
魔法先生は魔鳥と一緒に

深海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生は魔鳥と一緒に

【Nコード】

N9987M

【作者名】

深海

【あらすじ】

デタラメな理由で神の一族に殺されてしまった主人公は、特別な体と相棒を与えられてネギま！世界に飛び込んでいく。

触りだけだった原作知識は既に皆無、今後何がどうなるのか何一つわからないままだが、とりあえずその場その時の衝動で行動あるのみ！

俺は神など信じない。(前書き)

ご都合主義とカオスの深海世界へようこそ。
ヘンテコなネギま！破壊ストーリーの始まり始まり。

俺は神など信じない。

>>主人公

俺の名は、沢村鋭太郎。少々サブカルに傾倒している高校生だ。はつきり言えばオタクだな。

俺の眼前には一つの作品があった。友人宅で見たとあるプラモデルに触発され、その友人の紹介で手に入れたプラ粘土の塊から削り出した、一つの模型。本編中ではもっと大きいように描かれていたのだが、アレが威圧感の演出というもののだろう。

数十と失敗を繰り返し、ようやく納得できる姿をここに現すことが出来た。造形、彩色、ポーズ……全てが完璧だった。我ながら、ド素人の犯行とは思えん。今にも動き出しそうじゃないか。そう思えるほどの出来だったんだ。

今にして思えば、おかしい事だった。この日、俺は部屋に引きこもってなんと20日も経っていたのだ。その間、学校に行かず、家族にも会わず。完全に不眠不休飲まず食わずでコレの制作に走っていた。馬鹿の一念で済むような話じゃないし、いくら放任主義だって家族と決別した覚えは無い。部屋から一步も出なければ心配して声くらいかけに来るはずだったんだ。だが、俺がそれに気付いたのは……手遅れになってからだった。

「すまなかった!!」

今、俺の前に入るのは踏んで縛って叩いて蹴って吊るして斬って殴って弄って刺して曝して垂らして撃って燃やして甚振^{いたぶ}って埋めて割いて壊して殺してもまだ物足りない存在価値マイナス無限大のゴミクズと、炭と化したそのゴミの隣で土下座する老人。

この老人が言うには、あの時俺や俺の家族の精神はゴミクズによって改変されていたそうだ。俺には三大欲求を含めたあらゆる感覚を無視して模型作りを進めるように。俺の家族には、俺に何一つ干渉しないように。

その理由は『たまたま下界を覗いたら才能のありそうなのが夢中になっていたから、そいつ（つまり俺）が作る模型を一秒でも早く見たかったから』だと。その結果、俺は完成直後に栄養失調で倒れ、部屋の扉に鍵など無いにもかかわらず家族にさえ気付いてもらえずに息を引き取った……

もう、ね。開いた口が塞がらない。俺をなんだと思っているのか。で、この老人はゴミクズの師に当たる存在なのだという。まあ、神だとか何とか言っていたが、肩書きは関係ない。この落とし前をどう付けてくれるのか、だ。

「うむ。おぬしの人生を新たな形で再出発させよう。それでどうじゃ」

「と、言われてもな。正直、漫画やアニメは好きだが社会的に今の世の中に態々帰りたいと思うほどの未練は無いぞ。生きる事さえ保障されていない過去に飛ばされるのも、はつきり言えば怖い」

「何も元の世界に限った話ではない。星が複数在るように、世界もまた複数在る。お主の知る架空の世界『魔法先生ネギま!』によく似た世界が一つ空いておるので、そこでよいじゃろうか？」

ネギま、ねえ……名前と大まかな世界観と主人公が馬鹿だつて事を知ってるだけで、ストーリーは碌に知らないな。なんせダチの家

で一卷読んだだけだし……同じ漫画家さんの過去作は好きなんだが、特に実存AIの奴が気に入っている。どうせならそちに……行ってもやることがないか。アレを作れたのは完全に偶然の産物だし、自力でやるうにもプログラミングを学ぶのは面倒だ。

「しかし、俺が知る物語は大半が冒険譚だ。つまり、命の危険がある。さっき言った事に戻ってしまうが、二度も死ぬのは御免被る」
「ならば死なぬだけの力があれば大丈夫じゃろうて」
「軽いな……まあ、その路線で行くと言うなら、妥当なプランだろうが」

俗に言う異世界補正か。まあ、確かに退屈はしなさそうだな。作品の中に行くんじゃないやなくて似た世界に行くというんだから、原作崩壊とか気にしないで良さそうだし。原作知らないけどな。

「具体的には？」

「強力な肉体とそこに関わらぬ別箇の力を何か一つ与える事が規則となっておる」

「規則になるほどこういう事例が多いのか」

横目で老人を睨むが、老人はものすごく疲弊した表情だったのですぐにやめた。この存在が直接関与しているわけではなさそうだ。

「最近、若い連中の中で流行っておるようだな……嘆かわしい事じや。人間側から要望が重なったときには新たに世界を創造せねばならんときまである。言い換えれば、行き先の世界でお前さんの同類に出会うことは無い」

「そうか。で？」

「常ならば事態を起こした当事者が責任を取るのじやが、不肖の弟子はお主の願いを叶えられるほどの力は持っておらんし、お主の手

によってこの様じゃ。そこで、ワシのほうで原初のヒトを用意した。お主の精神と世界の根源の一つ……行き先では『高位精霊』と呼ばれるものを混ぜる事で、お主の肉体となる。精霊の種類は光と闇、そして地水火風の四元素じゃ。いずれか選ぶが良いぞ」

老人の掌には明滅する球体が収まっている。あれが『原初のヒト』とやらか……口ぶりからするとXenoのやつじゃなくて、亜人の祖として色々なところで設定だけ出現する幻の存在のことだろう。随分と大盤振る舞いだ……いや、人間追放が確定してるのはケチだと言っていいのか？

しかし精霊ね。光はガラじゃない。闇……惹かれる単語だが、魔物になるのはごめんな。となると四元素だが……火は力を振るつた後が面倒だ。風には何故かセクハラのイメージがある。水と地なら……

「地、だな」

「地か。地の精霊は主に大地に関わる存在・現象を司っておる。植物、鉱物等が主じゃ。それでよいかの？」

「構わない。選ぶなら地か水だが、舞台が地上なのは言うまでもないし、俺は普通に泳げるしな」

老人はそうか、と一言、球体をその場に落とした。それは一度見えない床で弾むと、身長190センチ近いボクサーみたいな体型の若い男になった。顔は日本人だが、耳の辺りに木で出来た龍の角みたいな物体がある。角の形は、あの昔話のオープニングに出たような奴、で想像つくだろうか。

「あちらに渡ったときにはこの体がおぬしのものじゃ。体の使い方は行けば解る。では、それ以外の力を用意しよう。此方は希望制でな、制限はあるが、まず言ってみるがよい」

「その前に質問。“行き先世界に準じた力”は願いに含まれるのか？」

「勿論含まれる。だが、仮に今望まずとも、お主の肉体には大きな力が宿っている。地道に伸ばせばそれ相応の力となるう」

つまり、チートレベルですぐさま使いたければ望めと。俺は別に要らないかな。それより欲しいのあるし。

「そうか。なら、旅をするための相棒が欲しい。そうだな……トレジャーハンターのチョコボ、一羽用意できるか？」

「む！？そんな希望は初めてじゃな。……特に禁止されておらんで、よいじゃろう。世界の違いに合わせていくらか調整しておくでな、後で確かめてくれ」

「わかった。じゃ、やってくれ」

「うむ。体の性質上、作品中に描かれた物語よりかなり前に参入することになるからの。まあ、寿命も長いからそう気にすることでもないわい」

「そうかい……あ、そうだ。最後にもう一つ」
「ん？」

「そのゴミ、どうせ復活するんだろ？きっちり抹消しておいて」

「気にかけんでも自らの意思で人間を殺した者は消去処分じゃ。わしらも二度と会うことは無い」

「ふうん、そんなもんかい」

「では、行くがいい」

老人の言葉と共にその場が光で埋め尽くされ、俺は意識を失った。

俺は神など信じない。(後書き)

ご意見、ご感想、作中のご質問などありましたらお寄せください。
また、アンケートを取る事もありますので、よろしければご協力の程お願いいたします。

逃げなきゃ殺られるなら一目散に決まってる。

>>主人公

諸君、俺が沢村鋭太郎だ。謎のゴミに殺され、神を名乗る老人に土属性魔法生物最高位の体を貰って『魔法先生ネギま!』世界の過去に放り出された。始めに立った場所は、見覚えのない森の中だった。まあ、状況的に覚えのある場所に放り出されたらそれはそれで困るんだが。

長い夢から覚めたかのように、頭の中に色々な情報が入ってくる。体の特徴や力の使い方以外にも色々な知識があるようだが、時代背景や今後ある大きな出来事が皆無なのは、サービスがなっていないな。

しかし、ここは何処なのだろう。あの作品の舞台は日本にあると言う、麻帆良だろう?ならここは現地の過去か主人公の出身地イギリスかのどちらかだと思うが……まあ、いきなり原作舞台に飛び込むとは限らないし、まずは情報収集だな。もし外国なら、日本に向かえばいい。

あ、ここに居る間に能力を確認しておこう。左手に意識を集中して、イメージする。すると、掌から植物の葉が生えてきて、右手でそれを掴む。イメージを強くしながら両手をゆっくりと離していくと、最終的には右手に蕪と大根の間の子みたいな植物が掴まれていく状態になった。言っておくが、辛味大根とかじゃないぞ。

コレこそ俺の肉体が有する二つの固有能力の一つ。簡単に言えば、俺の肉体そのものがあらゆる植物の因子を有していて、体表から植物を発生させる事が出来る能力だ。一度伸ばしたら縮める事はできないが、トカゲの尻尾きりのように通常の皮膚部分で切り離す事が

出来る。代償は俺の中にある養分と水分。当然といえば当然だな。だから野菜や果物を出して自分で食べてもエネルギー源の確保にはならず、若干マイナス。ただし、単純に葉を茂らせて根を張れば光合成できるので食事抜きでも生きてはいける。

この世にある全ての植物と、たった一種だけ、世界のどこを探しても絶対に見つからない植物を発生させる事が出来る。今右手に持っているのがその世界に存在しないはずの植物だ。そうすることが出来るのは、あの老人に頼んだ二つの力の内、一つを維持する為の必須アイテムだから。

俺はその“野菜”を自分の影の上で誘うように揺らす。数秒待つと、影が光を無視して濃く丸くなり、そこからオレンジの嘴とつばらで愛らしい瞳を有する黄色い頭が現れた。ソレは野菜を見るなり喜色満面で飛び上がって俺の手から野菜を奪うと、大きな翼でバランスを取りながらしっかりとした二本足で地面に降り立ち、カリカリと音を立てて野菜を食べてしまった。

丸っこいが均衡の取れている三頭身は俺の半分くらいの背丈。全身が黄色い羽毛で覆われていて、首に革の鞍を提げている。きゅう？と鳴きながら首をかしげる仕草は実に愛らしい。

さて、ここまでの表現でコレが何者かわかったあなたは、先ほどの野菜の名前もご存知だろう。そう……ギサールの野菜。ソレがこのネギま世界に実在しない植物の名前だ。

「俺の名前は沢村鋭太郎。以後よろしくな、ココ」
「きゅきゅきゅー！」

そして、俺の命名に万歳するように両の翼を広げて応えるのは、あの老人から貰った存在……おそらく日本で一番シリーズの数が多いであろうRPGに登場する、陸を制した鳥、チョコボ。しかもこ

いつは外伝の『不思議なダンジョン』仕様。そんじよそこらの肉食動物に如何こうされるような弱い奴でもなく、しかも俺に合わせて不老長寿。俺を乗せて走れるほど体が大きくないのが難点だが。名前は本編五作目主人公の相棒……の、嫁さんから取った。何故か雌だったから。

「ところで、ヒトの気配はわかるか？」

「きゅっ、きゅっ……きゅい！」

ココは少し頭を振ると、風に流れてきた生活の臭いを嗅ぎ分けたのか、自信満々に左の翼である一方向を示した。うん、動物スゲー。これなら今後の旅も安泰っぽいな！

俺は未来への期待を抱きながら、ココを連れて意気揚々と歩き出す。

「きゅ〜」

「え？腹ペコだったから一本じゃ足りない？仕方ないな」

もう一本出したギサールの野菜を幸せそうに齧るココを見ていると自然と頬が緩む。とても楽しい旅になりそうだ。

そんな気楽な時代じゃなかったことは、すぐに思い知るのだが。

あのあと森の外で十字軍の遠征を見てから何年経っただろうか。最初の一月数えたらもう嫌になったので、全くわからない。少なくとも二百年以上は経ってるはずだ。

さっさと日本に行きたいと思っていたはずなのだが、未だにヨーロッパに居る。あっちこっちで戦争戦争やってるせいで俺みたいない

異国の風貌をした奴はものすごく警戒されてしまうのだ。特に国境とか港とかで。仕方がないから、あんまり国家とか教会とかの目が光っていない田舎の村を転々として休戦や終戦を待っている。その途中で、病気になった人や大怪我を負ってしまった人を、俺の薬草で治療して回ったんだが……

それがいけなかった。

俺は全く知らなかったし、知っても気に留めなかっただろうが、医療は教会が仕切っていた……いや、牛耳ってたと言っても良い。とにかく、大半の人たちは病気になったら教会に寄付をして助けを求める。寄付できない貧しい人たちは泣き寝入りしながら死んでいくしかない。重税を課せられてまともな食事にもありつけないのだ。

あの時俺が訪れたあの村にも、そういう事情で衰弱した人たちがたくさん居た。そこで俺は……手を出してしまったんだ。俺の『死因』も衰弱死だったから、見過ごせなかったのかもしれない。ただ単純に、人の死を見たくなかっただけかもしれない。理由はわからないけど、俺は森で探すフリをしながら有効な成分を持つ植物を作り出して調合し、薬として彼らに与えた。とはいえ生活状況が改善する訳もないので、重症だったり伝染病だったりした人には僅かな時間だけ現世に留めて“最後の一言”を言わせてあげるのが精一杯だったけれど。

それでも、薬を与えた人が遺言を残せたことに、その遺族が“最後の一言”を聞いた事に感謝してくれたときは、謝罪の言葉と一緒に涙が流れる。さよならと微笑んで死んでしまった子供の体は小麦の袋よりも軽かった事の方が多くて、そういうときには世界を呪いたくなるほど本気で泣いたものだ。

そのうち、俺のことを死神だと呼ぶ人が現れた。前世の時代ではダークなイメージが強かったが、本来の死神は神に仕える農夫であり、時期が来た魂を神の許へ届ける存在だ。俺は否定したんだが、何しろ病人を癒して死に損ないには安らぎを与えて回ってるで見られているから、誤解が無くなる事はなかった。

教会が俺の本格的な搜索を始めたのもこの誤解が広まってからだ。代償なく治療する俺が存在すると自分達に都合が悪いと思われたのかもしれない。とにかく、聖職者が『髪と瞳が黒く、黄色い怪鳥を連れた男は魔女だ。人を殺して魂を地獄に連れて行く』という噂を流しているのをよく聞くようになった。その頃には俺は大半の寒村を回った後だったから訪れた村で迫害される事はなかったが、ただでさえ近付き難かった都市には完全に立ち入る事が出来なくなった。ココは影に隠せるが、顔を一切曝さないのは無理だからな。……男の魔女って何だよと言いたかった。

それが大体180年位前のこと。そんな昔の事を何故覚えていられるのかと思うかもしれないが、勿論覚えていてる訳じゃない。はっきり覚えているのはこの世界に來た最初の頃の事と、あまりにも軽すぎる子供の屍と、それが齎した悲しみくらいのもんだ。

では何故過去を語れるのかと言えば、俺の体には植物や無生物に染み付いた記憶を読み取るサイコメトリーが備わっていたので、これを利用して50年ずつアクセサリを付け続け、そこに俺の記憶を染み付かせておくことで自分の過去を振り返る事が出来る日記みたいなものになっているのだ。この能力は結構正確で便利。集落の植物とか家屋から言語さえ学び取れるから物凄く楽が出来る。

……え？チート能力の無駄使い？馬鹿なこというなよ、折角の能力を高々自然破壊や人殺しに使うなんて、そっちのほうがずっと無駄遣いじゃないか。まあ、命の危険が有る世界だから、いつかは破壊や殺しに走る時も来るんだろうけど。

まあ、結局どうなったのかというと……別にどうもなかった。俺は死神も悪魔も否定するのをやめて、ただただ助けを、最期の時間を求める人に薬を与えて回り続けた。

そして、あの連中に出会った。

自称、魔法使い。世界に溢れる魔力を用いて超常現象を起こす力“魔法”を用いて、世界の影で世のため人のために働くものだと、奴らはそう自称した。

まあ、胡散臭い事この上なかった。何せ、そんなことを言っておきながら十分な治療の魔法が使えるのは20人に1人居ればマシな方で、大規模破壊の魔法は5人に1人使えると言うのだから呆れてものが言えない。連中は俺に魔法協会という魔法使いの団体だか組織だかに参入するよう要求（依頼じゃなくて要求。この時点で既に話がおかしい）し、断ったら案の定武力行使してきやがった。

まあ、白魔ココにサイレス使わせれば無力化できるので大した脅威じゃないが、とにかく周りに遠慮しないので迷惑この上ない。樹に化けて森の中に隠れていたときに森ごと焼き払おうとされた事があるほどだ。世界の影とか世のため人のためとかはどうしたんだ、と三年くらいぶつ通しで説教したい。奴らは途中で餓死するだろうけど。

さて、そろそろ回想は終わりにしよう。背後の気配が少し強くなったようだ。この力の練り方は……

「『光の精霊8柱、集い来たりて敵を撃て』」

魔法使いが一番よく使う攻撃の魔法だな。さて、前方は崖、左右の茂みからも魔法の力を感じる。誘い込まれたかな？仕方ない、手

札を一枚切ろうか。

「ココ、ジョブチェンジ！竜騎士！」

「きゅっ！」

俺の指示を受けてココの体が光を放ち、ドラゴンの頭を模した鋭角的なデザインの青い兜と胸当てを形作る。俺は竜騎士ココの背中に手をかけて、崖を目前にさも追い詰められたかのような表情で振り向く。

「ふっ……止めだ！『魔法の射手、連弾・光の8矢』！」

「『魔法の射手、連弾・火の6矢』！」

「『魔法の射手、連弾・雷の7矢』！」

やはり伏兵だったか。破壊を撒き散らす魔法が三方向から俺たちに迫り、激突して土煙を上げる。

「おお、やったか！」

「いくら『幽霊走者』^{ゴーストランナー}と言えど逃げ道を塞げばどうという事はなかったな！」

「はっはっはっは！これで賞金は私達のものだ！」

何がそんなに楽しいのかわからないが、土煙を見ただけで騒いでいる魔法使い達をこっそり伺い、すぐに後退。姿勢を低くしているココの側に戻って、耳元で囁いた。

「（よし、奴らが巻き起こした煙が晴れる前に逃げるぞ、ココ）」
（こくこく）

勿論俺たちは無傷。命中直前に逃げたのだ……高さ300メートル

ルくらいある崖の上に。太古の戦士の力を以ってすればこの程度の崖は壁と呼ばない。俺たちは気配を殺し、ゆっくりじっくりと姿を森に溶け込ませた……

>>???

魔女狩りの手を逃れて樹の上に隠れて居たときのこと。三人の魔法使いが黄色い鳥らしき生き物を連れた男を追い掛け回しているのが目に入った。あいつらは私の隠れた木の下をまっすぐ駆け抜けていったけど、驚いたのは男の速さ。気も魔力も使っているようには見えないのに、たぶん走ることに特化している鳥の足に引けを取ってない。箒で飛ぶ魔法使いが僅かに引き離されているというのだから、驚くなど言う方が無理です。

やがて魔法使いたちはバラバラになります。どうやら崖に追い詰めるつもりのようにだけど……気にかかった私は奴らを探ってみることにしました。

男と鳥の走りの滑らかさは、まるで樹が避けているかのように感じるほどでした。枝葉に身を隠しながら追いかけるのは大変。そのうち男が崖に追い詰められていくと、鳥が光り輝いてその頭に兜のような仮面のようなものが現れます。アーティファクトなのかな？

けれども男と鳥は何もせずに走り続け、崖のほうに追い詰められます。崖のほうを向いたままの鳥に手を当てたままの男が振り返ると、魔法使い達は一斉に杖を振りました。魔法の射手。魔法使い達にとっては基本となる、普通の人から見たらそれだけでも脅威の攻撃魔法が三種類、男に襲い掛かって……命中、しなかった。けれどそれがわかったのは、私が崖の上に隠れて様子を見ていたから。爆

発の瞬間は私の目でも命中したと思ったのに、次の瞬間には崖の上で伏せている一人と一羽。じりじりと這いずって崖から離れる鳥と、同じように這いずって崖に戻り、様子を見る男。

そして、男達を殺したと思って大はしやぎしている魔法使い達の声に、聞き捨てならない単語を聞きました。

『ゴーストランナー
幽霊走者』

本名、性別、出自全て不明。248年前に突如現れて寒村の貧民に救いの手を差し伸べた賢者とも死神とも呼ばれ、同時に人の魂を闇の彼方へ連れ去る魔女といわれている。前者は田舎の御伽噺で、後者は教会の宣伝だ。魔法協会では捕獲に300万ポンドをかけている賞金首。二つ名の由来は、純粹に走って逃げる癖に全然捕まらないから。黒髪と黒い瞳で、いつも黄色い鳥が側に居る……アレか。追われる側の私が追う事なんて全然考えなかったから、すっかり忘れてた。

気になる。森に溶ける様に隠れていく一人と一匹を見失わないように、私はゆっくり追跡を始めた。鳥には独特のにおいがあったから、追いかけるのはそんなに難しくなかった。

金髪少女は吸血鬼らしいぞ。(前書き)

この時点でのエヴァンジェリンの実年齢は11〜13歳の設定です。

金髪少女は吸血鬼らしいぞ。

>> 生きてるのに幽霊呼ばわりされる逃亡者

広大な森の中を丸一日走り続けた。途中で何度か消臭効果のある薬をばら撒いたから、追跡開始にタイムラグが出る魔法使い達に追いつかれることはないだろう。もうすぐ、日が落ちるな。充分に引き離れたと判断して、近くの樹の下で休憩するしよう。

ココをすっぴんに戻し、途中で摘んだ野苺を取り出して口に運ぶ。爽やかな酸味が実に良い。ココにも与えてリラックス。これでお茶でもあれば言うことないんだが……残念だ。早く日本に行きたいなあ。

「ふう……」

「きゅっ、きゅっ」

「ん？どうしたココ？」

「きゅっ、きゅっ、きゅっ」

何、こっちを伺っている奴が居る、とな？ふむ。魔力の流れにおかしなところはなさそうだけど。視線を水平に動かして、何も居ないのを確認。少し仰いで、またグルリ、と……ん？

今、風に揺られて木々の間に妙な色が見えた気が……あれか？自覚すると向こうからの視線もわかるようになる。確かに探るような感じは有るけど、害意や敵意じゃないな。むしろ、怯えか？しかし、随分上手に気配を隠したものだ。野生動物の擬態に匹敵するレベルだな。だが、チョコボの察知能力は上回れなかったか。

足元の石を手にとって、それが隠れている樹の幹に投げつける。思いつきり加減したから少し音が鳴る程度だ。本気で投げると幹が

折れるレベルなのでいつもいつも加減が大変だ。

そのまましばらく待つと、見つかったと確信したのか視線の主は姿を現した。それは、金の髪と赤い瞳の幼女だった。年頃は10歳くらいか。

負の思念は感じない、な。そういうのに敏感なココも反応していない。ただ、魔法使いと同じような力が不自然に強いを感じるが。

「こんばんは」

とりあえずは挨拶し、ココの頭を一撫でしてから二度叩く。するとココはきよろきよると周りを見回して、どこかへ駆けていった。

金髪幼女は俺の声に震えて足を止めるが、気に留めずに続ける事にする。周囲への警戒は怠らずに。

「俺の名前は沢村鋭太郎。遙か東に在る島国の出身だ。沢村が家名で、鋭太郎が個人名。だから君達の法則に合わせると、鋭太郎・沢村になる。あの黄色い鳥は俺の相棒のココ。チヨコボという幻獣種の雌だ」

あえて本名を名乗る。流石に異界から来たとは言わないが、言った事は全部本当だ。言い終えた頃に大量の枯れ枝を銜えて戻ってきたココが、上手にそれを積み立てて翼で火打石を持って打ち合わせ、焚き火を熾す。器用だよな、ほんとに。最初の頃は自分の羽根焼いて慌ててたけど。

「ちよっ、待って!! どうして鳥が火を熾すの!？」

「どうしてって……狼に襲われたりしたら困るだろう?」

「そっじゃなくて!!」

ずっと黙っていた少女がツツコミを入れてくる。まあ、普通の鳥なら火を怖がって逃げるし、そもそも火打石なんて使えないな。だがいいいんだ、チョコボだから。俺はココにギサールの野菜を与えながら、腰を下ろして火にあたった。

「で、君は？」

「え、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルです」

「長いね。どこかの貴族さま？」

一度大声を出した事で喋る踏ん切りがついたのか、少女がようやく自己紹介してくれる。しかし、マクダウエルねえ。何年か前に城が焼けたとか何とか噂になってたが、関係者か？……どうでもいいか。

「まあ、座って火に当たりな。そろそろ日が落ちる。体が冷えてしまうぞ」

薬を調合してあげた革職人に貰った肩掛け鞆に手を入れて能力を使い、さもそこから取り出したかのように林檎を作り出してエヴァンジェリンに差し出す。まだ少し躊躇っているようだったが、彼女はそれを受け取ると爪を伸ばし、器用に切り分けた。俺はもう一度鞆に手を入れて林檎を出すと、丸かじり。しゃくつと瑞々しい音がある。うん、果実はエネルギー消費が激しいんだが、これだけのものが作れりゃ充分か。

「美味しい」

「それはよかった。落ち着いたところで、そろそろ用事を教えて欲しいんだが」

「あの……私は、吸血鬼なんです」

「ほう。随分とちっさい吸血鬼も居たものだな」

「こつ、これは……」

反論を抑えてうつむくエヴァンジェリン。ちょっと可愛いな、な
どと思いながら芯だけになってしまった林檎を焚き火の中に放り投
げると、あたりに甘い香りが漂い始める。同時にギサールの野菜を
ココへ投げながら、俺は思案した。

吸血鬼ねえ。魔法使いが居るんだから吸血鬼が居ても如何という
事もないか。魔法の力つばいの強いのも、その辺に關係が有るの
かね？なんというか、すごく自然に魔法の力……もう魔力でいいか。
魔力の取り込みと純化が行われてる。普通の魔法使いは濁った魔力
のまま使う奴が多いんだが。

ぼうつとエヴァンジェリンを見ながら考え、焼き林檎の香りの中
で待ち続ける事たつぷり2分、ようやく続きを話した。

「10歳の誕生日に無理矢理こんな体にさせられて……」

「……………」

「私は……ぐすつ、わたしは吸血鬼になんて……！」

聞いたら聞いたで居た堪れなくなつて、視線をエヴァンジェリン
から焚き火に移す。ぱちん、と林檎の種が爆ぜて、嗚咽が聞こえ始
めた。

恐らく、思い当たつた通りに焼け落ちたマクダウエルのお姫様だ
つたのだろう。ひよつとしたら焼いた本人かもしれない。種族：吸
血鬼で生まれたときからそうなのだと思つたんだが、聞く限りでは
違うようだな。人間を吸血鬼化とか、どこの死徒？こんな小さな女
の子を態々吸血鬼なんぞにして、そいつは何を考えて居たんだ？エ
ターナルロリータとかそんな感じか？

吸血鬼なんて『悪』の代名詞に貶められたら、相当酷い目にあつ
ただろう。俺だって評判が磐石になる前に目を付けられたらアウト
だったし、今でも教会に捕まったらどんな目に遭うか。怖いなんて

もんじゃない。

確実に迫害に遭っているだろうエヴァンジェリンの痛みや苦悩は、俺には理解できない。俺にはココが居る。ココの魔法を以ってすれば相手を殺さずに確実に逃げる事が出来る。一人も殺さず、孤独になるわけでもなく逃亡生活が出来ている者に、生きる為にたった一人で殺し続けなければならない者の苦悩など理解できるわけが無い。

そんな負い目もあって黙ったまま待ち、ココは心配になったのかエヴァンジェリンの側まで行き、寄り添うように座った。エヴァンジェリンは少し震えたが、ココと数秒目を合わせると抱きしめるようにしがみ付き、大声で泣き出した。

やがて泣き疲れて眠ってしまうエヴァンジェリン。結局俺のところへ何をしに来たのか解らず終いだが、俺はポツリと呟いた。

「連れて行ってあげようか」

ココがエヴァンジェリンを起こさないようにそつと頷くのを見て、俺は焚き火の火を消すと一人と一羽の背後に移動し、枝葉で自分達の姿を隠すのだった

>>金髪少女の吸血鬼

目が覚めたら昨夜と同じ場所に居て、私は大きな鳥……ココ、だっけ。に埋もれるように眠っていたみたい。エータローは既に起きていて、焚き火で魚を焼いていた。

「起きたか、エヴァンジェリン。おはよう」

「あ……はい、おはようございます」

「顔を洗っておいで。そしたらこれを食べよう」

「……………」

「どうした、魚は嫌いか？」

エーターローは不思議そうに私を見る。けれど、私からすればエーターローのほうがずっと不思議。私は昨夜自分を吸血鬼と名乗ったはず。なのに、エーターローは何も聞いてないかのよう。そんな風に振舞う人は、今まで一人も居なかった。

「えと……エーターロー？」

「どうした、エヴァンジェリン。早く行って来ないと焦げてしまうぞ？」

「…………ここに居ちゃダメ？」

離れている間にどこかへ行ってしまうそうな気がして、私は尋ねる。すると、エーターローは困ったように指で頬をかいて答えた。

「まあ、その寝癖頭で良いなら強制はしないが」

「えっ!？」

慌てて頭に手をやると、好き放題に跳ねまくってる前髪の感触が途端に恥ずかしくなって、私はエーターローが指し示す方向へ駆け出した。

そこには木陰を流れる小さな沢があって、私はすぐに覗き込む。前髪が前髪じゃなくなっていて、おでこが丸出し。ココの羽毛に頭を突っ込んでたせいだ。おまけとばかりに羽根の跡が頬についている。

こ、こんな恥ずかしい顔でエーターローの前に居続けようとしたの？一分前の私!やだ、もう……

顔を洗い、魔法で温めたお湯を使って髪を整えて戻ると、エータローはまだちゃんとそこに居て、ココにエサをあげてるところだった。

「エータロー」

「戻ったか。うん、寝起きの崩れた姿も悪くないが、やはり整っている」と一段と可愛いな」

「かつ……」

「丁度焼けたところだ。さ、頂こう」

可愛い……可愛い……可愛い……

「エヴァンジェリン！」

「わひゃいっ!？」

「これがお前の分だ。早く食べなさい、死んで貰った魚に失礼だろう」

うつ、変な返事しちゃった。エータローが差し出す細い木の串に刺さった川魚を受け取って、口に運ぼうとして……エータローが両手を胸の前で合わせて目を瞑る、祈りのような姿勢をとっているのが目に入った。見つければ火炙りの異端者が、どうして祈るのか、不思議に思ったから聞いてみる。

「エータロー、どうして祈るの？」

「ん?……ああ、別に神に祈ったわけじゃない。この魚に謝辞の心を示したただけだ」

「魚に？」

「そうだ。生物は何者であっても何かを喰わねば生きていけない。

喰うと言つのは殺すと言つ事だ。だから、魚を殺してしまった罪と、喰う事で生きていける事への“感謝”を、俺たちの生に対する犠牲となる食べ物へ捧げるのが大事だと俺は思っている」

「……」

「まあ、実際に何を食べたか、なんて覚えていられるわけじゃないが、少なくとも手を貸してくれない神様に祈るよりは現実的だろ？」

くくつ、と笑うエーターローを見て、私もなんだかそうしてみたくなった。手に持った串をもう一度地面に刺して、エーターローの真似をする。

「エヴァンジェリンもやるのか。では祈りの言葉を教えてあげよう。続けなさい。『いただきます』」

「『いただきます』」

「以上！さあ食べよう」

「えっ！？もう？」

「焦げたり冷めたりしたら食材に失礼だろうが」

お祈りつてもつと長いものだと思ってたけど、エーターローはさつさと魚を口に運ぶ。私ももう一度串を持って噛り付いた……とつても美味しかった。残った骨と頭と尻尾は焚き火に投げて始末。残していくとそこから嗅ぎ付いたりアンデッド関係の呪いを使ったりする魔法使いが居るかもしれないから、だって。私よりずっと用心深いんだ……

食べ終わった後、私はエーターローに聞いて居なかった事を聞くことにした。本当は食べている間に聞こうとしたんだけど、食事中に喋るなと怒られてちゃったから。

「エータローは魔法使いじゃないの？」

「違うぞ。俺は魔法を知らない。ココは白黒なら使えるけどな」

「どうして鳥が使えるのに人間が使えないのよ……」

本当にわからない。こうして喋っているだけでもエータローに大きな魔力を感じるのに、魔法使いじゃないと言う。その魔力も妙に自然で、普通なら威圧感で息も出来なくなりそうなのにとっても楽にしていられるのも不思議だった。

でも、それ以上にココの非常識が不思議で仕方ないのだけれど。

「さてな。チヨコボだから、としか言えん。そういうエヴァンジェリンはどうなんだ？」

「吸血鬼になったときに少しだけ空を飛べるようになったけど、あとは見よう見まねで魔法の射手が使えるくらい。でも、魔法使いの事なら少し知ってる。昔、知り合いが居たの」

「そうか」

エータローは深く聞かずに立ち上がり、腰に付いた土を軽く払った。ココも立って、焚き火に土を被せて消火している。私が砂を被らない様に、ちゃんと気を遣ってくれてるみたい。

「さて、エヴァンジェリン。もし良ければ、俺の旅に付いて来ないか？」

……え？

「勿論嫌なら俺たちの縁はこれまで、と言っただけの話だ。俺は君に会ったことを誰にも言わないし、たとえ君が俺たちの情報を流そうと怨んだりはしない」

「そ、そんな事しない！」

「俺もそう信じている。だが人間は残酷だからね。恐らく拷問を

」

エータローが言葉を途中で切って、視線を森の中に移す。ココも顔を上げて周囲を見回している。

「随分対応が早い……魔法使いの連携も日進月歩と言う事か」

ニヤリと笑って指を振るエータロー。すると、ココの体から光の粒が溢れて、頭に集ってバンダナになった。ただ衣装を被っただけにしか見えないけれど、間近で見ると魔力や気の流れが大きく変化しているのがわかった。

「囲まれてる……走れ！」

「きゅっきゅ」

エータローが叫ぶと同時に魔法の射手が襲い来る。全方位から迫るそれを見切って避けるエータローとココ。屈んだり体を捻ったりして、それでも走り抜ける姿は踊っているみたいにも見えた。

私はそんな事出来ないから、両手の爪を伸ばして自分に当たりそうな魔法を迎撃する。後ろから来るのには私の魔法の射手で対応できる。だけど……最低限の動きだけで駆け抜けるエータロー達にはどんどん引き離されてしまっし、そんなにあちこち気を配り続けるのは、私には無理だった。

「あうっ！」

躓いて転んでしまい、足首に痛みが走る。ひねっちゃった……！振り返ると、追いかけてきた魔法使いが私を見て立ち止まるところ

だった。全部で5人……ううん、まだ後3人こっちに来る……！

「汚らしい吸血鬼め……悪魔と接触して何をするつもりだった？」

「ふん、まともに答えるわけが無いだろう」

「そうだな、さっさと殺してしまおうか」

「いや、ただ殺すだけではダメだ」

「……ククク、では精々絶望させるとするか」

怖い！体をよじり、反転して逃げようとしても、乱暴に髪を掴まれた。痛い、痛い！いやぁ！！

「ハハハ、人間の真似をして泣くかよ、吸血鬼が！」

「何してるんだ？」

「なあに、この化け物がどこまで人間の真似が出来るか確かめてやるんじゃないか、ってな！！

「『幽霊走者』はどうした？」

「逃げたよ」

下卑た笑いが耳に届く。魔法使い達の手が私の体に伸びて、体を何箇所も鷲掴みにされる。痛い……気持ち悪い！嫌だよ、助けて！

「やだ、やだ、助けて、助けて！えーたらー！！」

「ハハハハハ！莫迦が、吸血鬼を助ける奴なんか居るわけ無いだろうが！」

「『幽霊走者』は逃げ専門の臆病者だ！態々戻って来る訳が無いな！」

そんな……エータロー……

「悪い、エヴァンジェリン。伏兵を探るのに手間取った」

目の前が真っ暗になりそうになったとき、優しい声が耳に届いた。それと同時に、視界を無数の影が横切る。

ドドドドドドッ

戻ってきたエーターローが木の上から降りてきたとき、生きているものは私とエーターローとココだけだった。魔法使い達の喉や心臓を太い木の枝が貫いて、命を奪い尽くしている。

暴力から開放した一瞬の殺戮劇に腰が抜けてしまった私を心配して、エーターローが近くで屈んでくれる。それで、思わず抱きついてしまった。でも、エーターローはそっと抱き抱えて頭を撫でてくれる。

「えーたる……！」

「すまん。俺はやる時には必ず皆殺しにせねばならなくてな……遅くなった」

「うっん……いいよ、来てくれたから」

「きゅ！きゅ！」

「うん、ココもありがとう」

「くえー！」

え？いつまでくつついてるんだ、私のご主人様から離れる？も、もうちょっただけ……だめ？

魔法の力を手に入れよう。(前書き)

超加速しますが、ご容赦ください。

魔法の力を手に入れよう。

>>世界の迷子

旅の仲間が増えてそろそろ一年。アレから魔法使いの襲撃頻度が増えたが、どうやらエヴァンジェリンの魔力だか生体反応だかがある程度追尾が利くようなので、基本方針を逃避から殲滅にシフトした。折角ココ以外に確定する為の情報が無い俺の姿を、態々広めようとは思わない。能力を知られるなんてもってのほかだ。故に、ココとエヴァンジェリンで敵を引つ掻き回し、総勢が確認取れたら全員殺す、と繰り返した。

そんな風にしてエヴァンジェリンとの出会いから半月が経った頃から、俺は一つ能力の応用的なものを思いついては実行している。

血の染みた長さ30センチほどの棒を握って瞑想する事およそ2分。

「……見つけたぞエヴァンジェリン。『来たれ氷精 爆ぜよ風精 氷爆』だな」

「うん、やってみる。『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！来たれ氷精 爆ぜよ風精 氷爆』！」

ぼふ！と白い煙がエヴァンジェリンの掌から噴出して、掻き消える。規模は小さかったが、煙が通り過ぎた後の樹の枝が傷だらけで凍り付いていた。一応は成功か。流石にエヴァンジェリンは才能があるな。俺は初級魔法でも最初の数回は不発なんだが。

まあ、何をしたのかというと、殺した魔法使いの魔法発動媒体、つまり杖やら指輪やらにサイコメトリーを使用して、使われた魔法の記憶を吸い上げているのだ。大半は魔法の射手ばかりで役に立た

ないが、たまゝに優秀な奴が新しい魔法の知識を持ってきてくれる。発動媒体や衣装が師匠のお下がりだったりする奴が大当たりだ。

つまり、俺たちはとりあえずの自衛策として、魔法とやらを学習してみているのだ。敵を知り、己を知れば百戦危うからずとも言うからな。魔法の破壊力は自然物では防御しきれない事も多いし。

一番最初の頃に魔法の射手の出しやすさなどで自己判断してみたところ、俺の魔法適性はどうかや土や石といったものに特化していて、氷や火は苦手なようだ。まんま樹木のイメージだな。エヴァンジェリンは闇や氷が得意で、光や火は苦手なようだ。やはり吸血鬼のイメージに沿っている。

扱い辛い力を効率悪く使うのは逃亡生活において致命的なので、俺たちは自分が扱いやすいと感じる属性の魔法をメインに習得していく事にした。だが。

「既に何度言っただか忘れたが、納得いかないぞ、エヴァンジェリン」
「うん」

「何故、回復・補助や防御の上位魔法を覚えてる奴が居ない？見つけた魔法の大半は攻撃魔法じゃないか」

「『治癒』と『武装解除』と捕縛系『魔法の射手』くらいしか見つけてないね。後は盾関係かな」

「単に対策を練るだけなら普遍的に扱われている魔法が解ればそれでいいが、奇襲に対処する時の事を考えると、やはりもつと魔法を知る必要があるそうだ……この杖の記憶によれば、魔法世界にあるアリアドネーという都市に行けば俺たちのような人外でも学習・研究させてくれるらしい」

若干胡散臭い話だが、学ぶ意思が有るものは何人であろうとも保護し、学ばせる都市だそうな。そこへ行けばもつと有用な魔法が見つかる、あるいは自分達に合わせた魔法を作り出すことも出来るかもしれない。

「でも、私たちがどうやってゲートを抜けるの？」

「昨日処分したクズが、その出身らしい。大半のゲートはメセンブリーナ連合の管轄だが、一箇所だけその政府組織が管理してるゲートがあるってさ。案外、すんなり通れるかもしれないぞ？ま、とりあえず行くだけ行ってみよう。何、ダメで元々、バレたら俺が悪魔になるだけさ」

魔法使いは極端に魔法に依存する傾向があるから、アナクロな手段で逆に誤魔化せるかもしれないしな。

――アリアドネー影響下の世界間ゲート

遠目に見えるゲートとやらはどこからどう見ても巨石文明の遺跡なんだが、どうやらあれが旧世界（いむせかい）と魔法世界（まほうせかい）を繋ぐ扉らしい。

ゲートそのものは方向感覚を狂わせたりする魔法で侵入を防いでいるつもりらしく、こちら側の警備はさほど厳しくない。そして、こちら側の審査を通ればあちらに渡っても呼び止められることはない。

以上の話は、目の前に居る魔法協会の受付嬢に口先で聞きだした話だ。どうも魔法使いって奴は他人を見下している節が有るな。賞金首が自分からこんな所に入り込んでくるなんて微塵も思っていない感じがする。実際俺の手配書の前で会釈したのに気付いてない。まあ、俺も一応毛染めで髪を染めてきたし、似顔絵が全然似てないせいも有るんだろうが。

ちなみにココは影の中に隠れているが、エヴァンジェリンはローブで全身を覆い隠しており、俺の左手に抱き付くようにしている。このローブも襲ってきた魔法使いから奪ったもので、魔力を隠す力があるらしい。俺の魔力が非常識に膨大なのもエヴァンジェリンか

ら聞いていたので、俺はこの場に来る前にありったけの魔力をぶちまけて正義の魔法使いを呼び込む撒き餌にしてきた。故にこの魔法協会には現在実働の魔法使いが出払っており、俺の魔力も今は人並み以下。

姿を隠そうとするエヴァンジェリンを気にした受付嬢がカウンタ―に乗り出して顔を覗き込もうとするが、エヴァンジェリンはさらに俺を盾にするように隠れる。不審がられるが、これも大切な演技だ。

「えと。娘さんですか？」

「いえ。実は先日、世話をしていた孤児院が戦火で焼けてしまっ、院長の勧めでアリアドネーに行く予定なんです。俺は丁度出掛けていて助かり、この子は炎の中一人生き残ったのですが、酷い火傷の跡が残ってしまいました。こうして姿を隠しているのです」

「あら……ごめんなさい。治癒の魔法使いを呼びましょうか？」

受付嬢の言葉にエヴァンジェリンがしがみ付く強さを増して、ふるふると首を横に振る。あんまり強くやりすぎると隙間から顔が見えるぞ？酷く醜い火傷メイクを施してあるとはいえ、気付かれないとも限らんし。下手すつとそれだけで悲鳴上げられるかも知れないし。

「申し訳ありませんが、ヒトを怖がるようになってしまいましたので避けていただけませんか。俺がアリアドネーに行くのはこの子を治す魔法を調べに行く為でもありますので」

「あつ。ごめんなさい、度々」

「お気になさらず。ですがそんな理由でこの子にも私にも身分の証を立てるものがないのですが、大丈夫でしょうか」

「大丈夫ですよ。此方の用紙にお名前をどうぞ。案内人がつくことに同意していただければ、すぐに手続きできますから」

な、なんてザル警備……いや、これは最早ワク警備だ。底が一切無い。まあ、万人を受け入れるってのはそういう事なのかもしれないが、嘘八百並べ立てただけなのに……泥沼戦争の時代だし、似たようなケースが多いのか？

差し出された用紙にも魔法や特別な思念は感じない。代筆でもよいか確認を取った上で、俺はアウトリエとミック、と署名した。EITAROUとエヴァンジェリンのフルネームの頭文字EAKMを適当にアナグラムした偽名だ。

この時代、苗字なんてのは貴族が持つものなので、これでいい。ましてや俺たちの設定は孤児だしな。孤児院の名前を名乗る事もあるだろうが、基本必要ないし。

「（うまく行っただね）」

「（自分でやっというてアレだが、ちょっと簡単すぎるな。悪い、引かなかったかも）」

「（うん……大丈夫だよ、きっと）」

俺たちは無事に魔法世界に辿り着き、案内人に従ってアリアドネーの総長のところに連れて行かれた。この街は女性優位らしく、総長もイイ感じのお姉さまだった。

だが、やはり嵌められたか？着いた途端人払いさせて結界まで張った上に、この探るような視線、僅かだが他人の魔力が体に纏わり付く不快感。一律でこんな事してるとは思えないが。

「ようこそアリアドネーへ。私達は学ぼうという意思と意欲を持つものならば、たとえ死神でも受け入れます。そう、吸血鬼や未知の存在であろうとも」

「感謝します。俺はアウトリエ。妹分、ミークの傷痕を癒す魔法を探しに此処へ来ました」

お決まりの文句に一言付け足した感じの挨拶に、定型文で即答しておく。これは確実にばれてるよな。エヴァンジェリンから離れないほうが良さそうだ。握った手に力が籠るが、エヴァンジェリンもしっかりと握り返してきた。思うことは同じか。

「傷を、ですか」

「酷い火傷を負いまして……」

訝しがられるが、俺は態度を崩さない。仕掛けてくるなら能力を使つてでもこの女を抹殺し、逃げるだけの事だ。

だがその後は適性のある属性と使える魔法の数などを尋ねられ、特に危害を加えてくるような素振りは無く、二人とも基礎過程に入ってもらえることになった。順調に進めば一年後には専門の治療課程に進めるらしい。しかも課題をちゃんとやっていればそれ以上の自主研究は自由だそうなので、警戒さえ怠らなければ目的は十二分に達成できそうだ。

寢床は本来なら教員用の家族寮に部屋を与えられた。エヴァンジェリンを女子校区や女子寮に入れる話もあったのだが、傷痕による対人恐怖症と相部屋の子への気遣いなどを理由に、俺と同室にしてみらったのだ。勿論嘘だが、あの総長がそれを許したのは恐らくこの都市でも吸血鬼への風当たりは良くないからだろう。アレは絶対見破ってた。

部屋に付いた俺たちはまず、備品や避難経路、監視装置などを調べて回る。どうやら学生証がGPSのような役割を果たす事以外にはこれといって監視の措置はなさそうだ。

備品はなかなか揃っている。特に初歩の手引書と簡単な実験機材

が本棚に揃っているのありがたい。

「しばらくは此処に居座れそうだな、ミーク」

「うん、お兄ちゃん」

適応早いなエヴァンジェリン……しかし、お兄ちゃん、か。

>>アリアドネー総長の日記

今日はとても不思議な事があった。吸血鬼と思しき少女を義妹と呼んで引き連れる男がこのアリアドネーに現れたのだ。しかもその男は探査魔法に引つかかっていたながら該当する定義が無い。つまり、完全に未知の存在だった。

だが、それ以上に不思議だったのは、彼らが虚偽の理由とは言え治療課程を希望した事だった。吸血鬼は不死の存在だ。それを義妹と呼ぶ以上、義兄を名乗る彼も何らかの長命種、あるいは不老種であることは間違いない。少なくともグールや従者ではなかったのだから。

それが治療課程を選ぶと言う事は、恐れられている不死の存在が経験豊富な救い手になると言う事かもしれない。それはとても素晴らしい事だと思う。

幸い、彼らは巧みに正体を隠している為、騒ぎにはなっていない。私はアリアドネーの伝統と主義に則り、彼らを受け入れることにした。とはいえ、吸血鬼を受け入れるのはアリアドネー始まって以来のことだ。

これは、私の全てを賭けた、一世一代の大博打に違いない。私は、彼らの善性に賭ける！

>>いもつと吸血鬼

びつくりするほど簡単にアリアドネーに潜り込んで、もうすぐ二年。

お兄ちゃんことエーターローは入学後すぐに自主訓練で高位の治癒魔法を覚えて、私は窮屈で醜いお化粧から解放され、その後も私達は順調に課題を修めていった。治療の魔法は今でも苦手だけれど、魔法薬の課題で代替できたからよかった。

私達は長命種の亜人だと思われる。お兄ちゃんには都合がいから否定しないようにと言われた。私はバレルのが怖くて友達を作れてないけど、お兄ちゃんがずっと一緒に居てくれたから寂しくはなかった。ただ……周りのお兄ちゃん人気が気に入らない。

そんなお兄ちゃんと私は今、真っ向から対峙している。学年別で行われる個人の模擬魔法戦は、いつも私たちの決勝で終わってしまうのだ。もうエキシビジョン戦みたいな形で定着しちゃってるのは複雑な感じ。

「では、始め！」

「『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック』！」

「『チク・タク・ク・ロック・シヤムロック』」

合図と同時に魔法を唱え始める。お兄ちゃんの始動キーは私とそっくり。それが絆のようで、少し嬉しい。ちなみに、私の魔法発動体は腕輪、お兄ちゃんは右手の手袋。本当は相手に聞こえないように詠唱する方法も練習してるんだけど、みんなに真似されると後々面倒だから、人目があるところでは使わないの。

「『目覚め顕れよ 忍び寄る異形 彼の者 暗闇に誘わん “暗黒

の捕え手”』！」

「『目覚め顕れよ 形無き腕^{かいな} 捕らえ放さず 地に沈め “泥土の捕え手”』」

同系統の捕縛魔法。私の手からは黒い光が幾条も飛んでいくが、私はその行く末を見るより早く空に逃げる。なぜなら、足元から泥でできた手が“にゅっ”と伸びてきて私を捕まえようとするから。これが結構射程長くて、2、3メートル逃げたくらいじゃ捕まっちゃう。

お兄ちゃんは体質的に大魔法が使えなかった。魔力そのものは多いけど、一度に魔法として展開制御できる規模がそんなに大きくなりたいだつて言つてた。例えると、絵の具はたっぷりあって筆も色々なのが揃つてるけど、絵を描くためのキャンパスが小さい、みたいな感じ。

だけど魔力の密度はいくらでも濃くできるし、何より四角帽子と丸眼鏡に緑のケーブをつけた“学者ココ”と一緒に頑張って殆どの魔法を改造してる。この改造魔法がすごく対処しづらい。

今の魔法だつて本来なら泥の塊が発動体から相手へ飛んでいく魔法だったのに、お兄ちゃんは相手の足元から直接捕獲する“泥の手”が発生するように改造してしまった。だから知らない人がこの魔法を受けるといつの間にか足を固定されてて、移動できなくなつたところを障壁突破の魔法でボコボコにされてしまう。

お兄ちゃんは「これがホントの魔改造だ！」つて言つて笑つてたけど、喰らう側からしたら笑い事じゃないよ、もう……！

「『チク・タク・ク・ロツク・シヤムロツク 来たれ地の精 花の精 夢誘う花纏いて 蒼天の下 駆け抜けよ 一陣の嵐』」

「り、『リク・ラク・ラ・ラツク・ライラツク！ 来たれ氷精 闇の精 闇を従え 吹雪け 常闇の氷雪』！」

いけない、考えすぎたらもう次の魔法が！？同クラスの魔法だけど、こっちのほうがちょっと短い！間に合えー！！

「『春の嵐』」

「『闇の吹雪』ーッ！」

二人の手から放たれた嵐がぶつかり合い、一瞬だけ拮抗して……すぐに崩れた。そして、私の意識は刈り取られる。

最後に見たのは、両手を広げて私の落下地点に先回りするお兄ちゃん。ちゃんと受け止めてくれるみたい。

最後に聞こえたのは、逆転ならずかー、とか負けたーとか言う学友の声。また賭けてたのね？

でも、連敗記録更新……か。私もまだまだ、頑張らなきゃ。少なくとも、今度の学部対抗100キロ耐久箒ラリーでお兄ちゃんの足を引っ張らないようにしないと！

脱げウォーズ開催！アリアドネーを発つ。（前書き）

色々端折りますがご勘弁を。

総合評価が既に250を突破！？皆様ありがとうございます！

これと次話はまだテンプレ臭いと思われます。

脱げウォーズ開催！アリアドネーを発つ。

>>ミーク

アリアドネー名物100キロ箒ラリーの日がやってきた。

これはアリアドネーの学院から市街を回り、西に広がる魔獣の森の外周を回って学院に戻る、というコースに設置された10のチェックポイントを通過し、学院に戻ってくるまでのコースをペアで飛行する競技。何故かラリーなのに勝敗はレース形式と言う中途半端な設定だけど、お兄ちゃんは「気にしたら負け」と言っていた。実際、学院側でもラリーと呼んだりレースと呼んだりと安定していないみたい。名物行事の癖に！

禁止事項は高度30メートル以上への侵入、直接攻撃魔法の使用……何故か一般の生徒は妨害魔法といえば武装解除と刷り込みされていて、他の魔法を使う人は殆ど居ない。つまり、えと……脱がしあいになるみたい。

この競技、本当はもっと上……修練士（騎士団候補生）課程という女子の学部が開いているイベントなんだけど、誰かが本人に断り無く推薦したらしくて、本来なら参加できない治癒課程の私たちが特別参加枠に放り込まれてしまった。

おかげでお兄ちゃんは参加者中たった一人の男の人になっちゃったんだけど、大丈夫かな？

「お兄ちゃん、ただい……ッ！？ご、ごめんなさい、間違えましたッ！」

開けた扉を大慌てで閉める。今、部屋の姿見の前に裸の女の人

……あれ？この扉……ちゃんと『アウトリエ&ミーク』って、掛札がかかってる。間違えてない、の？じゃ、じゃあまさか！

「お兄ちゃん！誰その女の人！！」

「誰も何も」

「あなたには聞いてないの！お兄ちゃん、どこに隠れたの！？」

「いや、ここに居るから」

「娼婦精霊なんて使わなくても私がッ！……って、え？」

「いつ、俺が娼婦精霊を買ったよ」

少し不機嫌そうにしているのは、背が高く赤い髪の女の人。肌は艶々、胸がとっても大きくてはしたないけど……目が吸い寄せられる。気が強そうなツリ目がちで鼻筋の通った顔立ちもとても綺麗で、肩幅に足を開いて体重を片方に寄せるアルファベットのRに見える立ち方で私のほうをまっすぐ見ている。

髪型はショートボブから耳が出るように切込みを入れたような形。堂々とした高さにある頭を見上げるのは、私にとっては慣れた角度だった。

「まさか……お兄ちゃん？」

「この格好じゃお姉ちゃんかも知れねえな。ま、アウトリエなのは間違いない」

「ど、どうして女の人に？」

「いくら俺でも、女の中に一人男で剥かれる危険と隣り合わせは御免被る。そこでココと一緒に“反転術式”なるものを組んでみた。で、とりあえず性別を反転させてみたというわけだ」

「いやいやいやいや。対幻術の調査魔法で“性別：女”が出る魔法って何？細胞の一つ一つまで性転換したとでも？」

「お兄ちゃん……お姉ちゃん？は再び姿見に向かって自分の腰や胸

を興味深そうに撫でたり揉んだりしている。うう、劣等感。私だつて、吸血鬼にならなかつたらもつと素敵なレディになつてゐるもの！

「それに、ロリコン疑惑よりはレズ疑惑のほうが捌き易いし？」

「ば、バカ！」

真正面から抱きしめられて囁かれた言葉に、大慌てになつて暴れちやつた……久しぶりのハグだったのに。私のバカ。

「で、娼婦精霊なんてモノどこで知つた？」

「え？あ！」

綺麗な顔でにつこり笑うお姉ちゃん（？）が怖い。本当に、私のバカー！

>> 性転換に成功したバカ

おい。バカは酷いな。俺は結構真面目にやってんだぞ？なあ、ココ。うん、うん、こういう所わかつてくれるのはお前だけだ。

この魔法は肉体強化や変質の魔法を緻密綿密精密に調整・配置しまくつて、その蝶・デリケートな術式を壊さないように規格外な魔力を込める事で発動する、規模は中級、難度と効果は最上級と言つていいほどのスペシヤアルでグレイティストウゝな魔法なのに、どうして理解が無いんだ。俺しか使えそうに無いからか？

まあ、理解されないは理解されないで仕方ない事なので、その辺は諦めよう。ラリーの実行委員会がNG出したら戻らにやならんし。

さて、俺をバカ呼ばわりして抱擁から逃げた直後から自己嫌惡に陥つて膝を突いているミークは準備が済んでいるようだから放置し

て、支度をしなくては。

ガントレット・フット・ブレイズ

着替えを終えたら、魔法発動体を兼ねた手甲&脚甲を身につける。普段は右手だけ使うのだが、今回は飛行しながらメインだから完全装備だ。箒レースと言いながら、箒以外の方法で飛べるなら別に使わなくてもいいらしい。ラクだな。それにこれなら太陽勇者な兄ちゃんや黒い風の声を聞く魔王のようなダッシュ飛行が出来るから。ちなみに、この装備。ちょっと値が張るイイ奴なんだが、ココの鞆に入ってた“ただの水を魔法薬に変える”チートアイテム『不思議な薬ビン』を使って用意したエーテルを30cc入りの小瓶に分けて触媒として売って見たら一つ3万ドラクマとか言われたのでラクに用意できた。怖くてハイやターボは話にもせられなかったよ。

脚甲が床を踏みしめる重厚な音と共にミークが現実に戻り、何故かがっかりした表情で抱きついてくる。似合ってるよな？何でそんなにがっかりするんだ？

「ま、いいか……ところでミーク。俺は確か治癒課程を選んだ気がするんだが、最近バトルっぽい事ばかりやってるような気がするぞ？」

「そうだね。でもほら、色々やらかしてるじゃない？先生達も何回か転向勧めに来たし」

「全く、総長め。自主研究は自由じゃなかったのか？」

「結果出たのに報告してない研究が70%もあるのが原因だと思う」

「大半がミークが言ったようなバカ研究なんだがな……あゝあ、できるもんなら棄権したいぜ」

わざとらしくむくれる俺に、ミークは微笑んでいる。少しは機嫌直したか。

「大うそつき。ノリノリの癖に」

「まあ、一度出るって決まって支度までしたんだ。後は勝つだけだろ」

『100キロ篤レース、スタート5分前です。出走者はスタート地点に集合してください。繰り返します』

ああ、もうそんな時間か。俺はミークの手を引いて会場に向かうことにした。

~~~~~

元気な声が司会をしている。あれも修練士課程の生徒らしい。解説は先生がやるようだ。

さっき紹介されたエリートのお嬢様と名高いどつかの級長とその御付のコンビがこつちを睨んでいるが、とりあえず無視でいいよな。

『そして今年は先生方の推薦でなんと治癒課程の主席次席が特別参戦！アウトリエとミークの兄妹コン、ビ……あれ？しょ、少々お待ちください……？』

ねえ、あれどうなってるの？えっ！（シーツ！）ご、ごめん……これ、嘘でしょ？本当？それじゃああの美人さん冗談抜きで“あの”アウトリエ様？うわ、あたし自信無くしちゃいそう』

聞こえてるぞ。マイク切れてないぞ。後“様”って誰のことだ？

『し、失礼致しました！治癒課程から特別参戦、アウトリエとミークの兄妹コンビです！なんとアウトリエの方は幻術装備で姿を変え



ての出場！一人だけ男性だと野次が煩いから、だそうです！」

よくやった！とか俺と変われ！といった野次が飛ぶ。装備じゃなくて魔法、しかも物理変換魔法だが、後々面倒だから噓ついた。だって悪用されたら痴漢が量産できるし。

その後、ルールの説明が在ったが、特別な変更点はなし。成績優秀者数名に将来有望な候補生として戦乙女騎士団の警備任務に同行・体験入隊できるらしい。俺はそんな特典要らないから帰って次の魔法を考えたい。

パン！

誰かが上げた魔法の射手の破裂を合図に、ラリーがレースかよくわからない競技はスタートする。一斉に飛び出していく箒少女達。俺たち？俺たちは最後尾。溜め込んだ魔力を爆発させるように飛行するとあつという間に高度30メートルを突破するか建造物を貫通してしまうので、初動はゆっくり、市街地を抜けて進路を確保したら……

「行くぜ、ミーク！」

「うん、お姉ちゃん！」

「加速！」

魔法ではなく、二人の息を合わせるためのキーワード。

瞬間、俺たちは二条の光となる。早くも始まった武装解除合戦の隙間を潜り、チェックポイントに証明アイテムを叩きつけ（埋まってしまったが気にしない）ルートに従いひたすら飛び続ける。

先頭らしいお嬢様&召使コンビが見えてきたのは、加速開始から十数分後。それでもコースの半分近く走破しているのだから、あの二人もたいしたスピードだ。

だけど、態々二人とも足を止めて待ち構えるのはどうかと思うぞ？せめて片方だけでも隠れてればいいのに。

「この場で落とします！『氷結 武装解除』！」

折角の無詠唱魔法も宣言してからじゃダメだろう。教育が甘いんじゃないか、修練士課程。

迫る魔力の奔流を回避する。武装解除はランクの割に範囲の広い魔法だが、来るタイミングと芯が解つてれば避けるのは簡単だ。

ミークと二人で背中合わせ、可能な限りのスピードで相手の間に滑り込む。伝統と流儀に従って、ひん剥いてやんよ！

「『チク・タク・ク・ロツク・シャムロツク 石化 』」

「『リク・ラク・ラ・ラツク・ライラツク 氷結 』」

「なっ！」

「速い！」

「『武装解除』！』」

それぞれ魔法発動体を相手に接触させての武装解除。咄嗟に障壁を張ろうとしたようだが、この距離なら逃げるのが先だとわからなかったのか。

お嬢様の服が凍り付いて砕け、お付きの服は砂になって崩れ落ちる。ゆっくり見ていたいのには確かだが、時間もないし、何よりミークの視線が冷たいのでさっさと方をつけよう。

俺は即座に急降下して肩掛け鞆からマメを大量にバラ蒔く。レース開始前に入れておいたものだ。

「お姉ちゃん！」

「よし来い！」

俺の着地に合わせて、体を隠そうと硬直した二人の首根っこを掴んだミークが追いかけてくる。これで止めた。俺は脱がせて終わりだなんて温い事は言わない。この場でリタイアするがいい！

「『チク・タク・ク・ロック・シヤムロック 萌え出づる若芽よ縛鎖となりて敵を捕えよ』！」

「『きやああつ！？』」

急速に成長したマメに向かってミークが二人の体を投げつけ、薦が二人を縛り上げる。

捕縛系魔法は幾種があるが、この魔法は特に優れていると俺は思う。極めて初歩的、魔法の射手よりランクの低い魔法でありながら、植物という実体を用いている為に防御も解除も一筋縄ではいかない。使う種を選べばそれだけで束縛の強度を調整できるところもいいだろう。何でこんな便利な魔法を軽視するかね？……低位の魔法に上級魔法の魔力を込めるのは、確かに技術的に高レベルな事だが。

「お姉ちゃん、早く行かないと追い抜かれちゃうよ？」

「ああ、今行く」

「お、お待ちなさい！こんなところに放置されたら……！」

お嬢様が何か言ってるけど、無視だ、無視。カメラにバッチリ裸が映ってるけど、その分、命の問題はないだろうよ。元々コースの安全くらいは確保してるだろうし。

気にせずミークと一緒にコースに戻る。暫定三位のペアが後方に迫りつつあるが、お嬢様のペアを見て「ゲッ」と聞こえてきそうな

表情をしている。怯んでいる隙に引き離して、さっさとゴールしてしまおう。

俺たちがゴールした後、魔獣の森をショートカットしようとして竜種に追いかけられた奴が居たらしい。實力不足は明白で、監視員が出張っていた。

俺はゴール直後に反転術式を再起動、男に戻って代理人を立てたのではないことをアピールした。すると「何故脱がなかったア!」とか馬鹿なことほざいたギャラリーが居たので、魔法の射手砂の一矢をお見舞いしておいた。

ちなみに優勝トロフィーやら賞状やら副賞やは元々特別参加だったからということで辞退。俺たちは戦闘魔法も勉強するけど、本来は非戦闘系の魔法を専攻したのであって、騎士団に入りたいわけじゃないから! 総長が残念そうな顔してるが、俺は戦士になりたくない!

そう言ったら各種名誉と商品の代わりにダイオラマ魔法球の資料と材料を貰いました。らっきー。

くく時は流れて。

年一回しかないイベントで「俺は治癒課程の人間なんだから担ぎ出すな!」と叫ぶ回数が20を超えた頃には、俺は『歩く病院』と呼ばれるほど大概の症状に対処できる治癒術者になっていた。治癒課程の博士号を取って教授にも抜擢され、アウトリエは魔法世界ではそれなりに知れた名前になっていた。

ミークは相変わらず治癒魔法こそ下手だが、魔法薬の研究で成績を伸ばして俺の助教授に納まったつきり、出世を断っている。だが今では吸血鬼という素性を受け入れる人物も着々と増えており、何人か血液まで提供してくれる友人も出来たらしい。嬉しい事だ。

「では、本日の講義はこれまでとする。今回は損傷と変異に関する治療についてだ。各自、予習復習と地力上げを怠らないように解散」

今日も俺の合図で学生達が散らばっていく。治癒課程の人気は相変わらず低い、取ってくれる学生達は皆真剣に取り組んでくれるので、教える側としてもやりがいがある。ミークは相変わらず修練士課程に進みやすいようだ。

講義が終わったあと他学部生徒が魔法の応用法や理論について質問に来る事もあるから、結構人気があるほうなんだと思う。

「アウトリエ教授、総長が呼びです」

ただ、有名税ってのは結構高いみたいだ。

総長は長命種ゆえに外見年齢の増加は実年齢の三割程度だが、それでも心労具合では老けて見えてしまう。今回のような話をするときには特にそう感じる。

相変わらず人払いがしっかりした部屋で行われた会談の内容は、メセンブリーナ連合とヘラス帝国の雲行きに関する事だった。前から小競り合いはあったという話だ。俺からすれば、そもそも外来者である連合側が亜人を弾圧し始めたのがそもその原因だとは思えない。世界跨いでまで侵略するなよと声を大にして訴えたいが、まあ……言っても無駄なんだろう。

大事なはその話の続きである。近年僅かながらその小競り合いが増加傾向にあり、国境沿いの集落や中立の立場を取っている種族のところへ帝国・連合両国から圧力がかかりつつあるというのだ。このままでは古い伝承や知識・能力を有する魔法世界の財産が無為に失われる恐れがあり、学術都市としてそれは見逃せない。

そこで総長は治癒術師として有名になった俺アウトルヒに特使として中立種族の集落を回り、保護の準備があることを伝えて欲しいと告げてきた。

正直に言えば、俺の利益になるような事じゃない。だが、俺はこの世界に来てアリアドネーに納まるまで、旧世界でやってきたことを思い出していた。強力な魔法を、より多くの技術を身につけた今なら、あの頃よりもっとたくさんの人に笑顔で逝って貰えるかも知れない。

そして、何時までも殻の内側に引きこもっていても、治癒魔法を身につけた意味がない。それに……いつの間にか、俺は自分の中に大きな思いを抱きかかえてしまったらしい。

一人でも多く、一秒でも長く。理不尽を諦められるだけの時間を与えてあげたい、と。

それから一月後、身辺整理を終えた俺はミークとココを連れてアリアドネーを発った。

## 脱げウォーズ開催！アリアドネーを発つ。（後書き）

活動報告でアンケートを展開しています。

既にお答えいただいている皆様、ありがとうございます。

締め切りは次話のアップデートまでとさせていただきますので、よろしければ皆様ご協力ください。

迫害、誇り、成長期間（前書き）

エヴァ 接触編をへます。超展開入り。



## 迫害、誇り、成長期間

>> 未だ進化中の病院人間

『幽霊走者』が消息不明の死亡扱いで賞金が立ち消えになっていたのが、アリアドネー生活の意図せぬ収穫だった。吸血鬼は不死性があるから問答無用で捕殺確定まで賞金取り下げは無いらしいが、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルも同じく消息不明で、能動的に探す奴は居なくなっただけ。と言うか、大魔法の行使や不老不死、吸血の現場を見られない限り、ミーク「エヴァンジェリンが吸血鬼だと言い当てられる奴など居ないと思うぞ。治癒魔法覚えだから吸血の痕も自分で消せるしな。」

アリアドネー総長の依頼である魔法世界各地の中立部族を巡る仕事は順調に進みつつある。魔法世界は地球ほどではなくてもただっ広いし、報告や授業に戻ったりもするからペースは遅く、任務は30年目に入りつつある。総長は老けていったが、ミークは精神が肉体に引つ張られているのかあまり成長した風ではない。

任務の結果と言えば、大半は変わらずその場で隠れ住む事を主張していた。中立の立場を重んじ、アリアドネーにも付かない、と言う意味だろう。とりあえず伝えた事だけは覚えていて欲しいと告げておいた。もし連合なり帝国なりの強制介入で集落が崩壊するようなことがあればいつでも助けを求めてくれればいい、と。遠からず介入があるだろうけどな。

それと同時に、貧困から病気になったり戦場からの流れ弾で負傷したりした民間人の治療を進めている。魔法世界なのでココのポーション系も使い放題なのがうれしい。だが、貧困はどうしようもないので病気は再発するだろう。一時的に栄養を与えて体を活性化さ

せればある程度抵抗力は付くが、飢えればやがて落ちる。それに、いくら治癒魔法が優秀でも失われた手足を丸々一本再生するのは無理と言うものだ。カニやトカゲじゃあるまいし。

俺がそこに思い悩んでいると、女の子が人形を抱えている姿が目に入った。そこから前世の記憶を目覚めさせ、俺は魔力を動力にして動く義手&義足を開発したのだ。動かす意思を魔力の流れに呼応させる術式が難しかったが、机と文具しかないフラスコ魔法球の中で2年の歳月をかけて完成させた。第五、第六の手足に感激する人々の笑顔を見ると、やっぱり魔法はこういう事に使うのが正道だと確信する。

……んで。噂が広まると聞かせたくない奴にも俺達の存在を聞かせる羽目になるわけで。

国境付近をあっちへこっちへ飛び回っているおかげでエンカウントは5年に各方面一回程度と少ないが、連合も帝国も俺を軍に抱き込もうと勧誘と言うか強制というか、まあ呼びかけてくるわけだ。お断りだけど。

「治癒術師アウトリエだな」

特に連合は治療中だろうとなんだろうと大人数でやってきて、威圧的な話し方をする。おかげで俺の中の連合株は連日ストップ安だ。帝国は集落の外で待っていてくれるし、断ったら断ったで「気が変わるまで出直し続けます」と言う。しつこいのはしつこいんだが、少なくとも治療の邪魔はしないので連合よりマシだ。寿命が長いと気も長くなる物なんだろうな。

「今日は連合か。ココ、ミーク、撤収準備」  
「うん」

「きゅっ」

捕縛の結界を張るようだが、俺たちの魔力なら相手が百人居てもレジストが可能だ。と言うか、ココが白魔でデスペル＋サイレスのコンボを使えば例え格上であろうとそれで済む。いざとなれば……肩掛け鞆の中に溜め込んでいる、俺の第三の能力を使えばいい。派手な殺しになりかねないからあんまりやりたくないんだが。

「せんせー、いつちゃうの？」

「ああ、残念だけどね。でもお父さんはもう大丈夫だ。このお薬を今日の日の入りと明日の日の出に飲ませれば、明日の夕方には元気になるはずだから」

ベッドから離れた俺を不安そうに見上げる幼い少年に、小瓶で二つポーションを渡す。ハイポーションでもいいかもしれないが、弱った体に強い薬は毒になる場合もあるからな。

ココは今までに使った薬の空き瓶を自分の鞆へ片付け、ミークは毛布や鍋など集落の中から借りてきたものを片付けていく。……魔法って本当に便利だよな。湿熱殺菌も簡単に出来るから適当に集めた器具を使っても二次感染の確率がすごく低い。

「速やかに外へ出る。従わぬ場合は」

「黙れ走狗が。ごめんな。目が覚めるまで様子を見たかったんだが」

「うっふ。ありがとうございました、せんせー！」

少年の頭をなで、兵士どもを威圧しながら外に出る。全く、忌々しいッたらありやしない。医療に従事するものとして、患者を途中で放り出すのがどれほど屈辱的か千年はかけて教え込んでやりたい。勿論肉体言語で。死ぬ？いやいや、医者が死線の越え方を見誤るわ

けないだろう。

少年の家から出てそのまま集落からも離れようとするが、兵士達に取り囲まれてしまった。その更に外周には集落の人たちが心配そうな顔でこちらを見ている。

「治療師アウトリエ。改めて命ずる。我らに同行せよ」

「はっ、寝言は寝て言え。俺はメセンブリーナ連合なんぞに組する意思などない」

「貴様……汚らわしい化け物の分際で！」

「ッ」

こいつら……本当に空気読まないな。そりゃ、確かに陰口は多少叩かれるがこれでもプライド持ってやってるんだ。お前らに邪魔されるいわれはない！

とはいえ、俺は治療の専門家……医者だ。医者に殺しは許されない。故に殺し以外の方法で無力化するため、相方二人にすばやく合図を送って魔法戦を仕掛けた。

秘密詠唱。詠唱から手を読まれることを防止し、さらに無詠唱では落ちてしまう威力を確保する為に編み出した技法。声帯に魔力を通すことで可聴域を超えた声を作り、さらに腹話術で詠唱を完全に気づかせない。十分な効果を望むには精密な魔力操作といっく堂並の腹話術が必要なので、難易度的には固有技法と言ってもよいのではなからうか。特訓すれば辿り着けるけどな。

内実が変声魔法と腹話術という（前世的に）既存の技術の組み合わせでしかないのは秘密だぞ？

「（『チク・タク・ク・ロック・シャムロック。狂いの翼、雄鷄より出でて、終焉を告げる者よ。僅かばかりの時を奪う毒の歌を。石の狂音・呪縛120秒』）」

俺は体質的に、魔法の“効果範囲”に制限がある。具体的に言うと、魔法の射手は今のところ1万8千まで収束で打てるのだが、連射だと300矢までしか打てなかったりするのだ。要は、拡散タイプの範囲攻撃が苦手という事。直進貫通攻撃なら射程内が範囲だから面積的には上回ることもたまにあるが。

扱える魔力量の問題とも違うので、アリアドネー入学からずっと範囲攻撃を収束攻撃にする改造魔法を造り続けてきた。今使ったのもその一つ。

『石の息吹』という石化させる煙を作る魔法をベースに、石化時間を短く限定する代わりに、固有抵抗力や魔法障壁を無視する効果を付与した魔法。やはり可聴域を超えた音波で呪縛を叩きつける為、察知されづらいという特性もある。さらに、これは魔法発動体の都合だが発動ポイントが自分の掌なので、ある程度指向性を持たせることも出来る。非常に便利だが、改造前や上位魔法に比べて距離による威力の減衰幅が非常に大きいという弱点もある。

だがこの距離ならば特に問題はなく、発生した音に気付く事もなく連合兵が石化していく。近くに居た民間人も何人か巻き添えになっってしまったが、2分で元に戻るので許して欲しいと言うと驚いてはいたが信じてくれた。これが信頼の力だ！

ちなみにミークは専用の音波対消滅魔法を使い、ココは発動直前に影の世界に避難して事無きを得ている。

連合兵の石像を蔦の魔法で縛り上げて、とつとと逃げる。俺たちの直線飛行速度は時速300キロを余裕で超えるので、追いつかれはしないだろうよ。

>> 病院人間の助手で妹

メセンブリーナ連合の兵士から逃げて毎度のように森林で野宿する。ココとお兄ちゃんに挟まれるように寄り添われ、お兄ちゃんが張り巡らせた枝葉が私たちを覆い隠している。

いつもならとても幸せに眠れるのに、今日の私は眠れなかった。

汚らわしい化け物め！

連合兵が口にした言葉が耳に残っている。お兄ちゃんに会うまでは何度も聞いた言葉。だけど、それは全て私に向けられていたもので、今までお兄ちゃんに向けられる事はなかった。本当は思われていたのかもしれないけれど、面と向かって声に出されたのは初めてだった。

お兄ちゃんが化け物呼ばわりされたのは、どうしてなんだろう。お兄ちゃんが魔法世界で活動を始めたのはこの仕事を請けてから。亜人を装っているお兄ちゃんが不老を疑われるにはまだ早い。

(つつん)

魔力も大きいけど、お兄ちゃんはアリアドネーを出てからずっと眠りや石化の魔法を使って相手を殺さないようにしている。

医者には人殺しを許さない。救命に国境はない。旅立ちの時は笑顔であれ。

お兄ちゃんの大切な三か条。そんなお兄ちゃんが、何故汚らわしいんだろう。

やっぱり、吸血鬼わたしと一緒にいるから

（ごっくん！）

「あうっ！？」

い、痛い……すごく硬いものがわたしの頭を叩いた。見ると、コが不機嫌そうな顔で私を睨んでいる。あの大きな嘴で殴られたんだ。いたいよう。

（ふる、ふる、こく、ふる）

「え？あんな奴らの言う事は気にしちゃいけない？」

（こくこく。こく、こく、ふるふる、こく）

「自分の誇りを、信念を貫くのが大事？」

（こくこく）

……心が読まれてたのかな。それとも声に出してたのかな。コは私を叱るような目で睨んだ後、頬擦りしてくれた。少し心が落ち着いたけど、反対側にあるお兄ちゃんの顔を見ると、どうしても不安になる。

いつか、私のせいでお兄ちゃんが人々から追いついてられて、殺されてしまう夢も見る。そういう日の朝は決まってお兄ちゃんが抱きしめてくれていた。寝ながらすごく泣くらしい。どこの赤ん坊かな、私は。

やりたいことははっきりしてる。でも、それを支える信念は充分だろうか。信念を貫く力は足りてるだろうか……ううん、それは否だ。

ずっと一緒にいたい。だけど、今の私はいつかお兄ちゃんの邪魔になる。お兄ちゃんに護られているだけで、引き離されたときもお兄ちゃんに心配をかけないだけの力はない。

差し出されたのは大きな傘。

欲しいのは、彼の隣。  
妨げるのは、権力の横暴。  
必要なのは、揺るがぬ力。  
育てるのは、私の信念。  
掲げるのは、自分だけの誇り。

そのために、私に必要な事は……最初の一手は。

「ココ。私はお兄ちゃんと、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルはエータロー・サウムラと一緒に居たい。でも、今の私はエータローに甘えてるだけ。それじゃダメだと思うの」  
「きゅい？」

「もう目は背けない。エータローの回復魔法でも、私の吸血鬼化は治せなかった。だったら、私はそこの女の子じゃなく、吸血鬼の真祖として相応しく、誇り高くこの無限の人生を生きていく。例えば世界の全てを敵に回しても」

（こくこく）

「だから私は、私の中の甘えを斬る。そしていつか、エータローの誇りと並べる、私の誇りを手に入れて戻ってくる。だから、少しだけお別れ。大丈夫よ。私たちなら千年経ってもまた会えるから」

まっすぐ私を見つめるココに、微笑みかける。やがて呆れたような諦めたような感じで首を横に振り、もう知らない、とばかりに眠りの体制に入るココ。私は苦笑いした後エータローの顔を見上げて、そこへ吸い込まれていく。

「エータロー。私の大切な人。一人で立ってみせるから。あなたに負けない、誇り高い女になって、帰ってくるから。だから、その旅立ちにもう少しだけ思い出をください」



眠ってるエーターローに、心を込めて口付けして……離れた。そして、影を媒体とする転移魔法を発動する。

「またね、ココ」

（ぱたぱた）

そつぽを向きながらも翼を振って見送ってくれる大切な友達に微笑みながら、私は転移した。

くくく

数分後、服のポケットから手紙が出てきて、私はパニックに陥る。

『エヴァンジェリン。行くのはいいが、年に一回くらいは近況報告を寄越しなさい。手紙でいいから』

起きてたならそう言ってくればいいのに……！！！！

## 迫害、誇り、成長期間（後書き）

描写が足りない気がします、今の深海の限界です。

エヴァちゃんは吸血鬼である自分が主人公に危険を運ぶ事を恐れ、庇われずとも追っ手を退けられるようにエヴァ様へのクラスチェンジを決意。そのために一度主人公の側を離れるようです。『闇の福音』フラグですが、回復魔法の習得や主人公の誇りに触れた事は何らかの変化を齎すでしょう。なんだかんだいつでも甘えん坊と過保護ですし。

MM兵の言葉は単なる悩み始め。後押ししたのはココです。

主人公の魔法能力の限界が解り辛いですが、原作における大魔法の定義も曖昧過ぎるので、『千の雷』や『燃える天空』は使えない程度で認識しておいてください。相性のいい土魔法も『冥府の石柱』オンバシラサイズを3本まで、くらいで。ラカンフィルムの偽者議員が部屋を破壊した巨大石柱の魔法は使えません。

次回からは予告していたさよちゃん回収、大戦編です。改造さよちゃんは2番で決定いたしました。

## 麻帆良の魔法使いと幽霊少女（前書き）

ちよつと捏造設定っぽいが入ります。

## 麻帆良の魔法使いと幽霊少女

>>手紙

エーターへ。

私は今も、旧世界の極東地域を巡りながら日本で習った武術を研鑽しています。東洋の概念は魔法も体術も目を見張るものばかりで、もう10年かけても観切れそうにありません。今もまだ日々が新鮮、楽しく頑張っています。

賞金額が上がり続けて賞金稼ぎがしつこいですが、エーターに教わった誇りと信念の大切さと救いの手は今でも大切にしています。エーターなら私以上に大丈夫だと思いますが、くれぐれも連合には注意してくださいね。

今回はエドキリコという綺麗なグラスと、美味しいお酒を同梱しますね。お友達と楽しんでください。ココにもよろしく。

キティより。

>>鋭太郎

エヴァンジェリンと別れ、アリアドネー総長の依頼を終えた俺は、その後半年をアリアドネーで、残りの半年を『赤い月』というNPOで活動するというサイクルを繰り返している。『赤い月』は俺を代表とした『国境なき医師団・魔法使い版』みたいなものだ。実際に旧世界で『国境なき医師団』が発足するのはまだ半世紀ほど先のことだが。名前の由来は、俺の大切な妹分からのイメージ抽出と、『死は旅立ちである』という俺の考えから、『罪を洗い流す』『転生』などのイメージも込めている。けくがれーを、きくよめーる、

あーかーいゝつき。

魔法の秘匿を理由にした出し惜しみ？するわけないだろそんな事。気付かれないように魔法を使うのが最優先で、気付かれても軽い口止めで充分だ。会則に「記憶は命である」「全力を尽くせ。さもなくば死ね」と明記してるからな！

連合を敵に回す覚悟のある魔法使いはまず居ないので、旧世界での活動は俺&ココしか居ないのが少し腹立たしくもあり、寂しくもあり。

魔法世界での活動なら俺の元生徒が力を貸してくれるんだけどな。流石に亜人の彼らを旧世界に呼び出すわけにはいかないだろう。

不老ともなると気が長くなってしまうのか、最近では10年置きにしか寄越さない手紙によれば、エヴァンジェリンは日本の方に居るらしい。元気でやってるようで何よりだ。

エヴァンジェリンが俺のところを離れてすぐ『闇の福音』の名前は知れ渡った。いや、連合が意図的に広めていった。『立派な魔法使い』が『倒すべき悪』として。だが、この手紙を見る限りエヴァンジェリンがそれを悔いていたり、怨んでいたりする様子はない。幾人かは理解者も居るという事だろう。

しかし、日本か……時代は代わり、イギリスで起きた産業革命以後世界は科学の力で加速しつつある。それは同時に妖怪や神の力を殺ぐ事になり、土着の信仰に基づく地方の魔法技術は失われつつある。これを好機と見た連合の魔法使いは旧世界での勢力を伸ばし、世界各地に魔法学校や魔法協会を据える事に成功していた。日本の魔法組織は開国時の不平等条約や政府が対外的に卑屈だった事もあってかなり強力に蝕まれたらしい。摩擦も大きいというが……

まあ、魔法のことはともかく、前世で18世紀から始まる工業化という一大現象を知っていた俺は、同時にこの現象が地球環境を著

しく破壊していくことも知っていた。だが、安易さや利便性を求める人の怠惰な本能と時代の流れは止められない。しかし、失われる自然は個人的に惜しい……

そこで、魔法球の出番と言うわけだ。俺は16世紀初頭から旧世界各地を飛び回り、山海を切り取って複数の魔法球に詰め込んだ。おかげで前世ではレッドデータだった生き物が魔法球の中で着々と繁殖している。生活区域の分割管理が難しいかと思ったんだが、適当に放り込んでも勝手に住み分けてそれぞれのテリトリーを作ってしまったため、心配無用だった。魔法球間のゲートを設置したらどんな動物でも自分が生活するのに適した場所を探し回ってテリトリーを作り、その魔法球の食物連鎖の一つになる。

別荘じゃなくて生命球だな、これは。中身が勝手にバランスとって適量に増えてくれるので、手を出す必要が一切ない。サファリパーク的なことも出来るんじゃないだろうか。

これと同時に、原種に近い野菜や果物も育っている。育てているじゃないぞ。野生で勝手に伸びてるんだ。形は悪いが逞しさも味も養分も品種改良物に負けない進化を遂げている。

……ん？修行？態々24倍もの密度でやるような急ぎの修行はない。アリアドネーの学院で赤点から逃れたい生徒の補講や補習には使ってるけど。

俺が修行といえば旧世界の各所で学んだ蹴り技主体の格闘技だ。体がでかく手足が長いので、大抵の相手ならリーチの外から一方的にぶっ飛ばせるから、というのがまあ、切っ掛けだな。

旧世界に来てすぐの頃から鍛錬してるから、もう550年くらい

になるのか。不老を隠す為に何度か名前を変えて活動してるから連合には気付かれていない。加入しろって煩いけど、眠りの魔法で逃げ回っている。魔法の秘匿を無視してるから『立派な魔法使い』に加えないぞと言われたが、別にそんなものに入りたくてやってるわけじゃないので知ったこっちゃない。

……何の話をしてたんだっけか？ああ、そうだ、日本の話だ。そうだな、明治初期の日本というのがどんなのか見てみたいし、日本古来の魔法……呪術だと思うが、そういうのも学んでみたい。確か、今の生徒の一人に京都出身者が居たよな。名簿、名簿、っと。

ああ、その前に関東魔法協会へ顔出さなきゃ拙いかもしれないな。そっちのアポは総長に頼もう。

「ココ、済まんがしばらく影の中で大人しくしててくれな」

「きゅっ、くえー」

「食事を増量しろ？うーん……解った解った、解ったから突つつくな！」

>>??????

僕は今、出来たばかりの鉄道の駅で人を待っている。

事是一通の手紙から始まった。ヨーロッパ経由で魔法世界から届いたその手紙には『アリアドネーから魔法使いが一人、日本へ観光に行く』という旨が記されていた。

本国からではなく、アリアドネーからというのは初めてのことだった。最も高位の魔法学校と呼ぶに相応しいアリアドネーからの来客に麻帆良は、関東魔法協会は慄いた。

そして喧々諤々の会議の末、その魔法使いの案内と護衛を任せられたのが学園長の直弟子の一人であり、実力も麻帆良第三位と謳われ

る僕だった。うまくいけば立派な魔法使いへまた一步近づけるだろう。

汽車がつき、客車から一人、長身の男性が降りてくる。登校や下校の時間で無ければ、この駅で乗り降りする人はほぼ皆無だ。魔力も大きいようだし、あの人がアリアドネーからの人に違いない。

「……お待ちしていました。マギさん」

「私は暇木だ。人違いではないか？」

……いとまぎ、いとまぎ、糸巻き、か。

「失礼しました。学園長よりあなたの案内を任された者です」

「そうか。だが、若人よ。私は個人で観光に来たに過ぎない。案内はこの学院の中だけで結構だ」

「ですが……」

「古東京都もじっくり回ってみたい。此方の組織に所属している魔法使いである君が一緒では、何かと不都合があるのではないかな？」

判断が難しい……けど、言ってる事は確かだ。陰陽師と魔法使いの確執は根が深い。事前に調べればすぐにわかることだから、彼がそれを言うのもおかしい話じゃない……どうする、どうする？

「で、ですが、それはあなたも同じことではありませんか？ 一人では――」

「気遣いは無用だ。学問に国境はなく、既に伝手を通して関西呪術協会側にも連絡を入れ、案内を頼んでいる。それよりも……」

彼はそう言って視線を世界樹のほうに向けるが、やがて首を振って歩き出した。世界樹の魔力が珍しかったのだろうか？



しかし、関西との繋がりまであるとは、やはりアリアドネーの高官なのだろうか？

「とりあえず、今日は休ませて貰おう。明日は所蔵されている魔法書を閲覧させてもらうぞ」

「わかりました。では、宿にご案内します」

悠然と歩く彼の背中を慌てて追いかけて、追い抜いて先導した。

>> 鋭太郎

すぐ側に敵愾心を燃やす組織があるというのに、魔法使いはドス流揃いか。案内に出てきた若いのは俺が思考誘導の魔法を使っていることにも気付かずに宿へ案内してくれた。それも、魔法の関与がない宿に、覗き見の魔法さえ無しで。総長が何か言い含めてくれたのか、どうしようもないアホなのかはまだ解らないが。

いずれにせよ、麻帆良での目的は図書館に所蔵されている魔法書。大半の魔法書はアリアドネーに揃っているが、原書・写本共に何らかの理由で確保できなかったものが連合を通じて各地の魔法協会に流れている場合がある。これを閲覧する為にも、俺は総長を通してアポを取ったのだ。学術都市の人間なら知識を漁ろうとするのに何の違和感もないからな。出来たら写本を持ち帰りたいものだ……これだけアホ揃いなら摩り替えて原書を持ち帰ってもバレないか？

だが、今回のメインは関西だ。日本土着の呪術を学び、扱える魔法の幅を広げる。どんな力にも一長一短があつてしかるべきなんだ。一つの技法に拘り過ぎてはいけない。研究者ならば専門を極めるのもいいが、俺の本分である戦災救援活動では兎に角多様な症状に対して柔軟に対処できる力が優先される。のんびり一つずつ極める余

裕はない。

「暇木様、京の都へはいつお越しに？」

「あなたが使いか」

「はい。此方が長よりの書状と本山への地図です」

「確かに受け取った。明後日にはお会いできよう」

「ありがとうございます」

お膳を運んでくれた女中さんが一通の手紙を渡し、違和感なく去っていく。魔法的な観点からすれば一般人に当たる気配だった。ふむ、ここでも連合の選民思想の弊害が出ているようだ。魔法使いや気を使う武芸者じゃないからとマークしていないのだろう。一般人こそが潜入しての間者に最適なのに。

とりあえず腰を落ち着けて料理に舌鼓を打ち、関西からの書状を開く。観光案内と呪術の師事に前向きな用意があるが、その前に『歩く病院』を見込んで依頼があるという。うんうん、こういう交換条件を前面に出してくる奴は好感が持てる。医者としての活動なら喜んで受けるところだ。だが、患者が居るなら少し予定を繰り上げたほうがいいのか？麻帆良では最近連続殺人事件があるから注意するようにと追伸が書かれているし……

ゴウンツ！

なんだ？麻帆良の校舎の方で妙な音が……大気の魔力流も乱れる。魔法を使えばそれだけ周囲の魔力は乱れるが、それにしたって行き過ぎだ。まるで周囲の魔力を誰かが強引にかき集めているような。

……行ってみるか。術式見れば有害無害もハッキリするだろう。

~~~~~

「冗談だろ……麻帆良の魔法使いは馬鹿揃いか」

魔力が特に乱れている場所……恐らく校舎であろう建物が見える場所についたとき、俺は無意識に独白していた。周辺の空間に漂う魔力を強引に吸い上げ、行使しようとしている巨大な魔法陣は、この世に在ってはならぬもの。

不完全とはいえ、俺の全てを否定する魔法が、決して成就するはずのない夢物語が、そこに在った。

曰く　死者蘇生。

この暴挙に走った愚かな魔法使いを見たのは48年ぶり、実行者は知っているだけでも千人は下らない。当然、全員が失敗だ。何も起こせなかった奴、人とは呼べない肉の塊を作った奴、そのまま化け物になった奴……パターンは大体この三つだ。そして、術者の末路はいつも一つ。魔力枯渇による生命力の消失、すなわち死だ。

今回展開されている術式は過去の反省を真摯に見たのか、周辺の魔力を吸い上げ、死者本人の肉体を焼いた灰を媒介に魂を呼び戻すもののようだ……成功するわけがない。確実に失敗する魔法がこれほど派手に展開されているのに、何故麻帆良の魔法使いは何の行動も起こさない？止めねばならんに決まっているだろうに！

「どちらへ行かれるのですか、お客さん」

「……そこを退け。貴様らにはあの魔法が見えないのか」

進路を塞ぐのは十人以上の魔法使い。俺を案内した若いのも混ざ

っている。関東魔法協会はこの反魂を支持するとても

「実行しているのは麻帆良第二位の魔法使いです。それに、世界樹の魔力もあります。きつとやってくれるでしょう」

冗談だろ。魔力の流れを見る限り、立ち塞がる魔法使いは雑魚中の雑魚、俺の所の落第生にすら劣るような奴らだ。こんな集団の二番目だからってあの魔法がうまく行くわけがない。

「愚かな……仮に成功したとしても、戻って来た者の居場所などないのだぞ」

「それでも、部外者であるあなたに邪魔はさせません。ここで見ていて頂きましょう、わたし達が栄光を掴む瞬間を」

名誉欲、か……？馬鹿な、確かに困難な魔法の成功例になれば一目置かれるのは確かだが、死者蘇生は第一級の禁呪、アリアドネーや帝国なら計画しただけでも重罪なのに、旧世界でそんな暴挙に及ぶのが連合の『立派な魔法使い』観なのか！？

「（『チク・タク・ク・ロック・シヤムロック』）」

ふざけている。理解できない。理解したくもない。このままあの魔法使いの暴走を許せば、無節操に吸い上げられた魔力の影響で無辜の連中が被害を被るのは間違いない。どんなに穏便に済んでも東西激突の引き金、魔法版関ヶ原だ。

「（『石の歌声・呪縛43200秒！』）」

吸い上げ現象でも十分な効力を発揮できるだけの魔力を込めて、石化魔法を発動する。石になった魔法使い達からも魔力が奪われつ

つあるから、効果時間は一割くらいまで減ってしまうかもしれない。それを見越して12時間もの設定にしておいたんだが。

既に反魂の魔法は発動している。いや、暴走している。生と死が両立する矛盾に世界が悲鳴を上げ、魔法がその痛みを強制するために魔力を際限なく吸い上げていく。世界樹が枯れるまであと3分、つてとこか。古き魔法の遺産を使い潰されては堪らん……アリアドネーの教授としても。

「ココ、白魔だ！突入直後にデスペル最大出力！」
(きゅいっ！)

魔力の流れから魔法が使われている部屋を特定し、物理防御障壁を展開、飛行魔法 最大出力！

「うおらあっ！！」

壁を粉碎し、肩掛け鞆からエーテル系入りの小瓶をありったけから撒く。同時に白魔ココが影の中から顔を出し、デスペルを発動。エーテルを触媒に増幅された解呪の魔法が、その場に展開されていた魔法陣を一瞬で掻き消した。魔法陣の中心に居た少年が驚愕の表情でこちらを見るが、俺は無視してドーム状の対魔法障壁を展開する。

「えっ……ぐぶ……」

直後、少年が泡を吹いて倒れた。急速に吸い上げられていた魔力が行き場を失って渋滞を起こし、空間の魔力濃度が上がりすぎてしまったからだ。川の流れをいきなり堰き止めた時に水位が一時的に上がるようなものだ。時間が過ぎれば元に……っておい！？

密度を増した魔力が澱になり、人の形を作っている。長い髪を切

り揃え、水兵服とプリーツスカートを着た少女だ。なんだ、何があった……？

「あ、あら？わたし、一体……？」

戸惑った風に周囲を見回す……幽霊、だよな？蘇生の魔法を途中で強引に解除した影響で、中途半端な状態が安定してしまったのか？と、とりあえず人格もあるみたいだし、コミュニケーションを図ってみるか。

「ええっと……なんで浮いてるのかしら？」

「あー、その、なんだ。こんばんは？」

「えっ！？」

後ろに居たせいで気付かなかったのか、驚いてこちらを見る幽霊少女。可愛いじゃないか。うむ、どこから見ても霊体が存在として安定している。

「あ、あのー、どちら様でしょうか。ここは女子校区で、男性は先生方しかいらつしやらないはずなんですけど……」

「説明が難しいな。とりあえず、俺の名前は沢村鋭太郎。幾つか質問に答えてくれるかな」

「あ、はい。わかりました」

「まず、君の名前は？」

「相坂さよです」

「この少年を知っているかい？」

「……いいえ？」

「ふむ。では、さっき気が付くより前で、一番新しい記憶はどんな事かな」

「ええっと……あ、あつ……思い出せません」

幽霊少女改め相坂さよが凹む。ふうむ、大体分かってきたぞ……？

このネギま！世界における幽霊ってのは、強い未練を残して死んだ場合に、その未練が魔力を喰って魂を地上に縛ってしまった存在のことだ。魔法世界の戦場跡地なら見ようと思えばそれなりに見ることが出来る。目障りだし影響力もほぼ皆無だし、放っておけば一週間くらいで消えるから誰も見ないけどな。

だけどこの幽霊は違う。多分、極端に濃度を増した魔力が死者蘇生の魔法の残滓に流れて、媒体となっていた灰に染み付いていた肉しきとしんかく体の記憶を形作ったもの……だと思う。通常ならば幽霊を構成する最も重要な心の記憶が何一つ残っていないのがその根拠だ。よほどショッキングな死に方をしたせいで人格が抹消したか、媒体が十分だったか。

部屋の魔力濃度が下がるのに従ってさよの存在感も希薄になっていくが、消滅寸前のレベルなのにまだ安定しているのも普通の幽霊とは違うところだ。

「あおう……わたし、もしかして幽霊なんでしょうか」

「……はい」

「あうう」

再び凹むさよ。足がないのに体育座りしての字を書いている。

いや、ここで嘘ついてもどうしようもないだろう。

「経緯は不明だが、まあ、成ってしまったものは仕方がない。さよ、と言ったな、色々説明してあげるから俺と来い」

「えっ！？？」

「このままここに居ると除霊されるかもしれないぞ。それでも良いなら強制はしないが」

「はっ、ハイ！行きます行きます！」

とりあえず、寄り代に桜の枝で人形を作って、さよの存在基盤を
移して、エーテルを撒いた瓶を回収、術者の少年が起きる前に撤収
だ！

麻帆良の魔法使いと幽霊少女（後書き）

幽霊少女現る。本人の独白やたつみの発言から、普通に幽霊になった存在ではないことにしました。

案内した魔法使いは名もなきモブです。蘇生魔法を使おうとしていたのはだれだ？

できる事、したい事、しなきゃならん事。

>>幽霊少女

「と、こんなところだ。大体理解できたか？」

「えーと、世界には魔法が実在して、沢村さんは魔法使いで……」

「そして君は魔法によって世界に呼び戻された幽霊／魔法存在と言うわけだ。まあ、今はそれだけ解ってればいい」

「なんだか複雑な気分です」

「こんにちは、相坂さよです。この度幽霊になりました。と言っても、世の中に未練があったり恨みがあったりするわけじゃありません。何でも、魔法によつて再現された存在らしいです。」

「幼年部から１１年間通っていました。麻帆良学園が魔法使いの一大拠点だなんて、初めて知りました。びっくりです。」

「わたしにそれを教えてくれたのは、わたしが宿った粗末な人形を胸のポケットに入れて歩いている背の高い男の人、沢村鋭太郎さん。この人も魔法使いだそうです。その足元を歩く黄色くてふわふわな鳥さんはチョコボのココちゃんというそうです。この体は幽霊なので触れませんが、抱きしめたいくらい可愛いです。」

「……つと、言っている間に沢村さんが学園長室の扉を叩きます。中から返事がして、入っていく沢村さんとココちゃん。わたしも、おじゃまして」

「来たか、暇木どの」

「学園長室には先生方が集まっていて、一番奥に座っていた学園長が沢村さんに声をかけます。」

でも沢村さんはそれに応えず、懷から一枚の紙を出して広げ、先生方に突き出しました。それは沢村さんが大急ぎで纏めた手紙の返事として、今朝何処かから届いたばかりの巻物でした。そして、それと同時にたくさんの光が床に溢れて、鎧を着た人が沢山現れます。なのに誰もわたしに気付いてくれないのが寂しいです。うう、ココちゃんが頭がある場所を撫でてくれます。触れないのがうらめしや

「全員動くな」

「「「！？」」」」

へえっ？」

沢村さんが口にしたのは、挨拶ではなく高圧的な命令でした。先生方が戸惑ううちに、鎧の人たちが何かを先生方に突きつけていきます。

「俺はアリアドネー“学院”治癒術者課程教授、沢村鋭太郎だ。昨晚、一般人死者への反魂魔法の使用、および使用幫助を確認した。これは魔法界における国際禁呪条約の重大な違反である。既にアリアドネー、ヘラス帝国、メセンブリーナ連合の主だった法的機関への報告が済んでいる。組織犯罪停止条約に基づき、関東魔法協会の魔法先生・魔法生徒・そのほか魔法関係者を全員拘束する。抵抗するな。現時刻より念話の使用等外部への連絡が確認された場合、捜査妨害と見做す」

沢村さんが宣言する間にも、先生方を縛り上げてた鎧の人たちが学園長室を出て行きます。

「馬鹿な……アリアドネーの教授が、何故こんな旧世界の極東に！」
「“観光”だと、最初から言っているだろうに……『眠りの霧』」

聞いた事のない言葉が沢村さんの口から流れると、ぼふつと煙のようなものが部屋を満たし、先生方が倒れていきます。これが魔法……あれ？

「教授、って……沢村さんは大学の先生なんですか？」

「ああ。制度が違うから大学と言うわけではないが、アリアドネーと言うところにある魔法使いの学校で、傷を治す魔法や医術を専門に教えている」

「それなら、どうして先生が逮捕みたいな事してるんですか？」

「別に俺が逮捕したわけじゃないさ。告げ口して警察機関を連れてきただけ」

「その割には、令状の読み上げみたいなことしてたじゃないですか」
「ふむ……目敏いな、相坂。よかるう、教えよう」

あ、なんだかノリノリですね。

「俺の出身のアリアドネーと言うのは麻帆良と同じような学園都市でな、同時に国際的に独立した組織でもある。だから、アリアドネーで教授と言うのは、単純に先生と言う以上の意味合いがある」

「はあ、偉い人なんですね」

「いや、実際にはそうでもない。単に顔が利くっただけさ」

「……よくわからないです」

「突き詰めて言えば、有名人だから言葉を真面目に聞いてくれる偉い人が多い、ってだけの事だよ」

ふつと溜息一つ、沢村さんがさっきの紙を丸めて片付けて、扉に向かうので追いかけます。

廊下に出てしばらく歩くと、鎧の人が何人も先生や生徒を捕まえて連れて行くのが見えました。他の先生や生徒も大騒ぎになってい

ます。でも、鎧の人に詰め寄った人達はふらふらと離れていきました。あれも何かの魔法でしょうか。

「先生、質問です！」

「む？そういう事なら教授と呼んでくれ」

「ハイ、教授！捕まった人達はどうなるんでしょうか！」

「魔法使いの世界に連れて行かれて、裁判にかけられる。禁止されている魔法を使おうとした罪と、一般人に大々的に魔法をバラそうとした罪で……軒並みオコジョ刑務所だな、多分」

「おこじょ？」

「そ。哺乳類食肉目鼬科の生き物。別名ヤマイタチ。鼬科にしては後ろ足が長く、丸顔。ベルクマンの法則に反し、寒冷地へ行くほど小型の個体が生息する。アーミンと呼ばれる毛皮の原料になる……物語なんかでよく聞くだろう？魔女だとばれたらカエルにされる、とか。俺たち魔法使いの罰つてのは、大体オコジョになる呪いがかけられて幽閉されるんだよ……主犯は子供だからってんで減刑あるだろうけど、最短でも10年は娑婆の空気とさよならだ」

しかし馬鹿げてるだろ？と笑ってココちゃんの頭をなでると、コちゃんが教授の影に沈んでいきます。その中に巣があるんだっていつてたけど、どんなのなんだろう？案外、立派なお家だったりして……

周りを見ると、麻帆良の外れにある麻帆良大橋。このまま歩くと麻帆良の外に出ちゃいます。道を封鎖している鎧の人と一言一言挨拶して、橋を渡りだす教授。

「どこへ向かうんですか？」

「京都。約束がある」

「京都！？す、すごく遠いですよ！？」

わたしが慌てると、教授はまたニヤツと意地悪そうに笑いました。

「この俺を誰だと思っっているのだ？」

>> 鋭太郎

やってきました京の都は関西呪術協会総本山。空飛んできたけどそれが何か？所要時間一時間ちよいだ。ちよつとした縮地を上回る速度だが、気にしない気にしない。飛行中は相坂がはいでたな。ハ鳥になった気分です〜と言ったが、あんなスピードで飛ぶ鳥は居ない。あと、ココが凹むからその表現はやめてくれ。さらに総本山の結界を通り抜けるときにはハなんだかぴりぴりします〜と言ったが、陰陽師の総本山の結界をその程度で済みますか。やはり並の幽霊ではないな。

ずらりと並ぶ巫女さんのお辞儀に若干気圧されながらココと進んでいくと、狩衣を着た二人の男が待っていた。一人は大太刀を腰に差している。生徒に聞いた、神鳴流という奴だろう。

「お待ちしていました、沢村鋭太郎殿。関西呪術協会の長、近衛義輝と申します。これは護衛の青山実春です」

「ご丁寧な挨拶、痛み入ります。アリアドネー治癒術者課程教授、沢村鋭太郎に御座います。これは我が従者、ココ。この度は急な願いを受け入れていただき、まことにありがとうございます……加えて、予告なく参上を繰り上げた事、空からなどと無粋な立ち入り方をしたこと、平にご容赦いただきたく」

いきなり2トップのお出迎えか……手紙にあった依頼つてのは、かなり大きなモノっぽいな。さてさて、鬼が出るか蛇が出るか……

鬼も蛇も出るか、陰陽師だし山の中だし。

「いえいえ、これほどに早く来ていただけたとは思いませんでした。ささ、どうぞ中へ」

「申し訳ないが、従者殿は此方でお待ちいただけますかな？」

「ええ、それは勿論。いいよな、ココ」

（こくこく）

青山氏の願いに首を振って応えるココに集まる巫女さんの黄色い声に三人して苦笑しながら、奥へ案内される。相坂も一緒なんだけど……気付いてる風じゃないな。

それにしても、広い。無駄に広い。流石は華族。対話するのは二人、護衛が一人と幽霊が一人。だと言うのに、部屋は二百人は並べそうなほど広い。落ち着かないぞ。

「近衛殿。まずはこの度の急な願いをお聞き届け頂き、改めてお礼を申し上げます。それと……一つ、残念なお話が」

「ほう？」

「昨日、関東魔法協会が重犯罪を犯しまして、先ほど魔法関係者が大勢検挙されました。その主犯の名が、近衛近右衛門と言いまして……縁のある方かと」

「……不肖の息子です。東西の架け橋になるのだと飛び出していったのですが……」

俺の報告にがつくりと肩を落とす長。青山氏も大分凹んだ様子だ。お察しします。

まあそれはともかく、と気を取り直し、長が話を再開する。

「書状にも書いたとおり、お願いしたいことが御座います」

「伺いましょう。魔法医として頼られる以上、出来る限りの事は致

します」

「……実は近年、陰陽師と、その……鬼の類が触れ合う機会が増えまして」

長が物凄く言い辛そうに告げてくる内容を、俺は理解してしまった。相坂はよく解っていないようだ、それは幸せな事だ。理解できるってのは、それだけ世の中にスレてることだからな。

「事情は理解いたしました。近衛殿はこれをどのように見ておられますか？」

「……時の流れならば致し方なし、と」

「承知いたしました。ならば適した薬をご用意させていただきます」
「よろしく頼みます」

互いに深々と一礼。緊迫した話が終わった後は碎けた話になり、京都出身の生徒の話や陰陽五行の基礎理論や善鬼護鬼などを軽く説いて貰ったりした。有意義な時間はすばやく過ぎ去っていき、いつの間にか日はとつぷりと暮れてしまった。

巫女さんに大人気のココに食事をやり、風呂を借りて、と。

「あの……教授、質問です！長さんのお願いってどういうことだったんですか？」

さあ研究の時間だ、って時に相坂が挙手した。すぐに聞きたかったけど今まで聞けなかった、と言う感じだな。聞き流せばいいのに……まあ、聞く以上は答えてやるか。

「どこから説明しようか……陰陽師と言うのは、日本古来の呪術を使う、昔から土着の魔法使いだ。これはいいな？」

「はい」

「で、魔法使いと言うのは基本的に接近戦に弱い。体を鍛えるより魔法の力を鍛える傾向があるし、体を動かしながら呪文を唱えたら普通は舌を噛むしな。そこで、敵が近寄らないように足止めする役割を担う奴が必要になる」
「ふむふむ……」

紙の幽霊と筆の幽霊を使って真剣に俺の話聞く相坂……ちょっと待て、何故そんなコマイ幽霊が本山の結界を抜いている？……考えるだけ無駄か。そういうもんだと言う事にしておこう。

「西洋由来の魔法使いはこれを“従者契約”によって解消している。他人と結ぶこの契約は、契約相手を“魔法使いの従者”^{ミラデル・マキ}と呼ばれる存在へ昇華し、魔力の供給などで身体能力を底上げして壁と露払いを担ってもらうと言うわけだ」

「従者契約とみ、みにす？」

「みにすてる・まぎ。話を続けるぞ？これが陰陽師になると、先の長のように剣客を雇う場合もあるが、大半は術や取引によって服従させた鬼とか妖怪とかをそこに当てるわけだ」

「なるほど……教授もその従者さんがいらっしゃるんですか？」

「俺の場合は例外に当たる。7〜800年生きてると魔法だけでは飽きてくるんでな、格闘術も学んだから接近戦もそれなりにできる。従者はココだ。人間同士の契約じゃないから、少し形が違うけどな」
「ふむふむ……それはつまり、ご飯に責任を取るから護ってね、みたいな感じですか？」

「単純だが解りやすくして良いな。ハンコをやるう」

俺の言葉をよく聞いて、理解して、メモる相坂。ちょっと覗くと、箇条書きで纏めてある。これなら少し補足を書き足せば充分参考になるだろう。デフォルメされた鬼のイラストが「がー」とか言ってるそばに『よくできました』のハンコを押すと実に嬉しそうに笑

った。あれ？このメモ幽霊……やめよう。どうせこのハンコだつて押そうと思ったときにしか付かない魔法のインクなんだ。幽霊と魔法がぶつかったからって騒ぐ意味は無い。

ちなみに俺は講義しながら自分の研究日誌（見掛けはアクセサリ―）を読み漁って過去の知識を吸い上げ、頭の中で今回の計画に必要な理論の構築を進めている。計画名は相坂実体化計画。

「で、だ。戦場と言う極度の緊張状態で常に自分の身を護ってくれる存在は、時間が経つに連れて本能的に好意的な存在になってくる。一種の吊橋効果なんだが……そこで自制が利かないと、どうなるか」
「……………」

「まあ、護ってくれる奴がとても好きになるわけだ。好きという気持ちが行き着く先は、わかるだろう？そして、それは確率こそ非常に低いが、古くは神話の時代から事例のある“可能な事”だ。確率が低いとは言っても当然“数撃ちやいつかは当たる”。長は当たった時用に対処する薬が欲しかったのさ。いつそうなるか解らないから急ぎだった、と」

おお、幽霊なのに顔が真っ赤。ハあわわわ……と両手で顔を覆って小さくなつていく相坂。まあ、つまりはそういうことなんだな。長はこれを受け止める姿勢のようだから、必要なのは栄養剤と調整関係と免疫関係と……擬態薬も必要かな？前二つが母体用で後ろ二つが嬰兒用だ。用意するのはそんなに難しいものじゃない。パターンの多い鬼と烏族の体を調べさせて貰えば必要な効能がはつきりするだろう。

さて、こっちはホムンクルス主体で……でもあれってフラスコから出すと崩れるんだよな。鍊金じゃなく魔法で組み上げるのは確定だが、フラスコ代わりに防御魔法で覆うか？いや、肉体そのものの安定性を向上させたいな。魂製造過程は捨てていいんだから、その

分術式に定着性と安定性の強化を加えて……そうだ、安定と言えばバランス、バランスを重視するのは東洋の思想だ。陰陽五行の概念をホムンクルスに応用すればこれまでに無い何かが生み出せるはずだ。

ふふふ、楽しくなってきたぞ……？

へあわわ……教授が悪そうな顔してます〜

「ふっふっふ、期待して待つが良い相坂さよ。一流どころの魔法使いにも引けを取らん素晴らしい肉体を用意して、再びの人生を謳歌させてやるからな」

へほ、本当ですかっ！？〜

「本当だとも。死者蘇生は禁止事項だが、魔法生物を作る分には何一つ障害は無いからな。たまたま幽霊が素材に入っていたところで、犯罪にはならん。さあて、どんな力を組み込もうかね？」

そう、たまたまだ。俺は偶然麻帆良で風変わりな幽霊を見つけて、東西魔術融合実験の素材として合意の上協力してもらった。それだけのことだ。対外的にはな。“新しい人造生命”の研究そのものは全くの無罪だから遠慮もいらない。創った命を粗末にすると犯罪になるけど、魂が宿る前の肉体はただの物質だ。

ふはははは……東西魔法概念を融合させた世界初の人造生命の肉体、必ずやチートに組み上げて見せよう！

できる事、したい事、しなきゃならん事。（後書き）

皆様の予想通り、某少年はぬらりひょんです。学園長にならないと言ふ事はありません……代理が思いつかないので。

さよちゃん人格はとりあえず好奇心旺盛な生徒みたいな感じで、今後も説明っぽくなりやすいですが、それも一種のキャラ付けみたいに思ってください。

薬のくだりも先への伏線みたいな感じになってます。誰のかは……わかりますよね？

次回。時は流れ、チートボディと未来のサムライマスター現る？

変化するパワーバランス。そして開戦へ。

>> 魔法教授

関西呪術協会にお邪魔して二十と数年。アリアドネーでは非常勤生活する俺に痺れを切らした優秀な後継者が講義を引き継ぎ、俺は自分のやりたい研究をしてその成果や論文を時折向こうへ持っていくのが主流になっていた。それでも月に何回か、主に大事な試験前などには講義しに行ってるし、質問状が届く事もよくある。熱心な生徒が居るのは嬉しい事なので、俺は出来る限りのアドバイスを返信している。『大教授の特別授業／通信講座』等と呼ばれているそうだ。

『赤い月』の方は活動を魔法世界に限られつつある。魔法世界のきな臭さが加速しているのもあるが、旧世界で動けるのは俺だけだし、諜報技術のめまぐるしい発達は魔法に迫るかのような勢いだ。それでも習った分身を活用してコソコソ活動しては居るのだが。

それに、魔法世界での活動もメンバーが増えた事もあって俺が出るのが禁じられつつあり、症例報告とかを纏めてマニュアル化するのが俺の主な仕事になっていた。幹部曰く「あなたこそがリーダーであり生き字引なんですから、我々で事が済む間は我々に任せてください！」とのことだ。組織の長つてのは中々不自由だな。

そんなこんなで、この数十年は殆ど関西の本山から動いていない。陰陽術の腕を磨き、西洋魔術との統合研究に励みつつ、友達と縁側に並び、エヴァンジェリンから贈られた酒や巫女さんが淹れてくれる上物の茶を楽しく飲む陽気のいい日を過ごすのが大半である。

この友達と言うのも大半が人間じゃない。本山の結界を軽く無視できるレベルの大物妖怪の皆様だ。鬼や烏族、狼に始まる犬狐猫などの狗族……そういうのが大将格が一声かけただけで結構気軽にや

つて来てくれるのだよ。無差別治療やってたら実力和思想、それから酒の強さを認められて友達になった……と言つか、基本的に酒飲みなら大抵友達になれるような奴ばかりだったぞ？上等な酒とつまみを山ほど持っていてけばそれだけで良いんだから。義輝と実春は愕然としてたけど。あ、役職降りたから呼び方変えたんだ。被るし。

今日もまた暖かな日差しを受けながら、とある大鬼と酒を飲んでいる。視線の先では、実春の孫、神鳴流継承者青山詠春が少女剣士を鍛えている。使っているのは相変わらず馬鹿みたいに長い大太刀だ。

「何度も思っただがな、馬に乗る訳じゃないんだからもつと短くて取り回し易いのを使えばいいのに」

「ま、そう言わんとき。神鳴流の代名詞みたいなもんやからな、こたわりがあるんやろう」

つい零してしまった言葉を拾ったのは、身の丈6メートルはある屈強な体に五本の角、縁側に並ぶのは窮屈すぎると言う事でゴザ敷いた上に胡坐かいてる隣の大鬼。勿論杯も一杯五合の鬼サイズだ。おかげで周囲には空っぽの一升瓶が早くも4本転がっていて、同じゴザの上に座っているココが並べたり積み上げたりして遊んでいる。

「専門家だからか……おっと、杯が空じゃないか酒呑よ」

「おお、これはすまん……っぷあゝ。うゝむ、染み渡るのお」

「あつここに居た……って、教授も酒呑さんもまた朝からお酒飲んでるんですか！？いくら酔わないからって飲みすぎです！没収です、没収！えいっ！」

背後から可愛い怒声と共に和装の美少女が現れ、触られもしないのに杯と酒瓶を奪われてしまう。酒呑に至っては自前の酒入り瓢箪

まで没収されてしまい「殺生な〜ワシの生き甲斐なんや〜」と泣いている。この情けないのが日本三大妖怪の一角だと言うのだから、世の中わからない。

そう、こいつは酒吞童子。大江山で無数の鬼を従える、鬼の頭領である。首だけになって彷徨ってたのを見つけたんだが、まだまだ現役、鬼の秩序を守り、地位の回復を図るのだとえらい張り切っていたので、恐らく討伐時にかけられたのだろう治癒を阻害していた呪いをデスペル薬で解いてやった。以来飲み友達。どう見ても『童子』なんてガラじゃないので単に酒吞と呼んでいる。配下の鬼は関西呪術協会と友好的に付き合っているようで、関東魔法協会の圧力を容易に撥ね退けられるほどには地位と実力を回復させていた。関東魔法協会はあの後もメセンブリーナ連合の管理下にある。連合そのものが旧世界人の国だからだが、魔法書の所蔵は制限され、巨大な図書館島の書架はスラスカだと言う。勿論没収した書物はアリアドネーが保管しているのだがね。

ちなみに白面金毛九尾とぬらりひょんには出会えていない。九尾はバラバラに飛び散った殺生石を全部集めると言う苦行をせねばどうしようもなく、ぬらりひょんは……どこに居るどんな奴なのかすら不明だ。だが、どこからか「いずれ会える」との声が聞こえているような気がするから気長に待つとしよう。

すぐ近くに飛騨の大鬼神、両面宿儺神が封印されていると言う話も聞いたが、こっちはこっちで呼んでも体が大きすぎると言う問題があり、逆に封印を硬くする必要があった。残念だ。

さて、話を戻して和装の美少女……まあ、要するに相坂なんだが身長149、3サイズ77-56-79。そのほかの部分も幽霊のときの格好をそのまま流用している。変更も可能だが、長年の幽霊生活で慣れてしまったので当分はこのままで良いそうだ。

体が出来たのはつい最近、二年位前だ。戦闘能力は魔法と陰陽術を扱う後衛型で、流石に酒吞には敵わないが、雑魚鬼なら数百匹相

手にしても勝利できる性能を誇っている。勿論、並大抵の魔法使いの攻撃が通用する事もない……戦わないならそれに越した事は無いが。

肉体固有の能力は幽霊の能力をそのまま移植できないかというコンセプトの元に設定された。つまり、受肉中でも浮遊やポルターガイストが使えるようになってる。さっき俺たちから酒を取り上げたのもポルターガイストだ。さらに、メモ帳や筆など、道具の幽霊を使役というか行使する能力もある。主に日常のレベルで便利な能力だ。さらに魔法的な何かじゃないから障壁とか結界とか完全無視で、幽霊時の相坂を感知できるような連中以外には察知不可能。力は強いが対象選択がかなり大雑把で直接誰かを傷付けられるような鋭さはないが、その辺も使い次第だろう。頭上から石を落とすとか。ちなみに、任意での幽体離脱も可能だ。魂の尾の都合で300メートルくらいしか離れられないが。

体が出来てすぐの頃はそりやもうはしゃぎまわり、ココと一緒にそこらを駆け回っていた。山ほど服を買ってきて組み合わせを悩んで見たり、半世紀ぶりの食事に涙したり。最近ようやく落ち着いてきたところだ。

相変わらず俺を教授と呼び、俺も相坂と呼んでいる。が、やっていることが女房染みてきているのは気のせいだろうか。妖怪連中にはよく「そらの夫婦より夫婦らしい」などとからかわれていて、真っ赤になった相坂が色んな物をポルターガイストで投げつけるのもよく見られる。分別は維持できているらしく、壊れ物は投げないけどな。

関西の話に進もう。妖怪と人間のハーフは14〜5年に一人くらい生まれている。身体能力や呪術の才能に秀でたものが多く、何時かは知る事だからと早めに知らせて本山で修行を積ませるのが通例のようだ……これも高位妖怪が本山に出入りする理由の一つでもあるらしい。人里で暮らすのが良いか、妖怪の一角として里に迎え入

れるのかを話し合ったりするためだとさ。

ま、酒呑ほどの超大物になると、単に遊びに来るだけだったりもするんだが。今みたいに。

「なあ、鋭太郎も何とか言っただけや。ワシから酒取ったら何が残るいうんや」

「でかい図体と愉快な人格……あとは手下の鬼どもか」

「誰もそないな事聞いとらん！なあさよはん、その瓢だけでも返したって」

「もう……飲んじゃだめですよ？」

「おお！おおとも！今日の晩までは絶対飲まん！」

この漫才も結構お約束になってきてる。非常識ではあるが、愉快的な日常の一面だ。相坂に怒られるのも呆れられるのも含めてな。うん、俺は日々を謳歌している。

「全くもう……」

「そう言っとなよ相坂、これでもやることはやってるんだ。分身がな」
「本体が働かなきゃ意味無いです！」

「分身の経験はきちんとフィードバックされてるからいいじゃないか……それに、本体でやるべき事は本体でやってるぞ」

「もう……ちょっと待っててくださいね、酔い覚ましのお茶を淹れて来ますから」

パタパタと走り去る相坂を見送り、酒呑も早く帰れと烏族の伝令に怒られたので掻き消えるように帰っていく。しばらくココと待って相坂のお茶が届いた頃、鍛錬を小休止した青山家が二人現れた。

>> 神鳴流剣士青山一号

朝から酒呑童子と酒を飲みながら鍛錬を見物していた人物に声をかける。

彼の名は沢村鋭太郎、20代の外見をしているが関西呪術協会に30年近く滞在している西洋魔法使いで陰陽師で医師。大妖怪を友と呼び、関西呪術協会との橋渡しをした人だ。

「おはよう、詠春に鶴ちゃん。相変わらず綺麗な太刀筋だな」

「おはようございます」

「おおきに」。ココちゃん抱っこしてええ？」

(こくこく)

「やあん、かわええ」

彼の従者である黄色い鳥をむぎゅつと抱きしめて頬擦りする弟子は置いておいて、彼の隣に座る。不思議な事に、アレだけ飲んでいながら酒精のにおいが全くしなかった。

さらに彼のもう一人の従者……と呼んでいいのかわからないが、相坂さんから茶を受け取る。彼女もまた彼と同様陰陽道と西洋魔術を併用し、高い技量を誇っている。従者契約はしていないと聞くが、その行動の中心はいつも彼なので、心理的には充分従者だろうと思う。夫婦のようだと言現すると様々なものが飛来するので避けねばならない。一度抜き身の大太刀が飛んできて肝を冷やしたことがある。

「それにしても詠春、お前本当に向こうへ渡るつもりか？」

「相変わらず情報が早いですね」

「俺は抗老化の手段も山ほど持つてるからな、噂を集めやすい」
アンチエイジング

なるほど、情報源は女性陣ですか。加えて彼ほどの頭脳と経験があれば噂話から核心に迫るのも容易、と。恐ろしい人だ。

彼は少し仰ぐようにして流れる雲を見ていた。独白のような彼の言葉が続く。

「それにしても、折角の継承者が腕試しに戦地へ赴くとは何たる暴拳」

「そう言わないでください。彼女を守る男になるにはこれくらいしないとダメなんですよ」

「……近右衛門の娘か。あの子も難儀な生まれになってしまったものだ」

「ええ、ですから、私は戦場で名を上げ、彼女を守る男になりたい」

「医者の前で人殺しの宣言とは太い奴だ。だが、志は評価してやろう……さて」

彼はそう言つて湯飲みを膝に置き、此方を真つ直ぐに見据えた。何を言われるのだろうか。確かに戦場で名を上げるということは敵を殺すと言う事だ。それを心得ない剣士は居ないだろう。

だが、彼の眼差しはそういう事を言っている訳ではなさそうだ。

「そんな詠春に忠告だ。義理立ても結構だが、無理に隠せばその分歪む事をよく覚えておけ」

「な、何のことでしょうか」

「……口に出して欲しいか？」

僅かに彼の視線が揺らぐ。周りを見て言え、と……相坂さん、コ、弟子。三人が此方を興味深そうに見つめている。彼女達に聞かれてもいいのか、という意味だと解釈し、それでは困るような話題は……ある。

「いえ、遠慮します。理解しました」

「そうか。では伏せておこう……青山詠春！」

「ハイ」

「戦場に立つ者の先達として命ずる。生きて帰れ。無様だろうと死に損なおうと、たとえ神鳴流を汚そうと、必ず生きて帰れ。それがお前があの子に対して果たすべき義理だ」

「……心得ました」

言葉に宿る気迫に、駆け抜けた戦場の数も質も彼に遠く及ばないと感じさせられた。それゆえに私は、彼の言葉を軽んずる事は許されぬと思い、はつきりと頷いた。

そして彼は懷から一通の封書を取り出し、開く。そしてこう言った。

「激戦は近い。俺の戦いもすぐそこまで迫っているだろうよ……」

>> 鋭太郎

詠春に忠告した翌日。俺はアリアドネーから届いた手紙を手に、魔法世界に現れていた。勿論ココと相坂も一緒に。

アリアドネーの廊下を歩く俺に、一人の生徒が近寄る。

「大教授、お待ちしていました」

「君か。どれほど集まっている？」

「ご自身の目でお確かめください。それから、此方をどうぞ」

不敵な笑みを浮かべる生徒に渡されたのは、畳まれた布。広げるとそれは大きなロープ。地は濃紺と藍色の斑で、背中と左胸に大きな赤い月が描かれている。……なるほど、悪くない。

迷わずそれを着込み、相坂と生徒も同じようにそれを纏った。流石にココの分はなかったけどな。

そして講堂に着く。そこには、同じローブを纏った人影が講堂を埋め尽くすほどに並んでいた。千人二千人には足りないだろう。俺の姿を見た皆が思い思いの杖を掲げている。

それを見た俺は壇上に据えられたマイクを使わず、ただ声を張り上げた。

「よくもまあ、これほどまでに集まったもんだ！そんなに戦地に行きたいか！」

オオオオオ！

「家族に別れは告げてきたんだろうな！？」

オオ！

一斉に上がる叫び声が、講堂を震わせる。負けじと俺も声量を上げた。

「いいだろう！連合と帝国の大々的な宣戦布告は聞いている通り！これまでになく大規模な戦闘が繰り広げられる事だろう！ここに伴う戦災を、俺たちは見過ごせるか！！」

否！否！否！

「では俺たちが杖を取り、二つの国を殺し尽くすか！」

否！否！否！

「ならば始めるぞ！俺達の戦いを！無益な戦いに興じる烏どもに、俺達の在り様を知らしめる！」

ウオオオオオオオ！！！！

「我らは医師師団『赤い月』！戦場に昇り、命を救い、魂を導く！全てを許さず、全てを認め、ただ救い続けよう！自らの手の及ぶ限

り！」

拳を振り上げ、吠える。赤い月のロープを纏った者達が皆同じように拳を振り上げ、決意と誇りを込めて吠えた。

二度と戻れないかもしれない。誰も救えないかもしれない。自分達の存在が戦況を加速させる事もあるだろう。

だがそれでも、目の前で理不尽に傷ついていく人々を見過ごせない。そう言う馬鹿な医者が、こんなに沢山居るのだった。

そして俺は後世に『大分裂戦争』と呼称される大戦争に、大勢を巻き込んで飛び込んでいく……

変化するパワーバランス。そして開戦へ。（後書き）

立場が随分関西寄りになり、木乃香改変も確定させてしまいました。関西呪術協会、驚異的に強化。鬼が自分から守る総本山……抜ける気がしない。

そして大戦へ。NGO的な活動してるならこの立場しかない！

次回は紅き翼が出てくる、のか？めまぐるしい展開で申し訳ないです。

いくら羽ばたこうが月面には届かない。

>> 紅き翼リーダー

俺はナギ・スプリングフィールド。千の呪文を使いこなす、世界最強の魔法使いだ！

俺がリーダーの最強集団『紅き翼』はグレートブリッジ奪還作戦以後帝国有利の戦線を押し戻し続け、その活躍で連合の勝利は確実といわれている。

そんな俺たちは連合の高官に呼び出され、ある仕事を請け負っていた。

「この地点に拠点を組んだ帝国の部隊を壊滅させてきて欲しい」

その言葉と共に渡されたのは作戦地図。そして、これまでの偵察隊の報告書だった。

よくわからないが、戦場の側に突然現れて作戦を妨害し、戦況を混乱させている連中らしい。何度か攻撃部隊も派遣したそうだが、あつという間に返り討ちにあつたらしい。つまり、とんでもなく強い奴が居るかも知れねえって事だろ。ワクワクしてくるぜ。

そして俺たち『紅き翼』は、その帝国特殊部隊と思しき連中の拠点へ向かっていた。

「見えてきましたよ。恐らくアレですね」

「あれは……帝国の仕官でしょうか」

アルが指差す方向には、一つのでっかいテントと沢山の小さいテ

ントの群。全体を何百人もの亜人が走り回っている。そして、一番でっかいテントの側で背の高いローブの奴がタカミチの言うとおり帝国軍人の制服を着た奴と深々と礼を交わしている。あのノッポから感じるでっけえ魔力……アイツが親玉だな！

「けっ、堂々とでっけえもん建てやがって、まるでサーカスだな」
「何でもいいぜ。帝国の連中には違いねえんだから……叩き潰す！」

ラカンの言葉を蹴っ飛ばしてあんちよこを開き、いつもの魔法を詠唱する。

「またしても初撃から広域殲滅魔法か？まるで馬鹿の一つ覚え……いや、馬鹿じゃったの」

「よいではないですか、ナギらしくて」

お師匠とアルが何かむかつくこと言ってるが、俺はいつもと同じようにぶっ飛ばすだけだぜ！

狙いはあの野郎がいるでっかいテントだ！行くぜ……オラアツ！

「“千の雷”……！」

>> 赤い月リーダー

「それでは、彼らのことをよろしくお願いいたします。あなたの方の高潔さは、必ず報告いたしましょうぞ」

「確かにお預かりしました。道中お気をつけてお戻りください」

深々と礼を交わしたのは、帝国軍の制服を来た亜人が三人。彼らは帝国王家と軍部の命令を受けて、戦場周辺の負傷者を“奪取”し

ている俺たちの調査にやってきた軍人だった。

この戦争中、『赤い月』は戦火に巻き込まれた人々を中心に回収しているが、戦意あるいは戦力を失った兵士も回収している。だがその手段ゆえに不審がられた。戦場が俯瞰で見れる場所にこっそり陣取り、倒れている連中を陣営問わず強制転移で回収して収容してしまうのだから。

治療を終えた兵士がどうするかは俺たちの感知するところではないが、テントの中で暴れたり別の患者に八つ当たりするような奴は医者流の制裁を加えて反省させている。

連合も何度か来たのだが、あいつらは上から目線で『従え』の一言しか言わないので無視を決め込んでいる。冗談ではない、患者を選び好みなど誰がするか！

帝国側は支援の用意があると言ってくれたが、それでは中立が保てないので、と丁重にお断りさせていただいた。第一、食料も薬品も俺が全部口八で調達できるので金も物資も外部供給の必要がない。

俺たちの前に敵はなく、俺たちの後ろに味方はない。

俺たちの道に正義はなく、俺たちの敵に悪はない。

俺たちが掲げるのはエゴであり、俺たちが砕くのは現在を襲う絶望と嘆きである。

中立性を保つ為の信念として考えた三か条だ。『赤い月』は正義の味方ではない。患者を前にしたどんな状況下でも黙っていられないバカな医者集団だ。そんな連中に後ろ盾は必要ない。

上の方にもお伝えくださいと言いつつ、彼らを見送ろうとしたその時。唐突に嫌な気配を感じて周囲に視線を巡らせた。

意識を集中させて魔力の流れに目を凝らせば、大分離れた場所に人影が見える。子供が三人、大人が二人、大男が一人、魔法使い風のローブが一人。子供の一人が数歩前に出て魔力を収束させて、何だあの規模は！？

「何て馬鹿げた、くっ、お下がりください！」

広域デスペル　ダメだ、ココは大テント戦線の中核、呼ぶ訳にはいかない。防御結界　これも不可、魔力の規模から考えるに強度不足の恐れがある。

悩む間にも敵対者と思しき奴の魔力が精霊を動かし、電撃が収束しつつある。

俺は焦りに震える腕を何とか制御し、鞆の中に入っているものを鷲掴みにした。そして

「『　十重二十重と重なりて走れよ稲妻』！」

何故か聞こえる呪文に臆することなく、掴んだものを両手に分けて正面空間に広くばらけるように投げる。それは、赤紫の煙を封じ込めたような光が揺らめく、大きめなビー玉くらいの球体だった。鷲掴みしたから正確な数が解らないが……二度三度撒いてる余裕はない。

こいつで防げなきゃお終いだ……なぜならこれが、俺の持ちうる最強の手札、第三の能力だから！

JOKER

「魔石よ、封じられた力を解き放て！“反転術式・進路”！！」

“千の雷”！！」

地平から飛来する雷の束が、緑色の障壁に阻まれる。どうやら永久追尾や命中爆発とかの効果を持たない広域殲滅魔法だったようだ。しかも、魔力の練りもめちゃくちゃで威力は見掛け倒し。この程度なら呪符の防御結界で事足りるじゃないか……勿体無い事させやがって。

これが俺の第三の能力、『魔石取り扱い』である。ネーミングが

ドストレートだとか言うな。わかりやすくいいだろう。

具体的には、魔力と魔法を高密度に凝縮して魔石に変じさせ、任意のタイミングで開放する事ができる、というものだ。これだけならば遅延魔法でも同じような事が出来るのだが、此方は魔力だけを封じる事も出来て、一度魔石にしまえば半永久的に保存が利き、何より開封するキーワードさえ知っていれば（発動時に）全く魔力を消費せずに魔法を行使することが出来るという特性がある。つまり、多重使用によって最大保有魔力量さえ超えた出力の魔法展開も可能になるということだ。これにより俺の弱点である魔法の規模を補う事も出来る。だが、魔法を圧縮する為に消費する魔力量が半端じゃない為、準備に時間が掛かるという欠点もある。実際、今の一撃で備蓄の三年分は消費してしまった……過ごしてきた歳月が違うからまだまだストックは有るが、やはり勿体無い気分だ。もう少し魔法を見抜く時間があれば数を調整できたんだが。

「この魔法は……まさか、赤毛の悪魔か!？」

「これを防いでしまうのか……何たる魔力!」

「帝国軍人殿。皆様にもお伝えください。我ら『赤い月』は、何者が相手であろうと実力を以って中立性を維持する、と」

青い顔をした帝国軍人さんに追加の伝言を頼む。それにしても何処のどいつだ、宣言もなくいきなりこんなもんブツ放す大馬鹿者は! 大方連合側のクズだろうが……このままテントの側を戦場にされては堪らん。

俺はさらに呪符をばら撒いた。

「友よ、友よ、俺に力を貸してくれ……」

陰陽師の定型詩とは違うが、俺と妖怪の間柄は基本友人なのでこれでいい。呪符が光り輝き、多数の鬼や烏族がその場に現れた。少

し多めに気を込め、位の高い連中に来て貰ったのは言うまでもないな。

「おう、鋭太郎やないか！」

「なんや、旦那さん、お困りか？」

「ああ。済まないが伏兵に備えてこのテントの群を守ってくれ。それから、そっちの軍人さんを安全な区域まで護衛してくれ」

「「おう、まかしとき！！」」

「俺はちいと留守する！頼んだ！」

頼もしい返事を背に受けて、飛行魔法を最大出力で発動する。クズども……医者を怒らせるとどんな目にあうか、その足りない頭に刻み込んでやる！まずは貴様だ、赤毛のガキッ！

「（『呪紋起動“障壁突破”』）」

「な、がつ！ぐああっ！？」

表面に施した呪紋処理を起動させた脚甲の先端でガキの肩を蹴りつけ、温い防御障壁を砕いて骨を外す。この程度で悲鳴を上げるとは……魔力強化はしてるようだが、鍛えてはいないということか？よろけるガキのもう一方の腕を捉え、絡め、極め、外す。これで両腕が使えなくなったガキの頭を持って、地面に叩きつけた。力の抜けた腕から、馬鹿に長い杖が離れる。

「がつは！」

「……ハッ！な、ナギッ！」

「おっと」

ようやく赤毛のピンチに気が付いたのか、周囲の連中が動き出す。殴りかかる筋肉ダルマ、腕を振って拳圧を飛ばしてくるヒゲのダン

ディと子供三号、魔法を使い始めるローブと子供二号。一人下がって大太刀に手をかけて機をうかがっている青年剣士は……もしかして詠春、か？

襲い掛かる物理衝撃や魔法攻撃を赤毛のガキを文字通り盾にして防御し続けながら、被っていたローブのフードを下ろす。と、青年剣士の表情が固まって引き攣った。うん、詠春だ。

それにしても、盾にされた味方を遠慮容赦なく攻撃とは、どういう連中なんだこいつらは。子供三号は流石に手を止めているが、筋肉ダルマ、お前途中から嬉々として赤毛のガキを意図的に殴ろうとしているだろう。H A H A H A じゃねえよ。

面倒だな、筋肉ダルマの相手だけでも酒呑に手伝ってもらおうか

……

「沢村殿！……お前らやめろーッ！」

あ、詠春が怒鳴った。また一段と声を通るようになったみたいだが、ひよつとして怒鳴り慣れたのか？だとしたら可哀想に。こんな連中と一緒に居たんじゃいつ喉が枯れてもおかしくなさそうだ。

数十秒後、情報交換をした俺の前には土下座する詠春と、詠春にアイスクリーム作られて蹲るローブ&子供二号と、混乱しているダンディ&子供三号。子供一号赤毛のガキと、詠春に頭を峰打ちされた筋肉ダルマは完全に気絶してしばらく再起不能だ。しかしこの赤毛、打点をずらしておいたとはいえアレだけ殴られといて骨折無しとは頑丈な奴。俺が最初にやった脱臼は治しておいたので、そのうち起きるだろう。

「申し訳ありませんでした、沢村殿ッ！」

「顔上げな、詠春。偽の情報に踊らされたんなら仕方ないさ。テン

トは無事だし、俺も実行犯には報復したからお相子でいいだろ」

「本当に申し訳ありません！」

「あ、あの、詠春さん、この方は……」

再起動を果たして恐る恐る質問する子供三号。詠春が教えてもいいかと此方に視線を向けてくるが、俺はそれを否定して自分から名乗る事にする。勝手に知られるのは嫌だ。

「随分手荒い挨拶になってしまったが、名乗っておこう。医術師団『赤い月』団長、沢村鋭太郎。魔法世界ではアウトリエという名で通っている」

「なっ！」

「なんと」

「……」

俺の名乗りを聞いて仰天するローブ&子供二号と、何かに絶望したかのように天を仰ぐダンディ。そりやそうだろう、本名はともかくアウトリエはそれなりに知れた名だからな。アリアドネーに所属する治癒魔法の大物として。

子供三号は再びフリーズしている。

「それにしても、沢村殿がNPO活動をなさっていたとは」

「ああ、悪いな詠春。身の上話をするのは嫌いなんだ。さて、俺は名乗ったんだし、そっちの名前を」

「うおおっ！」

突然の大声に視線が集中すると、飛び起きた赤毛のガキが俺に向かって殴りかかってくるところだった。拳を受け流し、突進力がそのままダメージになるように鳩尾を殴る。動きが止まった背中へ肘を落とし、再び地面に叩きつけてその上に乗った。

「ぐああああ……」

「なんなんだ、この思慮という言葉をどこかに捨ててきたようなバカガキは」

「ハハハ……一応、私たちのリーダーです」

「ガキじゃねえ！俺は『千の呪文の男』ナギ・スプリングフィールド！最強の魔法使いだ！えーしゅんも一応とか言っくな！」

「……すまん。俺も『一人総合病院』等と呼ばれる事があるが、心のイタさは治せないし、バカにつける薬は取り扱ってない」

「哀れまれた！？」

「……それは残念だ（です）」「……」

「お前らーッ！」

最強とか……バカだろ。？。大体において今お前の体勢はどうなってるんだ……あ、最強の・魔法使いじゃなくて最強の魔法・使いなのか？……いや、それはないか。

「騒ぐだけなら迷惑だから帰れ。俺は忙しいんだ」

「そうはいかねエゼ！お前らは戦場を混乱させて戦争を長引かせる悪い奴だろ！『来れ 虚空の雷（ぐい！ごぎん！）ぎゃああああ！』」

いつの間にか杖に手を伸ばしてまた魔法の詠唱を始めるバカの腰に力を入れると、痛々しい音がしてバカの悲鳴が響き渡る。

「な、なにをしたのじゃ」

「腰椎を外した」

「うつ……」

「え、えげつないのお……」

妙にジジ臭い言葉で喋る子供二号の質問に答えると、子供二号、ローブ、ダンディ、詠春の四人がまるで自分のことのように腰をさすって青い顔をした。俺はのた打ち回るバカの腰を一応詰め込んでやっってから放置して、詠春の肩を叩く。

「もういい、名乗らないでいいからさっさと帰れ。患者かその付き添いになるまで二度と俺達『赤い月』に近寄るな」

「そうですね。それがいいでしょう」

「じゃあな詠春、あまり殺しすぎるなよ」

「ま、まちやが、れ！」

いざ我等が戦場へ、と飛行魔法を用意し始めたら後ろから声がかかった。振り向くと、転がったままのバカが俺のほうをまっすぐ見ている。激痛で気絶しててもおかしくないのに、これがバカの一念という奴か？

「帝国は何考えてやがる！戦場を混乱させて、戦争を長引かせて何をする気だ！」

いや、知らねえよそんな事。俺たちはアリアドネー出身の医者集団であって、帝国軍じゃねえ。それに、戦場を混乱させたのはどっちかというと帝国勝利寸前をひっくり返したお前らのほうじゃねえのか？

まあ、いずれにしても、返す言葉はこれで決まりかな。

「語る舌を持たん。戦う意味さえ解せぬ輩に」

「なんだとッ！」

この場合の戦う意味ってのは目的意識の事ではなくて、戦いの被害被害その他って意味だ。それが解ってたら広域殲滅魔法なんか使

うわけがない。こいつの場合は目的意識のほうもかなり怪しいけどな。

「ふざけんな……アルもお師匠も黙ってないでなんか言えよ！」

「ナギ。彼らは帝国軍ではありませんよ」

「……へ？」

「アウトリ工教授といえばアリアドネーで治療の魔法を大きく発展させた『魔法医の祖』と呼ばれるほどの人物じゃ。『力尽くの中立』という理念を広めた人物でもあるの」

ローブの突っ込みに目を丸くしてバカ面しているバカに、追撃を入れるように子供二号が人を持ち上げる。こんな事になるなら普通に詠春に言っておけばよかったかな。今更言っても遅いけど。

「しかし彼が率いた『赤い月』は活動範囲こそ広がったが規模はそれほど大きくなかったはずじゃが」

「薄く広くやってたから、そう見えただろう。今回は激戦だから構成員が集合してる」

「なるほど、道理じゃの」

「……話は終わりだ。次に攻撃してきたときは全員不能の寝たきりにしてやる」

今度は何も聞かずに飛行魔法でさっさとテントへ戻る。クソ、時間を喰い過ぎた。一刻一秒を争う患者をほっという何をやってるんだ俺は！

>> 若き侍マスター

「なんだよ、これ……どうなってやがんだ!？」

「邪魔だから帰れってんだ！」

怒鳴りつける沢村殿だが、口先の言葉だけで他人を信用させるのは基本的に無理だと思う。縮地に劣らぬ速度で巨大なテントへ戻っていた彼の真意と正体を見定めようと『紅き翼』全員でそのテントまで追って行ったのだ。

布一つ潜った先にあったのは……見たことも無い地獄だった。

いてえ……いてえよ……

「もう大丈夫だ、今治すぞ！」

お母さん……逃げて……

「大丈夫、お母さんは無事だ！だから君も頑張れ！」

娘を頼みます、先生方……

お父さん！お父さん！！

「畜生が！蘇生薬急げ！今ならまだ間に合う！！」

「クソッ、帰って来い、帰って来い！こんな子遺して逝くんじゃねえよ！」

巨大なテントの中に横たえられた大勢の怪我人が並べられ、呻き声や悲鳴、嘆きや怒声が響き渡っている。腕が無いもの、足が無いもの、体が半分以上焼けているもの、吹き飛んでいるもの……人間も亜人も関係なく、老若男女の区別も無い、そこにいたのは重傷者の群だった。

彼の従者である黄色い鳥は、並べられた怪我人の間を駆け抜けて何かの小瓶を配っている。相坂さんの姿が見えないが、恐らく別のテントなのだろう。

「邪魔だ！出て行け！」

「うつ？」

戦場よりも戦場らしい鬼気迫る空間を前に呆けていたら、彼と同じローブを着た一人にテントから突き出されてしまった。抵抗する事が出来ずに追い出され、屍餅をついてしまふ。他の『紅き翼』メンバーも同様だった。あのラカンでさえ気圧されて立ち上がる事が出来ていない。

「なんで……なんでだよ」

「ナギ？」

「何で、アイツはこんな怪我人だらけのところを殲滅しろなんていったんだ？中に連合の奴だって居たじゃねえか。兵隊じゃない奴だって居た！この連中を殺したら、戦争で死ぬ奴がどんどん増えるじゃねえか！」

座り込んだまま呟くナギの言葉は、今の『紅き翼』全員の心を代弁していた。

「どうして俺たちにあんな偽情報を掴ませた……俺たちは、戦争を終わらせるために戦ってるんじゃないのか？なのに、どうしてこんな、戦争を加速させるみてえなことを！？」

このナギの言葉がこの戦争に隠された真実を暴き出すことになるとは、このときの私には予測できていなかった。

いくら羽ばたこうが月面には届かない。（後書き）

というわけで、紅き翼接触編でした。原作で核弾頭を引き合いに出していたナギですが、この作品では赤い月の活動を『完全なる世界』発見の引き金に見ました。いかがでしたか？

当然のことながら、主人公は紅き翼に入りません。

ちなみに赤い月の大テントの扱いは巨大手術室のような感じで、小テントには隔離が必要な伝染病患者や、大至急の治療が必要というわけではない軽傷者、病人、戦災孤児などが収容・保護されます。さよちゃんの小テント班の一員として頑張っています。

困った奴らと俺と契約（前書き）

鋭太郎のスタンスとアレの話です。

困った奴らと俺と契約

>> 鋭太郎

そいつがやってきたのは『紅き翼』とやら（結局名乗らせないまま追い払ったが、あの後詠春をキーワードに調べた）を追い払ってしばらく……半年くらい経った頃だった。

「やあ、『無上の救い手』。世界を救ってみないかい？」

そいつは俺の顔を見るなり、そう切り出した。

言っておくが、そんな無敵臭い二つ名を名乗ったり認めたりした覚えなどない！精々病院が俺の限界だ。

~~~~~

「お疲れ様です」

「ありがとう」

俺の執務室として使われているテントの中で1時間に渡るプレゼンテーション（何故か黒板まで持参してきやがった）を終えた総白髪の青年は、ソファに座ると相坂が淹れたカップに口をつけて目を見開いた。だが二、三度首を横に振るとそれをソーサーに戻して深く座りなおし、此方をまっすぐ見据える。

「以上で僕の説明は終わりだよ。答えは？」

「……興味ないから手は貸さない」

「それは何故かな？君の行いと違って世界を根本から救える手段のほすだけれど」

表情からは感情の揺らぎを感じ取りにくい、本気で聞いているらしい。まあ、答えは決まっているんだが。

「俺はそう言う大義に踏み潰される人が見捨てられなくて、こういうことをやってるんだ。目の前の患者しか見えてないし、見る気もない。それが幻だろうと人形だろうとな。それに」

「……それに？」

「世界の未来を賭けて戦うのは、医者の仕事じゃない」

たま〜に例外もあるけどな。だが俺にとってはごく当たり前なので平然と返したが、それを聞いた青年は目を点にしている。そんなに予想外だったか、俺の答えは。

まあ、魔法使いつてのは『紅き翼』のバカどもを筆頭にどいつもこいつも英雄志望ばかりだからな……珍しいっちゃ珍しいのか。

「帰って親玉にも伝えてくれ。やりたきや勝手にやれ、俺は自分の職分以外に手を出す気はない、とな」

「……それは、中立と見ていいのかな」

「どうだろうな。俺は『健康でない者』の味方だ。その結果何が敵に回るかまでは考えていない」

ようやく復帰した総白髪と言葉を交わした後、奴は中身が残っているカップをに目を落として溜息を吐いた。

「交渉は決裂か。残念だよ……ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト」

「教授ッ！」

始動キーと思しき言葉の羅列に相坂が立ち塞がろうとするが、俺



はその肩に手を置いて宥めながら立ち上がる。

「豆ブレイドの分析なら無駄だぞ。今じゃ俺しか持っていない旧い樹ふるだ」

「…………… 本当に残念だよ」

「ふえ？ …… 珈琲の話ですかっ！ 紛らわしい事しないでくださいッ  
！！」

「うつ！？」

こっそりとカップの中へ指先を向けていた腕を力なく下ろした青年に、相坂がお盆を振り下ろした。

ぼん、と音がして青年がよろけるが、体勢を立て直して謝る。そしてテントの外へ。

「そういえば、まだ名前を聞いていなかったな」

「言わなかったかい？」

「ああ、組織名しか聞いてない。それともアレがお前の名前だったのか？」

「いいや、違うよ。僕は『地のアーウェルンクス』さ」

「何だ、その捨て駒臭のする名前は。改名したほうがいいぞ」

「…………… そうなのかい？」

小首をかしげる青年に、俺ははつきりと頷いた。当たり前だ、四天王やら四聖獣やらつてのは使い捨てと打ち切り、踏み台と捨て駒を象徴するTHE・凶兆だぞ。

「ああ、その枕詞はヤバイ。確実に使い捨てのにおいがする。アーウェルンクスはともかく、地の、と付けるのはやめたほうがいいだろう」

「ふうん…………… わかった、考えておくよ。ありがとう」

そして青年アーウエルンクスは転移魔法を使って消えていった。  
ぱしゃんと音を立てて弾けた水溜りを一瞥した俺は、再び執務室へ  
戻ろうとして……足を止めた。

「今日は厄日か？」

視線を上げた俺の眼には、長い金髪の女が白いスーツのチビスケ  
に連れられてこっちへ歩いてくる姿が映っていた。

>>エンテオフュシア

この戦争が始まって、最も名を上げた組織を述べよと言われたと  
き、その意見は二分されるだろう。

一方は『紅き翼』。『千の呪文の男』ナギ・スプリングフィール  
ドをリーダーに据える戦闘集団。帝国の苛烈な攻勢を退け、戦線を  
押し進めつつある英雄達。

そしてもう一方が『赤い月』。メガロメセンブリアでは『死霊使  
いの集団』などと根も葉もない悪評が広められているようだが、最  
前線では『安全保障領域』と呼ばれている、武装中立の医療集団。

「こ、こんにちは」

「転んで擦り剥きでもしたか、子供三号」

「転んでません！それから、僕の名前はタカミチです！」

「そうか。ま、いい……入れ。立ち話は嫌だろう」

団長、教授などと呼称される代表、大きな赤い月を背負うローブ  
の男にタカミチが言葉をかけているが、男は溜息を吐いて頭を振っ

た。どういう意味だかは解らんが。

そしてテントの一つに通された。無数にあるテントの中でも、とりわけ小さなものだった。執務机とテーブルを挟んで向かい合うソファ以外は何もなく、それ以上を置く余裕すらない。

男は妾たちに勧めながら早々にソファに座って足を組み、肘掛に頬杖をついて切り出した。

「さて、用件を聞こうか」

堂々とした態度で此方を見据えてくる態度は無礼に思えるが、同時に風格を感じる。流石は武装中立の体现者か。今までに出会ったことのない性質を持っているか……

ティーカップを用意した給仕の少女に礼を言い、音を絶つ結界を張る。これでこの会話が聞こえるのはこの場にいる四人のみだ。

少女が周囲を見渡し、男は居住まいを正すがそれ以上の何かをする様子はない。幾つもの連合部隊が壊滅させられたと聞くが、血気盛んというわけではないのか。

「ウェスペルティア王国、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアだ。まずは突然の訪問を詫びる」

「恐悦至極。医療集団『赤い月』団長、アウトリエ。旧世界では沢村鋭太郎を名乗るものです。これは助手の相坂さよ」

「初めまして、女王陛下。お目にかかれて光栄です」

互いに臣下のものではない礼を交わし、再び視線を交差させる。鋭い眼光が此方を射抜いてくるが、怯まずに交渉を進めねばならない。

「うむ……用件だが、主らは優れた魔法薬を扱っていると聞いた。

まことか？」

「薬に優劣などありません。過ぎたるは猶及ばざるが如しと申しまして、全ては適度適切に処方されて初めて薬。それ以外は毒か水に過ぎません」

む。これまでに会った治療師はこういう質問をするとすぐに自分が如何に優れているかを説きだしたものだ。

「すまぬ、聞き方が悪かったようだ。だが、主らが優れた治療術者である事はわかった」

「いえ。身を託される以上、力量や思想を試されるのは当然の事です」

「……済まぬ。では、本題なのだが……」

喉が乾く。心音を自覚する。ティーカップを手にとって、掌が酷く濡れていることに気付いた。

さて、これほどまでに緊張したのはいつ以来だろうか。見知らぬ気高い香りの茶を口に含んで意を決し、潤った喉がさらに乾いていくのを感じながら男の目を見て口を開く。

「主ら、魔法や薬品によって奪われた意思を取り戻す事は出来るだろうか」

「細工側の種類、意図、分量。服用者の年齢、体型、体質。その他多くの要素を調べる必要があります」

男は言葉を区切り、妾と同じようにティーカップを口へやって此方を見据えなおした。

「その上で洗脳や自意識を封じる効果を中和すれば、後は時間をかけて人格形成を、人としての成長をしていけばいい……簡単に結論

だけを申し上げるならば」

男のまっすぐな視線を受け、妾の中に今日まで生きてきて最も強い緊張が走った。指一本動かせない。視線を外せない。瞬き一つ許されない。

「手間と時間が掛かりますが、生きているなら何処の何者であろうと治せます。そう、たとえ『物言わぬ兵器』に調律されていようとも」

「……！」

こやつ……やはり気付いておったか。陣営問わず兵士さえ治療するのが『赤い月』……ならば戦場の噂も全て知っておると見てよからう。

ならばもう……取り繕わずとも良いだろうか。

「……妾は」

「お待ちを、陛下。相坂」

「はい。タカミチくん、ちょっと外に出ましょう？」

「は、はい……」

合えて一言目を言わせてから止めた男の合図で少女がタカミチを連れて行く。その上から何らかの魔法……恐らく妾が遣ったものより数段上の遮断系魔法を用いた男はもう一度居住まいを正した。

「もうじき……我らは『完全なる世界』との決戦に臨むだろう。奴らの目的は『黄昏の姫御子』の力を利用した世界の破滅。そのような暴挙を許すわけにはいかぬ」

「……」

「いや、大儀を言い訳にするのは止そう。妾は自分で戦場に突き出

した妹に謝りたい。奪ってしまった意思を返したい。頼む……！あの子を、アスナを助けてくれ！」

テーブルに打ち付けるほどに頭を下げ、硬く目を閉じ返事を待つ。永遠にも思える空白の時間を打ち切ったのは、カップとソーサーが打ち合わされる済んだ音だった。

「『健康でないものの味方』……か」

その眩きにどのような想いが込められていたのか……妾には知る由もない。

>>さよ

二組目のお客様が去って行った後、教授の顔は笑い顔と泣き顔が混ざったような複雑な表情をしていました。

「ふふふ……」

「教授？」

「滅びの先を望むものと、滅びを避けようとするもの……誰もが平和を願って殺しあう。なんとも皮肉な話だよ」

「……何かお悩みですか？」

「いや……俺に悩みはない。迷いもない。自分に出来る精一杯をやり、信じた道を突き進むだけだ。それしか出来んし、それで良い」  
「教授ッ！」

テントの中に戻ろうとする教授の背中に、叫んでいました。数秒置いて振り返った教授の表情は、いつもの平静さを湛えていましたけど……バカにしないでください。これでも30年以上一緒なんで

すから。

「本当は悩んでいるのではないですか？ 少なくとも、彼らの真意を話せば」

「相坂！……それは俺たちがやるべきことじゃない」

「やるべきことって……どうしてですか！このまま戦いが始まったらまた沢山の人が！」

「相坂も聞いただろう？ 『世界の始まりと終わりの儀式』のことを。アレは明らかに賛否両論が揃う……特にあのバカどもなら確実に反対票を投じるだろう。腕尽くでな。そうすると結局、決戦の火蓋が切られるのは確実。儀式が始まればそれを防ぐ『反転封印術式』が使われる。儀式を拒絶するためにはそれしかないからな」

言葉を切った教授がゆっくり振り返り、強く握り締めた拳を睨んでいます。教授の言葉で頭の中に再生される、彼の説明。目的、手段、判明している対抗手段。

「何がどう転ぼうと、ウエスペルティアは死ぬ。もう止められない」

「ッー！」

「ならば……儀式の行方は英雄と魔王に任せ、全ての幕引きに崩れ去るウエスペルティアから、俺が最も救いたい連中を救い出す。それが俺の道……俺しか歩めない道だ」

「そんなことはありません、教授」

硬く握っていた手を開いてテントへ戻ろうと歩き出そうとした教授の背中に……私は抱きついて。引き止めるように強く抱きしめて、足を地面に突き立てます。

教授がその気になれば引きずっていくのは簡単ですけど、教授は足を止めてくれました。だから……告げます。

「他の誰が歩きたがらなくても、私は絶対にそこを歩きます！」

「きゅー！」

「相坂、ココ……」

いつの間にか教授の影から飛び出したココちゃんが、前から教授の足を押さえつけていました。

顔を動かしてココちゃんと目を合わせて、また教授にしがみ付きます。そして、伝えるんです。

「置いてきぼりは、嫌です……私に『そこに居る意味』を与えてくれたのは教授です。教授に置いて行かれたら、私は何者なのかわからなくなってしまう」

「きゅつき、きゅー！」

「危険な所に行くから、人数が少ないほうが都合がいいから待てと仰るなら、待ちます。帰るべき場所を守れと仰られれば守り通します。ですから……契約、してください。必ず帰ると、あなたの道に連れて行くと……好きなんです、あなたが。ずっと、ずっと連れて行って欲しいんです」

「きゅっ！？くえー！」

言っちゃった……とうとう言っちゃいました……恥ずかしいので目一杯しがみ付いて教授のローブに顔を隠します。なんだかココちゃんのほうから不機嫌な空気を感じますけど……良いんです！

「そうか……悪かった、相坂。ココも。俺は結局、心の深い場所でお前達を忌避していただろう」

私の腕が優しくはがされ、教授の体が回り、私のほうへ正面を向けて……強く、抱きしめられました。



「俺の道は……きつと、生半なものじゃないぞ」

「あは……大テントで充分思い知りました。だからもう怖くないです」

「言ったな？ 仮契約すつ飛ばしての本契約だ……キャンセルは受け付けないぞ」

「勿論です」

「きゅっきゅっきゅー!!」

「ん？ 仲間はずれにするな、私のほうが長く一緒に居て大好きなんだ？ ハハハ、ありがとうよ、ココ。大丈夫だ。俺とお前は永遠の相棒だからな」

教授がとても朗らかな顔で私たちを一度放し、鞆の中から錠剤くらの小さな石を取り出して地面に転がします。そして、私とココちゃんにも一つずつ手渡しました。教授は二つ手に持っています。

「契約の魔法を固めた魔石だ。魔力を注いで、交換して飲み込む手法を使う」

「はいっ」

(こく)

魔石を持った手をお祈りするように握り締めて、額に当てます。目を閉じて、私の思いと一緒に魔力を注ぎます。ココちゃんも同じようにして、それを教授のものと交換しました。

「集え、数多の精霊達よ。我が名は沢村鋭太郎。今ここに、相坂さよ、ココ、両名と主従の契りを交わす。ご照覧あれ、契約の神々よ

魔石、魔力開放。『契約』」

足元に転がされた魔石が光を放って魔法陣を構築して、教授の宣

言を合図に魔石を飲み込みます。瞬間、体の中に教授の魔力が駆け巡って……あまりの快感にココちゃん共々座り込んでしまいました。

そして教授の手元が光り輝き、一枚のカードと一つの首輪が出現します。カードには紅白矢絰の長着に赤紫色の袴、という女学生のような服装でカードの吹雪の中に立っている私の姿があります。

「ふむ。これが契約カードか……こっちの首輪はアーティファクトのようだが。カードが一枚しかないところを見ると、ココの分と見るべき、だよな？」

「きゅ」

座り込んだままのココちゃんに首輪を着けてあげた教授は、カードを両手に挟んで魔法を使い、コピーカードを私にくれました。

「これで、俺達は魔法使いとしても正式な主従というわけだ……よろしく頼むぞ」

「きゅい」

「ハイ、教授！」

「あー、相坂」

「はい？」

「こついう時くらい『教授』はやめないか？」

教授が照れくさそうに頬を書いてそつぽを向きながら告げた言葉に、顔が熱くなるのを感じながら……私は笑いました。

「はい……鋭太郎様！」

くくく

「ところで、魔石をちゃんと用意してたって事は、いつかしてくれるつもりだったんですね？」

「そりゃまあ……独りってのは寂しいもんだからな」

## 困った奴らと俺と契約（後書き）

過去編の大物、残りの二人登場。そしてすぐ退場。

そしてとうとうやつちまったぜ、パクティオー。ココは人間でない為カードの能力の大半が無意味なので、直接アーティファクトが出てくることにしてしまいました。「アデアット」言えないし。

知りたい人の為にさよちゃんカードデータ。

主人：沢村鋭太郎

名称：相坂さよ

称号：黄泉帰りの少女

徳性：希望

色調：銀

方位：北

星辰性：月

アーティファクト：封じられた獣達

## 決戦の裏側で（前書き）

大戦のメインは『紅き翼』に丸投げしました。

## 決戦の裏側で

>> 鋭太郎

墓守人の宮殿。王都オスティアの空中王宮の最奥に位置するこの領域が『完全なる世界』の本拠地にして、決戦の場となった。『紅き翼』と女王アリカによって集められた帝国・連合・アリアドネーの非正規混成部隊が『完全なる世界』の召喚魔や自動人形と激戦を繰り広げる中、俺は……

（きよろ、きよろ……パタパタ）

緑色のバンダナを巻いた“シーフココ”の先導で当の宮殿最奥部に忍び込んでいた。服装は『赤い月』のローブではなく、青い羽織姿。俺たちの前にトラップなど何の意味もなく、また内部の戦力は全て『紅き翼』撃退に浪費されたのか、感知能力を限界まで行使しても敵影を捕える事はなかった。

そして突き進む事暫く……視界の端に、見知った姿が映った。一方は総白髪 of 青年アーウェルンクス。もう一方は、赤毛のガキ……？の、え……ナントカフィールド。忘れた。

アーウェルンクスの首を掴んで持ち上げているガキだが……アーウェルンクスの表情はまだ余裕、いや、アレは諦めかもしれないな。

「フ、フフフ……まさか君は未だに僕が全ての黒幕だと思っているのかい？」

「なん、だと？」

「やはり彼を引き込めなかったのは痛い……残念だ」

「どういう意味だ、おい！」

ガキがアーウェルンクスを問い詰めるように一度揺らした瞬間、黒い光がその二人を撃ち貫いた。射線を辿ればそこには中身の見えない黒いロープ。始まりの魔法使い、造物主……だが、俺はそこまですべて視線を外した。

……悪いな、アーウェルンクス。俺は結局、お前らの敵に回りそう  
だ。

俺は壁面に手を付きサイコメトリーを発動させ、宮殿の構造情報と最も安定した魔力の濃い場所を探し出し、その決戦場を迂回して儀式の間であろう現場へと急行した。

背後で大きな音がしたが……俺は振り返らなかった。

そして、最秘奥……世界の始まりと終わりが眠る祭壇に、少女はいた。いや、あったと表現したほうがいいかもしれない。

祭壇の上に、表現は悪いが虫入り琥珀のように何かで固められている身の丈より長い髪を左右に下げた少女。その瞳に生気は感じられず、見た目は5歳弱。女王アリカに聞いたとおりの容貌だ。この子が『黄昏の姫御子』アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア。魔法使い最大の矛盾、魔力完全無効化能力の保有者。

……その力故に肉親にさえ利用された、哀れな娘。

少女を封じている水晶状の物体に手を触れ、サイコメトリーで解析する……とらわれた姫御子の完全魔力無効能力さえ利用する嚴重な封印術。デスペルでは無理だな。

「ココ、脱出準備。こいつは、俺がぶち破る」

「きゅっ」

俺の指示に従い、ココがアーティファクトの能力を開放する。

アーティファクト『血統の枝』

自分という存在が内包する、あるいは嘗て内包していた可能性を自らに上書きする能力を持つアーティファクト。簡単に言えば……平行世界の自分になる道具。

それを発動させたココの姿は、頭の高さ180センチほどのダチヨウに似た大きな鳥類の姿に変わっていた。リアル描写で大きくなったと言っても間違いではない。さらに契約によって俺の魔力が身体能力を向上させているため、本来なら雌のチヨコボが有している『背中に人を乗せる』事への本能的な嫌悪感が消えているというおまけ付き。ついでとばかりにアーティファクトは手綱に変形したりする。

これでアスナ姫連行の準備は整った。後は、この不愉快な結界を全力で粉碎するだけだ。

周囲に満ちている魔力を自分の体に集めて、高濃度の魔力を上乗せした能力を発動させる。生み出すのは 先端に紅い菱形の魔石を取り付けられた枝の杖。

俺はそれを両手で持ち、先端を大きく左後方に向ける。俺の肉体に宿っていた戦闘に利用できる二つの能力を相乗させた、一つの帰結は……杖にして、剣。あるいは槍とも称される、神代の武器。

結局のところ……俺の力も、破壊こそが真骨頂だということか。では、破壊と殺戮は異なるものであると、自らの行動で示すとしてう。



「砕け……『裏切りの枝』！」  
レーヴァテイン

振りぬく瞬間、赤い光が宝石から伸びた。光の刃は姫御子を封印する術式を容易く切り裂き、その切り口から魔法物質の表面に無数のひびが入って、砕け散った。

拘束が外れて落下し始める姫御子の体をココが嘴で捕え、打撲を防ぐ。そのまま落ちていれば魔法物質の欠片で怪我をしていたかもしれない。ナイスだ、相棒。さて、『紅き翼』に気付かれないように撤収だ。儀式の中核は失われたから世界の改変は……って、なんだ、これは！？

俺たちが祭壇を降りると、背後から魔力の暴走を感じた。

振り向けば、アスナ姫が囚われていた辺りから『世界の始まりと終わりの儀式』ではない、全く別の術式の魔法陣が展開されている。

慌てて祭壇の記憶を解析するが……すぐにやめた。冷静になれば、考えるまでもないことだった。

「老害め……ふざけた保険をかけやがって」

つい吐き捨てるように苛立ちがこぼれたが、気を取り直して撤収を再開しようと振り返る。すると、姫御子が正気を取り戻してココの背中に座り直そうとしている所だった。かるく手を貸してやって、手綱を掴ませてやる。

「……誰？」

「俺は沢村鋭太郎。こっちはココ。まことに勝手ながら、貴女の身柄を貰い受ける」

そう告げた瞬間、これまでも一際大きな音と振動が宮殿全体を襲い、周囲の魔力濃度が上昇し始めた。結局始まったか……頼むぞ、さよ。同志達よ。

「くえっ！」

「……ああ、行こう。お姫様も付き合ってもらおうぞ」

「……アスナ」

「ん？」

「アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフユシア」

ああ、名前か。お姫様と呼ぶなど。

「そうか。いい名前だな、アスナ」

「……ありがとう」

俺とココは走り出した。

>>ナギ

なんとか『造物主』をブツ倒した俺だったが……魔力を使い果たしたところに攻撃を受け、動けなくなっていた。

「武の英雄に未来は造ることはできぬ。貴様には結局、何も変えられまいよ」

聞きなれた声で、全く別の語り口が響く。

「だが果たして……自らに問うがよい。ヒトとは身を捨ててまで救うに足るものか？……人間は度し難い。英雄よ、貴様も我が260

0年の絶望を知れ。さらばだ……」

「お師匠……」

俺のお師匠、ゼクトが、まるで『造物主』みたいな事を言いながら煙になって消えていく。

「師匠ッ……師匠オおおおお      ツー!!」

だが俺には……叫ぶのが精一杯だった。力尽きて倒れ伏した俺の耳に届く、二つの足音。

「無様だな、ガキ」

「誰だ……!!」

「誰でもいい。とつとと帰れ」

突然足元に現れた強制転移魔法の光に目をやられ、声の主が見えねえ。だが、この声はどこかで聞いたことがあるはずだ。思い出せねえ……誰だ？

思い出すより早く転移魔法が発動して、俺は気を失った。

~~~~~

目が覚めたら停戦の式典が始まっていた。俺達は世界を救った英雄として称えられ、世界の破滅は回避された。あの後……俺はアルたち共々戦場の外に強制転送され、味方の部隊に回収されたらしい。儀式は封印され、姫子ちゃんも別働隊に保護されたそうだ。

だとしたら……あの野郎は何者だったんだ？

「ここに居たか」

「……姫さんか。いつにも増して酷え仏頂面だな」

「……………」

俺は式典が行われている離宮の庭園で空を見ていたが、後ろから姫さんに声をかけられた。普段の調子でからかったつもりなんだが……なんか調子狂うぜ。もうちょい挑発しねえとだめか？

「まあ、これであんたの騎士団もお役御免って訳だ。預けた杖と翼、そろそろ返してもらうぜ。流石にかたっ苦しくなっちゃったからな」「……そうじゃな。頃合であろう。妾もこれからは一人で生きていく事になるであろうからな」「なっ!?!」

おいおいおいおい!ただの軽口だぜ!?

「待てよ姫さん!」

「触れるな!」

「ばっ!」

いきなり背を向けて歩き出そうとする姫さんと止めようと腕を掴んだらぶん殴られた。何がどうなってやがる……

「これ以上主らを頼る事もない。我らの縁もこれまでじゃ」

「オイコラ待て姫さんッ!」

「妾は今やこの国の女王となった。最早主などが話しかけられる相手ではない」

「一体何を隠してやがるッ!」

咄嗟に叫ぶが……振り向いた姫さんの顔は冷たい。

「隠す、か。それは主も同じ事であろう。無理に明るく振舞いおっ

て、動揺が丸見えじゃ」

「ぐっ」

「主は話したくない。妾は話すわけにいかぬ。ならば最早、我ら
間に言葉は要るまい」

この、わがまま姫が……！

「……………ああ！そうかよ！勝手にしやがれ！！」

俺はその場にいるのも嫌になって、姫さんに背を向けて走り出
た。

>>アリカ

ナギが走り去り、妾はそれを見送る。

「陛下！」

叫びに応じて振り向けば、片膝を付く『紅き翼』のガトウ・カグ
ラ・ヴァンデンバーグとクルト・ゲーデル……その顔には強い緊張
が見て取れる。

「時間です。まもなく崩落の第一段階が始まります」

「そうか。進捗は？」

自然、硬い声になっている事を自覚する。

妾はあの封印術の後、反魔力場を使用した報いとして我がオステ
ィアが落ちることを知っていた。それゆえ、決戦直後に停戦式典を
この離宮時まで行えるよう手配し、それを口実に全オスティア市民

をこの場へ誘導する手はずになっていたのだ。

式典には多数の市民が参加していたが、あの島々にはまだ民が

「そ、それが……離宮島に集まった市民の人数を確認したところ……誘導予定人数の128%が既に集合しているという結果が出ました」

「な、に？」

ひやくにじゅうはちばあせんと？

「ばつ、馬鹿を申すでない、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ！他国の民まで数えたのであろう！」

「いえ、貧民島の不法移民と思われます……誘導に当たっている艦艇からの報告でも、浮遊島には猫の子一匹見つからないと」

「嘘を申すな！この短時間でどうやってこの離宮島にそれほど的人数が集まるのじゃ！」

「わかりません。ですが、何者かが転移魔法を使った形跡が見られています」

そのような……そのような奇跡が起きるなど、あるものか！

「全軍に告げよ！全霊をもって探し出し、一人の救いもらしも出すなと！また、離宮島に居る兵には民の人数と出身を今一度確かめるように！」

「ハ！」

走り去る二人の背を見ながら、妾は懷から一通のカードを取り出す。

宛名も差出人の名も記されておらぬカードには、短く二つの文が書き込まれていた。

約定果たせり。健闘を祈る。

……まさか、な。

>>さよ

今頃、オスティアでは終戦記念式典が開かれ、裏では首都周辺の浮遊島からの避難誘導が行われています。もつとも……

「楽しそうですね、教授」

「ああ。あの女王陛下が目をまん丸にしている頃だろうと思うとな。くくくつ、まさか、避難させるべき市民達がつくに避難を完了しているとは思うまいよ」

そう。あの決戦に『反転封印術式』が投入されたのを合図として『赤い月』はオスティア軍に偽装して各地に突入、女王の命を騙つて市民達を脅し支度させ、離宮島近くの崩落予定にない島に強制転移させました。こつそりと、全てが終わるであろう式典の翌日まで絶対に私たちのことを告げられない呪いをかけて。

それは……教授流の“悪戯”でした。

「だが、まあ。俺がサービスできるのはここまでだ。この先の戦いは女王陛下一人で潜り抜けて貰わなければ」

「あの子の事はどうなさるんです？」

そう尋ねると、教授はある一箇所に視線を動かします。その先には、簡単な服に着替えさせられて簡易ベッドに横たえられたアスナちゃんと、それを心配そうに覗き込むココちゃんの姿。

洗脳に類する魔法や薬品成分は見つかりませんでした。かなり強い成長阻害の薬品が使用されていたため、薬の服用をやめても今後10年ほどは姿が変わることがないだろうという診断がされています。

自由意志は物理的な暴力で奪っていたということですか……益々許せませんね。

「魔力を強引に詰め込んで能力を発動させられたせいで、内臓がズタズタだ。あの状態で立って歩けるのが信じられん。まずは栄養管理と安静でそれを治して、心身ともにリハビリだな。完治まで長くて半年。その後、女王陛下に引き渡す予定だ……迎えに来ればな」
「どついう意味ですか？」

普段と違う沈んだ様子でそう告げる教授は、大きく息をついて背もたれに身を預けました。そして、テーブルの上のティーカップを手に取り、静かに掲げて、言い放ちます。

「女王陛下は戦いに負ける。いや、勝ち尽くして舞台を降りる。老害が動くまで……早ければ一月半」

「……？」

「外れて欲しい予見ばかりが当たる……全く、我ながら度し難い脳味噌だ」

忌々しそうに頭を振ってお茶を含む教授……私は知りませんでした。オスティアの崩落がメガロメセンブリア元老院の策略で、広域魔力減衰現象に『完全なる世界』が関与していなかったということ。

そして、二カ月後。難民の受け入れや奴隷公認法の成立などで『災厄の女王』と蔑まれるようになってしまったアリカ女王は、父王

殺し、妹姪殺し、『完全なる世界』関与……戦争の黒幕としての罪を着せられ、投獄されてしまったのでした。

そして、教授は……

「鋭太郎、お姉さまを助けて」

アスナちゃんの言葉に、何事か考えていますけど……断ったらフライパンの幽霊で殴っちゃいますからね？

決戦の裏側で（後書き）

今回はアリカ姫救出と大戦編終了？

アスナは保護者に引き渡して、次は刹那？

いつになったら麻帆良にいけるんだか……

この展開から姫様NTR（まだくつついてないからヒロイン化のほう
が適切かな？）は無理がある？

はい

いいえ

嫌だからやめれ

派手な事は馬鹿に任せる。(前書き)

アリカとナギをくつつけるほうがよっぽど無理があるとツツコまれたので、アリカをヒロインポジションに引っ張り上げてみます。とりあえず救出からですね。

派手な事は馬鹿に任せる。

>>アリカ

此処は連合最辺境、ケルベラス無限監獄。一体何をもって無限と呼ぶのかは不明じゃがな。

壁の向こうには空と雲と、地平線まで続く荒野が広がっておるはずじゃ。

そして、此処からさほど遠くない場所にケルベラス渓谷がある。

魔力も気も封じられ、無数の魔獣が飢えて吠える終焉の谷。

災厄の女王アリカ・アナルキア・エンテオフュシアがそこへ投げ込まれるまで一年……か。

「なんだ……食べなかったのかい、女王様」

重厚な監獄の扉が開き、全身鎧に身を包んだ重装兵が床に置かれたトレーを拾い上げている。妾はそれを横目で一瞥した後、すぐに視線を逸らした。どうでもよいのだ、そんなことは……

「庶民の味はお口に合わなかったか？だが、まあ……今のあんたにや丁度いいだろう？何せあんた、あの戦争を起こした張本人なんだ」

妾はこのとき、重装兵の目が一瞬光った事に気が付かなかった。

「そんなあんたに味方する奴なんて、この世に“五人と”居ないぜ？」

「なに……？」

「やっそこつち向いたか。全く、少しは栄養つけて欲しいもんだな……冷めちまったからこいつは下げるが、“次に出すものはちゃん

と食えよ”」

あの重装兵、何かがおかしくはないか……？

だがその疑問の答えが出るより早く兵は食事を下げようと扉から出て行き……それを閉めるより早く、此方から見える場所で立ち止まった。

そして何事か話し合う声が聞こえ、鎧が階段を下りていく音と引き換えに元老院のローブに身を包んだ男が一人、中へ入ってくる。妾を陥れ、この場へ放り込んだ忌々しい恥知らずの一人だが……

「これはこれは。見るに堪えぬみすばらしいお姿ですな。最古の王家の末裔にこのような仕打ち、真に心が痛みます」

ふん。心にもないことを。声が笑っておるわ。

恥知らずは大仰な仕草で騒ぎ立てながら妾の側まで歩み寄ってくる。

「黄昏の姫御子と共に封印された墓所の最奥部……そこへ至る方法を貴女はご存知でしょう？」

何を言うかと思えば、そんなこと。誰が教えるものか。と、無視しておつたら妾の髪が粗雑に掴み上げられる……痛い。

何をするか、と恥知らずの顔を睨みつけようとして……別なものが視界に入った。

「言つのです！これは世界を滅びから救う為でもあり、最愛のアスナ姫をお救いするためでもありますぞっ！？」

最早恥知らずの声など耳に入っておらぬ。監房の入り口で手を振

っている重装兵の姿しか意識できぬ。その兵士がどこからかもつて来た長大な棒を振りかざし、音もなく走ってくる姿しかわからぬ。

「ふん、使えん女だ。いや、これは言いすぎですな……来年の処刑で、貴女は世界平和の礎として大いに役ダツ？」

そして兵士は妾を投げ捨てた男の頭を殴りつけ、意識を刈り取った。

「ああ、全く。デタラメな女王様だ」

「貴様……あいたつ？」

何者だ、と問いただそうとしたところへ頭を軽く小突かれた。

兵士はその棒で自分の肩を叩きながら、大きな溜息をつく。そして、妾にとって聞き捨てならぬ言葉を吐いた。

「自分でアスナに謝りたいとか言っておきながら、死に急ぐとはどういう了見だ」

「ッ！『赤い月』の沢村鋭太郎か！」

そうだ。その話をしたのは一人しかおらぬ。そして思い当たると、仕草、態度の雰囲気や声色の記憶がこの兵士のものとは合致していくのがわかった……認識阻害でも使っておったか。

しかし大胆な。この監房を監視する魔法装置も……いや、面会禁止のこの房へ恥知らずが入ってきた時点でそれは停止させられておるか。

「ご名答。一度きりなのに覚えて頂けていたとは光栄の至り。囚われのお姫様を連れ出しに来た。拒否は認めない」

「それはできぬ、妾が多く憎しみを引き受けて処刑されれば、こ

の世の不幸を一つでも減らせるのじゃ」

「やかましい」

「あうっ！？き、きさま、女王の頭を気軽に叩くでない！」

こ、今度は脱いだ兜で叩いてきおった。素顔を見せた鋭太郎はまるで子供を諫めるような優しい目をしていた。思わず、どきりと胸が高鳴ったような気がする。

「黙らっしやい。陛下が処刑されたらアスナが悲しむだろうが。そのせいで自失状態に逆戻りしたらどうする気だ」

「あの子も王族、負うべき責任は」

「やかましいというのに。ちょっと待っとけ」

「はうっ」

今度はデコピンか！王族の頭をなんだと心得ておるのだ。ええい忌々しい拘束服め、体が動けばこやつの頬を張り倒してやるというのに！……うう、痛いぞ。

鋭太郎は倒れている恥知らずの側にしやがみこんで何やら薬品や魔法を使っている。一体何をするつもりなのか。

「ラッキーだったな。背丈が似た議員が来るまで粘るつもりだったんだが、まさか初日でアタリを引くとは」

「どういう意味じゃ」

「こういう意味じゃ」

「んなっ……！」

鋭太郎が立ち上がったとき、妾は絶句してしまった。なぜなら、そこに横たわっていたものは……

「わ、妾！？」

「いい感じにそっくりだろう？なってもらおうじゃないか、世界平

和の礎とやらにさ」

ニヤニヤとあまり見たことのない種類の笑みを浮かべておる鋭太郎は、そのまま妾の拘束服を外してゆく。半年振りに自由になった体は各所が痛い、今はそれどころではないな。

「幻術ではない、だと？信じられぬ……こやつは男だったではないか。一体何をどうやって？」

「一応理論はあるんだが、色々マズイので割愛する。後はこいつに陛下の服を着せればドッペル君の完成だ。陛下の着替えは持つてきたし、議員への変身は幻術で大丈夫だろ」

「し、しかし、妾の思考まで写っておるわけではないのであろう？こやつが自ら替え玉であると言い出したらどうする」

「その点も問題ないさ。適当に内面壊して幻想空間に放り込んだから……さあ、さっさと着替えてくれ。それとも手を貸そうか？」

「たっ、戯け！」

「おっと」

むっ……渾身の平手打ちであつたのに。障壁ならば王家の魔力で容易く無力化できるのだが、避けられてはどうしようもないな。

「それじゃ、外で待ってる。着付けは一人じゃ無理だろうから、服を着たら呼んでくれ」

「わ、わかった」

鋭太郎の姿が壁の向こうに消えたのを確認してから、服を脱ぐ……。

「え、鋭太郎」

「ん？」

壁の向こうから覗き込むように顔を出した鋭太郎に、妾は、言わねばならぬ。

「……………」

「？」

「……………」

「なんだって？」

訝しげな顔で近付いてくる鋭太郎。一度で聞き取らぬか、朴念仁！は、恥ずかしいのじゃぞ！？

「体が痛うて、腕が上がらぬ」

「さっきの平手打ちは？」

「……アレがトドメになった」

「……………あんた、結構抜けてんのな」

うつ……………何故こんな事になってしまったのじゃ。くつ。女の裸を見てただで居れると思うでないぞ！

>>さよ

ケルベラスとメガロメセンブリアを繋ぐ飛行魚航路の下にある森で、私たちはキャンプしていました。

今日のご飯はココちゃんが釣ってきたお魚の塩焼きです。

リハビリを終えたアスナちゃんにアリカ陛下の救出を頼まれた教授は、ココちゃんに私たちの護衛を任せて単身ケルベラス無限監獄に乗り込んでいます。

取って置き魔法で連れて帰ると仰ってましたが、大丈夫でしょうか。

そう考えると、アスナちゃんとココちゃんが一齐に一方向に目を向けました。

「二人とも、食べてるときに余所見は」

「いや、いいよ、相坂。今ばかりは仕方がない。それにしても、ココに匹敵する感知能力とは恐れ入る」

「教授!？」

「ただいま。予定が思った以上に繰り上げになってね」

声をかけられて振り返ると、認識障害を解除した教授ともう一人、アリカ女王陛下が立っておられました。

「アスナ……妾は……」

距離を開けたまま言い淀む陛下に、アスナちゃんは私たちに教えられた言葉を口にします。

大切な家族が戻ってきたら、その喜びを込めてこう言いなさい。

「……おかえりなさい」

「えっ？」

「おかえりなさい。お姉さま」

「あ、アスナ……うむ、今戻った!」

アスナちゃんに駆け寄って、小さな体を抱きしめる陛下。食べかけの魚串はココちゃんに回収されているので、服につくこともないでしょう。

「それにしても教授、どうやってケルベラスの監獄から陛下を？」

「メガロのゴミと摩り替えてきた。で、帰りの途中で俺が暗殺を装って議員に化けたアリ力を巻き込んで飛行魚から脱出、落下。川の下流で変身を解いて歩いてきた。中々スリリングで楽しかったんじゃないか？」

「戯け！死ぬかと思っただわ！」

「おっと」

「避けるなっ！この、このっ！！」

「無茶言わない」

陛下が投げた石を避ける教授。はあ、また随分と無茶をしたんですね。

災厄の女王の肩代わりなんて、ご愁傷様です元老院議員。でも自業自得なので助けたくありません。

それにしても、陛下と教授がなんだか親密な感じがするのは何故でしょうか。

なんだかすごく怒っても良いような事があったんじゃないかと思うんですが……

「落ち着いてください女王陛下。アスナちゃんがご飯の途中ですから」

「む？そ、それはすまなかった。だが、相坂さよ。妾は最早女王ではない。アスナ同様、アリ力と呼んでくれぬか。鋭太郎も」

「あ。わかりました。これからよろしくお願いします、アリ力さん」

「了解したぞ女王陛下」

「戯けッ！」

また教授は遊んでますね。いじりやすそうだからってあんまり虐めちゃダメですよ。

「冗談だ、許せアリカ」
「ッ!？」

え?.....どうしてそこで真っ赤になるんですか、アリカさん?
教授、一体何をしたんです? 事と次第によつては.....怒りますよ?

>> 鋭太郎

あの後、俺達はアリカとアスナを身内に引き入れて魔法世界中を旅している。大分裂戦争が終わつても、そこで生まれた火種が各地で紛争となつて燃え上がっているからだ。

アリカも自分が成立させた奴隷公認法や難民の受け入れ態勢などが原因の一端になっていると主張して、最前線で活躍している。カリスマ溢れる指揮能力で、一般のボランティアを充分な即席戦力に変貌させるので侮れない。玉座降りても女王か。

連合が躍起になつて広めた「災厄の女王は捕縛されている」という情報が増え隠れ蓑になったのか、アリカは女王アリカのそっくりさんだと思われている。アスナに至つては存在そのものが基本非公式なので『黄昏の姫御子』だと気付く奴はいない。念のために認識阻害も使つてるがな。

だが.....例外がないわけじゃないようだ。

「見つけたぜ! 勝負だ医者野郎!.....つて、何で姫さんや姫子ちゃんまで一緒に居るんだ?」

「噂に聞いたそっくりさんですか? それにしても似ていますねえ」
「へっ、何でもいいぜ。ぶっ飛ばせるんならな!」

「……まさか、な」
「？」

まあ、上から？、変態、筋肉、おっさん、ガキ。英雄『紅き翼』の面々である。

一体どこからどうやって嗅ぎ付けてきたんだか。エヴァンジェリンにもわからないように気を使っているというのに、このバグどもは。

それともガトウとタカミチ少年探偵団とやらは存外に優秀だったりするのか？

「はあ、こいつらは……申し訳ありません沢村殿」

「詠春、お前はさつさと本山に帰れ」

「ナギやラカンが付いて来たら京都が地図から消えてしまいますよ」

「……まあ、なんだ。スマンカッタ」

詠春も居るぞ。戦意ゼロだけだな。

何やら興奮している『紅き翼』に対して我がパーティーは気楽なもんだ。

「ナギ、か。考え無しなのは相変わらずじゃな」

「……ナギだから」

「きゅー！」

「長くなりそうですし、お茶にしましょうか？」

……問題を丸投げされた気がする。というかその姫様s、仮にも過去、自分を助けた英雄を相手に随分と冷たくないだろうか。？が凹んでる気がするんだが。

まあ、気を取り直して……

「何か用か、英雄殿」

「ハッ！ぶっ飛ばされた借りを返さなけりゃと思ってな！それに……二人の偽者困ってるのが気に入らねえ！！」

意気揚々と杖を突きつけているが、少しは空気読もうとか思わんのか。

人間は誰であれ本人なんだから偽者呼ばわりはないだろ。ああ、背後から嫌な気配が

「鋭太郎。そのバ力を1分で屈服せよ」

「ダメ。30秒」

いちいち振り返らなくてもわかる。完全に怒ってる。だってタカミチ少年の顔が真っ青だから。

しかし、無茶振りしてくれるなウチの姫様ズは。どんだけの出力ぶつけりゃこのバカ相手にそれが出来るんだか。まあ、時間かけ過ぎると相坂のお茶が冷めちゃうし……攻めとくか。

俺がやる気を出したのがわかったのか構える『紅き翼』 - 1。

今、ここに……医者VS英雄の戦いが幕を上げた？

派手な事は馬鹿に任せる。(後書き)

処刑当日まで……待つわけがない。あんなに大胆な救出するのはバカどもだけで充分です。

原作ではナギがウジウジ悩んでる頃(?)ですね。この作品ではアリカにスッパリ切られたので凹みながらも各地で俺TSUEEやってみました。今回出現したのもその一環ですが……

ちなみに身代わり議員の変身は物理変換する反転術式と魔法薬による急速修復を利用した整形手術であるため、魔法が解除されるケルベラスの谷底でも元に戻る事はありません。G O T O H E L L。

V S バカ（前書き）

紅き翼との接触がうまくかけてないと思います……

前話ラストの文言の割りに、敵の数は激減。

まあ、普通に考えてドロップアウトでしょ？

V S バカ

>>タカミチ

崩れた柱や壁、焼けた石畳を晒す戦場跡。

そこで対峙する、複数の人影。

一方は『千の呪文の男』ナギ・スプリングフィールド率いる『紅き翼』よりナギ、ラカン。

もう一方は詠春さんによれば“着流し”というスタイルの背が高い男性。『不戦要塞』『総合病院』『絶対領域』等の二つ名で呼ばれた医療集団『赤い月』、その団長、沢村鋭太郎さん。

先の大戦では万軍を相手にその身一つで自分達の領域を守り抜き、今もバグ二人を前にして尚、余裕の表情を崩さない正真正銘の実力者。

ちなみに何故二人だけなのかというと、最初に彼が「参加不参加の区別をつけるなら早くしろ」と言った時に他の皆が勝負を降りたから。その理由は、

詠春さんが真面目に「彼を敵に回す理由がない」

アルさんは苦笑いで「彼の制裁は恐ろしいので」

師匠はすごく苦い顔で「腰痛と友達になるのはごめんだ」

とのこと。師匠でさえ戦おうとしない相手に挑むのは無謀すぎるので僕も辞退。クルトはMMで孤軍奮闘中につき不在。

結局、『紅き翼』のバグ二人だけの戦闘となりました。

緊迫した空気が満ちる中、先手を打ったのは彼。

「30秒か……俺のお姫様は無理難題がお好きだな。どれ。よいい」

僅かに笑みを浮かべ、彼は右手を左へ振る。すると、その手には石で出来た剣が握られた。アリアドネーの騎士団が使うので有名な装剣の魔法。知ってはいたけど、石の剣を見るのは初めてだ。

「どん」

「うおっ!？」

そして次の瞬間、彼は既にナギへ斬りかかっている。

ナギは勿論障壁を展開して防御しようとするけど、それはあっさり打ち破られた。

「げっ!全力の障壁が紙切れ以下かよ!」

「ナギ、どけ!アデアット!」

「む」

ラカンのアーティファクト『千の顔を持つ英雄』がその無数の牙をむくと、彼は即座に後退した。ラカンが彼を追うように剣を投げつけるが、全て紙一重で回避されている。

多種多様な剣が、槍が、荒野に突き刺さっていく。暫くはただ逃げていた彼は、突如反転した。地面に突き刺さったラカンの剣を引き抜き、それで投擲を捌きながら接近戦に打って出たのだ。

「うげ!マジかよ!」

咄嗟に迎撃するラカンだが、ぶつかり合うのは同一のアーティファクト。ならば、より効率的に力を加えたものが勝利する。迎撃に出現した武器を相殺した彼が、石の剣でラカンの堅い肉体に赤い線を引いた。

でもまだ浅い。直前でラカンが身を引いたおかげで、骨まで剣が届いていなかった。

「ぬおっ」

「……浅いか」

「野郎、これでも喰らえッ！ “雷の斧”！」

「ぬるい」

そこへ最初に斬りかかれた時にラカンに投げられたナギがようやく戻ってきて、雷の魔法を放つ。彼はそれを感知して、何時ぞやの様に今度はラカンに盾にした。

「んなっ！あばばばっ！」

「あ！悪いジャック！」

こんがりアフロになったラカン。その背中が彼に蹴り付けられ、ナギに向かって飛んでいく。蹴られた衝撃で目を覚ましたラカンは

「てめえナギ！いきなり何しやがるっ！！！」

「悪いっつったろうがよ！？」

「うるせえ、殴らせろ！」

「っ、上等だ！くたばれジャック！」

ナギに向かって拳を振るいだした。避けたナギも彼そっちのけで喧嘩し出す。何を考えているんだろう、あの二人は。いや、何も考

えていないに違いない。

彼ほどの実力者にそんな隙を見せていいはずがないのに。

当然、彼は瞬動を用いて二人の死角に回り、首筋に一度ずつ触れた。

「終われ」

「な……？」

「かふっ！？」

彼の宣言と同時に、ナギとラカンの体が崩れ落ちる。何をしたのか……すぐにはわからなくても、彼がどういう分野の専門家であるかを思い出せば、さほど不思議な話ではなかった。

彼の二つ名は数多くあるが、全体的に共通したイメージは『病院』。あらゆる医療、つまり人体の構造と治癒と治療、そして……薬品のスペシャリスト。

「安心しろ、今回は痛くないから」

動けなくなった二人のところへ歩み寄って、彼の早業が披露された。気か、魔力か、強化された速度で披露されたそれを、僕は当然忘れられないだろう。

出来上がったそれを一瞥した彼は、悠々と自分の仲間のところへ戻っていった……

>>アリカ

鋭太郎がナギ・スプリングフィールドとジャック・ラカンを相手取って開始のタイミングを計っているのを視界の端に置きつつ、妾はアスナとさよを連れ、少し離れた瓦礫を魔法で清めて座った。そこへ、鋭太郎の影から出てきたココが駆け寄り、『紅き翼』残留メンバーとの間に立ちはだかる。

騎士のような兜と胸当てからして、おおかた妾達の護衛を言いつけられたのだろう。主従揃って律儀な奴らじゃ。

妾とさよはこの騒動の帰結を確信しておる為、少しばかりの小休止とする。

さよが虚空からティーセットを出現させて茶葉を用意する。湯は魔法で造るようだ。初めて聞いた時には驚いたが、いや、今でも充分驚くに値する事だと思っているが、さよは“道具の幽霊”なるものを使役できるらしい。普段は質量も体積もない霊体として自らの袂に留め置き、必要なときに取り出して物質化させることが出来るという……実に強力で便利な力じゃ。

そして、それら“幽霊”は殆どが一級品と呼んでよい物ばかり。事実、現在オステイアンティーが淹れられているあのティーセットもその幽霊だというが、王宮で用いていたものにも引けを取らぬ品格を放っておる。僅かに青白色合いも落ち着いた感があって実によい。流石に中身は幽霊というわけには行かぬが。

周囲が瓦礫というのはいただけぬが、鋭太郎との旅で贅沢というのがどういふものか実感した今となってはさほど気にするべきことでもない。妾はゆっくりさせてもらおうとするか。

アスナはやはりさよから借りた時計の幽霊に目を落としながら鋭太郎を見ておる。鋭太郎が腕利きなのは知っておるが、あのバグ2人を30秒で裁けるであろうか。

むこうはガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグとタカミチが鋭太郎

たちを注視している。

アルビレオ・イマは此方へ歩み寄ろうとしたが、青山詠春がそれを抑えて前に出る。得物から手を放し、両の掌を顔の左右でこちらに向けていた。

「交戦の意思はありませんよ。少しお話がしたいのですが、よいでしょうか？」

「……さよ、確が主達はサムライマスターと縁があるのじゃったな？」

「はい。彼の本拠地が教授の旧世界での拠点のひとつです」

確認を取ると、さよは明確に頷いた。それならば信用してもよからう。

「ココ、妾も少し話してみたい。道を開けよ」

「きゅい、きゅい、きゅー！」

身振り手振り　羽振り？　と鳴き声で何事かをアピールする

ココ。意思が明確に伝わるのは良い事だと思うが、何故これで明確なコミュニケーションが取れるのであろうか？

……何々？詠春は面識があるし、タカミチは未熟だからまだよいが、残りは腕が立つ上に不審、護衛を命じられた以上、不審者を近づけるわけには行かぬ、と申すか。

幸い、鋭太郎のおかげで妾も『災厄の女王、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア』ではないことになっておる。ならば、折角伏せられておるカードを態々返すこともあるまい。ならば

「待たせたな」

ココに指示を出そうとした矢先、側面から声がかかった。声色ですぐに誰であるかはわかっていたが、体ごとそちらに向けて応対する。思ったとおり、そこには煤一つ浴びておらぬ鋭太郎の姿があった。何故かアスナが抱き上げられておるが、な。

ナギとラカンをどうしたのか訊ねたが、その回答として指差されたほうを見て、すぐに視線を鋭太郎に戻した。そこに“あつた”のは、間違いなくあのバグ二人。だがその体は複雑に絡み合い、一つの“ナニカ”と化していた。二つの頭と、奇妙な方向に伸びる四対の肢をもつナニカじゃ。

その“製造作業”の全貌を見てしまったのであろうタカミチとガトウの顔色が悪い。妾もそれを直視して正気で居れるかは少々不安じゃ。一刻も早く忘れようと、今のアスナのように誰かの胸元へ飛び込んでおるじやろう。その誰かは……今の所、鋭太郎しか居らんな。

「おい、大丈夫か？」

「う、うむ！ 問題ない。案ずるな。しかし見事な早業、何か褒美をやらんとな」

「その言葉だけで充分だ」

ぼん、と肩を一度叩いて離れながらココの頭を撫で、青山詠春と何事か会話し、連れ立って此方へ歩く鋭太郎。時折アルビレオ・イマを警戒しているように見えるが、何事かあったのじやろうか。

「まあ、その辺適当に座るといい」

「ありがとうございます」

腰を下ろした鋭太郎と『紅き翼』。まず口火を切ったのは、やは

りというべきか、アルビレオ・イマだった。

「あのバグを止めたのは何の術ですか？」

「……まず名乗ろうとは思わないのか？」

「これは失礼しました。私はアルビ」

「不要だ。此方も二度と名乗る意思はないし、先の質問に答える気も無い」

やらせておいてそれは無いのではないか、鋭太郎？確かにアルビレオ・イマの性格は褒められたものではないが、少し嫌悪しすぎではないか。それともこれが『生理的に受け付けない』というものであろうか。

瞬間的に険悪な気配を放つ鋭太郎だが、『紅き翼』は苦笑いしておる。いつものことか。

次に動いたのは青山詠春。やはり顔見知りが場を取り持つべきであらう。

「失礼しました、沢村殿。ところで、あの二人が動けるようになるのはいつの話ですか？」

「思った以上に頑丈みただから麻痺は1時間そこそこで抜けると思うが、自由に動くにはもっとかかるだろうな」

此方には真面目に答えるようじゃな。相手が知人である事もあるうが、鋭太郎は“自らの領分”において虚偽や不要な隠し立てはせぬ主義。この場合は容態の説明じゃな。

技を隠そうと結果は隠さぬ。そういった明確な線引きもこの男の魅力の一つであらう。言っておくが、妾とさよの共通見解じゃぞ？

そんな鋭太郎の現状だが……腰掛ける事で水平になった腿の片方にアスナが座って抱きつき、もう一方にはココが顎を乗せて安らい

で居る。僅かばかり首をもたげた羨望を無視し、話の続きに耳を傾けた。

「何故アリカ女王とアスナ姫がこの場にいるのか質問しても？」

「よく似てるだけで、俺の身内だ。アスナ姫というのは知らないが、『災厄の女王』ならケルベラスの無限監獄にいるそうじゃないか」
「……そうか」

ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグの質問だが、鋭太郎は白を切った。こやつとクルト・ゲードルは連合内の情報網も持つて居るはずじゃから、ケルベラスから『災厄の女王』が居なくなったならすぐに気付けるはずじゃ。それが却って混乱を齎して居るのじゃろう。

ふふ、こうしてみると実に器用な手を使ったものじゃな、鋭太郎は。元老院の議員は不正の固まりじゃから暗殺されたところでその理由を特定など出来ぬじゃろうし、妾を詰問した戻りであれば自らが秘密を独占せんと狂言に出た可能性も考えられる。

議員が妾であると疑える事態になるのは、果たして何年先になるのか。その頃には『災厄の女王』はケルベラス渓谷に蠢く魔獣の腹の中じゃ。

「ほかに質問が無ければ、そろそろ出発しようと思うんだが」

考え込むガトウを無視した鋭太郎は、そう言つてアスナを降ろしココにアーティファクトの使用を命ずる。さよもティーセットを霊体に変化させ、手早くその準備を済ませた。

それを押しとめたのは、タカミチの声。

「待つてください！あなたはどうかやってそんなに強くなつたんですか！？」

「どうやって、か。ふむ」

振り向いてその顔を暫く見ていた鋭太郎は、やがて何かを諦めたかのように首を振った。そして、ゆっくりと転がっているナニカを指差す。……妾はもうアレを見とくない。

「とりあえず、慢心しない事だな。常に自分を過小評価し、その上で自分の未来を見捨てない事。そう在り続ける事が出来たなら、そのときお前は自然と高みへ向かっている」

「……よくわかりました」

言っておる間に妾たちは準備を済ませ、いつでも動けるようにしていた。そして、『紅き翼』と挨拶を終えた鋭太郎は、何故か青山詠春を気絶させて担いであるではないか。

そして、妾たちがそれを問う前に次の目的地を告げるのだった。

「旧世界は関西呪術協会に行く。とりあえずこいつの祝言だ」

……とりあえず、新郎を強制的に担ぎこむ結婚式があつてよいのかどうか詰問したかった。

V S バカ（後書き）

これにて大戦編は幕引きですね。次は旧世界過去編になるでしょうか。

その前に、エヴァの現状を一度書いてみます。

この後の原作改変予定（考案中）は刹那の立場（鋭太郎の思想的に身内は確定）と、木乃香麻帆良行きの理由くらいです。後者は東西交流とか何とか言えば詠春は動いてしまいそうですが。

ちなみに木乃香に魔法を隠すルートは消滅済み（本山に鬼とか普通に出入りしてるので）です。

ここで何か事件を起こすとすれば、スクナ復活過去編でしょうか。原作では『紅き翼』が封印しましたが……

「折角だからこれに手を出して！」というような事があればリクエストしてみてください。できそうなら書きます。たぶんきつと。

「これやって」の例え

コタロー が なかまに なりたそうに こちらを みている！
なかまに しますか？

はい
いいえ

我ながら……ネギの成長フラグが悉く折られていく気がしてなら

ない。

吸血鬼は何を思う（前書き）

時間軸？無視してください。

吸血鬼は何を思う

>>エヴァ

大戦は終結した。だが、戦争によって生まれた難民は世界全土に散らばり、治安の悪化、国交摩擦の激化など、世界は今も多くの危機を孕んでいる。

私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。吸血鬼『闇の福音』……私自身の存在もまた、争いの火種でもあるのだが。

だが、私はこの道を選んだことを後悔していない。もとより疎まれる為に奴の許を離れたのだから。
私の望みどおり人の闇を知る事が出来、夜の女王として力をつけることも出来た。最早奴の隣に私がいても、降りかかる火の粉を打ち砕く事くらい容易だろう。

しかし、目の前に見えている弱者を捨てて奴の元に走れば、軽蔑されてしまうに違いない。それは……怖い。

だから私は奴に会えるその日まで、『誇り高い悪・闇の福音』として、『大教授の助手・MEAK』として、『奴の妹分』として、倒すべき敵を選定し、そうでないものには出来る限り手を差し伸べる。

「行くぞ、チャチャゼロ、ブリジット」

「アイサー、御主人」

「はい、エヴァ様」

故にこそ、私は歩く……戦いの爪痕を。新たに生まれた戦いの中を。

>>???

どうしてこんな事になったのだろう……

何事も無い、平穏な一日になるはずだったのに。

朝、窓から差し込む日差しに目を覚まし、服を着る。

洗面所で父様と合流して、朝ごはんを準備していた母様に挨拶をする。

なんでもない、いつもの朝だったのに。

突然町の広場に攻撃魔法が撃ち込まれ、私の日常は戦争に塗りつぶされた。

怒声。喚声。悲鳴。断末魔……

耳に入る言葉で、意味を成しているものは殆ど無かった。窓の外は攻撃魔法の輝きと血飛沫の赤で埋め尽くされ、衝撃が私の家の扉も打ち砕き、その瞬間左目に強い熱を感じた。

「アアアアア!!」

「エレナ!!」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!

左目を強く押さえようとする私の手を、父様が掴んで引き止める。そして『治癒』の魔法でその痛みをやわらげてくれると、振動に足

を取られながらも壁に手をついて姿勢を保ち、私を抱き上げた。そして、母様があけていた床下への扉の中に私を詰め込む。元々物入れでしかないそこはとても狭く、私の体も小さく丸まらなければ収まらなかった。

「ここでじつとしていなさいね」

「何が聞こえても、動いたり声を出したりしてはいけないからね」

私を見つめてそう命じた両親の顔はとても柔らかで、安らかで……それが恐ろしかった。

けれど、私が口を開くより早く扉は閉められ、数秒後には何かが壊れる音がする。

複数の荒々しい足音。何かが壊れるような音が響き続ける中、絹を引き裂くような母の悲鳴と、獣の咆哮にも似た父の慟哭。激しい物音。重いものが落ちる音が数回。そして 静かになった。

それでも私は両親が迎えに来てくれるのを信じて動かなかった。

そして……本当に何も聞こえなくなった。あれほど騒がしかった外の喧騒も聞こえない。

だけど、私は動かなかった。いや、動けなかった。

開いた扉のむこうに、父がいた。けれど、その体は血まみれで、多くの穴が開いていた。

父は、私の姿を見て「もう大丈夫」と微笑み……私の進路を空けるように倒れて、動かなくなった。

震える体に無理を言って床下から出て行くと、血まみれで倒れている知らない男の人と、仰向けに寝かされて服がズタズタに破かれ

ている母の体があった。

わたしはそれを見て……その場にまた、座り込んでしまった。

「とう、さま……」

どうして、どうして私はこうなったのだろう。
なぜ、両親と一緒に死ななかったのだろう。
両親を喪った私は、どうすればいいのだろう。

「……かあさま」

何がどうなっているのか、私は何なのかさえわからなくなりかけていて。

「む……この状況で生き残ったものが居たか」

声をかけられた瞬間、私はそれに飛び掛っていた。

その直後、意識を失ってしまったのだが。

>>エヴァ

生存者は小娘だった。突然襲いかかってきた時には驚いたものだが、突然戦禍に巻き込まれて混乱するなという方が間違いというものだ。

「エヴァ様、一通り落ち着かれたようです」

「そうか……」

声の細い、後ろに流れる一対の角を戴く盲目の娘が報告に来た。
こいつの名はブリジット。嘗て鋭太郎がアリアドネー総長の依頼で巡った中立種族の一つで、戦渦に巻き込まれたためにアリアドネーに保護された被災者の一人だ。
連合の襲撃を受けて集落はほぼ壊滅してしまい、こやつ自身もそのときに光を失ったと聞いている。

鋭太郎の魔力分析には劣るが樹木の精霊と交信する力があり、魔法も中々優秀なので助手に抜擢したのだ。戦場が危険なのは当然なので、即席の強化策として仮契約もしている。

「では行こう。チャチャゼロは待機。奴らが戻ってくるようなら排除しろ」

「ツマンネーナ」

文句を言う我が従者、殺戮人形チャチャゼロの反応は無視して生き残りの小娘の傍に行く。

長い髪を左右で結っているその小娘は、どうやら左目を負傷しているようだ。押さえている手を血液が伝っている。

私をまっすぐ見据えながらも怯えた風に見受けられる。襲撃者と間違えて襲ったことを後悔しているようだ、私は気にしていない。少々マントが破れただけだったしな。

「小娘。一人残されたことを嘆くか？それとも両親の想いを背負って生きていくか？」

「え……？」

「選ばせてやる。望むならば苦痛なく逝かせてやる。だが、助かった命を生きていく意志があるのならば、このエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルが我が名にかけて貴様を導こう」

小娘は私の名を聞いて大きく震える。何か信じられないものを見る目だ。……これまでに拾った被災者達も皆一様にそんな顔をしていたな。わかつているとはいえ、傷つく。

そしてブリジットと目を合わせ、それが大きく頷いたのを見てまた私を見る。今度ははっきりと正面を見据えてきた。

「さあ、どうする？」

「……いきます。でも」

「わかつている。貴様の目を癒し、死者を弔うでしょう」

「はい」

小娘の同意を得て、僅かながら血の流れる左目を診る。が……あまり良い状態ではなかった。

恐らく崩壊のときに何かマジックアイテム 恐らく照明器具の破片が眼球に刺さった後、素人が迂闊に『治癒』を行ったために破片が眼球内に残ってしまっている。鋭太郎ならばともかく、私ではこの状態からの修復は無理だ。だがこのまま放置すれば、精霊の暴走など失明以外の悪影響も出るだろう。

こういう場合、眼球内にある破片を精霊を手懐ける基点として新たな眼とするか、あるいは眼球ごと除去するかどちらかが必要になるだろう。

まずは容態を説明し、どちらかを患者自身に選ばせるのだったな。
鋭太郎。

「小娘。貴様の眼はこのままでは精霊に喰われ、何れ死に至る呪いとなるだろう。これを防ぐには、左眼を除去するか魔眼にするか出来ない。どちらが良い？」

「まがん」

即答か。まあ、良いだろう。選ばせはした。魔眼に吞まれて墮ちるか、飼いならすかは小娘次第だ。

まずは対象となる左目を清め、鋭太郎に貰った儀式魔法級の純粹魔力が籠った魔石を小娘に左目に押し当てた。

照明器具の破片なら、恐らく火属性だろう。これを高位の精霊核に変容させる儀式を始める。

「かなり痛むはずだ。耐えろよ？」リク・ラク・ラ・ラック・ライラック」

>>ブリジット

大規模儀式魔法に他者が踏み込むと破綻してしまう場合があるので、私はエヴァ様の傍を離れ、チャチャゼロのところへ。

エヴァ様の従者である殺戮人形は瓦礫の上に腰掛けて退屈そうに空を見上げていました。私に気付いて大きなナイフを振りかざす様は、挨拶と知っていて尚恐ろしい。わたしのように、そこに内包される狂気を直接感知してしまうような存在だと特に。

「オ、ブリジット。ドシタ……ッテ、随分トデツケー魔法使ッテナ、ゴ主人」

「ええ。潰れてしまった眼を魔眼にして再生なさるそうで」

「ケケケ、ソイツハ面白ソーダナ。魔眼ノ重サニ潰サレネートイーガ」

「そうですね……ッ」

他愛も無い会話の途中、精霊が異変を伝えます。こちらに向かっ

てくる人影。

「チャチャゼロ、三時方向距離2000。数は3……賞金稼ぎでしょう」

「スクネーナ。ドーセナラムット刻マセテ欲シイゼ。ケケケ」

そう言って飛び出していくチャチャゼロ。私もアーティファクトを出して、流れ弾を警戒しなくては。

私のアーティファクトは『狂気の提琴』。指向性をもった破壊の波を放つヴァイオリン……ええ、当初は驚きましたよ。何せ私はそれまで楽器というものに触れたこともありませんでしたから。

ですが、何かと教養が深いエヴァ様のご指導によって恥をかかない程度には扱えるようになりました。ありがとうございますエヴァ様。

やがてチャチャゼロが接敵して、魔法の気配が飛び交う。何本か逸れて来た魔法の射手をアーティファクトによる攻撃で迎撃。音波でありながら魔法の波動でもあるアーティファクトの攻撃は、実体のない光や炎の魔法さえ粉碎できます。

交戦時間はおよそ30秒。迎撃した魔法の射手は7本……少ないですね。エヴァ様の特訓では数百本が普通なのですが。

肩透かしを貰ったような脱力感を味わいながらアーティファクトをカードに戻し、瓦礫に腰掛けてチャチャゼロの帰りを待ちます。椅子なんて贅沢なもの、ここにはありませんから。

「なんだ、何かあったのか」

「エヴァ様。程度の低い賞金稼ぎがやってきただけです。今、チャゼロが片付けました」

「そうか。此方はひとまず終わったぞ。後は小娘次第だな」

この短時間で酷く疲弊されたエヴァ様。幻術が解けて少女の姿に戻ってしまっていますよ？

その背後で横たわっている生き残りの少女は、恐らく儀式に体力を奪われて気絶しているでしょう。

「では、参りましょうか、アリアドネーへ」

「そうだな。魔眼の扱いを詳しく教えねばならん」

二年に一度、大教授からのお手紙も届く頃ですし、ね？

~~~~~

「な、な!？」

アリアドネーで私書箱から手紙を取り出したエヴァ様……いえ、ここではミーク様が同封されていた写真を握り締めて震えています。どうなさったのでしょうか。

「くっ、いつの間に……しかも本契約だと？あのバカ兄、人の気も知らないで……!」

「みーく、さま？」

何かぶつぶつ言いながらその写真をくしゃくしゃに丸めてしまうミーク様。隣にいる子……エレナも怯えています。当然でしょう、

闇の魔王の怒気を至近で浴びて気絶しないで済むのは、きっと魔眼のおかげです。

「旧世界に行くぞブリジット！私の研究室に置いてある別荘と魔法薬をありったけ空間圧縮靴に詰めて持って来い！」

「で、ですが私は亜人ですし、あの子はどうするんですか？」

「私の術が三流魔法使いに見破られて堪るか！それに、鋭太郎に会いさえすればそんな事どうともなる！あの小娘も連れて行く！さつさと支度しろー！！」

「は、はいっ」

特訓で失敗した時だってあんなに怒らなかったのに、本当にどうなさったのでしょうか？恐らく大教授に何か関連のあることだと思いますが……？

遅れたら今度は氷柱にされそうな予感さえするので、大急ぎでミーク様の研究室へ走ります。

ああ、本当に。何をなさったのですか、大教授？

## 吸血鬼は何を思う（後書き）

エヴァちゃん暴走。

鋭太郎は自分の情報を全面的に隠蔽しているので、旧世界、以上の情報は知らないエヴァ。追っかけているうちに　というフラグです。

そして……あのパーティーから二人を抜擢！なんと旧世界に参上！！  
焰の名前は適当です。本編で明らかになったら改変します。

残り二人の扱いはどうしましょうか。

そのままフェイトに拾わせるか、鋭太郎の分身に拾わせるか。あるいは立ち消え？



## 設定。(前書き)

現状の鋭太郎とココの能力です。尺稼ぎ。

## 設定。

### 主人公

名称：沢村 鋭太郎さわむら えいたろう

通称：アウトリエ（魔法世界。旧世界では本名）

種族：オンリーワン。ジャンルは亜人。

性別：雄。

体格：192センチ84キロ。ボクサーのようなスタイル。かなり足長。

髪：黒 短髪

瞳：黒

肌：黄（肌色）

身体能力：強化抜きでも極めて高し。気も膨大。不老長寿。

魔法能力：魔力大量保有 光合成モードで回復速度高速化 範囲攻撃適性なし。

適性属性：土＞水 光・闇＞風＞火・雷 氷

感知能力：気配に関しては達人級。魔力や気は自然に流れるものすら感じ取る人外級。

性格概要：気楽で勝手、色恋沙汰には疎いが来るものは拒まず。

所有属性：父性。

愛好：ココ 美少女 美味しい食事 有閑生活。

嫌悪：自称正義 無益な暴力 軽率。

夢：どこかでのおんびり隠遁生活。甲斐甲斐しい女の子が何人が居ると幸せかもしれない。

魔法発動体：ガントレット&ソラレット。それぞれが発動体として機能するため、使いこなせば同時に4つの魔法を行使できる。ただし、飛行魔法を使用する場合はバランスを取る為に手足どちらかを両方行使せねばならない。

“障壁突破”の呪紋処理が施されているため、体術攻撃時に魔法使用の防御力を無視する。

#### 先天能力『プラント』

自らの肉体を大地、あるいは植物の一部として、植物やその一部分を体表から発生させる能力。

一度伸ばしたものを縮める事はできない。ただし、途中であっても本来の体表部分から任意で切り離す事が出来る。

伸ばすには体内の養分と水分を消費する。部位や質量によって消費に差があり、一番消費が大きいのは当然のことながら種子を含む果実。

伸ばした部位は本体と繋がっている限り体の一部であり、故に枝葉と根で光合成も出来る。

#### 先天能力『魔石取り扱い』

魔法、または魔力を圧縮する事で、魔石化する事ができる。

魔石はキーワードを知っていれば誰でも解放できるインスタント魔法。譲渡できる遅延魔法と考えてもいい。鋭太郎が扱える魔法が封印可能。内包された魔力量によって大きさが変わる。

魔石化は開始すれば以後は無意識に続行されるが、魔法使いとしての通常の生活をしながらだと、『魔法の射手・光の一矢』レベルの魔石（BB弾程度のサイズになる）を造るのにも5日かかってしまう。魔力を一切使わなくとも丸2日かかる。

先天能力『サイコメトリー限定』

植物と無生物限定だが、それらの記憶を抜き出して保有する事が出来る。

動物の死体などから生前の記憶を抜き出すのは不可能。この場合、死亡等で無生物となつてからの記憶のみ引き出すことが出来る。食肉なら「いつ死んだか、いつ捌かれたか、痛んでいるか」など。抜き出した記憶の中身から自分に有用なものをフィードバックする事まで出来る優れもの。

欠点は読み取り中どうしても意識が無防備になってしまう事。夢中になつて本を読む感覚に近い。

特殊技能『秘密詠唱』

無詠唱の変声魔法と腹話術を用いることで、相手に悟られない呪文詠唱をする技術。理屈は簡単だが実践が難しい。変声魔法発動の分魔力消費量が増えるが、微々たるもの。

固有魔法『反転術式』

アリアドネーでの研究によつて生まれた、極めて高度かつデタラメな魔法。使用できるのは世界中探しても鋭太郎一人。

効果は読んで字のごとく、指定した対象あるいは展開した魔法陣に接触したモノの“特定のステータス”を“反転”させる事。

本編中では“性別”を“反転”させて性転換したり、魔法の“進路”を“反転”させて擬似的なりフレクバリアを展開したりとチートな効力を発揮している。リフレクバリアもときはその性質上、力技では突破されない。

特殊魔法技能『分け身の術』

ベースは原作で刹那などが使っていた式神分身。耐久力を上げ、『プラント』の能力を付与できるように術を加工したもの。光合成

によつて魔力を補充できるので、本体からの魔力供給を必須としない。

分身の体力魔力は本体の6／7割に落ち、魔石生成や反転術式など魔力消費量の多い魔法は行使できない。

分身であるから情報や経験を共有可能。ただし、運動不足などによる肉体の劣化を防ぐ事には繋がらない。

これにより、同一の時間に複数の場所で活動する事が出来、鋭太郎は同じ年に幾つもの大学を受講している事になっていたりする。……アリバイ工作に最適？

### 大技『裏切りの枝』 レーヴァテイン

『プラント』と『魔石取り扱い』を併用して生じさせる神代の武器もどき。具体的には、巻き込み現象を利用して延ばした枝に大魔力の魔石を取り込ませ、変容させたもの。

外見は赤い菱形の宝石が据えられた、ねじれている木の枝。魔力開放の意思を持って振ることと『杖』『剣』『槍』のいずれかの形態を取る事が出来る。

魔石の魔力を一気に解放するので瞬間的な極大火力を誇るが、その性質上使い捨て。一応、魔石さえあれば連発可能。

この技に使用可能なレベルの魔石を生成するのには、魔力を節約して約一年半かかる。

### 装備『革の肩掛け鞆』

これと言つて何の変哲もない無地の鞆。ただし古き職人芸の産物であり、さらに耐久性と中身を保護する力が魔法で強化されているため、500年以上戦場で使つても本体や中身が壊れたりした事はない。暴れないように肩紐のほかに腰紐も付いている。つまり三点式シートベルトみたいな形。

中身は後述するココのチートアイテムで作ったFF薬を移した

小瓶と、生成した魔石、筆記用具などが入っている。

腰紐にはダイオラマ魔法球のフラスコが7つぶら下がっている。

#### 異界『影の世界レベル1』

自分の影が異界になっている。魔法ではないのでアスナにも無効化できない。しかし狭く、ココの巣だけで容量が限界。中がどうなっているのかはココしか知らない。

#### 異界『ダイオラマ魔法球・カスタム』

いわゆる“別荘”だが、旅を繰り返す鋭太郎は持ち運びに困らないように実験器具サイズのフラスコを用いている。このフラスコが既に特別製で、振動緩和や水平維持機構が組み込まれた二重構造になっているため、振り回しても中身には一切影響がない。耐久性も廃スベック。

内部は工業の発達によって汚染される前の山野や無人島を世界から切り取ったものが入っており、野性の動植物が繁殖している。ちよつとした冒険になるが、採れる食材は強靱で美味。

全部で七つ。それぞれ『山岳の魔法球』『大海の魔法球』『森林の魔法球』『草原の魔法球』『山岳の魔法球2』『大海の魔法球2』『森林の魔法球2』。2は魔法世界版。

『大海の魔法球』のみ、リゾートとしての滞在が可能な設備が揃っている。

#### 概要

『完成した模型が見たいから』という非常にフザケタ理由で衰弱死に追いやられた主人公。

後述する相棒ココと共に中世欧州で薬師の真似事をしたため、医療で信仰と寄付を集めていた教会に異端指定され、あちこち逃げ回る事になった。逃げる際にFF魔法で眠らせたり魔法薬で加速したりした為、魔法協会が噂を聞きつけてココ共々捕獲を試みた。が、

長い歳月の間に捕獲が捕殺に変化してしまう。伝言ゲーム的な齟齬だと思われる。

その後エヴァンジェリンと出会い、共に魔法世界のアリアドネーに逃亡、治癒魔法の使い手として大成する。同時期に触媒としてエーテルを販売。財を成す。

現在では『治癒術者過程の大教授』と呼ばれているが、単なる称号。地位は教授。暇つぶしにと研究しながら時折講義をしている。

1920年ごろ、魔法関係者による医療集団『赤い月』を結成。団員は殆ど亜人だが、旧世界人も多少はいるためNPOとしても登録されている。

大戦では両軍の負傷者や戦渦に巻き込まれたものを癒し続け、戦後も戦災孤児や難民の社会復帰に影で尽力していた。

1940年ごろから関西呪術協会にて陰陽術も学んでおり、京都周辺の妖怪とは仲がいい。

## THE・チート生物

名称：ココ

種族：チヨコボ（黄チヨコボ）

性別：雌

体格：全高93センチ　コロコロした三頭身

身体能力：全体的に超一流。やたら器用。空は飛べない。不老長寿。

魔法能力：皆無。化け物級。ジヨブ次第。

感知能力：元々野生動物。チートパワーでさらに強化されている。

性格：純粹

愛好：銳太郎 食事 睡眠

嫌悪：暴力 銳太郎と長時間離れる事 勝手に背中に乗られること

夢：おなか一杯食べる事。空を飛ぶこと。

技能『不思議なコミュニケーション』

鳴き声とボディランゲージで自分の意思を伝える事が出来る。  
何故か齟齬は皆無。

装備『不思議な鞆』

首から提げた、明らかに大きさに見合っていない容量を有する鞆。  
口さえ通れば大抵のものを好きなだけ詰め込める。普段は旅でよく  
使うナイフや火打石などが入っている。

アイテム『不思議な小瓶』

注いで半日待つだけで唯の水がFF薬になるチートアイテム。  
薬一種に付き2つずつ入っている。

特殊『ジヨブチェンジ』

言わずと知れた太古の戦士の力を自分に降ろす能力。ナイト・  
竜騎士・暗黒騎士・忍者・シーフ・学者・黒魔道師・白魔道師・踊  
り子の全9種に元々のチョコボの姿『すっぴん』を足して全部で1  
0の姿に変化できる。

SP/MPに当たる魔力は銳太郎から供給可能、かつ魔法の全  
体掛け等が可能になっている。もうどうしようもなくチート。

アーティファクト『血統の枝』



平行世界（FF本編）のチョコボの姿になれる。身体能力が強化されるため、雌でありながら背中に重量物を載せて走ることも可能に。

黒チョコボになれば空も飛べる……？

## 概要

自称：神が用意した鋭太郎の相棒。出所不明。鋭太郎の影の中に巣があり、鋭太郎によく懐いている。明らかに鋭太郎よりも能力が高いが、動物と人間ならそんなもんだろ、と鋭太郎は言う。

ツメやクラは装備しない。ただし、主人である鋭太郎の望みであればこの限りではない。

「ご多分に漏れず『チョコボくさい』。『チョコボ・くさい』ではない。間違えると激怒するので要注意。

## おまけ

鋭太郎への好意レベル

（各10点満点、0基準）

名前：恋慕／親愛／友情

ココ：0／10／10

エヴァ：5／9／9

さよ：9／8／3

アリカ：7／6／9

アスナ：5／6／2

設定。(後書き)

うん、やりすぎた。

## 宿命（前書き）

またの名を伏線回収。

## 宿命

>>アリカ

鋭太郎に連れられ、旧世界の関西呪術協会というところへやってきた。

旧世界土着のメガロセンブリアと直接的な関与の無い魔法組織だと鋭太郎が言っていたが、なるほど妾の顔を見ても顔色を変えるものが数えるほどもしか居らぬな。妾の事を知るものは魔法世界へ出向いた事のあるものだけというわけじゃ。

青山詠春の結婚式も古来の仕来りに則ったものであり、眼を見開くようなものであった。

上質で不思議な仕立ての衣装を着込んだ花嫁の姿はどこか神秘的で、思わず自分がそれを着る姿を思い描いてしまうほどであった。無論、そのイメージの中で隣に座るのは青山詠春ではなく、鋭……ごほん。

それはともかく。

アスナは月明かりに照らされた中庭でココに跨り、騎士の真似事をして遊んで居るな。遊び相手の半分が異形というのが気になるが。

そして鋭太郎は早々に挨拶を済ませて離れへ向かったという。本殿へ入って来れぬ事情のある者をもてなすのだと聞いた。アスナと遊んで居るような、友好的な異形たちのことであろう。

その方角からは随分と賑やかな声が聞こえておる事だしの。

そして妾はさよと一緒に月見酒じゃ。静かな月光の下、ゆっくりと流れる時間を味わう……さて、こんな気分になったのはいつ以来

であろうか。

……あるいは初めてかもしれんの。

「こんなところに居らりましたか」

「む？」

「菜乃香さん。いいんですか、席を外してしまっても」

独特な言い回しと発音をする声に振り向けば、そこに居るのは衣装を楽なものに変えた花嫁であった。

肌がうつすら紅潮しており、気分も良さそうだが、同時につまらなそうでもあった。

ちなみに、妾とアスナは日本語を知らぬので、魔法の翻訳装置を使って居るぞ？

「あつちは皆潰れてもーてな〜？えーたるはんと飲みなおそ思つて」  
「あら……もうそんな時間なんですか？」

「ん〜、皆舞い上がつとつたからなあ。いつもよりペース早かつてん」

さよが不思議そうに時計を見るが、時刻はまだ午後十時を回ったばかりじゃな。宴の終わりには確かに早すぎる気もするが。

それにしても、鋭太郎のところへか。妾たちも行こうか、と視線でさよに問いかけるが、帰ってきたのは苦笑いであった。

「あゝ、やめておいたほうがいいと思いますよ？気分乗ってるから“石”いくかも……」

「えーたるはん、文字通りに鬼より強い人やからな。いつも切り上げる二時半くらいまで待つとつた方がええと思つよ？」

「そ、そうなのか」

流石に“鬼より強い”は冗談だと思っただが、二人の真剣な顔を見て思いを改める。確かに幾度か杯を交わす機会があり、酒精に強いのは知っていたが……まさか此方も人にあらずとは。

「あ、そや。二人はえーたるはんの事好きなんやろ？」

「ツ！？ご、ごふつ、えほっ！」

「だ、大丈夫ですかアリカさん！？」

い、いいいきなり何を言い出すのじゃ！わ、妾が鋭太郎の事を好いて居るなどと！

突然の事にむせ返ってしまった妾に、菜乃香は悪戯っぽく微笑んでいた。

「あかんえゝ、もつと押さな。えーたるはん、お医者様やろ？誰も彼も“人間”の括りで真面目に見てまうから、自分に向けられる“心”にえらい鈍いんや」

……知ってる。裸を見られたときもまるで木石を見るのと同じような視線しか感じなかったからな。

その後も何度か振り向かせてみようとしたのじゃが、気付こう、あるいは気付くまいとする意思さえ感じられぬ。それでも美貌の姫と謳われたと言うのに、自尊心がズタズタじゃ。

「せやから、お酒呑み終わってええ気分になつてるときに……」  
「よこによ」

「なっ」

「そ、それは……！」

「ふふふ……ほな、おーきに」

にこやかな笑顔を残して去ってゆく菜乃香の背を見送りながら、

囁かれた提案が頭の中で反響しておる。振り払えぬその言葉をせめて誤魔化そうと、妾はさよに声をかけていた。

「ところでさよ、先ほど言った“ごく”とはなんだ？」

「昔からの単位で、およそ180リットルの事です」

……二の句が告げなかった。

>> 鋭太郎

関西呪術協会総本山。昼も夜も無い吞めや歌えの大騒ぎがようやく収束し、御山は静まり返っていた。言うまでも無く、その宴会が原因である。

飲まなかった面々とザル以外は全員二日酔いでダウンしているの  
で、今日の業務はその辺と無縁な人外が中心。鬼や烏族が見回りを  
して、猫や狐の狗族が内勤……ここはどここの魔界だ？

俺のところも、アリカとさよが“とある理由”でダウン。アスナ  
は小鬼相手に遊び疲れたんだろう。そろそろ10時だが、まだ起き  
てこない。

俺はいつも通りに起きて鍛錬してココとのんびり。分身からの情  
報を統合したり『赤い月』の活動報告を纏めたりはしているが、基  
本は日光浴だ。俺の場合、光合成とも言っ。

「えーたろはん」

そんな静かな時間の中、かけられた声に振り返れば襦袢姿の大和  
撫子。

その顔を確認した俺は居住まいを正して頭を垂れた。

「……ゆうべはおたのしみでしたね？」  
「っ。もう、ややわぁ」

赤子の頃からよく知っている人物なのでちよつとからかつてやった。お約束でな。

この娘が次代の西の長、近衛菜乃香。詠春の嫁さんだ。この場に詠春が居ないのは、恐らく二日酔いで潰れているからだろ。おつとりした見かけによらずザルなんだよ、このお嬢様。

「そう言っえいたろはんも、さよはんやアリカはんと一緒やったん違いますの？」

「ふむ、そう見えるか？俺は別にそう言う関係は持っていないつもりなのだが」

「あれ？実行せえへんかったんやろか」

かわいらしく小首をかしげる菜乃香に「お前の差し金か！」と叫びたくなつたのを辛うじて抑える。

さあ寝ようって所へ二人が夜這いに来たときには流石にパニックだった。長寿になつたせいなのか医者としての活動の間にそうなったのか、俺の性欲はこつち来てから随分と大人しくなっていて楽しめたのに。それをまあ……喜ぶべきなのか嘆くべきなのかわからんな。

アスナが寝ていなかったらどうするつもりだったんだろうか。

「実行、ね。一体何を吹き込んだんだ？」

「えいたろはんは思いつきり押さないと動いてくれへんえ？って言っただけや」

「……そうかい」



本当にそれだけとは思わんが……藪を突付いて蛇を出す事もあるまい。

隣に腰を下ろす菜乃香に、傍らから茶を出して渡す。反対側では、口を出す隙間を見つけられないココが退屈そうに船を漕いでいた。

ふつと一息つくと、菜乃香の気配も表情も暗いものに変わっている。無理もない。なぜなら、この娘が望んでいたことが全て実現したわけではないのだから。

むしろ、一番望んでいた事だけは叶わなかったのだ。

「お父様、来いひんかった」

「……来れないだろ。刑期を終えたからと言って雪げるような罪じゃない」

「それでもウチは、来てほしかったなあ」

軽く空を仰いで今にも泣きそうな表情からは、良家に付き物の孤独感と寂寥感が漂っていた。加えて、近右衛門のせいで白い目で見られていた時期もある……俺には理解できないが、きっと辛いのだろう。

悲痛な面持ちは似合わないので、適当な理由をつけて詠春のところへ送り返してしまうことにする。さっさと起きて慰める、婿。

「菜乃香、お前ももう一眠りして来い。まだ疲れが抜けてないみたいだぞ」

「そや、ね。うん、そうさせてもらっわ」

酔い覚ましの薬を受け取って立ち上がり、ふらふらと戻っていく菜乃香の背を見送った後、俺は下駄を召喚して履き、庭に下りた。砂利を踏みしめる音でココも目を覚まし、鋭い表情になる。

そして俺は、自分の服を軽く調べて、一言。

「……さて、お仕事しますか」  
「きゅっ！」

頭の黒いネズミが潜り込んでるみたいだからな。

>>???

供与されたマジックアイテムを用いて秘密裏に大型魔物の封印を解き、関西呪術協会に打撃を与える事。それが私に与えられた指令である。

その関西呪術協会では電撃的な結婚式が行われたとかで、その招待状にかけられた魔法によって監視の目を騙す事が出来るという……本来ならば昨夜のうちに儀式を終わらせるべきだったのだが、何の手違いか招待状の到着が遅れてしまった。そのため、こんな昼間に開封を行わねばならないとは。

……まあよい。先の大戦において製造されたというこのマジックアイテムに秘められた魔力は膨大だ。解き放つだけで封印の要を破壊する事はできるだろう。

別のマジックアイテムによって強力な認識阻害の結果を展開し、湖にかかる栈橋と、そこに設えられた祭壇……そこから魔力を開放する。

操る必要などない。ただ、復活させてやればよい。人の枷なき魔物は、ただ暴れるのみ。

「なるほどな」  
「何ッ!？」

突如かけられた声に、思わず振り返る。そこに居たのは、着崩した和装に身を包む長身の男。

どうということだ。この男……どうやって私に一切気付かせずにこの場に現れた？

「魔力も集めず、儀式の手順も踏まず……俺が手を出した封印をどう解くつもりかと思えば」

悠然と歩み寄る男へ、無詠唱の“魔法の射手”を打ち込む。魔法の光が男を襲うが、強固な障壁に阻まれた。

……格上か。ならば、障害の排除よりも任務の達成を優先する。私はマジックアイテムの開放段階を二つ上げた。一気に解き放って自壊するレベルのものだ。

魔力が暴風となって祭壇を、棧橋を砕き、ロープが張られた大岩にひびが入る。

「この魔力……やはりオスティアの。ふふふ、丁度いい。これで懸念事項が一つ消えたわけだ」

封印は破壊した。だが、男がうろたえる様子は無い。装剣の魔法で石の剣を喚び出し、それをこちらに向けていた。

次の瞬間、静かな瞬動術で距離を詰められるが、私も即座に瞬動術で回避、懐から符を一枚取り出す。

「魔法の射手 火の34矢」

「ぬるいな」

「ぐっ！」

なんということだ。障壁や他の魔法で相殺してくれば爆煙で視界を覆えたはずなのだ！それを、回避、だと！？

しかも先ほどの剣。ただの一振りですべて障壁を紙のように粉碎した。貫いてくるだろうと予測していなければ、手足を切り落とされていた！

何か。何かこいつの動きを妨げられる一手は……！

焦りが動きを縛ったのか、一瞬反応が遅れる。それは致命的な一瞬であり、男が振るった石の剣が左腕を切り飛ばし、激痛が走った。それにより更に動きを鈍らせようとする体に鞭打ち、距離をとろうと大きく後退する。

そして。待ち望んだ瞬間がやってきた。

バキンッ

硬いものが砕け散るような音。砕けたのは私の手の中のマジックアイテムと、ロープの巻きつけてあった大岩の二つだった。そして、大岩のあった場所に光の柱が立つ。

そして、その柱の中で立ち上がる、山より高い巨軀。何かを求めようと上空へ差し伸べられる二本の腕と、立ち上がる胴体を支えるそれとは別の、二本の腕。

二面四手を有する巨大な鬼神。リョウメンスクナ。

全ての封から解放され、あらゆる枷を外された大鬼神は、ただ空へ向かって吼えた。

たったそれだけのことで発生した衝撃波に吹き飛ばされる。男は障壁で防いだ……好機は得た。

「あ」

私の狙いに気付いた男が間抜けな声を上げるが、もう遅い。ずっと右手に隠し持っていた転移魔法符は、既に発動している。

舌打ちする男の表情を最期に見たまま、展開された魔法陣より溢れる光に包まれた私はその場から姿を消した。

>> 鋭太郎

失敗だな。スクナが動き出す前に工作員を捕まえて、さつさと封印し直しておきたかったんだが。

まあ、痛い痛いけど、ボーナスタイムを逃した程度だ。どうせ使うだろう転移の痕跡を追っかける為にココを別行動させてるんだし。

契約の力を通して俺が感知した転移魔法の魔力情報と行き先の座標をココへ送り、急行させる。

そして俺は、復活した大鬼神を前に気合を入れなおした。

二面四手、飛驒の神。神格の波動に気圧されるが、退きたくなくなるほどじゃない。

菜乃香の為、詠春の為、そして未来を担う子等の為。大人しくなってもらうぞ、両面宿儺！！

## 宿命（後書き）

「鋭太郎関西到着によるスクナ封印強化」

「アスナ回収時の魔力消失現象」

以上二つの張らなくてもよかった気がする伏線を回収する為（だけに）、スクナに復活してもらいました。

原作の修学旅行時と違い「召喚」では無く「開封」ですので、この話で復活したスクナは全力全開、人間がコントロールなんて間違っても出来ないレベルのパワーを有しています。

スクナ が あらわれた

コマンド？

倒す

分裂させて仲間にする

神様強え！（前書き）

過去宿讎編、とりあえず終了。

神様強え！

>>さよ

静かにまどろむ、台風一過の総本山。しかし、その眠りは突如覚まされました。

途轍もない悪寒が走り、布団を跳ね飛ばして飛び起きて。見れば、アリカさんが冷水を浴びせられたような表情で同じように体を起こし、こちらを見えています。

「なんじゃ、今のは？」

「わかりません。けど……すごい力」

ばたばたばた……たん！

「鋭太郎、う？」

勢いよく障子が開き、アスナちゃんが姿を現して。そして、そのまま固まってしまいました。

どうしたのかな、と一瞬だけ疑問に思い、すぐにその原因に思い当ります。

私とアリカさん、何にも着てない上に……首筋や胸に小さな痣がついています。

そして何より、ここは教授に宛がわれた部屋。私たちは隣の部屋が宛がわれていました。

何をしたのか、隠しようがありません。せめてもと、布団を引き上げて素肌を隠します。



「あ、えと。おは、よう?」

「お、おはようございます、アスナちゃん」

ぎこちない挨拶。隣でアリカさんが咳払いをすると、我に帰ったアスナちゃんが障子を閉めました。とりあえず、外から見える状態ではなくなったので布団から出ましょう。べたつく体を魔法で清めて、用意されている服を着ます。

二人ともが人に見られても大丈夫な格好になったのを確認してから、アリカさんがアスナちゃんを呼び寄せました。

今度は辺りをしっかり窺ってから、滑り込むように最小限の隙間を空けて部屋に入るアスナちゃん。自業自得ですし、順序が逆ですよ、とは言えませんか。

「え、っと。アスナちゃんもさっきの魔力の事で?」

「うん。湖のほうにおっきな鬼が出たの」

「湖?」

湖といえば、確か両面宿儺神の封印があつたはず。でもアレは確か教授が調整してまだ暫くは解けないはずだったのに。

つい思案に沈んでしまった私の肩が叩かれ、我に返るとアリカさんが頷いていました。

「何か良からぬ事があつたのは確実。敏い鋭太郎の事じゃ、既に対応に走っておるはず。まずは長の下へ行くぞ」

確固たる意思に裏づけされた確かな表情で方針を極めるアリカさん。私とアスナちゃんはそこに同意して手荷物を用意し、廊下に飛び出しました。

>>アリカ

廊下を駆け抜け、本殿にたどり着く。あの部屋からは向きの都合で見えなかったが、確かに巨大な四本腕の鬼がそこに立って暴れているようじゃな。

集まった巫女たちが呆然とそれを見上げておるが、妾はその後方に立っておる女に声をかけた。

「近衛菜乃香、何があつたのじゃ」

「アリカはん……両面宿儺いう鬼神の封印が解けてもおたんよ。ウチが生きてる間は出てこんやろ言われてたんに」

「それで？」

「えーたるはんが真つ先に気付いたみたいで、抑えに入つたはります。ウチも腕つききを出そ思つたんやけど、旦那様もお義父様たちも、皆ふらふらでなあ」

情けない事だが、まあ、無理もない。実際この場に居るものも、体調の都合で顔色を悪くしているものが多そうじゃな。

それにしても、婚姻の宴にあわせて策謀を張るとは、随分と下衆な真似をしてくれたものじゃ。

「あれほど目立つのじゃ、何かの図ではないのか？」

「んー、それが一番怖いな。せやから狗族や鬼にも手え貸りてるんやけど、まだ敵を見つけた言う報告はないんや。動ける陰陽師には交通機関の監視と転移妨害をさせてるえ」

どういう……いや、あれほどの存在じゃ。あの鬼神のみで全て事が足りると考えたのなら、復活後速やかに高飛びすると言うのも道理ではある。

ならば妾たちがすべきことは

「さよは湖へ。鋭太郎を補佐するやり方はさよが一番よく知っておろう」

「いえ、ココちゃんに次いで二番と自負してます」

「む？……それもそうじゃな。では任せろぞ？アスナは妾とココを探す。あの鬼神に仕掛けていないということは」

「多分、犯人を追ってる」

「そうじゃ。あの鋭太郎が起動に時間の掛かる長距離転移符をみすみす使わせるとは思えぬ。間違はなく、まだ近くに居る」

「ん！」

役割は決まった。ならば速やかに行動するのみ。

「すんまへんな、お手を煩わせてしもうて」

「気にする事は無い。鋭太郎がそこに居るのじゃからな」

「……ふふふ、恋する乙女みたいや」

悪戯つぽく微笑む近衛菜乃香の言葉に、顔が熱を持った。が、今は気にしている時間は無い。

そう言うことにして、この恥ずかしさを誤魔化してしまおう。

「か、からかつておる暇はあるまい！行くぞアスナ！」

「ココちゃんなら一般の人でも知つとるから、聞いてみてな」

……じゃろうと思ったわ。

>> 鋭太郎

やっぱ強いわ、神様は。残像しか見えない一振りを回避しながら、つくづく思う。

神剣が纏う気は貰えば魔法諸共俺を切り裂くだろうし、防御面も全力で投げた“冥府の石柱”を軽く弾いてくれるとか、硬いにも程がある。

背中？側の二本の腕が持っている弓矢の威力も半端じゃない。全力で先回りして湖へ叩き込むのが限界だ。魔石の防壁を展開する暇さえない。

幸運なのは、理性が発言してないから攻撃が大振りで予測しやすい事か。それでも剣が巻き起こす風で体を持っていかれるし、速さも威力も読み違えたら即死なレベルなんだが。

はつきり言おうか。手も足も出ません。煙を出す魔法と認識阻害の結界のおかげで注意を引けているが、強引に無視されたらアウトだ。

強いだろうとは思ってたが……ここまでとは。

矢を叩き落して急接近、袈裟斬りを避けて払いを潜り、懐へ飛び込もうとする時には一振り目が斬り上げになって帰ってきている。そしてそれだけの時間があれば次の矢が番え終わるというエンドレスワルツ。宿儺の足止め自体には成功してるからまだいいんだが……

まあ、喧嘩して勝てるか、と聞かれると酒吞相手でも怪しいんだ、宿儺に勝てるなんて思い上がってたわけじゃない。

我が身に満ちるチートな力というのは人間基準の話であって、妖怪や悪魔等、本物の化け物を基準にして俺の戦闘能力を計った場合、ランクは上の下程度だ。

魔石を使えばその限りでないとは言え、所詮は過去を消費して発動する瞬間的なブーストに過ぎない。恒常的な能力上昇は望めない

のだ。

だから、つまり……

グオオオオオオ！！

「くっ！」

宿讎を滅するのはまず不可能だ、って事だな。だが、それは予定通りのことだ。

今の宿讎は、全ての封印が一度に解除されてしまった為に、本来ならば消費されていたはずの力が暴走している。本来ならば明確にあるはずの自意識や知性が発露出来ないほどの野生の暴走。

だから、暴れるだけ暴れさせて疲れれば理性を取り戻すはず。暴走の結果発生しうる災害を最低限に抑えるのが俺の役目って訳だ。

剣戟の嵐を掻い潜り続ける。段々と眼が慣れてきてはいるが、宿讎も少しずつ知性を取り戻しているのか、こっちの回避を読み出しているようだ。

「全く、厄介な　ツ！？」

また放たれようとした矢を追おうと魔力を爆発させ　その進路を神剣に塞がれた。読まれた！

間一髪魔力に気を混ぜて反発させた反動で回避するが、剣に引き裂かれた空気が渦を巻いて俺を喰らい、俺は大きく方向感覚と姿勢を崩される。

そして、追う事が出来なくなった俺の視界の中で、宿讎の二本の腕が矢を射た。光属性“魔法の射手”を二、三万収束させたような

光の帯は狙い違わず総本山のほうへ飛んでいく。

やっちまった。瞬間的に状況を把握した俺の思考は諦念を明らかにしたが、その直後宿讎の矢は突如出現した鋼鉄の巨人に阻まれ、叩き落された。

そして、姿勢を立て直そうと足掻く俺を狙った神剣が側面から青い大蛇の尾が打ち付けられ、逸れていく。

光の粒になって消えていくそれらを視界の端に収めながら記憶を辿る……あれはたしか、鉄巨人とリヴァイアサン。ならば

【教授！ご無事ですか！？】

思考に飛び込む念話。やっぱりさよか。気を取られすぎて宿讎に殺されないよう注意しつつ、応答する。

【ああ、助かった。そっちは？】

【隠蔽と人払いの結果を展開して、さっきの攻撃にはアーティファクトを使いました。被害ありません。アリカさんとアスナちゃんはココちゃんのほうへ。菜乃香さんたちは包囲網の形成に当たってます】

【そうか……】

さよのアーティファクト『封じられた獣達』は、召喚系のアーティファクトだ。その実体は知る人ぞ知る、知らない人は全く知らない『ポップアップカード』である。何でこの世界にあるんだ？

百枚を超えるカードの一枚一枚にFFモンスターのイラストとコマンドが記されていて、選択して投げる事で召喚し、コマンドを実行するアイテム。出力は高いが一度に一撃のみで、一度使ったカードがもう一度使えるようになるまで暫く時間が掛かるという難点も

ある。

だが、もとより速射でない矢の撃墜には充分だ。それに……時間も迫っている。

グ、オオ……オオオ……

さっきの連携からこっち、宿讎の動きが鈍っている。ようやく理性が戻ってきた……ようだが！

宿讎は苦悶の声を上げながら大きく口を開き、そこへ気を練りこんでいる。それを感じるだけで冷や汗が流れているのが自覚できた。大急ぎでその射線上に回りこみ……飛行魔法をオールカット。気による浮遊術だけで体を支え、使すべき魔法を選択する。

飛び道具に対する絶対防御と言い切れるほど自信を持って行使できる魔法を、俺は有している。

“一体構造”の矢には理由があって使えなかったが、“流動する群体”であるビームならばこれを使うことに躊躇いは無い。

【さよ、認識阻害の強化を頼む。派手になるぞ】

【既に行使できる最強のものを展開中です】

流石、頼れる……さて、大鬼神よ。そいつを撃ったら大人しくしてくれよな。

ただそれだけで死をイメージできるほど莫大な気を圧縮されたビームが、ついに宿讎の口から放たれる。

浮遊術でしっかりと足を固定した俺は、そこへ向かって両手を突き出していた。

俺が、俺だけが持つ、破格の威力と応用性を持った魔法を展開する為に。

「反転術式・進路」！」

神々しい光の奔流が、俺が展開した魔法陣に迫った。それは魔法陣に接触すると、細かく連続的に弾けた。

反転術式によって進路を逆転させた宿儺の気が、後続する宿儺の気とぶつかり合ったからだ。この魔法は対象に問う“一個”の概念に問題があるのか、複数の部品で構成された人工物とかだと普通に全部反転するのだが、水のような無形物が相手だと接触しているその部分だけしか反転できない。

なので、無形である気の奔流を反転させると、魔法陣に接触した僅かな部分が反転して後続の気を相殺し、押し勝った後続の気がまた反転して相殺し、を繰り返す。

矢に使えなかった理由というのも、気という無形で構成されながらも矢という有形である為に完全に反射してしまい、それを宿儺に避けられでもしたら大惨事になるのが眼に見えていたからだ。

暫く……時間にして十数秒が経過し、ようやく気の奔流が収まって宿儺が姿勢を崩した。

吾、は？

おお、宿儺が喋った。性別も年齢もわからない不思議な声色だ。さすが神様。

そうだ、吾は彼奴等を……む？ヤマトの軍勢はどこへ行った？どこへ隠れたあ、タケフルクマあ！



ヤマトの軍勢？ひょっとして自意識は討ち取られた千六百年近く前のままなのか。っと、放っておいたら今度は理性を持って暴れるかも知れんな。気付いてないみたいだし、早いとこ接触しておかねば。

「飛驒の鬼神よ、俺の声を聞いてくれ！」

む？なんじゃあ！……随分小さいの。

「いやいや、周りの山を見て言えよ。お前がでかすぎるんだよ」

お、おお？

勢いよく俺のほうを見たかと思えば、拍子抜けしたような声を出す。そして、体のサイズについて指摘したら自分の脇の下を覗くようなコミカルな仕草でそれを確認し出した。威厳があるのか無いのかよくわからん。あんまりフランクだから俺も語調がかなり砕けている。

なんじゃ、こりゃ。小さいの、説明しろや。

「だから小さい言っただけ」

このサイズ……肩に乗ってライフル撃ちながら「やらせはせんぞ」とか言ったら様になるかね？

まあネタはさておき、俺は宿儺に色々と説明した。宿儺が調伏されて千六百年くらい封印されていたこととか。

少し遠い目をして誰かを思いながら俺の話聞いた宿儺は、その返礼というカタチで少しだけ過去を語ってくれた。

何でも、宿儺はもともと飛驒や美濃に居た民族の長で、大和朝廷との勢力争いをしていらしたらしい。日本書紀に書かれていたような略取や暴行は一切働いていないそう。格好やサイズも当時ではちょっと大きい人、程度で、こんな化け物ではなかったようだ。まあ、歴史ってのはそういうもんだからな。

しかし、困ったな。こんな図体では迂闊に歩けもせんではないか。

「そうだな。そこで一つ提案がある」

ほほう。言ってみるがいい！

「人間サイズにしてやるのと引き換えで、こっちの仕事手伝って欲しい」

ふむ……まあ、また封印されるのも癪に触るな。

宿儺が思案する事二十秒。

よかろう！吾の暴走を押し留めて見せた借りを、その仕事とやらで返そうではないか。

仮面のような顔からは表情が読み取れないが、呵呵大笑でもしそうな声音で返事する宿儺。まあ、裏切ったら殺されそうだな。やらないだろうけど。

そして俺は、今日まで生きててまだ一個しか作ってない20年物の魔石を使つて『裏切りの枝』レヴァテインを出す。アー、モツタイネ。

おい、何をする気だ！？

「避けるなよ？ズレたら命の保障はない……一刀！両断！」

どわああああ！？

……その日。関西呪術協会とはある鬼神の協力を取り付け、その力を不動のものとした。

神様強え！（後書き）

事後な二人、アスナに見つかる。

アリカ様カリスマ発揮。

さよちゃんアーティファクトお披露目。

宿儺覚醒！なんか神様っぽくないぞ！？

の、四本でした？

ココに追いかけている工作人員はあっさり捕まります。サイレス＋スロウ＋オードンムヴで。

そして鋭太郎の能力レベル。サイコメトリーは言うまでも無く、プラントの能力もVS悪魔とかだとあんまり威力を発揮できません。鬼相手ならヒイラギを出すとかでちよつと怯ませるくらいは出来ませんが、ガチバトルだと最上級の色々には勝てません。

格闘能力も魔法能力も攻撃力より機動力や防御力を重視して伸ばしているの、能動的な戦闘には向いてないのです。

ただ、これは基準が違う話でして、毒物耐性などの違いもありますから人間相手なら楽勝ですけどね。

さて、今回は時間を飛ばして、いい加減原作生徒を登場させたいと思います。

質問一。

発覚してしまった鋭太郎×アリカ！子供は！？

できる（多分2・A入り）  
できない

言っておきますが、さよとの間には出来ませんよ？彼女の体はジヤンル的に魔法生物なので、少なくとも鋭太郎がそうしようとしな  
い限りは。

質問二。

さよの名前が文章に溶けやすいので、麻帆良編あたりから（戸籍偽造のときにそうした、という流れで）漢字を当てたいのですが、  
どう思われますか？「小夜」か「沙世」にしようと思ってます。

## 恨みの行き場と娘達（前書き）

前回のアンケートに対しても、沢山のご回答ありがとうございました。

アリカだけじゃなくさよにも！とのご意見もありましたので、前  
言を翻して採用します！

## 恨みの行き場と娘達

>> 鋭太郎

さて……宿讎復活と鎮静化の騒動から、暫く経った。あのときの  
工作員は捕獲に成功したが、尋問中に隠し持っていた毒物で死んで  
しまったらしい。

所持品にも身元を特定できるようなものは無かった。ただ一つを  
除いては。

そして

「ウチは嫌や！」

今、俺の眼前では一人の少女が叫んでいる。年のころは10歳前  
後だろう。

所属の陰陽師たちを集合させた西の長を継承する席で、果敢にも  
新しい長である菜乃香に吠えている。今にも跳びかかって噛み付き  
そうな勢いだが、周囲の陰陽師たちが取り押さえているのでそれも  
叶わない。

「なんで、なんでお父様やお母様を殺した西洋魔術師と仲良うせな  
ならんねん！この前の宿讎かて東の」

「天ヶ崎ッ！」

「っ！」

詠春が割って入ったか。

「天ヶ崎千草。宿讎の件は“疑惑”に過ぎない。軽々しく口にする

な」

「っ。申し訳、ありません」

悔しそうに唇を引き結び、宥められながら元の位置に座る少女  
天ヶ崎千草。

それを悲しそうな目で見つめた菜乃香だったが、すぐに表情を長  
のものにして周囲を見渡した。

「皆も同じように感じとる事も、ちゃんとわかってます。でもな？  
殺されたから殺して、殺したから殺されて、それで最期、皆は幸せ  
になれるんやろか。うちは、違うと思う。でも、一人きりでそんな  
事言つたかてダメなんもわかってる。せやから、皆に力を貸してほ  
しいんや」

深々と頭を垂れる菜乃香に戸惑いの声を漏らす陰陽師たちであつ  
たが、やがて一人、二人と頭を垂れていき、最終的には俺たちを除  
く全員が土下座に近い姿勢をとっていた。

宿讎の件は工作員の所持品の中に近衛近右衛門宛の招待状があつ  
たことから、関東魔法協会への疑念が高まっている。先代の長（義  
輝。二週間ほど前に逝ってしまった）が問い合わせたところ、「そ  
の招待状は盗難にあった」といういくらでも疑える返答が帰ってき  
たため、事実闇の中だが。

俺もその招待状へサイコメトリーを使ったのだが、読み取れたの  
は近右衛門の葛藤ばかり。どうやら工作員達はかなり取り扱いに気  
をつけていたようだ。まあ、俺の能力ほどの精度は無いが、残留思  
念を探る魔法自体は広く知られているしな。

まあ、結局俺がその宿讎を関西の味方にしてしまったので、潰す  
つもりが修正不可能なほど強化する結果に終わったのは、ザマミロ

としか言いようが無いけど。

しかし……うん、ちょっと手を貸しておくか。

>> 千草

「天ヶ崎千草。少し、話をしよう」

「センセ……」

継承式が解散になって足早に本山を出ようとしたウチ。せやけど、横から声がかかったことでその足が止まってしまう。

声をかけてきたのは“相談役”の沢村鋭太郎はんやった。外部の方でありながら関西呪術教会の古株で、お若い見掛けやけど何年生きたはるのか誰も知らん。

誰一人敵わん程の大きな力を持ったはるのに、分け隔て無く優しくて頼もしいお医者様。先代様が長生きできたのも、この方の助力あつての事や。

ウチも修行で無理をしすぎて体を壊してしまったときにお世話になったけど、その時にはまるでお父様のような接し方をされて、思わず泣いてしもつたなあ。

「一先ずは礼を言っておこう。お前があ場で主張してくれたおかげで、菜乃香の意志は強く根付いた」

「いけずどすな」

「そう言うな。お前も聞いたろう、菜乃香の言葉を。暫く前に言っ  
たと思うが」

ぽん、と頭に軽い圧力がかかった。ウチはそれをした沢村センセの顔を見上げる。



「俺も元は“西洋魔術師”だ。そこへの恨みがあるなら俺一人で受け止めてやる。だからもう少し、菜乃香や詠春の想いも認めてやってくれ。な？」

そう言つて笑う沢村センセの手を、ウチは払えない。……ほんまに、お父様みたいな人や。

でも、誰より強い陰陽術師の沢村センセを西洋魔術師というには、大分無理があると思うんやけどなあ？

>> 鋭太郎

さて、そんな恥ずかしい干渉をしてから、更に時は流れる。天ヶ崎千草はあの後めきめきと頭角を現し、若手の中でも注目を浴びているようだ。詠春と菜乃香が礼を言ってきたが、さてナンノコトヤラ。

「やつ！ たつ！」

「踏み込みが浅い」

「ふっ！ せいっ！」

「もっと深く、もっと早く」

菜乃香の方針返還があつても、東西関係は相変わらずだ。表立つてぶつかる事は無く、お互いに過激派がコソコソ襲撃しあう程度。奈乃香や詠春は古き確執に疲れている感じがするが、そこに囚われたものも決して少なくないのだろう。

「ととさま」

「ん？」

「どーん」

かけられた声に振り返ると、庭を走ってきた和服の幼女がミサイルの如く低空ジャンプで突っ込んでくるところだった。即座に上体を反らせて激突を回避し、急速接近する幼女の肩に手を当てて確保、下ろしていた足を振り上げて座布団ごと水平方向に一回転。

ぐるん、と回ってもとの姿勢に戻る頃には、幼女は俺の膝の上で横抱きになっていた。

「何がどーんか。全く……」

「えへ」

幸せそうに俺の胸に顔を埋める幼女の額を軽く小突く。

そして視線を上げると、別の幼女が養女に声をかけるところだった。

「たああ　！」

「せつちゃーん、あそびにいくえ？」

「ふえっ？あきやああああ！？」

べしやつ！

そんなことを考えてたら訓練中だった俺の養女<sup>むすめ</sup>が自爆しよった…

…訓練中に意識を逸らすとは困ったやつちゃ。

滑って転んで涙目状態の養女を、稽古をつけていた男が心配そうに覗き込んでいる。

身の丈は詠春とさほど変わらず、だが近年やつれつつある奴と違ってがっしりした体型が大岩のような印象を受けるその男は、あの時真つ二つに切り裂いた宿儺の片割れである。呼び名は“<sup>キョウ</sup>暁”。この場には居ないが、もう半分が女性の姿で弓使いの“<sup>スナ</sup>蛭”である。

神様は完全存在だからなのか性別が無く、分断したときに男女一人ずつになってしまったのだ。

「ありや……」

「せつちゃん!？」

養女のお粗末な自爆に、その元凶といえなくも無い声をかけた幼女が大慌てで駆け寄っていく。俺に抱きかかえられていたほうも“あゝあ”みたいな顔をして歩み寄っていた。

菜乃香に瓜二つでぼわぼわした雰囲気醸し出しているあの娘が近衛木乃香。菜乃香と詠春の娘だ。

そしてさっき飛び付いてきたのが俺の実子、沢村咲夜。

儀礼用には見えない先端が丸く広がった剣を持つてひっくり返っている俺の養女が、刹那だ。沢村の姓を名乗らせようか、本来の母のものである桜咲の姓を名乗らせようか迷っている。

揃いも揃って厄介なものを背負って生まれてきてしまった三人娘だ。

木乃香はその体に脈々と受け継がれる高貴な血が発現したのか、人間としては破格の魔力を抱えて。おかげで菜乃香がその大魔力に中てられ、一時は危篤に陥ったほどだった。

俺が居なければ死んでしまっていたかもしれない。詠春が泣いて喜んでた。

忙しい菜乃香や詠春の代わりにはならないが、保護監督の役目を委任されている。

性格も適性も“癒し”の方面に特化しているようなので、大きくなったら俺の業を教え込もうと思っている。

咲夜は俺とアリカの間に来た子で、言わずもがな正体不明の亜

人と人間のハーフである。どんな形で出てくるのか非常に心配だったが、少なくとも人間の姿をしていたのでひとまずは安心できた。

だが、成長するにつれ俺の子だと主張するように秘められた力を現し始めている。流石にプラントや魔石の能力は遺伝していないようだ、その魔力量は俺の6割（木乃香の8割5分）で性質は王家のもの、という別の意味で“酷い”ものだった。加えて、俺には無い何らかの特殊能力を有している恐れもある。その辺も充分に注意しないと。

性格はダウンナー。だが先ほどの突撃からもわかるように、俺にだけは妙にアクティブだったりする。

この二人は魔力をコントロールできなければ確実に厄介な事になるため、3歳ごろから修行が課せられている。教師は勿論俺とアリ力。

とりあえず自分で隠蔽できるようになってもらわないと、危険が危ない。過剰防衛的な意味で。

そしてある意味では最も大きな問題であった、刹那。烏族と人間のハーフとして生まれたこの娘は、透き通るような、というか実際に透き通るほど白い肌と純白の翼、髪、そして真っ赤な瞳を持って生まれてきてしまったのだ。

白鳥。白い鳥は太陽の化身であり、高い霊格を有しているとされる。つまり、木乃香達同様先天的に巨大な力ないし素質を有し、それをはつきりと表す容姿で生まれてしまった。

それゆえに両親の愛の下に生まれながら、烏族にも陰陽師にも恐れられ、忌避されてしまった。しかもそのショックが祟ったのか母親が肥立ちを悪くして急逝、武人でありいつ消え去るかわからない我が身一つで子育ては出来ぬと嘆いた父親が、そのタブーさえ覆せるほど格の高いもの……という少し気恥ずかしいが、人類をはるかに超越している事は確かであろう俺の元へ、泣く泣くその娘を託

してきたのだ。刹那、という名を与えて。

俺も祀り上げられたり隔離されたりするのは可哀想だと思うし、白子は大抵免疫力に問題があるから二つ返事で引き取ったんだがな？ その様子が軽々しく見えたのか、あるいは“沢村”の姓を名乗られるのが不満なのか、説明を終えるまでさよもアリカもアスナも口利いてくれなかった。説明しても半日くらいむくれたままだった。仕方がないのでご機嫌を取る為に　おっと、話が逸れてしまうな。刹那の話に戻る。

そうして養女に迎えた刹那。自分が忌避されるはずのものだったのを無意識で自覚しているのか、かなりの甘えん坊になってしまい、最初は咲夜と一緒にあって一日中俺に引つ付いている事が多かった。だが咲夜と木乃香が魔力運用の修行を始めると、なにやら危機感を抱いたらしくて暁に頭を下げ、神剣の扱いを学ぶようになってしまふ。元々武芸が達者な烏族の血を引いてるだけあって、暁を驚かせる速度で上達しているらしい。拙いながらも気の扱いまで覚え始めているそう。

と、このように問題を抱えて生まれてしまった三人ではあるが、それぞれの仲はとても良い。どこかへ遊びに行くときは常に三人一緒に、護衛兼監視に俺、ココ、さよ、アリカの中から二人が付いていく。

アスナは三回に一回くらいの頻度で同行しているようだ。なにかズレを感じてしまって少し居づらい感じがすると相談してきたが、カッコつけてないで好きに遊んで来いと言っておいた。もうすぐオスティアが仕掛けた成長阻害の残留効果が切れるから、精神年齢のすり合わせを始めないとダメだ。

「ふえ……」

「せつちゃん大丈夫？痛い痛い、とんでけっ！」

「とんでけ」

「うにゆう。ありがとう」

木乃香と咲夜の回復術で刹那に傷が癒えていく。二人ともおまじないレベルなら問題なく使える程度には魔力のコントロールを身につけているからな。

それから三人は遊びに行くのなんのと話をして、暁に訓練の終了を要請している。元々予定の時間は過ぎていたのですぐに承諾は貰えたらしく、三人は俺のところに戻ってきた。

「お出かけか？」

「はい。行ってきます」

「今日は川で河童さんと遊ばー思ってるんよ」

「かかさまとココが一緒」

「そうかそうか。だがこの間の雨で水位が上がってるはずだから、あんまり近寄りすぎてはいけないぞ」

「「「はい」」」

はしゃぐだけで飛び跳ねるようなテンションの木乃香と、そこに引つ張られる刹那。そして一步引いたところで傍観するようだが楽しげな足取りの咲夜。我が娘等ながら、凸凹だな。

見送っていると暁が寄ってきて、隣に腰掛けた。

「羨ましい」

「なんだって？」

「あれほど元気な三人の娘が居ながら、もうじき四人目を手に入れる貴様が羨ましいと言ったのだ」

ああ、そう言う事かと納得して頷く。暁の言う事は真実だ。

アリカの妊娠がはつきりしたとき、さよにも子供が欲しいとせがまれた。俺はその時、二人同時に育てるのは厳しいものがあると諭して時間を稼いだ。何せ“俺”の子だ。遺伝した魔力を使って癩癧一発で部屋一つ潰すようなパワフルな赤ん坊を二人も一遍に見られるわけがない。

そこで、制御する人格の土台を作る時間を確保する事とさよの機嫌を天秤にかけ、“アリカとの子が4歳になったら”という約束で妥協できた為、その約束に則ってもうすぐ咲夜に異母弟妹が生まれる。いつもならすぐ傍に控えてるさよがこの場に居ないのは、そう言う意味だ。

「そうだな。幸せだよ、本当に」

「良いことだ。ワシら男を動かすのはその幸福感よ。今後よろしく頼むぞ、友よ」

「ああ。よろしく」

信頼の証にと暁と拳をつき合わせた俺は、退屈しのぎに昼寝をするべく縁側に横たわるのだった。

## 恨みの行き場と娘達（後書き）

色々不足してますが、襲撃組の話は修学旅行くらいにしようと思います。

そしてようやく原作の生徒キャラが登場。っても木乃香と刹那ですが。オリジナルの娘も追加。

さよとの子はネギと同年代にします。異母弟妹、と書きましたが、双子の予定はありません。鋭太郎が胎児の性別を頭に入れていないだけです。

次は世界に散っている鋭太郎のチート分身の話と、麻帆良行きの原因付け、かな？



分身の働きと転がり込んだ面倒事……（前書き）

使っていると記述があつたのに書き忘れた『分身』についての記述と魔法適性の設定を設定ページに追加しました。

分身の働きと転がり込んだ面倒事……

く NGOで強かな少女と出会う

> 褐色銃士（幼）

今、私の眼前では、私のマスター、コウキが黒いローブを纏った背の高い男に正座させられている。

……いい気味だ。毎度毎度何一つ顧みずに突っ走って傷を作っているような奴なんだから。今日の事だって、すぐ隣に居た仲間に声を掛けて連れて行けば無傷で済む話だったんだ。

散々お小言を言われたマスターは、ようやく開放されてふらふらと立ち上がった。長ズボンだから傷は無いだろうけど、岩肌だったからかなり痛くなっていることだろうね。

大人しくそのお説教が済むのを待っていた私は、跳ねるように立って黒いローブの人物に歩み寄った。

「むぐむぐ、んくん……さて、お説教が済んだところで質問させて欲しいんだけど」

「待て、マナ。その前に俺からお前に質問したい」

「何かな、我がマスター……はむ」

「……その手に持ってるモノは何だ」

「何って」

視線を手元に落とす。と言っても、目と鼻の先にあるのだけだね。

「見ればわかるだろう、饅頭だ。このお兄さんが差し入れてくれたものじゃないか」

「それはわかってる。俺が聞きたいのは、何故六つも貰った饅頭が一つしかなくて、その一つをお前がパクついているか、だ」

「何だ。そんなこともわからないのかい、我がマスターは」

最後の一口になってしまったそれをお腹の中へ片付けて、腰に手を当て胸を張る。生憎まだまだ成長途中の我が身だが、何、あと数年もすれば立派な淑女になっているはずだ。

「全て私が平らげたからだ。実に美味だった」

「お気に召したようで何よりだ、おぜうさん」

「うん、とても感謝しているよ。このところあまり町に寄れなくてね、甘味に飢えていたところだったんだ。でも、頭を撫でるのは止してくれないかな？」

「これは失礼。あんまり笑顔が眩しかったものでね」

……私はよく、表情が読みにくいといわれるのだけれど。なんだろうね、このヒトから溢れるぬくもりは。ずっと傍に居たくなる。コウキとは違う意味だね。

「俺の分はああああ!？」

「「あるわけないだろうそんなもの」」

「酷え!」

大げさなりアクションでショックを受けてますと表現したマスターは、ふらふらとその場に膝と手をついた。ああ、これは後でご機嫌取りが必要なのかな？

「とまあ、コウキ弄りはこの辺にして、お嬢さんの質問を聞こうか」

「うん？ああ、そうだった……お兄さんは一体何者かな？」

「NPO『赤い月』所属の沢村鋭太郎だ。<sup>アウトリエ</sup>身内からは教授と呼ばれている。以後、よろしく」

「へえ、あの『絶対不可侵』がこんなに若い人だとはね……私はマナ・アルカナ。マナと呼んで欲しい」

「聞いたことのない二つ名がまた増えてるな。まあ、いいさ。年齢不明、住所不定、職業不詳。名前以外に自分を説明する術を持たない変な奴だ」

「それを自分でいうのもまた変な話だね。まあ、あなたの名前は有名だから、いいんじゃないかな？」

握手をしながら笑いあう私たち。

それにしても、彼の中に渦巻くこの異様な魔力の流れは一体なんだろう。コウキの対応を見ても、あの饅頭の味を考えても、悪いヒトとは思えないけど。まだまだ用心が

「そんなに警戒しないでくれないか。広く活動するにはどうしても体一つでは足りなくてね。増やしてるんだ」

おっと、気付かれてしまったかな。うゝん、もう少し悟らせない練習が必要だね。

けど今は、彼の好意に頼ってもう少し情報を貰おうかな。

「その、変わった力もかな？」

「わかる……いや、視える、か？あんまり頼ると吞まれるぞ？」

彼は、そう言っただけでまた私の頭を撫で始めた……

だから、その心地よすぎる子ども扱いは何とかしたほうがいいよ。

「吸血鬼の難題を解決せよ」

>> 鋭太郎の分身

枝葉を広げた広葉樹が多く広がる森の中、少し開けた場所。静かに陽光が差し込むその場所で、俺はキャンプしていた。実態は森林で樹木化した俺の枝葉でお嬢様方がのんびりしてるだけだがな。

「ん……えゝたろ……」

ただでさえ柔らかい幼い声に、まどろみが混ざって実に可愛い声を出している金髪幼女　ご存知エヴァンジェリン。……とりあえず、ただの寝言と断定。

接触直後はさよとの本契約の事で怒り心頭だったが、俺が分身である事をすぐに見抜くと本体までの道案内と従者の護衛などを命じた愛すべき妹。

この分だと、二人を抱いて子供まで作っている事が知れたら自制が効かなくなるほど怒るだろう。痴話喧嘩で消滅するなんて間抜けなオチは御免なので、ネタばらしとご機嫌取りは本体に任せる。死にはしないはずだ。多分、きっと。

俺の力ならハンモックを使わずとも丁度良く枝葉を組み上げる事が出来るので、合流してから昼間はずっとその上で寝ている。灰になるほどではないが、直射日光は気分の良いものじゃないらしい。俺としても昼間は養分を溜め込んでおきたいので都合がいい。偽装にもなるし、もし見つかったとしても襲撃者はエヴァンジェリンの人形で排除できるしな。

意識を巡らせると、エヴァンジェリンとその従者人形チャチャゼ口のほかに、もう二つ生命の気配を感じ取る事ができる。

俺と似た気配を持っている樹木系の亜人“ブリジット”と、左目が魔眼の人間種“エレナ”。

共通した事項として、エヴァンジェリンが拾った戦災孤児であることと、女子であること、そして頭身が低いことが挙げられる。チャチャゼロと同じくらいしかない。

元々は普通の人間と同等……中一と小二くらいの少女の大きさなのだが、魔法世界出身という部分に問題があった。

特一級の機密事項になっているそうだが、魔法世界というのはその名の通り、魔法で作られた巨大な箱庭なのだ。故に、空も海も大地も、そこで生きるモノも全て魔法でできた仮初の存在なのだ。

この二人も全員魔法世界生まれ。“完全な世界”風に言うならば質量を持った残ぞ……じゃない、幻影に過ぎない。“魔法世界を維持する魔法”の影響外である旧世界では自分を維持できず、“存在”が“魔法”に還元される……つまり消滅してしまうのだ。

これは魔法世界に存在するありとあらゆるものに共通する事柄で、魔法世界から旧世界へ物品を持ち込むことや純正魔法世界人の世界渡りが禁止されていること、アーティファクトが例え致命的に破損していてもリロードで初期状態に戻せることの要因でもある。

そうと知らずに幻術使って連れ出してしまったエヴァンジェリンは、生命の危機に陥った二人に対して封印術を決行。体を覆う結界というカタチで擬似的に“世界構築の魔法”を再現し、消滅を防いだらしい。

その際に維持結界の魔力供給源をエヴァンジェリンに設定したのだが、仮契約のラインでは供給の効率が悪く、急造の術式で組み上げが甘かったこともあって、結界を小さくしないと十分に維持できなかったそうだ。そのせいでこんなデフォルメボデイになっ

現在はエヴァンジェリンが魔法理論を研究・構築し、遠く日本の本体は魔法球も利用して新しい結界術用の魔石を生成している段階である。かなり孤独で退屈だからあの手段はあんまりやりたくないんだが、二人がこのままつてのもどうかと思うし……今更魔法世界に帰れと言つのも、なんだしな。

現状を考えるのはこのくらいにして、起きているらしい二人に意識を向けよう。

枝と蔦を編んで用意した“フロア”で時間を潰している。その上には葡萄棚みたいな構造の屋根があり、食用に適する果実や野菜がぶら下がっている。

時間の潰し方は、エレナの修行だ。後天的に構築したという魔眼というのは、慣らすのに時間が掛かるものだ。エレナの魔眼は火の精霊を取り込んで行使するタイプで、睨んだものを燃やしたり自身を精霊化することができるものだ。

今のエレナは対象の選定が甘かったり暴走させたりしてしまうので、そのコントロールを身につけるために俺の枝葉を燃している。防御魔法は枝葉にも行き渡るから、余計なものを燃やされる恐れも無い。最悪、炭になった枝は切り離せば良いだけの話だ。

筋はいいので、俺の本体と合流できる頃には充分なコントロールを身につけているだろう。何時になるかは不明だがな。

「んく……ふあわわわ」

エヴァンジェリンが起きたか。上体だけ起こして片手を天へ伸ばし、もう一方の手で目を擦っている姿は外見通りの幼女だな。言っていると怒るが。

「んむ……おい、分身」

「何かねエヴァンジェリン」

エヴァンジェリンが俺を呼びつけるが、お互い移動せずとも顔は会う。そう言う場所で寝ていたからな。

それにしても、目を離していた数百年の間に随分と言葉遣いが悪くなったものだ。まあ、悪の魔法使いも色々と大変だからな。寝言は昔のまま可愛らしいから、根っこまで歪んでしまったわけではないと信じたい。その辺の確認も本体に任せよう。下手に突付けば碌な事にならんだろうから。

エヴァンジェリンはゆっくりと居住まいを整え、俺に向き合った。

「例の相談だが、何か進展はあったか？」

「……」

相談、と切り出されて、俺は言葉に詰まった。それは、エヴァンジェリンが本体と接触するに当たり、彼女にかけられている600万ドルの賞金を何とかして解消できないか、という話である。

真祖の吸血鬼の賞金は、捕獲封印でのみ解消できる。不老不死だからだ。

だが、封印した上で本体とエヴァンジェリンが接触するのは困難だ。

もちろん封印を解除するのは簡単だが、そうすると今度は賞金稼ぎの代わりに連合の魔法使いが大挙して押し寄せてきて、撃退したらまた賞金首。終わり無き輪舞曲は御免被る。

俺が封印した事にしても、賞金をかけるのは連合だから、引き渡さねば面倒ことになるし。

この問題をクリアする為に、組み上げたプランが無いわけではな



い。まあ、あまり良い手ではないが。

必要なものは二つ。

言う事を聞かせられる連合傘下の魔法組織。

“エヴァンジェリンの自由を確保できる封印”を連合に納得させられるだけの名声を持つ『立派な魔法使い』

……正直に言うと、実はどちらも心当たりがある。

決定的な弱みを握っている魔法組織の長と、軽く誘導するだけで思い通りに動く、知能のない魔法馬鹿。

だが、この手段は非常に計算が狂いやすい。何より、あの馬鹿が変に気を回して余計な事でもしようものなら厄介だ。

「もし、到着間近までに新しい物が出来なかったら……お前が言っていた方法を取る。そのときには、二人を頼むぞ」

「ああ……おっと、情報統合の時間だ。ちょっと待て……ん？」

俺たち分身の情報をリアルタイムで共有していたら幾ら本体でもパンクする。だから分身の情報は何人分ずつかに分けて一日中少しずつ統合と整理を行っている。それが俺の番になったということだ。だが、この情報は……なんともはや。

「あゝ、なんだ。エヴァンジェリン」  
「ん？」

「お前の賞金を取り下げられた」  
「……は？」

「魔法世界で偉い人とお付き合いする」

>>また別の分身（反転）

「姫様ー！」

「姫様どこですかー！！」

ああ、なんか廊下が騒がしいな。戸棚を整理しながら喧騒を聞き流す。

どうせあのじゃじゃ馬が逃げだしたんだろう。

「もうじき二十歳になる女が何ガキみたいな事してんだか……三分の一だからまだ6つ半か？」

思わず声に出してしまったが、この部屋は俺に与えられた私室だ。気にするような事は無い。

俺こと分身221号の立場は、ヘラス帝国皇室の典医だ。勿論アウトリエに、と頼まれて来ている。

女性を診ることが多いので、あらかじめ性別反転を施した分身を派遣した本体であった。

……一番治すことが多いのが第三皇女に巻き込まれた侍女たちだ。というのは、一種の笑い話なのか？

薬品棚に鍵を掛けて、椅子に腰掛けてしおりの挟まった医学書を開く。

知的に優雅にお茶の時間だ。急病でもない限り、誰にも邪魔は……

「ヨーコおおー！！」

誰にも邪魔は……

「すぐに来るのじゃヨーコ！御主にしか出来ぬ話があるのじゃー！」

邪魔……は……

「無視するで、無いわぁー！！」

「やかましーっ！！」

いつの間にやら傍に出現していた褐色のチビの顔面を掴んで持ち上げる。

「うぎゃー！痛い痛い痛い、割ーれーのーじゃー！」

「割れる割れる割れる割れるっ！ティータイムを邪魔する阿呆は割れてしまえ！」（勿論冗談だ）

「みぎゃー！」

この小娘こそ帝国のじゃじゃ馬姫、第三皇女テオドラである。大戦中はアリカの和平工作の縁から『紅き翼』と一緒になつて『完全なる世界』の野望（英雄視点）打破を交渉・情報面で支えていたというが、どこまで本当だか。前線引っ掻き回すようなイメージしか持てん。

「うーぎゃー！」

跡を残さない匙加減で仕掛け続ける耐久アイアンクロー。それは、テオドラを着替えさせるべく探し回っていた侍女から事情を聞くまで延々と続いたのであった。

賓客用の応接室では、見覚えの在る大男と、独特すぎてコメントできない髪形の変な男と、よく知っている若々しい娘（年齢不詳）と、目つきの悪い眼鏡の青年がソファに座っていた。

「筋肉達磨とうちのセラスはわかるが、後の二人は誰だ？」

「うむ、それはの……」

「メガロの外交官、ジャン・リュック・リカードだ。ジャックとは飲み友達でな」

「同じくメガロメセンブリアのクルト・ゲーデルです。嘗て『紅き翼』に居ました」

「……俺は『赤い月』アウトリエの代理人、美剣陽子だ。悪いが早速本題に入ってくれ」

連合、か。こんな時分にどういふつもりだろうね。

視線が厳しいのに気付いているのか、リカードとゲーデルの表情は硬いな。ラカンが自然体だが、ひと睨みすると何時ぞやの仕打ちでも思い出したのか、突然身震いして顔を青くしたりしている。

そんな中、話を切り出したのは知己であるセラス。どういう知り合いかは……年齢と外見の噛み合なさから察して欲しい。大戦からこつち、殆ど年をとっていないように見えるあの姿からな。

「では、単刀直入に、まずは要請の内容を申し上げます。非公式ではありますが、MM、ヘラス帝国、アリアドネーの連名で『赤い月』代表アウトリエに旧世界は日本、『関東魔法協会』の監査を依頼します」

……何？

セラスが差し出してきた書類を受け取りながら、俺の思考はフリ

ーズした。すぐに再起動を果たし、書類に目を通しながら言われた事を吟味する。

書類は現状の関東魔法協会に関する公式非公式揃えた情報と、四年前に起きた宿讎復活騒動に関する関東側の報告書だった。

内容に関しては、本体が分身でかき集めた情報と変わらない。追加情報になりそうなのは精々近右衛門の交友関係くらいなものだ。メルディアナってのはイギリスの魔法学校だったか？

「アリアドネーもヘラス帝国も旧世界での出来事に大きく関与する意志はありませんが、これほどまでに大きな魔法災害を意図的に発生させる事は魔法世界全体を危機に陥れる行為であり、見過ごすわけにも行かなくなりました」

「しかも、実行犯は『関東魔法協会』へ送られた招待状を利用して領域侵入していた。これだけでも連合側の立場は非常に悪くなります。盗難被害などという程度の低い弁明では、反発も必至」

「メガロとしては傘下の組織を利用されたって事になってるが、実際にこの麻帆良ってのは独断専行が多くてな。かといって本腰入れて査察したら隠されちまう。そこで……」

「完全中立の『赤い月』団長に、極秘裏の調査と必要であれば阻止を依頼したいのじゃ」

一応、筋は通っている。アリアドネーも中立を掲げてはいるが、国際政治に一切関与しない訳ではない。その点、『赤い月』は完全に独立した個人と、そこに集う個人の集団でしかない。規律や規範はあっても、それは政治ではないし、その中でも俺は真つ当な国籍さえ持たない中立者だ。

あの小細工はMM元老院の仕業であることは確実だが、老害が一

枚岩ではないのを知っているし、この二人が実行した派閥と無関係という可能性もある。そちらのほうが大きいだろう。

こういうのはあまり深く考えても仕方がない。幾つかネックはあるが、さっさと済ませてティータイムに戻ろう。

「条件が二つ、質問が一つある」

「……どうぞ」

「条件1。アウトリエが見る限りで実際に問題であると判断した部分を調査してこの場の四者へ報告する。その方針や調査対象、また彼と彼の家族、そしてそこに準ずる者達への一切の手出し口出し無用」

これは大前提だ。そもそも中立が狂うし、俺の傍には突付かれると拙い存在も居る。

「条件2。『闇の福音』を同行させる。賞金を取り下げる」

「んなつ！」

「そもそもアレは能動的に人を襲わない。この監視はアウトリエが責任を持って行おう」

まあ、ダメで元々ではあるが、言うておくだけ言うておこう。うまく行けば儲けものだ。

「そして最後に、質問だ」

言葉を区切る。周囲の視線が集う中、俺は高々と掲げた右手の人差し指を振り下ろし、突きつけた。

「何の為にこの筋肉達磨連れてきたんだ？」

指差す先には、ソファに腰掛け腕を組んだ姿勢のままグース力軒をかいているジャック・ラカンの姿があつた。

分身の働きと転がり込んだ面倒事……（後書き）

分身の話は今後もちヨコチヨコ書こつと思います。



## 出立準備（前書き）

ようやく吸血鬼合流。

ココが空気ですが、麻帆良到着後は大活躍する予定ですのでお待ちください。

## 出立準備

> 詠春

「と、言う事なんだが」

「あはは、相変わらず大きな人やねえ。けど丁度ええわ。な、詠春はん」

「ええ。宿讎の件で一番過敏になっているのは恐らく我々ですし」

沢村殿が魔法世界から請け負った仕事について相談してきたとき、私たちは丁度同じことを頼むか頼むまいか相談していたところだった。

長たる妻の方針によつて表立つての敵対は見られないが、陰で不満を持っている者達は宵闇に紛れて麻帆良へ攻撃を加えている。

同様に東の魔法使いが総本山へ攻撃を加えて居り、捕獲された術師らを交換することで全面衝突は避けているが、何時その拮抗が崩れるかと思うと胃痛がする。

「麻帆良への入り方は、もう決まってはります？」

「まだだ。魔法世界の関与を伏せねばならんから、一般の教員として潜り込もうかと思っているが」

「それは難しいでしょう。東には今タカミチ君が居ます。彼ならば貴方が年を取らない事を知っていなくても、貴方との関与を疑る事は間違いない。それに、魔法完全無効化能力は誤魔化しようがないでしょう？」

予定を否定した私の言葉に、彼の眉が顰められる。恐らく、家族のことを考えているのだろう。

彼と一緒に居るアスナちゃんがアスナ姫である事は、魔法完全無効化能力を見れば明らかだ。ならば、アリカさんもアリカ女王である事は想像に難くない。

実際、関西に滞在し始めてすぐに確認を取りなすと、本人であるとあっさり認められた。ただ、決して口外しないと強制証文で誓約させられてしまったが。

「……縁が深くなければ認識阻害でどうにかできるんだがな」

「ええ、ですからここは、関西呪術協会の雇われ人として向かってもらいたいと思います」

「何？……そうか、木乃香を」

彼の片眉が跳ねる。私たちの娘、木乃香は生まれつき尋常ではない魔力を有していた。

それを無自覚に暴走させてしまったり、良からぬ事に利用しようとする輩から護る為、西の長とその護衛という地位に忙殺される私達の代わりに保護監督を請け負ってもらっているのが現状だった。

歴史、知識、実績、人柄、そして実力。これらを兼ね備えた彼を表立って非難する者は無い。誰もが彼に助けられた経験を持ち、能動的な干渉をしないそのスタイルは、正当に避難するのは困難だろう。

逆恨みならその限りではないが。

「うん、連れてってくれひんかな？」

「……親元から離すのはどうかと、思わないでもないんだが」

「うちらも自分で見れるならそうしたいんよ？けど、なあ？」

「木乃香をお任せできるのが沢村殿しかいらっしやいませなので……」

「何とか引き受けて頂けませんか」

「ふう、む」

考え込む素振りの沢村殿を前にして、私も重い心を奮わせる。

正直に言えば、娘を遠く麻帆良まで送り出すのは心配だし、不安だ。そして何より、不甲斐無い。だが西の長としてのお役目に手を抜くわけにも行かず、協会幹部の陰陽師に預ければ内部の派閥抗争が激化する恐れもあり、ましてやお義父さんを頼るうものなら内部が一丸となつて反発するに違いない。

彼は独自に分け身の術を修めているが、式の術から派生している以上式払いが無効というわけではない。委ねるならば本体でなくてはならない、というのは彼との共通見解でもある。

「事情はよく知っているつもりだし、客員として長の意向を無視するつもりも無い。あとは木乃香本人の意思次第だな。本人が抵抗して事態を悪化させるような事は流石に受け付けかねる」

「ええ。木乃香が嫌がることまでするつもりはありませんから」

「俺のほうも昨夜事情を話した上ですぐに来るか一時期残るかを相談させている。少なくともさよは七曜（しちよう）が学校に上がれる頃までは関（かん）西に残る事になるだろう。蛍の協力を取り付けたが、お前達もよろしく頼む」

「ええ、それは勿論です」

暗号名のような響きだが、七曜というのは彼の第二子の本名だ。鬼達と祝いの品を狩りに山へ入ったところ、見事な大熊を仕留められた所から取つたらしい。その由来は北斗七星、すなわち大熊座の別称だ。

魔力は少ないが、生後数週で首が据わるといふ驚きの成長率を見せているあたりに『蛙の子は蛙』だと思い知らされた。

その後、私たちは彼の事情とすり合わせつつ依頼したい事柄を纏め、契約書を作るに至った。

話が纏まり、いざ木乃香の説得に入ろうとしたその時。

「お母様ー!!」

ばたばたばた……スパァン!

「沢村のおっちゃん居なくなってまうって、ほんま!？」

当の本人が血相を変えて部屋に飛び込んできた。

ちらりと視線を向けた沢村殿の顔が実に複雑な苦笑だったのは、胸のうちに秘めておいた方が良かったろうか。

く少し時間が戻りく

>アスナ

昨夜、鋭太郎が関東の麻帆良という所へ行くと言い出した。どこから請け負った鋭太郎にしか出来ないお仕事だと言っていたけど、そんなものは魔法世界絡みしかないと思う。

生まれたばかりの七曜は力が安定するまでこっちに居ると思う。敵地とも言つべき関東で鋭太郎が七曜にかまける時間はそんなに無いはずだ。勿論、そうなれば七曜のお母さん、さよさんも残ると思う。

お姉様は鋭太郎の浮気防止についていくらしい。その割には随分と心が弾んでいたみたいけど。

わたしはどちらにしても小学校という所に入るように言われているけど、鋭太郎に相談しながらじゃないとガキの中で落ち着いているのが難しいと思うから、どうせなら鋭太郎の傍に居る事にする。

鋭太郎は一日考えてみてくれといったのだけれど、あまり悩まな

かったな。

そのせいでやることがないから、ぼくっつと庭で遊んでいる木乃香たちを見ている。今日は猫又と河童を相手に石蹴りをしている。一度蹴り過ぎて障子を壊し、ひどく怒られていたっけ。お仕置きは確か……お尻百叩きだったかな？あれ、それは鬼ごっこで行灯を倒したときだっけ？

お仕置きされる理由が多すぎてあんまり覚えてない。

そのうち飽きたのか、解散してこっちに走ってきた。妖怪たちは妖怪たちで仕事を抜け出してきたらしく、慌てて山に戻っていったけど。

「アスナ」

「はい、麦茶」

「おーきに、ありがとう」

元気すぎてついていけないせいでちょっと世話焼きしてたら、庭先で遊んだときは私のところに来てお茶を出させるのが三人の普通になってしまった。

ニコニコしてるこの子達は可愛いし、冷却魔法の練習にもなるから不満はないけど。

「あ、アスナさんはあの事決めましたか？」

「鋭太郎と一緒にする。そっちは？」

「む……小学生の間はこっちで修行を続けるつもりです」  
「……同じく」

これはビックリ。鋭太郎べったりだからくつついて行くと思った。まあ、刹那は真面目だし、折角習い始めた剣を放り出しては行けないのか？

咲夜のお師匠はさよさんの御腹が大きくなった頃から……誰だっけ。雨傘とかそんな名前の人に代わった。頭のいい人らしくて、簡単な式神の術くらいなら使えるようになったとか言ってた。

「ぷ」

「……あ」

「酷いわみんなあ。ウチに内緒で何の相談やの？行くとか残るとか何のことやー」

仲間外れにされた木乃香がむくれていた。刹那が口を滑らせたと焦っているけど、今更遅い。咲夜は相変わらず少し引いたところでくすくすと笑っているだけ。

私は溜息一つ。リスか何かみたいにまん丸になったほっぺを指先で押しつぶして、額を押し付けた。

「鋭太郎が仕事でここを離れるの。今度は結構長いみたい」

「ええっ！」

「七曜たちが残るからちよくちよく戻ってくるし、私も……って」

「行っちゃいましたよ」

「追跡、」

人の話を最後まで聞かない木乃香を追いかけて、私たちは走り出した。

履物を蹴飛ばし、滑りやすい板張りを駆け、角は手すりに足をついてでも曲がり、巫女さんを避け、一目散に駆け抜ける木乃香の背中を追う。方向から考えて、目的地は西の長の部屋？

気を使って追いかけているのに追いつけないのは、無自覚に身体強化をしているから？

追いついたときには、木乃香は既に長の部屋に飛び込んでいて、

その部屋には詠春と鋭太郎も居た。  
そして。

「ウチも行くー!!」

鶴の一声で、同行者一名追加が確定した。刹那が寂しそうにしていたのは、黙っていたよう。

> 鋭太郎

そんなこんなで大騒ぎした冬。各種手続き（小細工）を終え、出立の挨拶回りも済ませた。

総本山の前で菜乃香や詠春に別れを告げ、残留組を一人ずつ抱きしめていく。

先ず、戸籍の偽造に当たって漢字をあてた小夜<sup>さよ</sup>。アリカと相談していたそうだが、相坂姓のまま、内縁の妻の形でいいらしい。エンテオフュシアを名乗らせるわけにも行かないから、俺としてもありがた…… 勿論、それ相応の対価は払わされたが。

「三人を頼む」

「勿論です」

「七曜も、な」

まだ柔らかい七曜の額に自身の額をあわせ、健康であれ、と願いを込める。

そして三人目…… 物凄い剣幕でじゃんけんをする二人。どんな執念なのか、延々とあいこを繰り返していた。新幹線の時間があるのであまり待てず、二人まとめて抱きかかえる。



「しつかりな」

「は、はい……」

「……大丈夫。ちゃんと一人前になる」

気丈な返事をしながらも、抱き返してくる腕に籠る力は強い。力を緩めるまでじっと待っていると、ふと、懐かしい力を感じ取った。二人もそうなのか、俺の体を離して空を見つめる。

「最後のメンバーの到着だ……ちよつと離れな」

「うゝ……」

あいつの事を話したのも昨日のことだから、小夜やアリカの心象はまだ悪い。だが、あいつも根っからの悪ではないのだから、そのうち和解すると信じている。

一歩前に出て両手を広げ、魔力を開放する。襲来する巨大な魔力を中和するために。

「鬼さん此方、手の鳴る方へ……ってか」

吸血“鬼”だから……などくだらない事を考えていると、やがて空の彼方から黒と金で彩られた影が俺の胴体へ飛び込んできた。勿論、抱きつくなんて可愛らしいものじゃなく。

「おの、ばか　　！」

「っ！」

鳩尾めがけての、左ストレートだった。人外の魔力を充分に練りこまれたその拳が与える衝撃は俺の体を揺るがし、吸収しきれない

力が石畳に靴の跡を刻ませた。

途端に殺気立つ周囲を抑え、目の前で煌く金糸を見つめる。懐かしい。直に見るのは何百年ぶりか。

それが大きく揺れ、鋭い深紅の眼が合った。瞬間、全力で仰け反る。目と鼻の先、頭のあった場所を鋭く伸びた爪が引き裂いた。

仰け反った体が戻るのを待たず、バックステップで姿勢を整える。胴体があった場所を跳び回し蹴りが通過した。相手が背を見せる瞬間を狙って足の裏を突き出す。が、それは何か不可視のクッション染みたものに受け止められ、空間に固定された。

「っ？」

「もらっ！？」

そのまま振り返った相手を迎えたのは、固定された足をそのまま支えとして、もう一方の足を振るった蹴り。威力はさほど乗っていないが、油断でもしていたのか大きく怯み、隙が出来た。

足を固定している何かを振り払い、しっかりと着地する。追撃はせず、少し距離をとった。

金糸の持ち主は姿勢を整え、最後に一発、ボディヘストレートを打ち込んだ。加速の乗った初撃程ではないが、ノーダメージとは行かない。

「痛いぞ、エヴァンジェリン」

「当たり前だ。この、浮気者が」

ふるふると肩を震わせる、小さな体。伸ばされていた腕は段々と折れていき、やがて額が胸板に触れた。それを抱きかかえて迎え入れると、震えがゆっくりと大きくなっていく。

「お帰り、エヴァンジェリン」  
「……………ただいま」

震える小さな体が、ゆつくりと俺を抱きしめた。

背後に感じる鋭い視線は、今は無視させて欲しい。何故か六本も感じるんだが……………？

## 出立準備（後書き）

麻帆良行きを保留した四人についてですが、原作の刹那より少し早く、五年後くらいに合流します。

まあ、作中では次回次々回に登場しますので、何のために待ったの？と思われるでしょうが……今は流してください。

麻帆良よ、俺はまた来たぞ。

> 鋭太郎

新幹線の座席は窮屈だった。いや、体格的な意味合いも皆無ではないが、そういうことではない。

空白の数百年を埋めるかのように密着したがるエヴァンジェリンと、突然割り込まれたと主張するアリカの間で見えない火花が弾けまくっていたのだ。

原因が俺の秘密主義にあったことは認める。むやみに自分の情報が広がるのが何となく嫌で、近しいヒトにも重要な事柄を伏せているということも少なくない。

……初対面の人間がさも知己のように俺の名前を呼んだり、知らないところで自分に関する何かを触れ回られているのを知ると無性に不愉快な気分になるのだ。理解できるだろうか？

まあ、名前の方は有名になっている自覚があるから我慢はできるが、公私の線引きは重要だろう？

今後は報せるべき事柄も選定するからこの針の筈から助けくれと心中で叫んでいたのだが、どうやら思いは伝わらなかったようだ。

その結果が      電車を降りたときの俺の状態である。

エヴァンジェリンが前を、木乃香が背中を占拠し、アリカが右腕にしなだれかかり、左手はアスナに捕まっている。両手＋花といえは聞こえはいいが、特に存在感の強い約二名が火花を散らしていれば、余程の猛者でない限り言葉を選ばざるをえないだろう。新

幹線の中で慣れた二人はともかく。

事実、菜乃香と詠春が手配してくれた案内役の神鳴流剣士（確か新婚のはずだ）は挨拶を選ぶのに数秒フリーズしたからな。

60年前にはなかったが、現在の麻帆良には対高位存在用の封印結界が張り巡らされている。

効力が俺にまで及んだのは意外というか、それとも予想通りというべきか。

だが、魔力で強化する分はともかく地の筋力までは封印できないらしく、先天的に人外な俺の身体能力は全く落ちていない。蓄積の総量が限定されるだけだから魔石の製造も少し遅れる程度。非常時でもエーテル使えば何の問題もなさそうだ。

エヴァンジェリンは流石にそういう訳にも行かないが。その不便を武器に俺に張り付いているのだから、抜け目無いと言っかなんと言っか。

……解説という名の現実逃避終わり。色々流して歩くべし。

思わず飛行機に乗った記憶を探してしまいそうなほど異国情緒溢れる麻帆良の町並み。

世界を見たことではそれなりに自負のある俺でも、よくもここまですったものだと感じしてしまう。

その住宅街を抜け、2トントラックがようやく抜けられる程度の道を歩く事十数分、現れたのは二階建ての立派な洋館だった。人口密集地から僅かに離れ、広葉樹に囲まれる佇まいは貴族の別邸のよきな印象を受ける。

「これは凄いな」

「とある華族の魔法使いが工房にしていたのですが、畏や仕掛けが多すぎて没後に買い手がつかず、仕方なく保存だけされていた屋敷

だそうです」

神鳴流から説明を聞きながら間取り図を受け取る。自然と頬が緩んでいた。

「なるほど、俺向きだな」

早速サイコメトリーで探知を行って罾や監視装置を検出していく。魔法世界の迷宮だろうと完全解析する俺の能力。盗撮や盗聴の類は即刻魔法を送り込んで破壊し、元々建物に備わっている罾などは作動させないよう間取り図にマークと注意を記入。それが済んだらアリカに手渡す。

「エヴァンジェリンと相談して部屋割りを決めておいてくれ。木乃香とアスナは俺と学園長室だ」

二人の目がきらりと光ったので、喧嘩しないように釘を刺してから預かり娘と義妹を連れ出した。

~~~~~

居住区画から電車で二駅。この一文だけで麻帆良がどれほど大きな都市なのがわかるな。

学園の校舎を物珍しそうに見回しながらはしゃぐ木乃香たちに相槌を打ちながら学園内部を歩く俺だったが、周囲の風景の変化から学園都市の地図を思い出し、ふと足を止めた。

「葛葉の。訊ねていいか」

「は、はい！何なりと！」

「いや、そんな畏まれるほどの事ではないんだが」

まるでバネ仕掛けのように背筋を伸ばして応答する案内役を見て、思わず苦笑してしまう。

葛葉というのは旧姓なのだが、旦那の姓など聞いたことがないし、“葛葉の娘”であることは変化無いのでこれで通してしまうことにする。下の名前も知っているが、呼んだら怒気を浴びる事は想像に難くないし。

面識の切っ掛けはご多分にもれず、稽古でよく傷を作って来たことだ。何故か打撲よりも膝とか肘とか掌とかの擦り傷が多かったのは、彼女の名誉の為に秘密にしておく。

さて、俺は質問をするべく前方に見える校舎を指さした。

「確か、学園長室へ案内されているはずなんだが……何故、俺達は女子校区画に向かっているんだ？」

「あ……ああ、そのことですか」

そうあからさまにホツとされると、何を聞かれると思っていたのか、少し気になるな。プライベートなことで、何か言われたくない事でもあるんだろうか。

「学園長室は女子中学部の校舎にあるんです」

そして返ってきた答えに、俺は何と返せばいいか困ってしまった。いや、この先の区画に学園長室があるのだろうというのは話の流れ的に当然だと思っただ。

だが、何故に中学？

確かに女子校区画の一番手前だが、区画全体がこんなに奥のところにあるのに、そんな事気にする意味があるのか？

そんな俺の思案を読み取られたのか、葛葉の娘はきまりが悪そうに言葉を重ねるのだが。

「学園長室そのものは各校舎に用意されているのですが、私が赴任してから他の部屋が使われたという話はまだ聞いていません」

「まさか……近右衛門の趣味か？」

「ええっ！うちのおじいちゃんロリコンやったん！？」

「そ、そう言う噂は聞きませんが……」

憶測でしかないが、思わず口に出してしまった。木乃香がショックを受けている。

目当てが生徒とは限らないからロリコンかどうかは保留しておくにしても、そんな理由だとしたらかなりの問題だと思うぞ。

それとも女子中等部に常駐しなければならない特別な理由でもあるんだろうか。無いならもっと中央寄りの管理棟（学園全体の事務棟）に居ろよ、と思う。

考えていても仕方のないことだから、諦めて歩くけどな。

女子中等部の校舎を進む事暫く。ようやくたどり着いた学園長室で。

「学園長、西からの方をお連れ致しました」

「……うむ、入ってくれ」

俺は、何時ぞやの啓示の通りに、ぬらりひょんと遭遇した。

> T・T・T

麻帆良学園学園長室。同時に、関東魔法協会理事長室でもある。

今は、後者だ。

学園長の執務机。その上に広げられた書類を挟んで僕と学園長は俯いていた。

その書類は数日前に関西呪術協会から届いたもの。

内容を簡潔に纏めると、大体三つの事柄が書かれている。

一、西の長の実子であり学園長のお孫さんでもある近衛木乃香という少女を、魔法のトラブルから保護する為、麻帆良に入学させる。

二、近衛木乃香は“魔法”に関与させない。

三、近衛木乃香の保護者として、関西呪術協会が雇った魔法関係者を派遣する。

四、その魔法関係者に以前関西で発生した鬼神復活事件に関する調査を依頼した。

五、第二項、第四項の遂行に必要な限り、派遣した魔法関係者に便宜を図れ。

一方的な通達と要求だが、僕達は待ったをかける事さえ許されなかった。

なぜなら、近衛木乃香ともう一人、件の魔法関係者の連れだという少女が、一般向けの願書を使って正式に麻帆良学園初等部の入学試験を受け、優秀な成績で合格したから。

真つ当な試験で優秀な成績を収め、面接でも多くの先生方に人格を評価された二人の入学を阻止することなど出来ようはずがなく、その保護者が学園都市の一角に居を構える事に異を唱える事も不可能だ。

二つ目の項目についても、正当な保護者の教育方針であるし、大戦の頃ならばともかく表面的には平和を保っている現在において、まだ5歳6歳の少女を修羅の巷に巻き込むのは魔法使いとしても避けるべきことだ。

……最近の魔法使いは“魔法のすばらしさ”を説いてばかりで危険性を無視する傾向があるから、特に僕が注意する必要があるかもしれない。

このほかにも、東西のパワーバランスや、鬼神復活事件に関する負い目などが関東魔法協会の動きを制限している。本国の万全な支援無しに関西とやりあうなど、今の麻帆良に出来ようはずがない。

そして今日、その魔法関係者がここへ来る。いや、廊下を歩いてくる強い気配は、既にその人物がここにたどり着いた事を意味しているだろう。

そして響く、ノックの音。それを聞いて、僕は学園長の正面を空けた。

「学園長。西からの方をお連れ致しました」

「……うむ、入ってくれ」

扉が開き、刀子先生が入室される。……とある理由から、苗字を呼ぶ事は避けられている。

そして彼女に続いた人物の姿を見て、刺す様な気配を受けて、僕

は思わず声を上げてしまった。

「えっ？」

「む？」

同じように学園長も反応してしまったようだが、その人物は触れずに学園長の前に立った。

そして、彼の後ろから二人の少女が入室し、正面に回りこむ。だが、少女達は学園長の頭を見るなり信じられないものを見たような顔で保護者の背後に隠れてしまった。

間違いなく、学園長を宇宙人だの妖怪だのと言わしめる後頭部が原因だろう。悪目立ちするせいで面接に参加してもらっていないからね。小さな子供にこの後頭部を前にして平常心を保てというのは、たとえ学園結界の効力があつたとしても厳しい話だよ。

そして二人を宥めるように頭を撫でる彼は、明らかに学園長が受けたショックを無視している。

「近衛木乃香、沢村明日菜。両名の保護者、沢村鋭太郎です……ほら、挨拶」

「こ、近衛木乃香や」

「沢村明日菜」

「うむ……よく参られた。この近衛近右衛門、君達を歓迎しよう」

学園長が挨拶に比べると、黒髪の少女、木乃香ちゃんは再びうつたえ、保護者に縋った。

だが、その保護者ももう一人の少女もフォローしきれないといった風に困り顔だ。

「（や、やっぱりアレがおじいちゃんなん！？）」

「（木乃香って、妖怪の孫だったの？）」

「（近衛家の連中は『人間だったはず』だと言っていたが）」
「（『だったはず』で！）」

一応声は潜めているが、丸々聞こえている。ただ、内容は僕も刀子先生も苦笑するしか出来ない。

何せ、僕達自身も初対面の時には似たような事を考えてしまったのだから。

「みんな、ヒドい……ワシ、泣いちゃう」
『気色悪い』

泣き崩れる演技をする学園長に、声の揃った批評が襲い掛かった。僕は参加してないよ？……ホントダヨ？

学園長が大きく咳払いし、場を仕切りなおした。学園長としての顔で、二人の少女に向き合う。

「まあ、誤解は追々解いていくとして……二人とも、優秀な成績で入学を果たしたその才覚、期待しておるよ。来年から、皆と仲良くの？」

「わかったえ」
「はい」

はつきりとした返事を返す二人の少女に満足げに頷いた学園長は、残った一人に視線を振った。

視線が集う長身の男性は、両手を少女達に確保されながらも気配を衰えさせてはいない。本物の、強者。

「そちらの沢村君は先生をしてくれるのじゃったな」

「ええ。よろしく願います」

「うむ。担当などの話を詰めておきたいのじゃが」

学園長が促す前に、オレンジの髪、あの姫様を髣髴とさせる明日菜ちゃんが彼の袖を引いた。

話の流れを察したように彼と木乃香ちゃんに何事か囁き、刀子先生に声を掛けて一緒に学園長室を出て行く。

「失礼しました」

「ご案内してきます」

退出する三人を見送った後、誰よりも早く僕が口を開いていた。

「お久しぶりです、よね？」

「12年……変わる訳だな、あの子供三号が」

「タカミチですよ」

「覚えているし、詠春からも聞いている。挨拶代わりだ……そつちは50年くらいか？近衛近右衛門」

「……………」

「と言っても、一瞬だったからな。覚えていないか」

「……ナンダッテ？」

些事ですらないかのように続けられた言葉に、僕の思考が停止する。

彼は口の端を吊り上げて晒っている。それに対する学園長は、硬い表情で彼を見つめていた。

自然、彼への警戒心が首を擡げ、さっきの明日菜ちゃんの顔が遠い記憶の少女と被る。そうだ、どうして気付かなかったんだろう。彼女は

けれど、それを訊ねようとした瞬間鋭い眼光が僕を突き刺した。

瞬間、自分の首が空を飛ぶイメージが精神を埋め尽くし、僕の喉は発声を拒否した。

そして押し黙っていた学園長も、続く言葉に顔を上げて叫んでしまふ。

「さて、労働契約の話だが。先に言うと、木乃香護衛の邪魔になるから一般の仕事以外を請け負う気はない」

「そ、それは困るぞい！魔法先生の手も足りんし、木乃香の魔力に引き寄せられるものが居るかも知れん！君は一般の生徒を危険に晒すつもりか！？」

「狙われる理由なら他にも山ほどあるだろう。俺は“木乃香”を守るのであって“木乃香が居る麻帆良”を守るわけじゃない。無論、目の前に敵が居るならば排除はするが……木乃香を放置して他に感、急場に対応できなくなる等もつての他」

食い下がる学園長を一刀、切り捨てる。言い分としては正しいだろう。

けれど、麻帆良に所属する魔法先生達の質が右肩下がりのもの、残念ながら事実。麻帆良全域をカバーできるほどの人数も居ないから、警備の穴になる部分も少なくない。

麻帆良の事情と彼の力を知っている僕としては、どうしてもその力を借りたいと思ってしまう。

「どうしても、ダメですか」

「戦力低下はお前達“魔法使い”の不始末だ。一般人の安否を論ずるなら、今すぐ貴様らがこの地を離れればいい。麻帆良は貴重な霊地だが、維持さえ出来ない霊地に縋りついたところで克己向上など出来ようはずがない」

「……」

「……………」

返す言葉が、ない。重い沈黙に支配される僕ら二人を、彼は暫く黙って見ていた。

そして踵を返し、扉へ向って歩き出す。

「此方の都合としては、木乃香の担任がベストだ。だが、そちらにも都合があるう……新任教師として妥当な仕事であれば請け負うからそのつもりで」

僕らは何も言えないままその背中を見送る。彼は扉にてを掛け、開き

「ただ、俺の本職を頼ると言っなら　それを断るつもりは無い」

そう言って、扉を閉めた。

僕は学園長と目を合わせ……一筋だけ見えた光明に、知らず手を握り合っていた。

麻帆良よ、俺はまた来たぞ。（後書き）

鋭太郎の麻帆良ポジションは……担任兼養護教諭（副）、かな？

ええ、現実的に無理があるのは承知ですよ。でも、麻帆良だし。

ふっいんされしもの、ともだち

> 鋭太郎

麻帆良学園 初等部養護教諭。

それが近右衛門が俺に寄越した役職の名前であった。残念ながらいきなり担任は無理があったようだが、校舎には詰められるので妥協しておこうか。

勿論、木乃香たちの進学に伴って俺も中等部行きになる。流石に女子中に男性の養護教諭はどうなのかと思うが……その辺はまだわからない。

エヴァの従者、ブリジット&エレナの世界結界も再構築が行われて元通りの大きさに活動できるようになり、現在は魔力運用の効率化や対探知措置の安定化、最終的には二人をこちら側に完全に順応させる魔法にたどり着くべく鋭意研究中だ。エヴァンジェリンが。勿論俺も手を貸すつもりだったのだが、「ヤダ！わたしがやる！」と600年前のような語調でばっさり断られた。なぜ？

近右衛門から魔法先生との顔合わせに集会を開くといわれたが、断った上で俺の存在を宣伝しないように釘を刺しておいた。怪我が酷いときに呼べば良いだけの事だと言って。

吠えて縋るが、即死レベルのダメージを貰うのは力量不足だからで、それは教育を怠った魔法協会の失態だ。医者おれの管轄でもなし、態々敵愾心を煽るような真似、誰がするか。

その他の手続きや業務に問題はなく、俺の、俺たちの麻帆良生活は始まった。

木乃香とブリジットに家事を教えたり、明日菜とエレナが戦闘訓練を受けたと言い出したり、明日菜がクラスの委員長と喧嘩して保健室に運び込まれたり、エヴァとアリカが携帯相手に四苦八苦したり。

……ココをかまい忘れていじけさせてしまったり。

そんなある日のこと。木乃香が他の皆を引き連れて俺のところにやってきた。

珍しい全員集合に最初は何事かと身構えてしまったが、木乃香は菜乃香そっくりのぼわぼわした空気を発しながら、こういった。

「地下室行ってみたいねん」

「……あー」

地下室。どういう目的かは知らないが、この洋館の地下は二階層あり、地下一階は食料などを溜め込む倉庫になっている。そして地下二階は罾が張り巡らされた通路と、広めの2部屋。

何の為の罾かもわからないので破壊や解除はしておらず、また罾を見切れるのが俺だけなので、皆にはB2への立ち入りを禁じていた。

しかし俺も平日は仕事、休日は家族サービスでそれなりに忙しく、時間をとってその奥を調べに行く事が出来ていなかった。

これもいい機会かもしれない。そう思った俺は、罾を回避しながら地下を調査しに行く事に決めるのだった。

まあ、別に不思議のダンジョンがあるとかそう言うことではないので、唯一“命に関わる危機”を知らない木乃香さえしっかり抑えておけば罾に引かかる事も無く、目的の部屋に辿り着く。

いい子だから言って聞かせれば素直に従うが、自分の興奮を抑えるにはどうしても実感を伴った危機管理が必要だ。

サイコメトリーでその先に罾がないことを確認したら、ゆっくり扉を開く。木造の扉が大きな音を立て、不気味さを演出していた。

『私、わくわくしてます』と顔に書いてある木乃香を宥めながら部屋に入ると、物質を保存する魔法が込められた魔法陣が時を刻んで待っていた。

そこにあつたのは背の高い書架と紙片の散乱した机、そして無数の実験器具。

木乃香たちは当てが外れたような顔をするが、エヴァンジェリンとアリカは興味深そうに散乱している紙片を拾い集める。

「ほう……封印術の研究者だったのか。学園結界の原型にも触れていたようだな」

「うむ。此方の書架も研究日誌と資料が7：2じゃ。熱心な人物だったに違いない」

「む。おもしろい！エヴァちゃん、もっと奥行ってみいひん？」

「エヴァちゃん言うな！……仕方ない、後で改めて調べるとしよう。少し待て」

木乃香にせつつかれて紙片を読むことから纏める事に切り替えるエヴァンジェリン。

エヴァちゃんは駄目なのか。俺には隠れてキティ呼ばわりさせてるくせに。

「鋭太郎よ、今何か変なことを考えなかったか？」

「いや、何も？」

アリカさん、何故そんな目を向けるのですか？ブリジットもこっち向いてるし。口に出してないよな、俺。

「そうか。いや、何か妙な気配を感じたのじゃ」
「ええ、私も」

……さいですか。

ともあれ、整頓を終えた部屋を出て隣の部屋へ。そこで俺は、信じられないものを見た。

先の研究室と同じ、保存の魔法陣が敷き詰められた部屋には、たった一つ、姿見だけが置いてあった。

俺たちの姿が映らない鏡だけが。

「きゅいつ！？きゅ、きゅ、きゅー！」

「わっ！？ちよつと、ココ！」

「けほ、けほっ」

鏡写しのその姿を見たココが大慌てで姿見に駆け寄り、翼で積もった埃を払う。

もうもうと舞い上がる埃に各所から苦情が殺到するが、ココにはそれを気にする余裕すらないようだった。俺にもそれをフォローする余裕はない。

ココ同様に丸みを帯びた白い三頭身ボディ。

二足歩行が前提なのであろう、あまりにも短い手足。

飛行の為にしては短すぎる皮膜の翼。

デフォルメした猫のような頭。

そして頭頂部から提灯のように飛び出した、紅い球体。

そう言う外見の生き物が、繰り糸の切れた操り人形のように腰を降ろして頂垂れていた。

ココが必死に語りかけているが、どうやら音声は伝わっていない

らしく、無反応。

「なんだろう……こいつ」

「かわええなあ。でも、何で鏡なのにうちらが写らへんのかな」

「それを言うなら、写ってる場所にこんな生き物居ないわ」

「えと、何が起きてるんですか？」

「あ、あんな」

鏡について相談を始める明日菜と木乃香、そしてエレナ。

ブリジットは光を失っているためにこの光の仕掛けが認識できず、混乱中。木乃香に説明を求めている。

「鏡の封印術か……まるで御伽噺じゃな」

「古い手法を。鋭太郎、どう見る？」

「概念が古くても術には改良が加えられてる。デスペル掛けて中身諸共消去するのも後味悪いし、さっきの部屋で理論を探したほうが手っ取り早いな……アリカ、ちょっと監督頼む」

「……報酬は、こ、今夜請求するからな、忘れるでないぞ」

耳まで真っ赤なアリカの頭を撫でて、廊下に戻る俺。なにやら背後でエヴァンジェリンが威嚇するようにうなり声を上げたあと此方についてきた。

二つの部屋以外には何も無いことを確認済みなので、罨を解除する。中ものを出さない為の罨ではない事さえわかれば、後は邪魔なだけだからな。

研究室を家捜しして鏡の封印術を研究していた資料を発掘、きちんと解除方法まで掲載されていたのでそれを持ってモーグリ封印の間に戻る。

どうやら此方に気付いたらしいモーグリが、鏡の内側からこちら

側を叩いていた。

「あ、鋭太郎！この子出せないの！？」

「今から出すよ。ココ、ちよいと離れる」

「きゅ」

大丈夫だ、すぐに出せるから。そう言って子供達とココの頭を撫でて、エヴァと俺と姿見で正三角を描くように立つ。

「対魔法探知は充分だろうな？」

「ああ、大丈夫だ。もし何かあれば、俺が麻帆良を叩き潰す」

「頼もしい限りだな、お兄様」

そして数分間、二人で呪文を朗々と唱え上げた。長い呪文を唱え終わったとき、鏡の世界が白で埋め尽くされ、そこから押し出されるように、モーグリが転がり落ちた。いや、鏡に映っていたときは随分大きく見えていたようだが、どうやらコモーグリだったらしい。

「うっ……酷い目にあったクポ」

「喋った？」

封印解除の余波でも食らったのか、ふらふらしながら立ち上がった。此方をまっすぐ見据えると、そのコモーグリは深々と頭を下げた。

「助けてくれてありがとうクポ。ぼくはモリスン。変な魔法使いに捕まって鏡の世界に閉じ込められていたクポ。このご恩は必ずお返ししますクポ」

「気にするな。俺は鋭太郎だ」

「エヴァンジェリンだ」

「覚えました」

高さが合わないので膝を付いてそのモリスンというコモーグリと握手すると、エヴァンジェリンもそれに倣う。

「しゃ、しゃべった？」

「しかも意外と立派な名前？」

「はわわ……」

背後では娘達が困惑している。それをおいて前に出たのは、やはりココだった。

チヨコボの姿を見たモリスンが仰天したように駆け寄った。

「盟友チヨコボ！君もこの世界に飛ばされたクポ？」

「くえー？」

「え？違う？じゃあどうやったクポ？」

（こくふるふる）

「秘密？それなら仕方ないクポね」

（こくこくふるこく、？）

「ぼくクポ？ぼくはアトモスに飲まれて気が付いたらここに居たクポ。世界の違いはモグネットで確認したクポ」

周囲そっちのけでココとの会話に熱中したモリスンは、自らの肩掛け鞄から小さな体に見合った小さなノートパソコンっぽい端末を取り出した。恐らくそれがモグネットの端末なのだろう。

端末の画面に“モグチャット”とか表示されているあたり、どうやら世界の壁さえ越えるらしいな、モグネット。どうなってんだ、この幻獣どもは。

「なんや面白そうやね？」

「どれどれ……」

「あつ、覗いちゃ駄目クポー！」

木乃香やエヴァンジェリンが興味を示し、賑やかになったモリスンの周りから少し離れた場所に立っていると、ブリジットがよってきた。

「……あの、結局なんだったのでしょうか」

「ん？家族が一人増えただけさ」

勤めて爽やかにそう答えると、ブリジットはそうですか、と応えて少し微笑んだ。

しかしアトモスねえ。小夜のアーティファクトならともかく、針を飛ばすサボテンとか包丁とカンテラもったあいつとか紛れ込んでいなけりゃいいが……

く少しずつ時は流れく

>咲夜

京の夜は騒がしい。霊地を求めて暗躍する術者や妖怪との人知れぬ戦いがあるから。

今もそう。

「つく……此処もかつ！」

「つーこーどめ」

「ガキがあー！」

路地から飛び出してきた影に小刀を投げる。弾かれたけど。

出てきたのは……中年の男性。魔力の宿りやすい宝石をターゲットにした泥棒の一味。

そして、領域を侵した西洋魔術師。悪態をつきながら杖を構えている。飛んでくるのは光の矢。

「たて」

「なっ！」

けれどもそれは、左手で突きつけた御札から生じる魔力の壁に阻まれる。

私がお師匠様から学んだ術は、式の展開を極端に省略して“はやさ”を極めた術。始動キーも呼びかけも無く、ただ起こしたい現象を口にして、少しの動きをするだけ。

かかさま譲りの特性を持つ私の魔力に、この術はとても相性がよかった。

魔法である限りは、ととさまの攻撃でさえ完全に防御できるのだから。

「……“とべ”」

「う、うおお！」

更に数枚の紙を投げる。あらかじめ鳥の形に切り抜かれていたそれは突然命あるかのように軌道を変えて男に襲い掛かり、四肢の機能を破壊した。

おまけに杖を砕いて、泣き喚く男の口を沈黙のお札で塞ぐ。これでおしまい。

一仕事終えて油断したのかもしれない。上空から迫る魔法に気付

いたとき、私はそれを防げない体勢だった。

ああ、やつちゃったな、と思った瞬間、誰かに跳びかかられて姿勢を崩し、倒れる。犯人は獣化した狗族の少年だった。ハーフだからか、獣化しても人間の特徴が残ってる。

犬上小太郎。修行が実戦訓練に入ってから知り合った子。狗神使いで格闘少年。歳は弟の七曜と一緒に。でも七曜の方が体が大きくて力が強い。その代わりコタは速い。

出合った時はそこそだった実力も、七曜に意地張って鍛えている間に大分伸びた。

「咲夜姉ちゃん！無事か！？」

「コタ？」

「怪我、ないか？」

「……ん、大丈夫。それより敵は？」

私の返事を聞いたコタはホッとしたように息を吐いて、さっきの魔法が飛んできた方を見る。

私もその視線を追ってみるけど、もう何も居なかった。

「敵は七曜と月詠が潰した。俺が行きたかってんけど、姉ちゃんやばそうやったし。役割分担ゆー奴やな」

質問に答えたコタはニカツと笑ってみせた。何となく可愛くて、その頭を撫でてみる。獣化すると長くなるボサボサの髪は、それ相応の手触りだった。

これならこっちの三角

「ん……耳はやめてや。くすぐりたいゆーてるやろ」

釘刺された。くすん。

いじけた振りでコタをからかいながら待っていると、黒装束の少年とロリ服の少女が歩いてきた。

少年は大の大人を一人担いでいて、少女のほうも小太刀とはいえ体格的にはかなり重いだろう代物を二本、腰に差している。

私が倒した男に叩きつけるように担いでいた大人（男性だった）を降ろした少年は、私とコタをまっすぐ見る。

「怪我は」

「大丈夫や」

「そうか」

腹違いの弟、七曜。とっても力持ち。体術のほかに螢さんの弓術を習っていて、強弓の使い手。気の風変わりな扱いなら私達の誰よりうまい。ととさまの影響で心が妙に成熟してるのか、口数が少なすぎるのが姉として心配。

その七曜の隣でニコニコしているのは、神鳴流剣士の月詠。師範にも勝つ本物の天才。神鳴流剣士じゃ修行の相手も務まらなくて、最近 は鞍馬さんの部下に手伝ってもらってるみたい。

時々七曜を見る目が怪しい。

「最後の最後でしくじった……ごめん」

「ええねん、そんな事。無事やったんやし」

「ん」

「今生の別れ言うわけでもなし、ええやないですか」

そう、これで最後の実戦訓練。来週から七曜が小学生だから、明日にはととさまの居る麻帆良へ。

危ないところを一緒に潜り抜けた二人とハイタッチして別れを告

げ、七曜と総本山への帰路につく。

「咲夜姉ちゃん！その……俺、もっと強くなる！もっと格好ええ男になるで！」

「うん、楽しみにしてる。小太郎」

「七曜ちゃん、またな」

「元気で」

私たちは何度か振り返ったけど、コタと月詠はずっとその場で手を振っていた。

ふっいんされしもの、ともだち（後書き）

投稿初期に頂いたアイデアを投入。ワームホールを潜り抜けたら異世界でした。ということでサポーター！

ちなみにこの名前、某御伽噺シリーズ第一作、“幻想”の雷魔法で有名ですが、モーグリの名前としても実在します。

いいんちょショタコンフラグ折るか否か、悩んでいます。治した事にするのは簡単なんですけどね。

京都サイドは例のフラグ成長中。最早引き返せませんな。

合流（前書き）

更新がどんどん遅くなっております……申し訳ない。

私事が立て込み、PCと向かい合える時間が大幅に減っていることと、あの薬味小僧をどう使おうか悩んでいる故にこうなっています。

合流

> 鋭太郎

俺が麻帆良に着て五年を数えた、ある冬の日。

「ととさまー!!」

「ちちうえー!」

人も疎らな麻帆良居住区の駅で、俺は二本のロケットを迎え撃った。

全長およそ120センチ、黒い弾頭のそれはまっすぐに俺へ突撃し、脇腹を捉える。

無論、その正体は俺の可愛い娘達であるからして、撃墜するなど不可能だ。

しかし、何故に刹那はファザコン武者娘になってしまったのだろうか?……多分暁と螢のせいだ。

「待っていたぞ、咲夜、刹那」

若干痛いのだが父の威厳を以って耐え、苦笑しながら張り付いた二人の少女を左右それぞれ腕で抱き上げて、その後から歩いてくる和装の女と彼女に手を引かれる、二人よりもっと小さな男児に目を向ける。

少年は俺の傍まで歩いてくると母の手を離し、俺をじっと見上げてきた。頭的位置を俺と同じくらいまで持ち上げられている二人の姉を羨む様に。

「来い、七曜」

「はい」

変化は僅かなので見慣れないと区別できないが、息子は嬉しそうに笑みを浮かべてアスファルトを蹴った。

とん、と軽やかな音を立ててムーンスルトした七曜は、俺の頭頂部に手を当てて支点にし、肩に両足の腿を乗せた。つまり肩車だ。

俺の身体的な性質を色濃く受け継いだ七曜は、こういうアクロバットも得意なようだ。

右に咲夜、左に刹那、頭の上に七曜……人間キングギドラ状態になった俺を見て、和装の女 小夜は楽しそうに笑っていた。

別にこの状態になるのは初めてではない。頭数が揃っているときはいつもこうだ。

「お待たせしました、鋭太郎様」

「言うほど待つてはいないさ」

ほんの少しの背伸び、では足りないのでジャンプして唇を合わせてくる小夜に微笑みかける。

そして隣に控えていたココ（AF起動）が「また待ちぼうけかー？」と言わんばかりに鳴いた。

「ココ、ココ」

「くえっ？」

俺の肩の辺りから相棒を呼ぶ声がして、それを見上げたココに。

「とおー」

「きゅ!?!」

咲夜が、飛び乗った。もふつと羽毛に飛び込んだ長女は、衝撃でバランスを崩して暴れるココの上で器用に姿勢を整え、無事ライディングに成功。

「くえー！」

「くふ……勝った」

何しやがると抗議するココの上でVサイン。何に？というツッコミは無粋だ。

まあ、ココのほうもアーティファクトのおかげで負担は殆どないし、脅かされたと怒っているだけだから放っておいてもいいだろう。ああ、わかってる、ちゃんと後でブラシ掛けてやるから。だから脇腹に頭突きをかますな。

京都残留組を駅まで迎えに来たのは俺とココのみ。ココは認識障害の効果を発揮する足輪型マジックアイテムを装備している。

世界樹を異様と思わせない程度の認識障害が張り巡らされているとはいえ、俺が知る限り世界に一羽しか居ないチョコボを何の対策もなしに出歩かせる訳には行かないからな。

「そろそろ行くか。アリカ達が待ってる」

「はい」

「こゝ」

その場で180度回転。遠心力で振り落とされないようにと刹那がしっかりとしがみ付くのを感じながら、歩き出す。

すぐに咲夜にせっつかれたココがダッシュして行き、小夜は左後ろ三步の位置をニコニコしながらついてくる。

懐かしい感覚だ。心がとても穏やかになる。ココの上から手を振

る咲夜を追うべく飛び出した七曜と、突然の疎外感に慌てて追従した刹那を目で追いながら、俺は家族を守る誓いを新たにした。

>エヴァンジェリン

鋭太郎が連れていた子供達を見ると、少しだけ、心に棘が刺さる。既に居るものはどうしようもないと理解しているし、アリカとは一先ずの決着も見えた。

だが、それでも……出来ない相談だとわかっていても、だ。

誰かに当たっても仕方がないので、この苦悩を一番理解してなさそうな男の正面に陣取り、背中を預けた。

鋭太郎は何も言わない。いつもそうだ。ただ黙ったまま、ほんの少し気配に笑みを滲ませるだけ。全く、好意の質に気付いているのかいないのか。

だが、まあ。安心する。それは認めようじゃないか。

「しかし、鋭太郎。お前の子は随分と能力が偏るのだな」

「ああ、生まれてすぐの診断でそう思った。だが、俺はそれでいいと思う」

「……そうだな。あの娘達は確かに暖かそうだ」

楽しそうな子供達の背中に、とうの昔に振り払った悲しさが帰って来たようだ。

私も鋭太郎も、純粋な戦闘や生存ならばどれほど苛酷な環境で孤立無援になろうと問題ない。それだけの強さは持ち合わせている。

故に、待っているのは羨望と嫉妬に始まる悪意と偽善と迫害だ。孤独に耐えうる力は、その持ち主が望む望まざるに関わらず、人

を孤独に導く。

鋭太郎は力を振るう方法を救命に向けることで表立っての迫害を退けたが、『まほーのくに』では相変わらず悪役扱いされている。事実無根の政治宣伝のせいで、この地にも鋭太郎を快く思っていない魔法使いが大勢いるだろう。

まあ、吸血鬼である私を匿ったりしているから、そのほかにも敵対する要素は充分にあるが。

鋭太郎が私たちを守っている。鋭太郎は我が身を十全に守れる。たった一人で完結する鋼の城塞。なんとも理不尽な奴だ。

だが守られているものも守られているなりに鋭太郎を支えようとしている。私たちがいる限り、絶対に鋭太郎の心は折らせない。何が相手だろうと、だ。

さて、そのためにも。

「そこを退け、吸血鬼」

「どっちか詰めて　おばさま」

その、為、にも……

「ふ、ふはははは！？言ってくれるじゃないか小娘ども！この『闇の福音』、確保したモノを易々と手放すほど無欲ではない！そしておばさまって言うな……」

俺の妹なら叔母だけだな、とか言う鋭太郎の呟きも今はスルーだ！この娘ども、教育してやる……！！

「やるか？」

「こいや」

「いいだろう、年長者を侮辱した罪でお仕置きだー!!」

「三人とも……屋内で騒ぎすぎだ」

「喧嘩は駄目です」

鋭太郎と小夜に怒られた。小夜は笑ったまま怒るので、かなり怖かった。わ、私は悪くない!

しかし、大規模魔法しか鋭太郎に勝てる部分のない私が、況してやこの面倒な結界の中で出来る事は……ある、か。よし。

「鋭太郎。私が子供達を鍛えてやろうじゃないか」

「大魔王直々の指南か……それは面白いことになりそうだ」

「そうだろう、そうだろう」

「「ぷ」」

可愛らしい唸り声を上げて私を威嚇する小娘二人は一先ず無視し、もう一人の子供を捜して……すぐに見つけた。

七曜と名づけられている鋭太郎の息子は、ただ一人の男児だから我が従者達と木乃香、明日菜に囲まれて弄繰り回されていた。

読み取りにくい表情だったが、瞳の中に困惑と救難要請があるのはわかった。勿論、私も鋭太郎も苦笑いするだけで助けはしないがな。

親とはまた違った意味で苦労しそうだな、あの息子。

そんな感想を抱きながら窓の外を見ると、雪が降り始めていた。

>タカミチ

呼び出されて学園長室に行くと、学園長と数人の魔法先生が机を挟んで向かい合っているところだった。

何が起きたのかはわからなくても、何に関する事が起きたのかは容易に想像がつく。

いや、学園長がこうも劣勢に立たされるほどの案件は一つくらいしか思いつかないと言った方が正確だろうか。

ともかくその場に近付いていくと、学園長の机の上には数枚の写真が並べられていた。映っていたのは予想どおり“彼”。一緒に居るのは連絡のあった家族だろう。

「学園長！此方の指示に従わない魔法使いなど、危険過ぎます！即刻排除の許可を！」

「ならん！」

「何故です！？聞けば顔合わせの会合すら開かせなかったというではありませんか！そんな危険な人物に初等部養護教諭の仕事を与えるなど！一体何をお考えですか！」

「危険などない。少なくとも、君らが彼らに危害を加えぬ限りはの」

魔法先生たちはどうやら、関東魔法教会の管理下でない“彼”が自分の家族を呼び寄せたことについて、自らの戦力を増強し麻帆良を転覆しようとしているのではないのかと考えているようだった。

確かに“彼”は警備の仕事を断ったり魔法先生たちとの顔合わせを拒否したりと、魔法先生たちと足並みを揃える事を避けている。

それは彼が関西呪術協会の依頼を受けた雇われ魔法使いであり、詠春さんの娘さんを護衛する為にはその立場を公にしないほうが良いと判断したからなのだけれど、どうやらどこから情報が漏れて裏目に出てしまったようだ。

学園長のお孫さんの保護者なのだから相応の何かがあるというのは疑われて当然だから、寧ろこの五年間よく気付かれなかったものだとも思える。

「学園長！」

「ならんと言っておる」

「高畑先生、貴方からも言ってください！」

「そうは仰いますが、人には事情と言うものが……」

「我々は正義の魔法使いですよ！？その我々に言えぬとなれば、後ろめたいことに違いありません！」

血が上っている魔法先生を宥めようとしたところを被せられて、

ああ、この人もなのか、と思った。

あの大戦以降、英雄『紅き翼』を持ち上げたプロパガンダの影響なのか、自分を正義だと信じて止まない魔法使いが増えている。それは大戦期に後方に居たり、大戦後に生まれた若い人が中心だった。

戦争を止めさせたくて戦ったはずの僕ら『紅き翼』が、新たな争いの種になっている。

こういった人を見るとどうしてもそう思ってしまう、無力感に苛まれる。

ナギが始めた僕達の戦いは一先ず勝利に終わった。けれど、その名声が人を驕らせる。

ナギでさえ参戦の理由は名誉欲や力のやり場を求めている事だと言っていたのに、まるで最初から揺ぎ無い正義を持っていたかのようには語られる『紅き翼』の英雄譚は、少なくとも僕にとっては苦痛以外の何物でもなかった。

こんな事なら……戦わなければ良かったと思うことさえあるほどに、後悔してしまう事もあった。それでも、あの戦争をそのまま続けるよりはマシだと自分を鼓舞するしかないのだけれど。

その魔法先生は更に学園長に詰め寄っている。知らず数歩下がっていた僕に気付いた黒人の先生が声を掛けてくれた。

「高畑先生、顔色が悪いですよ。お疲れなのでは？」

「い、いえ。大丈夫ですよ」

「無理ありません　彼の言う正義は、私たちには苦過ぎる」

後半声を潜めたその人　ガンドルフィーニ先生に、僕は見開いた目を向けていた。

僕から見た彼は熱血漢で、自分の信奉する正義に真つ直ぐな人だった。その彼が、正義を苦いと表現したことが、意外に思えた。

失礼な反応だったのだと思う。ガンドルフィーニ先生は苦笑いしていた。

「語れば語るほど耳を塞ぎ、目を曇らせるのが“正義”だと……父の言葉です」

「なるほど……」

「しかし学園長もお人が悪い。お孫さんの護衛である以上相応の信頼が置ける人物なのは察せますが、何の情報も無しでは不安になるのも無理からぬ事です」

溜息を一つ吐き、二人で学園長を見遣る。自称“正義の味方”の猛攻に、学園長はかなり分が悪そうだ。

「学園長！」

「……もう一度席を設けるよう言っておこう。だが、彼らに手を出

す事は許可できん」

とうとう、学園長が折れてしまった。若い先生方はまだ不満を漏らしてはいたが、一先ずは引き上げる事にしたようだった。

退出する先生方の背を見送り、難しそうな顔をしている学園長と二人になる。

「よろしかったのですか？」

「うむ……今までこうならなかった方が不思議なのじゃ。そして知られた以上、無理な隠し立てが逆効果になることは沢村君もよく知っておるはずじゃ」

「それは、そうですが。彼らがあの人の意思を尊重するとは思えませんが」

「そ、そのときは……どうしよう？」

不安を直接言葉にしてぶつけると、学園長もおどけて逃げるしかなかったようだ。

暫くの間沈黙が場を満たし、学園長は恐る恐る電話機を手にとった

『はい、沢村です』

数回のコール音の後に受話器から零れた若い女性の声に、学園長の表情が一瞬だけ驚愕の色に塗りつぶされた。

合流（後書き）

次回はスルーしたはずの顔合わせ？

水面下で動きたい人たち（前書き）

前回でた話の補足とか帰結とかそんな感じなので、中身薄くて短めです。

水面下で動きたい人たち

> 学園長

『はい、沢村です』

受話器越しに聞こえた声に、一瞬思考が停止した。じゃが、すぐに立て直す。

そのようなこと、あるはずが無い。あるはずが無いのじゃ。

『もしもし？どちら様でしょうか』

「う、うむ、学園長の近衛じゃが、沢村先生はご在宅か？」

『いつもお世話になっております。少々お待ちください』

彼女も、彼女に連なるものも……既に、この世に無いのじゃから。電話の相手が変わるまでの間、保留音を聞きながら在りし日の記憶を幻視し、それを振り切る。

『代わったが。何か用か、若造』

か、開口一番……やはり相当嫌われておるのう。

「と、言う事なのじゃが。時間を取ってもらえんか」

『断る。少なくとも初等部担当の連中とは5年前に挨拶を済ませているはずだ』

沢村君に電話を掛け、事の顛末を説明したが、ばつさりと切られてしまう。

「そういわずに、何とかならんかのう。このままでは、暴走した彼らがどんな手を打つかわからんでな」

『暴走しないように貴様がいるのだろぅが、“リッパナマホウツカイ”近衛近右衛門。職務怠慢のツケを押し付けるな』

「ぐぬ……」

『念の為、言っておくが』

言葉に詰まる儂に、彼も一度言葉を切った。その瞬間、電話越しだというのに明確な殺気。否、殺意が浴びせられた。

正面で零れる声を拾っている高畑君も冷や汗をかいておるようじや。

『もし俺の家族に手を出すなら、その罪、当事者と貴様の命で購わせる』

「「……………」」

『死にたくなくば 仕事しろ』

「ま、待ってください！」

言うだけ言って通話を切られる寸前、高畑君が受話器をひったくった。

『タカミチか。耳が痛い』

「すみません。その、一部の魔法先生の暴走を抑えるために、貴方の素性を明かす必要があると思われるのですが」

ふむ。確かに素性が知れぬという事が暴走を助長しておるし、それは良い手じゃな。

現状麻帆良で彼の仔細を知るのは高畑君と刀子君だけじゃろって。それも全てとは言えぬじやろぅが。

『俺一人の事であれば、必要なだけ明かすといい。だが、連合の連中は『赤い月』を悪魔の集団か何かと勘違いしているぞ』

「……そうでしたね。では、アリアドネーの地位ある人物とだけ告げておきます」

『好きにしな。こっちに飛び火しない程度にな……切るぞ』

そう言って今度こそ通話が切られた。

高畑君は胸を撫で下ろしておるが、大丈夫じゃろうか？

「ふう……援護はこれが限界です。後は頑張ってください、学園長」

ま、丸投げしおった！？

く学園長の危機は続く！一方その頃、合法（または外法）ロリは宣言を果たし始めていたく

>エヴァンジェリン

見渡す限り、青い空と広い海。

絶海の孤島を封じ込めたプライベートスペースで、今、私は鋭太郎の子供達と向かい合っていた。

【よろしくおねがいします】

「よし……来るがいい！」

思い思いの武器を手にしている子供達が、私の合図で散開する。戦士、魔法使い、弓使い、僧侶　ふふふ。まるで魔王を倒す勇者の一行みたいな組み合わせじゃないか。

まあ、個々の能力がまだ低いから、おいそれとやられてやるわけにも行かんが。

「第一段階、開放　閃！」

「おっと」

距離を開けながら、刹那がその手に持った刀　いや、光に包まれて姿を現した神剣を振るう。すると、気で練られた刃が飛来したので、屈んで避けた。気の練りは中々のものだ……

私が足を止めたと見るや即座に距離を詰めてくる刹那だが、その脇が僅かに光った事に気が付いた私は急いでその場から跳ぶ。

風を引き裂く音と共に、私がいた場所が貫かれていた。何が貫いたのか知る為に、その出所を辿る。七曜が長大な弓に新たな矢を番えていた。青白い、妙に存在感の薄い矢を。

この肌を刺すような危機感……模擬でも貰うわけには行かん。少しでも忘れれば、アウトか。

「さすが鋭太郎の子……っ！」

思わず呟いたが、背中から白い翼を生やして追撃の速度を上げた刹那に、意識を引き戻される。

咄嗟に爪を伸ばして刀を受ける。翼で生じる推進力は中々のもので、この私が拮抗する力を読み違い、僅かに押される。

このまま硬直してしまえばいいのだ。少し爪に込める魔力を増やして振るうと、刹那はそれを真上に飛んで回避。私も即座にその場を離れ、高速で飛ぶ矢を避けた。

直後、背後に現れる式鬼。叩き潰しに来る金棒を真祖の拳で迎え撃ち、戻ってきた刹那は後ろ回し蹴りで　回避されたが、距離は取った。いい反応じゃないか。

私の足止めと詠唱妨害が目的だろう。紙で出来た鳥が多数、私を襲う。最初は障壁に阻まれると思ったのだが、なんと容易く切り裂く始末。

仕方なく伸ばしたままの爪で切り裂くが、数が多い上に機動性が高く、一振り一枚しか切れん。短気ならばすぐに平常心を失いかねんな、これは。

今のところ足を止めるまで撃ってきていないが、これではいい的だな……ふん。

何より、攻撃の際に殆ど言葉を発しないのが面倒だ。術の発動でさえ、叫ぶという事が無い。自己顕示欲の強い魔法使いどもはべらべらと喋る分対処する時間が取れるが、この子等にはそれが無い。

戦いに順応し、冷たく静かな魔力、気を練る事に慣れている。更には、攻撃をどれほど防がれても次の対応が取れるように心を落ち着かせているということだ。

そこの魔法使いより随分と手ごわいじゃないか。

では。そろそろ此方からの攻撃にどう対処するのも見せてもらおうか。

無詠唱の魔法の射手を先ずは300。一番後ろで呆けている木乃香に向けて放つ。

ぱあん！と音が鳴り、魔法の矢の大半がかき消された。残った矢が数枚の呪符を構えた木乃香に向う。

「 被い」

言葉と共に展開される個人用防御結界。符を使う術はいざという

時の展開速度で通常詠唱をはるかに上回るからな……防御にはもってこいだろう。到達前に威力を殺げるならば尚の事。

そうして魔法の行方を追っている間にも、刹那や咲夜の攻撃は続いている。いきなり後衛が狙われても慌てないか。ではもう少し力を入れるとしよう。

一瞬だけ手加減を止め、魔力の波動で刹那と式神を吹き飛ばす。
刹那は七曜が受け止めた。
その間に詠唱を始める。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！ 来れ氷精 大気に満ちよ

」

「！ 耐氷結界」

「うん。いくえ、咲ちゃん」

「おまかせ」

なるほど、一人では防げぬから術者二人の結界で凌ごうという事か……力量差に疎んでいる訳でも怯えているわけでもない。

「 白夜の国の 凍土と氷河を！ “こおる大地” ！」

私の足元から子供達へ向けて、巨大な氷柱を生じさせる魔法の寒波が進った。再び響いた鳴弦によって魔法を相殺される感覚を得て、即座に次の魔法を詠唱する。

「 “闇の吹雪” 」

渦巻く黒い嵐が白煙を掻き分けて突き進む。また、障壁に阻まれたようだが……鳴弦が、無い？

「しまっ
」

白煙を穿ち、ほぼ真下から飛来した矢。咄嗟に障壁を張るが貫かれ、だがその僅かな時間稼ぎによって急所を外す事は出来た。障壁の強度を見るために殆ど時間を置かずに追撃したのだが……僅かな時間差を突かれたか。

分析しているうちに刹那が来る。左腕に矢が刺さっている私は右手に“断罪者の剣”を発動させ、剣を迎え撃つ。相転移と極低温の刃には実体が無いはずなのだが、流石は神の剣、見事に切り結んで見せた。

二合、三合。打ち合ううちに、左手の感覚が薄れてゆく。いや、傷口から胴体のほうへも、よからぬものが侵食を始めていた。やはり、破魔弓だったか。

私の存在を脅かすほどではないが、無視し続ければ当分行動不能になりかねんな。

わざと隙を作って矢が刺さる左腕を刹那に切り落とさせようとす
るが、此方の状況が知れているのだろ。仕掛けてこない。仕方な
く、自分で肩から切り落とす。不死でも痛いものは痛い。泣きたい
それを隙と見て切り込んできた刹那の攻撃を、体を蝙蝠に変えて
回避、離脱する。

離れた高所で体を再構築し、子供達の陣形を見直す。刹那と七曜
が油断無く此方を見据え、咲夜と木乃香は二人で魔法を詠唱してい
た。

「魔法の射手・収束・砂の50矢」

む、炸裂系の魔法の射手を収束？何をする気なのかとそれを見て
いると、刹那に抱かれて急速接近しつつある木乃香の詠唱も終わっ

た。

「風花・風塵乱舞」

「なっ！」

暴風が砂を吹き飛ばし、砂利交じりの風が私を襲う。障壁を無視されるのを予測し、転移で逃げる。

出現先はパーティー後列、七曜の後ろ。だが、七曜はすぐにそれに反応して弓を振り、拳を打ちつけてきた。

何で出来ているのか知らないが、えらく硬い弓だった。防いだ右腕、痣ができそうだな。

七曜はすぐに距離を取り、矢を番え、放つ。一度に三本、目にも留まらぬ速さで三度射た。矢からは相変わらず嫌な感じがするので、回避に徹する。

だが足が止まるように射掛けられ、その一瞬を刹那に突かれる。

爪に魔力を込めて斬撃の嵐に応じる。刹那の隙は七曜と咲夜がカバ―しており、その七曜と咲夜は木乃香の結界で此方の干渉を防ぐ。

引き離れた上で広域殲滅でもしなければ、単独で勝てるパーティーではないな。

うむ……これだけわかれば充分だろう。

もう一度魔力の爆発で襲い来るものを吹き飛ばし、終了を告げる。

「よし、これまで！」

私がそう言うと、剣や符を下げて適度に距離を取った場所に四人が集合した。

【ありがとございました！】

「今日は様子見だったからやりたい放題やらせたが、明日からはこ
うは行かん。覚えておけ？では、本日はこれにて解散だ。風呂で汗
流して来い」

【はい】

「お、お嬢様、そんなに引つ張らないで……」

「あーれー」

解散の合図で嬉々として走り去る二人と、引きずられていく七曜
& 刹那。混浴する気が……って、あいつはまだ5歳だったか。

ふっ、どれもこれも面白い素材だ。忌避される白鳥、極東最大の
魔力保有者、自他共に認める化け物の子……闇の大魔王の手下に相
応しい。立派な悪の大幹部にしてやるぞ？

「フハハハハハハハハハハ！！」

……さて、魔王気分も味わったし、私も汗を流して鋭太郎の所にて
も行こうか。

追記。

風呂に行ったらまだ子供達がいた。七曜は将来が楽しみだった。
どういう意味でかは教えん。

水面下で動きたい人たち（後書き）

とりあえず、ぬらりひょんにはひたすら苦勞してもらいたい。
そう言う地位なんだから。

エヴァちゃんが追い詰められたのは、修行の初回で子供達のを測るために手を抜きまくっていたからです。

原作で戦った後だったネギと違い、ほぼ初対面で土台の力量がわからなかったからです。

原作で言うネギVSタカミチの、更にランクダウンみたいな感じ
です。

夜の闇、昼の闇（前書き）

今回は真面目にお仕事する魔法先生を書いてみるテスト。

夜の闇、昼の闇

>多く憎まれ（またはボコられ）役の人

……ん？

「ガンドルフィーニ先生、なにか？」

「いや、何か不意な紹介をされた気がして……」

「紹介？」

「いや、きつと気のせいだ。忘れてくれ」

なんだかよくわからない発言をしてしまった。今更誰に紹介され
ると言うんだか。

おかげで監督と教育を担当している魔法生徒に首を傾げられてし
まった。

法衣を纏う彼女は釈然としないながらも従い、話題を逸らす。

「それにしても、今夜は皆様、随分と気が立っておられるようです
ね」

「そう見えるか？」

「ええ。空気がいつもより刺々しく感じます」

一応とぼけてみたが、そう巧くは行かないか。

それにしても、生徒に気付かれるほどとは。彼らは何がそんなに
気に入らないと言うのだろうか。

聞いた話が全てだとは思わないが、あの高畑先生と学園長が揃っ
て身元を保証するのだから我々が率先して敵対するべき相手ではな
いとわからないのか。全く。

心中で愚痴を言うのも程ほどに、結界が感知した不審者を討伐に向う。

麻帆良はアジア有数の霊地だ。そこに集う巨大な魔力を悪用させない為に、我々関東魔法協会が管理、防衛している。

敵は千差万別だ。多くは鬼や悪魔といった尖兵を倒していけば、術者は逃げていくのだが。

捕獲できればそれが一番だが、相手が魔法使いであった場合“教育上宜しくない”として意図的に取り逃がさせられる事も、少なくは無い。

最も、それを表立って言うものは一人も居ないが。

暫く走り、敵の影が見える距離で木の上に体を隠す。

敵は、使役された低級悪魔のようだ。無節操に様々なタイプが喚ばれている。

「あ、あんなに……」

生徒の声が震えている。低級とはいえ悪魔、生徒が楽に還せる相手ではない。

それに、私は生徒を戦場に連れ出すことには反対だ。人手不足は否定できないし、学園長の命令だから従ってはいるが……

「私が前に出よう。高音君はこの位置から支援を」

「わ、わかりましたわ」

故にこそ、片手に自動拳銃、片手にナイフ。近々中距離を広く抑えるこのスタイルで一人、低級悪魔の群に飛び込んだ。

ナイフの柄を銃把にあわせ、両手で握りこむ。目を見開き、悪魔との距離を測った。

二時、十時半、三時、十二時。

連続して、乾いた音が鳴り響く。術を施された弾丸が一発一発、悪魔の眉間を貫いていく。

一体ずつ確実に。なるべく注意を引くように。出来る限り派手に。しかし静かに。

あるものは取り押さえて首を掻き切り、あるものは投げ飛ばして撃つ。

残弾一発で弾倉を変え、高音君に気付いたものは最優先に。

暫くそれ続けて、悪魔の群を掃討した。高音君と合流し、携帯電話を手取る。

念話の盗聴より電話の盗聴のほうが可能性が低いというのだから、笑わせてくれる。

電話帳から学園長室を呼び出そうとして。

別の声に、止められた。念話……それも、今夜の警備を担当している魔法先生からだ。

その報告を受けて……顔から血の気が引く音が聞こえた気がした。

『一部の防衛線が崩れている。ガンドルフィーニ、すまんが“屋敷”の北50メートル地点に向ってくれ』

隣に目を向けるが、高音君がそれを聞いた様子は無い。どうやら魔法先生に限定した念話のようだ。

顔を引き締めなおし、するべき事を優先する。

「高音君、今日の任務は完了だ。寮に戻り、明日に備えたまえ」

「わかりました、先生。では、また明日……」

「ああ。私は他の先生方と合流して学園長に報告するので、先に失礼する」

「おやすみなさい」

頭を下げる高音君を背に、速やかに“屋敷”へと向かう。

それにしても……何故、学園長は何も言っていない？

> グラヒゲ

警備網の一部が不自然に破られたのを確認したのは、大結界の管理を担当していた明石だった。

あの学園長室での暴走を確認したとき、あいつは納得がいかない風の表情をしていた。

情報源は娘か？それとなく探ったときも生徒達は中々好印象を持っていらしいが。

いずれにしても、崩れた戦線があの“屋敷”へ向っている以上、事態はかなり悪化している。

高畑先生が術者を見つけ出して討つ事が出来ればそれでいいのだが、間に合わない場合……多少、過激な方法を取っても同僚の暴走を阻止しなくては。

「ヒヒヒ……そうだ、しっかりついて来い」

見つけた。やはり、あの時学園長室で最後まで主張していた男だった。

最早目が尋常じゃない。狂っている。浮気した旦那を半殺しにし

た時の葛葉より酷い。

「何をしている！防衛線を維持しないか！」

「ふん、誰に守られているのかもわからない恩知らずに、その選択の重さを思い知らせてやるだけだ！こいつらを使つてな！」

また初級の魔法で悪魔たちを挑発し出す。

恐らく、彼が持つ狂気に引き寄せられているのだろう。術者数人では呼び出しきれないほどの数がつこめいていた。

「馬鹿な、一般人を巻き込む気ですか！」

「煩い！我々は正義なのだ！些細な犠牲に感ける必要はない！」

葛葉の糾弾にも聞く耳持たずか。仕方ない。ならばせめて、こいつらの足止めで高畑の時間を稼がなくては……！

「やるぞ、葛葉。デイグ・デイル・ディリック・ヴォルホール」

「仕方ありません……神鳴流、葛葉刀子。参ります」

仕事中は旧姓を名乗るんだと……

さて、この数相手にガンドルフィーニを足して……間に合うか？

「間に合わせます！この程度　！」

「我々の敵足り得ないさ」

おや、声に出ていたか。気をつけるとしよう。

結論を言えば、高畑が術者を倒して事態が収集するまでに、我々は大小悪魔303柱と発狂魔法使い一名を倒滅・捕縛した。

“屋敷”には気付かれなかったと信じたい。

> 鋭太郎

「とりあえず、何の冗談か教えてくれないか蟬型宇宙忍者モドキ」

「ふおっ！？そ、それは酷くないかの！？」

「馬鹿を言え、これでも二十重くらいにはオブラートを巻いている。ほら、キリキリ吐け」

そついいながら、俺は手元にある書類の端を叩いた。

それは、来年度から俺が副担任兼生活相談員となる、麻帆良学園中等部1年A組の学級名簿である。

流石に女子中学校で常勤の養護教諭は無理があったと見える。まあ、常識的なことで何よりだ。

いわゆる“お年頃”だからな。初等部でも高学年になると身体測定で俺が担当するのは身長だけにしろと言われたし、別段不服はない。

まあ、医療に従事した経験と技術に関しては実績もあることだし、非常時には養護教諭として対応できるようにするそうだ。

それもあって、普段は暇な職務らしい。木乃香の傍に詰められるので、こっちの任務としてはかなりやりやすくなるだろう。

だが、しかし！

「……その、な？ 今年度の初等部卒業生や来年度から転入してく

る子に魔法の関係者や素質の高い子が多くての？ 折角じゃから一纏めにしてしまおうと思つてのう？」

一々疑問符で区切るな、気色悪い。

この渡されたクラス名簿なのだが……酷いの一言に尽きる。

元々超人染みた生徒で溢れているこの麻帆良においても、選りすぐりの変人どもが一纏めになっているではないか。

木乃香、明日菜、刹那、咲夜。魔法先生・明石の娘、教会の見習い、甲賀中忍。

雪広財閥の令嬢、幼きパパラッチ、ラッキー仮面、マッド。

一時期本気でホルモン異常を心配したほど発育がおかしい双子&保母見習い。何度診断しても健康体だった。仕方が無いのでちよつとした整体法を伝授したが、あまり効果は無いようだ。

そして時折やってきては相談するかしまいか散々逡巡した挙句「なんでもないです」と帰って行く、人間不信の心理防壁体質。

初等部で見かけた連中だけでこれだけいる。クラスの半数が挙がつたぞ。

留学生も聞き覚えがある名前の褐色少女を筆頭に、一クラス四人は詰め込みすぎだ。

しかも、この最後のは人間じゃないだろう。

他の連中も変人とまでは言わないが、身体測定や健康調査のときに素質を感じていた奴らばかり。

一体何を考えてここまで詰め込んだんだか。ここまで高密度に異端を詰め込めば、集団覚醒が起きてもおかしくなさそうだぞ？

「……前々から、そう、60年前からずっと思つてたんだが」

「な、何かの」

「お前ら、魔法を秘匿する気なんて欠片も無いだろう」

都市伝説にまでなりやがって。なんだよ、魔法オヤジって。近右衛門は笑って済まそうとしたが、一睨みしたら青い顔で震え上がっていた。

最終的に、俺はこの話を受けることになってしまった。今からクラス分けを変更する時間は無い、とまでは言わないが、魔法使いの都合で一般教員の皆さんに迷惑を掛けてしまうのは忍びない。

少なくともクラスごとの平均学力に差が出過ぎないように、という意味合いならばそれなりに適切だし、変人揃いは麻帆良では珍しい事ではない。

悲しいかな、魔法を知らない限り“1 A”の結成を阻害する理由には存在しないのだ。

近右衛門に踊らされている感はあるが、その代わり心行くまで締め上げて報酬を法外な額（財源は近右衛門の収入）で契約させだし、放課後も生徒をサポートできるように生活指導員という肩書きも手に入れた。まあ、指導というより相談に乗るのが俺の主目的だが。

干物と化したぬらりひょんを放置し、俺は家路に 付く前に、近右衛門に拳を突きつけた。

「何か隠してる事があったら、今の内に吐いておけ」

「な、なんのことかの？」

「何日か前の晩、森で いや、いい。邪魔したな」

くっくくく、また青くなってるな。気付かないとでも思ったのか。

他にも良からぬ事を企んでいるだろうが。まあ、邪魔なら打ち砕くだけの事だ。

家に帰ると、出迎えた小夜が俺に客だと言う。少し機嫌が悪そうだったから、女性だろう。

服装を整え、応接間に向う。子供達やエヴァンジェリンの姿が見えないが、恐らくまた魔法球の中か、俺の魔法級から作った地下の不思議なダンジョンで遊んでるんだろう。

モリスンもそっち系のモーグリだったらしく、話を聞いたエヴァンジェリンが目を輝かせていたのを覚えている。
見た目は？仕様なんだがな。

「お久しぶり　いや、始めまして、かな？」

応接間のソファに深く腰掛け、紅茶を飲んでいたのは褐色の少女だった。

そしてその不思議な挨拶は、俺の分身のみと接触した証明である。

「どちらかといえば始めましてだろうか、マナ・アルカナ　いや、龍宮マナ」

「もうご存知なのかい？ふふ、流石に耳が早いね」

「4月からの副担任だからな。まあ、さっき知ったばかりだが」

相手に合わせてニヒルな笑いを返していると、少し驚いたような顔をするマナ。

そんなに不思議か？

「貴方なら養護教諭だと思っていたよ」

「女子中だからな。非常時には動くが、常勤は無理だ」

「ふむ……それもそうだね、貴方は若々しいから」

若干沈んだ顔のマナに、育ちすぎた悲しみを見た。が、無視する。その後も龍宮姓の事や死んでしまったコウキのあること無い事を語って過ごした。

やはり、マナは少し寂しそうだった。

> 中華小娘（偽？）

おかしいネ。確かこの場所に住んでいたと思ったの二。
感知の力を広げても魔力を感じられないヨ？

ま、まさか……

「このワタシを謀た力、大師父！？」

「未来からやってきた中華少女は、何も無い森の中で絶叫するのであった」

夜の闇、昼の闇（後書き）

次回は茶々丸誕生話と結成！1 Aでお送りします？

未来技術と機人少女（前書き）

茶々丸誕生の回。

未来技術と機人少女

> 華人小娘（未来人）

や、やと着いたヨ……まさか、巧妙に隠したヒントで学内一周させられるとは思わなかつたネ。

それにしても大師父、この時代のうちからこれほどの罫を仕掛けるとは。ワタシが来るのを知てたと言うの力？……いや、さすがの大師父でもそれはないネ。きっと誰でもいいから嵌めてみたかただけに違いないヨ。

それにしても相変わらずヒドイ隠蔽能力ネ、結界の魔力抑制を逆利用しているとはいえ、これだけの魔力が渦巻く屋敷を敷地内に入るまで全く感知できないとハ。

さて、この時代の大師父たちとは初対面のはず、気を入れて交渉しないと怒らせてしまうネ。

見た感じ、インターフォンの類は無いヨ。扉に獅子を模った大きなドアノックカーがあるだけ力。

とりあえず、叩いてみるヨ。

ドン、ドン。

「ごめんくださいネ！」

「どちら様でしょうか？」

扉が開いて出てきたのは、和装美人の小夜さんネ。

伸縮自在の人造ボディ、今日は中学生サイズヨ。でもバストサイズはちよつと増量中力？

「初めまして、超 鈴音と申しますヨ。『教授』と『闇の福音』はご在宅力ナ？」

「……お二人の知己でいらっしやいますか？」

ぐっ、空気が重いネ！小夜さんのオーラはこの時代で既にこのレベルだと言っの力！？

「い、いや、初対面ネ。ただ、この地に居るに当たて挨拶が必要な身分と言わせて貰っヨ」

「そうですか。念のため、探査を掛けさせて頂きますが、よろしいでしょうか」

「お邪魔するのはこちらネ、当然ヨ」

小夜さんに探査魔法を掛けられた後、応接間に通された。プライバシーの侵害とか言質の確保、そして何より家族の安全に煩い大師父を警戒して手ぶらで来たのが功を奏したネ。

さて、話をどう進めたらいいかと考えていると、さして間を置かず目的の二人がここへやってきた。

「我らを訪ねてくるから誰かと思えば……小娘一人か」

「すまないな、お客人。して、謎の転校生“超 鈴音”が魔法協会に敬遠される我々に如何なる御用かな」

「おや、ご存知だた力」

「お互い様だ。さ、本題に進んでくれ」

むむむ、相変わらず性急な人ネ。一種の病気ヨ、この無駄の無さ過ぎる交渉術は。

やはり素直に話してしまうのが一番力。

「そうネ、では単刀直入に言うヨ。ワタシの計画に、あなた方の協力が必要ネ。そう、人造生命のノウハウを持つ、あなた方のネ」

「……よく調べてる」

「ふん、気に入らん」

人外の重圧が……確りするネ、超 鈴音。

「ま、まあ、最後まで聞いて欲しいネ。ワタシは三年後の学園祭で“魔法使い”達を吃驚させる一大イベントを予定しているヨ。二人にはその土台となる我が戦力の開発に手を貸して欲しいネ」

二人して腕を組んで此方を睨みつけてきてるヨ。

「戦力の開発、ね。自動人形オート・マータでも作る気か？」

「まあ、そんな所ネ。具体的には最初の理論構築と、実験機の試験運用をお願いしたいネ」

「「ほほう……」」

フッフ、目の色が変わたネ？『理論』『実験』『試験』と、学者肌の二人が食いつきやすい単語を三つも並べた甲斐があたヨ。

「開発コンセプトを聞いておこうか」

大師父が笑みを浮かべながらそう問うた時、ワタシは会心の笑みを浮かべて答えたヨ。

何しろ、大師父の気を最大限に引く答えを大師父本人から聞いてきたからネ！

「それは！“戦うお茶汲み人形”ネ！」

「なに？」

「これを見るヨ！」

更に設計草案を突きつけるヨ。大師父はそれを奪うように取て読み始めたネ……『闇の福音』^{オネエサマ}はそれをちよと不満げに眺めた後、ワタシのほうを睨みつけるヨ。

大師父と違って機械はさばりだたからネ。

「うち……おい、小娘。鋭太郎はともかく、私は悪の魔法使いだ。相応の対価は用意しているのだろうな」

「それは勿論ネ。ワタシの持つ科学技術の提供と、試験運用を終えた実験機をアフターサービス満載で進呈するヨ。おまけに、この肉まん食べ放題券も進呈するネ！」

「沢村一家全員分か？」

「うっ！？さ、流石にそれはマズイネ」

「……ま、いい。おまけだからな。で、どうするんだ鋭太郎」

視線が大師父に集中すると、丁度草案を読み終わった大師父が顔を上げたところだた。

「実に面白い……これはまだ草案なんだな？」

「そうネ、実際に作りながら動かしながら追加・調整する予定ヨ」「開発の設備はどうする？」

「共同開発者が工科大に持つてる研究所を改造してあるネ」

「費用はどうやって捻出する？」

「お料理研究会の屋台をプロデュースしてるネ。それに宝くじの当たりに貯金は一杯あるヨ」

大師父の質問に正直に答えていく。

私の答えを吟味するように腕組して考えた大師父は、膝を叩いた。

「ふむ……………よし、俺は乗った。エヴァンジェリンは」

「鋭太郎が乗るのに私が反る訳が無いだろう」

「だ、そうだ」

よかつたな、未来人。

！？……………いや、幻聴、カ？

まあ、大師父なら設計草案から見抜かれてもおかしくは無いネ。
ともかく、これで計画の一番大事な部分は押さえたネ。あとは邁
進するのみヨ！

く未来技術を秘匿する為、以下、ダイジェストでお送りしますく

くごあいさつく

「紹介するネ、共同開発者のハカセよ」

「あれ、沢村先生？ 先生も魔法の関係者だったんですか？」

「やっぱり葉加瀬だったか。ミンナニハ ナイショダヨ？」

「あ、はい。それは勿論」

「何故棒読み？」

く素体チエツクく

「で、“人形遣い”の目から見て、この子はどうかネ？」

「球体間接か……………悪くは無い。科学とやらはよくわからんが、これ
なら私の系でもよく動くだろう」

「アナタにお墨付きもらえるなら安心ヨ」

「ふふふ、そうだろうそうだろう」

「で、そんな大魔法使いには、コレをお願いしたいネ」

「うん？ 魔科学動力炉……だと？」

く なまえく

「さて、大分出来てきたようだが……このアンドロイドの名前は決まってるのか？」

「アンドロイドじゃありません、ガイノイドです」

「いや、アンドロイドだろ。“人間のようなもの”なんだから」

「女性型なんですから、“女性のようなもの”です！」

「人間には男女が居て当然なのに敢えて女性が強調されたのは、それが性欲処理用の人形だったからだという事を理解した上で言っているのか？」

「ッ……！」

「今日まで開発に関わってきたが、そういった機能は付けた覚えが無いな」

「あ、あああたり前ですっ！」

「なのに、ガイノイドなのか？」

「それでもガイノイドなんですっ！」

「……あの二人は何を言い合っているんだ？」

「……譲れない一線があるのヨ、きとネ」

く きどうく

「もう起動実験か……あっという間だな」

「楽しい時間はすぐに過ぎるというが、こんなに早くできるとは思

てなかつたヨ。貴方達のおかげネ」

「あ、動力炉の稼動開始を確認しました！」

「契約……締結」

「初期設定を開始します。固有名称を登録してください」

「ふむ。よし、貴様の名前は茶々丸だ！」

「「「なっ！？」」」

「チャチャマル……登録しました。よろしくお願いいたします、マスター」

「ナンテコツタ……」

「色々名前を考えていたの二……」

「まさかの独断専行とは。闇の魔王を甘く見ていました……」

>茶々丸

初期設定を終えた私の電子頭脳が“自我”の優先権をA Iシステムに切り替えたとき、初めて視覚情報として保存されたのは開発者の一人にして私のマスターでもあるエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルが、他の開発者三人の視線に耐え切れずに部屋を飛び出すところでした。

初めて聞いた音声は、悲鳴と溜息を除けば、開発者の一人、沢村鋭太郎 暫定呼称“家長” の挨拶でした。

「おはよう、茶々丸。気分はどうだ？」

気分、ですか。ガイノイドである私にはボディの都合・不都合があるだけで、気分という言葉は適切ではないと思われませんが。

「そんな深く考えずに、ただ判断すれば良いんだよ、茶々丸」

「そうですか……システムに異常はありませんので、不快ではありません」

「それは重畳ネ」

葉加瀬聡美 指定呼称“ハカセ” に促されて返答すると、

超 鈴音が満足げに頷いて機材を確認しました。

その後も幾つか簡素な質問 中には理解できない抽象的なものもありました を受けた後、私はデータ収集のため、沢村家に引き取られる事を知らされました。

マスターを含め、11人+1匹+1羽+1体の大所帯だそうです。そこへ私という1体が追加されるわけですね。

葉加瀬たちから稼働に於ける注意点などを聞かされた後、沢村邸へ向います。

道中、道端でマスターが蹲っていました。あまり人目について欲しくない姿です。

「エヴァンジェリン、帰るぞ」

「ぐす……どうせ私はセンスないやい」

「ったく。600歳にもなってそんなに拗ねるんじゃない」

困ったような呆れたような声を掛けられたマスターは、勢いよく振り向いて牙をむいています。

「うるさい！歳の事は言っな！私より年上の癖に！」

「はいはい、元気出たなら帰るぞ？」

「うっ……」

しゃがみこんだまま両腕を伸ばすマスターは、とても齢600歳の吸血鬼には見えなくて……

何故か、AIがこの映像を記録する事を強く推奨していました。

とりあえず、専用のフォルダを新規作成、現在抱っこ中のマスターも先ほどの映像とあわせて保存しておきましょう。

「マスター」

「む、何だ、茶々丸。場所なら譲らんぞ」

「いえ、そうではなく。私は何をすれば良いのでしょうか」

元よりマスターの居場所を奪うなどという選択はありません。そのように答えると、マスターは暫く考えて、話を家長に振りましました。

「どう思う、鋭太郎？」

「何も考えてなかったのか……だったら小夜の手伝いをしてもらうか。帰ったら紹介するから、今はそんなに気張らなくていいぞ」

「わかりました」

それきり会話はなくなり、家長が何度かマスターを抱きなおすところを録画しながら、沢村邸に到着しました。

すぐに家人の集合が掛けられ、大勢の前で家長に紹介されます。

出来たばかりの人物ライブラリが急速に増えることに、不快ではない変調が起きていましたが、これは为什么呢。

そして……この、ココとモリスンという二個体は、いったい何者なのでしょうか。

超と葉加瀬が用意した、魔法世界の生物も網羅しているライブラリに該当しない生命体です。詳しい事は家長がご存知との事ですが、

いったいどこから連れてきたのでしょうか。

困惑しますが、皆様曰く“慣れ”らしいので、保留としておきましよう。

私の主任務は、小夜さんの家事を補助することだそうです。

「では、早速……」

「あ、今日はいいですよ。折角のお誕生日ですし、お祝いしましょう。ご馳走作らなくっちゃ」

「いえ、私はガイノイドですし、飲食はフェイクですので……」

食材の無駄になってしまふとお止めしようとしたのですが、それを制止されました。

とても楽しそうに笑う小夜さんの笑顔を、まぶしく感じます。

「でも、食べられるでしょう？駄目ですよ、一人ぼっんとしていは」

「オイ、ソリヤ俺へノアテツケカ？」

「あらあら、また拗ねさせちゃいました」

「拗ネテネーヨ！」

頬に手を当てて困った風な表情をする小夜さんの視線の先には、動く事の出来ないチャチャゼ口姉さんが座らされている椅子がありました。

半機械式の私と違って純魔法式の直接供給なので、封印の効果がある学園結界の中では満足な量の供給が出来ず、動けないのだそうです。

「ともかく、茶々丸さんはちゃんと食べられるのだから、一緒に食べないと駄目です」

「駄目ですか」

「駄目です。そして今日は茶々丸さんのお祝いなんですから、茶々丸さんが働くのも駄目です」

「ですが、私は……」

「言い訳無用です！」

「あ、う。わ、わかりました」

腰に手を当てて見据えてくる小夜さんに気圧されて、肯定の言葉を漏らしてしまいました。

小夜さんは満足そうに頷いて、ブリジットさんに追加の買出しを要請、彼女は七曜君とココを連れて出かけていきました。

私は、この賑やかで不思議な家庭の一員になれるのでしょうか。歓迎会の準備を進める皆様を見ながら、私はそんな疑問を感じるのです。

歓迎会の終盤で、マスターが明日からの仕事着として濃紺のエプロンドレスを用意してくださいました。

試着してみたところ、とても好評だった事を記録しておきます。

未来技術と機人少女（後書き）

茶々丸だけで一話出来てしまった……

次回は1 A副担任就任の話です？

麻帆良ファンタジア・カオスフル（前書き）

サブタイにたいした意味はありません。

副担任就任とあの娘の話。

麻帆良ファンタジア・カオスフル

> 鋭太郎

前方に見えるは、タカミチの後ろ頭。

中々に精進を積んでいるようだ、今はそんな事どうでもいい。

此処は麻帆良学園女子中等部、本校舎。

近右衛門のありがたくないが無駄に長い挨拶で若干眠気を覚えつつ、これから一年　いや、クラス替えがないから三年か。副担任を勤める1年A組に向って歩を進めている。

タカミチが前に入るのは、同じクラスの担任だからだ。

念のため名簿で顔と名前を再確認しつつ歩いていると、すぐに教室に着いた。

やはりと言うか何と言うか、扉が僅かに開いている。で、目の前に黒板消しが見えている。

鳴滝姉妹の悪戯癖は有名なので、これくらいは予想の範疇だ。初日にやらかすとは思わなかったが。

ちなみに俺は身長で都合で屈まないと鴨居を潜れない。故に、黒板消しトラップに引つかかることはない。気付かない、という事がありえないからだ。

「はっはっは、仕方がないなあ」

などと笑いながトラップを解除し、教室の中へ進むタカミチ。念のため少し時間を置いてから追隨したが、どうやら他にはないようだ。

相手の力量もわからずに過激なものを仕掛けるほど考えなしではないということだな。

……などと思った俺が甘かった。

丁度俺が入室した瞬間、どこからか風を切る音が。咄嗟に左手を動かしてそれを捕まえてみると、吸盤付きの矢が三本。

恐らく、“パパラッチ”朝倉の情報などから俺が副担任になることを知り、俺の用心を先読みした上で時間差の罠を仕掛けたようだ。やってくれるじゃないか。この周到さは“教会の見習い”こと春日が入れ知恵していると見た。

そんな俺の静かな感心を他所に、教壇に立ったタカミチは手を叩きながら存在感を強化して生徒達の意識をひきつけた。

「静かにしてもらえるかな。僕はこのクラスの担任になったタカミチ・Ｔ・高畑です。担当教科は英語。よろしくね」

タカミチが目配せを寄越すので、俺も続けて自己紹介を始める。

「沢村鋭太郎だ。タカミチは出張が多いので、それを補佐する意味もあってこのクラスの専属副担任となった。生活指導、及び相談員でもある。医師やカウンセラーの資格も持っているから、気兼ねなく相談してくれ。よろしく」

僅かな静寂。だが、その内に渦巻く膨大な“おなじちから女子力”を感じ取った俺は、生徒の反応を待たずして話を進めることを選択した。

専行されて驚くタカミチだが、甘い。甘すぎる。貴様は“女子力”の恐ろしさを知らんのだ。十人以上の女性を家族に抱えている俺にはそれが十二分にわかる。

アレは、もし魔力などのエネルギーに変換できたなら惑星さえも割りかねないものだ。多分。

閑話休題。

「では、早速諸君の自己紹介を聞かせてもらえるだろうか。出席番号、姓名、任意でコメントを。俺達への質問でも良い。出席番号順に……明石からだな」

「はい！1番、明石裕奈！えっと　沢村先生って、お幾つなんですか？」

「ふむ。四十路は過ぎた、とだけ言わせて貰おうか」

【嘘だッ！】

一発目で目論見失敗。苦笑いする俺が居た。

「ボソボソ（まあ、今のリアクションは無理ないと思いますけどね。どこから見ても二十歳前後ですよ）」

黙っとけ。

>明日菜

苦笑いする先生サイドを置き去りに、教室は異様なテンションに包まれた。

理由はただ一つ。鋭太郎の若さ。女性にとって『若さ』はとても深刻な問題……らしい。

長いこと歳を取れなかった私には解りづらいけど、あの姉さまが鋭太郎の胸倉掴んで振り回すくらい。

「そ、その若さの秘訣を是非！」

「適度な運動、栄養管理、十分な睡眠、そして頼れる相棒、だな」
「も、もつと詳しく！」

「HRが終わらん。後にしろ」

「絶対ですよ！？」

あゝあ……知らない。絶対に学校中から質問攻めに会うわね。
周囲の目もかなりギラギラ光ってるし。

「好きな女性のタイプを是非」

「んゝ、静かで優しい人、かな？」

「ノーコメントだ。妻子持ちにする質問じゃない」

小夜さんと姉様の共通点って何かしら……美女、とか？

鋭太郎から求めているところは見たこと無いけど、まさか『来るもの拒まず』とか言わないわよね。

う！？咲夜と刹那のほうから妙な気配が！

これについて考えるのは止めときましよう。

「このクラスに沢村さんが3人いるんですけど」

「3人とも俺の娘だ。だからと言って差別、贗冒する意思はないので、そのつもりで居るように」

「戦うアル！」

「戦わないアル！」

「ハハハ……」

「お二人の“付き合い”ってー」

「妄想するような話は何一つ実在しない」

「ぐっ！なんて早い切りかえし」

「年収を教えてくださいますか」

「家族を養える程度だ」

「ははは、僕も秘密って事で」

「勝負でござる！」

「種目は勉強五番勝負でござる！」
ペーパーテスト

「や、やっぱり無しでお願いするでござるよ」

「悪戯トラップはどこまで仕掛けていいのー？」

「罠張り禁止」

「うん、それ無理ですう」

私たちは無難に挨拶だけで済ませたけど、質問の殆どが鋭太郎に向いてるのは何でかしら。

初等部の頃から顔見知りだから、初対面の高畑先生より聞きやすいのかな。

鋭太郎も鋭太郎で前もって用意してたみたいに即答だし。

最後のザジさんまで紹介が終わったなら、そのまま委員の選考に。

「委員長は私、雪広あやかが務めさせていただきますわ」

「出たわね、目立ちたがり」

「んなっ！？」

何よ、また生意気とかガキっぽいこと言う訳？

いいわよ、相手になってやろうじゃ

「双方、止めい！」

「「っ！」」

響く鋭太郎の怒声。観客モードに入りかけていた教室も、一瞬で静まり返った。

クラスメートの何人かは自失か混乱状態になってるし、気を込めた一喝だったみたいね。

「活力有り余るようで実に結構！　だが、為すべき事を為さずして徒に時を浪費する事は許さん！」

「も、申し訳ありません」

「ごめん、鋭太郎」

私たちが謝ると、鋭太郎は大きく息を吐いて笑みを見せた。瞬時に教室を埋め尽くしていた重圧が取れて、いつの間にか止めていた呼吸を再開した。

「よろしい。席に着け。それから明日菜、校内では沢村先生と呼べ。そしてタカミチは仕事しろ。出番くらいちゃんと見抜け」

「ハハハ……すみませんね。さて、それじゃあ、雪広さん以外にクラス委員長に立候補する人は居ないかな？」

鋭太郎の一喝が効いたのか、その後は特に騒ぎも起きずに肅々と決まっていた。

今日は初日で授業なし。だから委員が決まって、幾つかの連絡事項が伝えられたら帰宅　というか、入寮する事になる。

高畑先生が解散を宣言して、鋭太郎と一緒にクラスを出て行くとき、鋭太郎は扉の前で一度振り向いた。

「ああ、我が生徒諸君。先ほどは脅かしてすまなかった。だが諸君が本日ここで為すべき事はこれにて完了なので、以後は思う存分ク

ラスメイトとの親交を深めてくれたまえ」

言いただけ言って返事も待たずに退出してしまう鋭太郎。

クラスは何を言われるかと怯えていたみただけど、数秒すると言われた事を理解し始める。

まあ、とばっちりとはいえ一喝されたら、普通は本人に怯むわよね。おまけに、長生きしてるせいで本気になると思に時代掛かるんだもの。

「ね、ね、木乃香。家でもいつもあんな感じで怒るの？」

隣席の木乃香に詰め寄っているのは、木乃香にとっては初等部からの友達、早乙女ハルナ。その後ろには綾瀬夕映と本屋ちゃんこと宮崎のどかの姿もある。

普段木乃香と一緒に居る私にとってもそれなりに親しい、見慣れたメンバーだった。

「おっちゃんが怒ったの見たんはウチも初めてや。ビックリしたわ」。な、明日菜」

「そもそも怒られるような事しないわよ。さっきの失敗もこれでおしまい」

「あっちゃん。じゃあもういいinchよVS明日菜は無しかあ」

さっきのはつい、いつもの調子で挑発に乗っちゃったただけなんだから。いいinchよだって懲りただろうし、少なくとも鋭太郎の前で同じ事にはならないでしょう。

後、ハルナ。人の喧嘩を望むようなことは言わない方がいいわよ。

木乃香の話が終わるのを待つ間、私は頬杖ついて周囲を見渡してみる事にした。

すると、帰り支度を進める刹那のほうに背の高い色黒の人……確か、龍宮マナさんが歩いていくのを見つけた。

「やあ、沢村刹那さん」

「貴女は、龍宮さん、でしたか」

「マナでいいよ。敬語もいい。ルームメイトだしね」

「……そうだったな。では、そうさせてもらおう。私のことも刹那と」

「ははは、随分と変わるものだね。よろしく」

しっかりと握手を交わして此方に視線を送った後、二人は帰ってゆく。

正確には、これから“帰る”ことになる女子寮に向う、かな？

咲夜はどうしたんだろう、と思ったけど、どうやらもう教室には居ないみたいだった。

一声掛けてくれてもよかったのに。何かあったのかしら。

> ちう

早速寮の部屋って奴をチェックするため、手早く荷物を纏めてそこへ向ってるんだが……

私のすぐ隣に、私の歩調に合わせて歩いてる金髪が一人。あの保険医の娘らしいが。

「沢村咲夜。よろしく」

「あ、ああ……長谷川千雨だ」

とりあえず返事をしておくと、そいつはそれきり何も言わなかった。

さっき配られたプリントにあった寮の部屋割りでこいつがルームメイトなのはわかってたから、多分その関係で付いて来たんじゃないかと思っただけだ。

そのまま寮の部屋に直行して、荷物を解き始める。つつても私の荷物はあんまり人目に……ってオイ。

「咲夜つつたつけ。何だ、それ？」

「裁縫道具」

「いや、それは見りゃわかるよ」

そいつが解いている荷物の中には、妙に本格的な……そう、私がコスプレ衣装を作るのに使ってるのと大差ない……いや、それよりもっと上等な裁縫道具が揃っていた。

「お手入れ用。私の服、全部手作りだから」

なんでもないような返答が返ってきて、単語以外も喋れるのか、なんて妙な感想を抱いちゃった。

そのせいで、言葉の意味に気づくのが少し遅れた。

「……は！？ぜんぶ！？」

「うん」

「制服もか？」

「勿論」

「……冗談だろ」

「本当だけど。何か、変？」

小首をかしげて不思議そうにこっちを見てるが、どう考えても変だろう。

私だって衣装は手作りするが、普段着は市販品だ。制服なんて尚の事。それが普通だろう。

だから、そう言ってやった。ああ、やっぱりこいつも“変な奴”かと思いながら。

そしたら、息を呑む答えが返ってきた。

「変、なの？」

「っ!!」

聞き慣れた言葉だった。字面だけなら。

だけど、初めて聞く、待ち望んでいた言葉だった。

私が指摘する『変』を、肯定してくれるイントネーション。

これまでそうして来た奴らは、みんな私のほうが変になってるみたいな物言いをしてきた。

その後も、そんな“変なこと”が普通の事みたいに振舞ってて……

「わたし、変……」

暗い記憶に引き摺られ始めていた私を、不安そうな声が呼び戻した。

やばい、私のせいで気分沈めちゃった。速やかにフォローだ。

「ま、まあ、良いんじゃないか？その、モノの出来は、良いみたいだし。センスあるぜ」

「……そう？」

「ああ、うん……」

改めてこいつが着ている制服を見る。コスとしての目しか持っていないけど、出来はプロの領域だ。

私たちが着てる工業品の制服よりずっと良いものだと、断言できるだろう。

認めたくないけど、私が同じものを作っても、よっぽど調子がよくないとこのレベルは無理だ。

つい……興味が湧いた。

「なあ、これ……あんたが作ったのか？」

「ちよつとだけ。習いながら」

「わ、私も、ちよつと裁縫、するんだ……こんなんだけど」

多分、判断力が落ちてたんだと思う。

私は自分のダンボールを一つ開けて、中からコスプレ衣装を出していた。

瞬間、私の空気が凍りつく。

だけど、そいつはそんななお構い無しに、興味深そうにそのコスを手にとって。

「凄い」

と、のたまった。

予想外の返事に固まっちまった体に衣装を当てて、じっくり観察される。

「ぴったり……千雨、凄いね」

「け、軽蔑、しないのか？」

「どうして？可愛い格好は、私も好き。するの、見るの」

そう言って、笑いやがった……なんか、あつたかくなる笑顔だった。

だから……その、なんだ。

「よ、よかったら……あんたの分も作ろうか？その、い、一緒に……」

「……うん」

私に、友達が出来たんだよ。

~~~~~

「あのさ、咲夜。手作りが普通ってことは、あんたん家ってみんな

……」

「うん、手作り」

「あの保険医……じゃねえ、副担任のスーツも？」

「“お姉さん”渾身の一品」

……どこかデザイナーだよ。

## 麻帆良ファンタジア・カオスフル（後書き）

就任しました。それだけの話。

どれが誰の質問か当てなさい（0点）

入寮に関しては、ゆーなやマナの状況を参考に、学園都市内に住居があっても入寮するものだと解釈してます。エヴァだけが特例だったのさ。

流石に小学生からはないだろ、ってことで。

ちうたんの救済ですが、咲夜に特技を追加して魔法を知らせることなく人間不信を緩和する段階を踏んでみました。

このまま仲良くなると確実にココやモリスンと接触するので、魔法もばれますね……テンプレかな……

沢村一家の服はみんなマクダウェルブランドです。元・姫様が大量生産品を受け付けないのです。

咲夜は鋭太郎にくつつく口実を作るために技術を盗みました。吸血鬼から。

## あるファンシーの一日。（前書き）

とりあえず番外で今のうちに出番をあげておきたいんです。

## あるファンシーの一日。

>モリスン

く早朝く

住宅街が途切れて林を抜けた場所に、ぼくがお世話になっているお屋敷があるクポ。

ぼくが起きるのは、朝日が昇る前。

一階の隅っこにある部屋に用意されてる寢床から這い出て、体を伸ばすクポ。

ぼく一人の部屋だなんて……まるで夢のような待遇クポ。

狭い部屋だけど、置く物もないから特に問題にはならないクポ。

「おはようクポく」

「おはよう、モリスン」

「きゅく」

「おはよう。これが今日の分だ」

起きたら庭に出て、朝のランニングに出る旦那さんとエレナさん、それからココに挨拶クポ。

ココのご飯を預かって、旦那さんたちを見送ったら、お仕事の始まりクポ。

お屋敷の地下一階……食料庫。

この沢村邸で消費される天然食材を置く為の部屋が、ぼくの仕事場クポ。

“食料庫”とは言ったクポが、実際に置いてあるのは旦那さんの“土地”と、熟成中のお肉……動物の形をしたまま吊り下げられているお肉は、慣れないとちょっと怖いクポ。

それから、旦那さん特製のお漬物が戸棚に眠ってるクポ。

「え〜っと、今朝は……よし、行くクポ！」  
「きゅっ！」

時間差を小さめに設定されてる“土地”に入って、食べ物集めクポ！

……ココが居ないと怖くて進めないのは、ナイシヨクポ。

取れた食べ物を分けて、台所に持っていくクポ。

この頃には小夜さん、ブリジットさん、茶々丸さんが起き出して待ってるクポ。

「これでいいクポ？」

「確認しました。種別、分量共に適切です」

「間違えてないクポ」

「ありがとうございます。美味しい朝ごはんを用意しますからね」

「楽しみクポ」

さて、今日のごはんに必要な食べ物を台所に持っていったら、また食料庫に戻って今度は小さめの木箱を二個用意。お肉とお野菜を詰めて、ココと一緒に出かけクポ。

「気をつけて行ってらっしゃい」  
「はい、行ってきますクポ」

「きゅ」

二つの箱でココの体を挟むように固定して、その上に乗るクポ。  
お出かけの挨拶をしたら、ひたすらダッシュ！クポ。

走って走って、目的地は学園エリアの一角、一台の路面電車が停  
まってるガレージクポ。

「お邪魔しますクポ」

「お、来た力。待ってたヨ」

「ごくろうさまです。」

出迎えてくれた二人、お団子頭の女の人　超さんと、コアラみ  
たいな人　四葉さんに、木箱と納品書を渡すクポ。

「フム……確かに注文どおりの量ネ。これで我が超包子<sup>チャオパス</sup>はあと三日  
は戦えるネ！」

いつもいつも、ありがとうございます。

「此方こそありがとうクポ。おやつはいつも美味しく頂いてるクポ  
」

納品書にサインを貰ったら、朝ごはんになる前に帰るクポ。

一度お喋りのしすぎで遅刻して、こっぴどく怒られたクポ……

だからいつも、疾走あるのみクポ！……ココが。

だってぼくらモーグリは走るのも飛ぶのも全然早くないクポ……

「聞いた力、五月。我らが点心はついに種族の壁も越えたネ！」



やりました……！

……ん？　なんか聞こえたクポ？

（午前）

お仕事が終わったら、体の汚れを取って朝ごはんクポ。

明日菜さんたちは中学校から寮生活だけど、走りこみの途中で合流してそのままこっちに来てるから、朝ごはんも変わらず一緒に食べるクポ。

でも……

「お替りをいただけますか」

「はい、良いですよ」

なんで増えてるクポ？

エヴァさんに睨まれた刹那さんが何度も何度も頭下げてるクポ……

ご飯を食べ終わると、旦那さんたちが学校へ行くクポ。

ぼくらは暫くやることがないからごろごろしてるクポが……そこに、アリカさんが来るクポ。

帳簿と算盤を背の低いテーブルにおいて、ぼくを立たせるクポ。

せ、背が低いからとか言うなクポ！

「モリスン、魔法球の方はどうじゃ？」

「ん、来週の終わりくらいに“山岳”が冬入りと見たクポ。とりあえず、日持ちするのは集めてまた旦那さんに漬けてもらうクポ」

「やはりそうか。ふむ……」

ぱちぱちと堅い木がぶつかる音が響いて、アリカさんの溜息で止むクポ。

麻帆良に着てから、アリカさんはずっとこうやって沢村家の家計をチェックしているらしいクポ。

他にも旦那さんが用意してるお薬の取引とか、エヴァさんが使う布の手配とかもしてるクポ。

……騙されない交渉とか、契約の穴をつくのとかが凄く手馴れてるのは、昔取った杵柄と言ってたクポ。

「やはり、少し悪化しておるな……」

「困るクポ？」

「うむ……子供達が大きくなれば物入りにもなるし、主な収入源である鋭太郎たちの薬も、戦後処理の進行と共に需要が減ってきておる。教員の収入を計算に入れても、今年の利益は前年比で4割は落ちるであろうな」

「それは大変クポ!？」

「いや、試算した諸経費を差し引いた上での話じゃ。貯蓄や行楽に割く分が、4割減という事じゃな。まあ、鋭太郎が妾らを路頭に迷わす事はないゆえ、慌てるでないぞモリスンよ」

凄い信頼クポ。でもでも、確かに旦那さんたちなら何があっても大丈夫な気がするクポ……。

その後も暫く食料庫のツマミ食い被害とかお肉の状態とかを相談しながら、算盤の音を聞いて過ごしたクポ。

「こうして帳簿をつけて居るのも、要らぬ横槍を入れさせない様に

するのが目的なだけじゃし……おお、茶々丸。良いところへ来た。  
次に食料を荒らせば、エヴァの紅茶代は一割減額じゃと言っておけ」  
「畏まりました。お伝えします」

「コレジャー誰がますたーダカ判ンネーゼ。ケケッ」

〈午後〉

基本的に、朝のお仕事以外にぼくらがやるべき事はないクポ。

朝ごはんが終わったらみんなのお手伝いをして、それがひと段落  
着いたら好きに過ごすクポ。

モグネット端末で情報を集めたり、ココと“土地”で遊んだり…  
…まあ、色々クポ。

超一味に改造された端末なら、まほネットと言つのにも繋がるク  
ポ。

この世界の魔道士……魔法使いのモグネットみたいなものクポね。  
まねっこクポ。

ここからでもモグネットには繋がるけど、ギルがないからお買い  
物は出来ないクポ。

お屋敷にある不思議なダンジョンは、こっち側の材料で出来てる  
からお金は拾えないクポ……。

残念だけど、お便りや公開情報だけでも集めておけば、また後で  
役に立つかもしれないクポ！

〈夕方〉

「ただいま」

「うむ、お帰り」  
「きゆう！」

時間は大体午後3時半。七曜が帰ってくるクポ。七曜だけは敬称つけるの嫌がるクポ。だからつけてないクポ。

七曜はいつも、学校からまっすぐ帰ってくるクポ。だからこの前、友達と遊ばないか聞いてみたクポ。

そしたら

「不和」

とだけ返ってきたクポ。あんまり聞いて欲しくなさそうだったから、それからは聞いてないクポ。

まあ、知らない結構不気味に映る性格が、悪いほうに出てるんだと思うクポ。

七曜も家が好きみたいクポ。時々、木乃香さんとかに引っ張られてどこかに行くけど。

「帰ったか、七曜。では早速支度しろ」

「5分」

「40秒だ。すぐに来い」

「承知」

七曜が帰ってきてから旦那さんが帰ってくるまでは大体3時間くらいクポ。

それまでの間、エヴァさんは嬉々として七曜と遊んでるクポ。口に出すと怒るクポが……

「何をしているネコモグラ。さっさと迷宮の封を解け」

（ネコモグラって言うなクポ！）

と、言えたらどれほど良いクポか……どうして名前を呼んでくれないクポ？

勿論お仕置きが怖くて反抗なんて出来ないから、お屋敷の地下二階に急ぐクポ。

嘗てぼくが捕まっていた部屋は大改造されて、今はダンジョンの入り口になってるクポ。

多数のパターンを持つ部屋と通路が自動で組み合わせり、入るたびに構造を変えて侵入者を惑わせる。それが名高き不思議のダンジョンクポ。

フロアにはワンダリングモンスターが無限に湧き出て、トレジャ―ハンターたちの行く手に立ち塞がるクポ。

奥へ進めば進むほど素敵な宝物が、そして強大なモンスターが待っているクポ。

“強大なモンスター” だけなら、ダンジョンに入る前から接触できるけど……

「何か言ったか、ネコモグラ」

「何も言っていないクポ！」

睨まれたクポ！ 怖いクポー！

大慌てで扉に施されてる封印を解くクポ。この扉には、変化し続ける不思議のダンジョンを一時的に安定させる魔法と、内外の時間差を調節する魔法が仕掛けられているクポ。

向こう側の世界ではレアアイテムや魔王の力で出来てるけれど、

こっちは人工的に魔法を組み合わせで作った再現したダンジョンだから、きちんと作動を確認してから入らないとフロアの構造変化に巻き込まれて死んでしまうクポ。

だから、早まったりしないように、ぼくの特別な封印が施されているクポ。

「おい、ネコモグラ。今日の時間差は1/2だ」

「わかったクポ。ひらけ、ごま！クポ」

ズ、ズ、ズ……

ぼくの声にこたえた扉が、重々しい音を立てて開いていくクポ。そして現れる、まっすぐな通路。それを暫く歩くと、やがて道が分かれて、右手に大きなお城が見える場所があるクポ。

まっすぐ進めばダンジョンの中。外へ出て暫くいけば、そこはエヴァさんのお城クポ。

「今日は城の前にするか……七曜、茶々丸、来い」

「はい」

「オイ、ゴ主人。俺ハ無視力ヨ」

「そのまま七曜の頭の上にいれば良いだけだろうが」

さくさく進んでしまいうエヴァさんたちの最後尾に居た茶々丸さんが振り向いて、一礼してくれるクポ。

「では、私達はここで……後ほど、また」

「わかったクポ。時間には気をつけるクポ」

手を振って見送った後、ぼく達はダンジョンのほうに進むクポ。ココのストレス発散と運動不足解消のついでに、レアアイテムを集めちゃうクポ

「れつつ、ぐー！ー！クポ！」  
「きゅいつ、きゅー！ー！」

>七曜

く夜く

「……で、奥まで行ったは良いが、宝物番の竜種にやられた、と」  
「きゅー……」

母たちが夕餉の支度に取り掛かる頃、父は呆れた顔で気絶しているモリスンに氷嚢を当てていた。

目の部分が渦巻いているように見えるのは、恐らく印象操作だろう……確証は無いが。

ココによれば、自分達が鍛錬をしている間に迷宮の奥へ入り、竜種に返り討ちにあつたそうだ。

当人（鳥）は当然のように無傷だったのだが、相方が気絶したので戻ってきたのだと言う。

ちなみに自分はエヴァ姉とチャチャゼロと茶々丸にタコ殴りにされた。

死ななければ完治する手段が在るからと、一切の加減が無い。今日も終了時には死ぬまで1時間を切る様な重態だった。

だが、とりあえず父が帰るまでの6時間で使用した薬が一回分で済んだのだから、自分の成長も実感できている。

初期は、酷かった……

「全く。ココと違って防御手段弱いんだから隠れてれば良いのに」

どこか遠くへ思考が言っってしまったが、明日菜姉が尤もな事を言ったので帰ってきた。

だが、何度指摘を受けても改善しないと言う事は、モリスンなりの信念があるのだと思う。

変な生き物だが、情熱はあるから。

その後。

夕餉を済ませ、就寝前の運動と入浴その他を済ませて床に就いたのだが。

結局、その日のうちにモリスンが起きている所を見かけることはなかった。



## あるファンシーの一日。（後書き）

一応最初からこうと決めてはいたのですが、書く前にニート疑惑が出てしまったので、こりゃいかんと掲載することに。

うちのアリカさんには対外交渉と家計の管理をお願いしてます。

収益は真っ黒なうえに貯蓄も半端無いので、家計の管理と言うよりは税金対策とかその辺ですね。

鋭太郎の分身経由で、ちゃんと勉強してるんですよ。

## 第二次チート設定公開（前書き）

原作時間軸突入に伴い、主人公サイドの面々について改変点と設定を上げておきます。

## 第二次チート設定公開。

沢村一家

〈主人公ズ〉

名称：沢村 鋭太郎

更新情報：

麻帆良学園中等部1年A組副担任、臨時養護教諭、生活指導／相談員に就任。

魔法球を学内で持ち歩くわけにはいかないので、改造して自宅の食料庫と迷宮の材料に振り分けている。

魔法能力：魔力大量保有 魔力一般魔法使いレベルに変更。学園結界の影響。

魔法発動体：『万年筆』追加。スーツの胸ポケットに常備。学内で偽装しつつ、緊急に対応する為。これは麻帆良の魔法先生なら誰もがやっている対策である。物はそれぞれだが。

名称：ココ

更新情報：モリスン参加に伴い、革の鞍を標準装備。

〈原作改変組〉

名称：エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル

## 改変

吸血鬼化のほぼ直後に鋭太郎に拾われているので、ナギとの面識がなく、光に生きている。

デフォルトで最強たる真祖の肉体はそのままに、治癒術の知識と魔法薬の技術を追加。

非公式だが、大分裂戦争の復興初期に『月夜の女神』という二つ名がついていた。

不死者をも成長させる薬品を500年越しに研究中。未だ目処は立たず。

市販の服には早々に見切りをつけ、自作したものを沢村家の面々に着せている。

年齢は上から二番目なのに、沢村家の年長者（明日菜込み）としては下から二番目の立場だったりする。

名称：相坂さよ                      相坂小夜

## 改変

新たな肉体を得て鋭太郎とくつついてる。良妻賢母。

魔法で構築されている人造の肉体は、あらゆるサイズが思いのまま。普段は原作同様（B増量）に中学生の頃の大きさだが、子供を連れて外を歩くなど保護者としての面が必要なときは大人サイズ。

黄泉帰りの影響なのか、物質の幽霊を使役する能力に目覚めている。

あらゆる日用品を高張らせる事無く常備できるので、本人も重宝している。

沢村家の主婦。魔法使いとして活躍する事はないが、お仕置きには魔法を使うことがある。

名称：アリカ・アナルキア・エンテオフュシア      沢村   アリカ

#### 改変

ナギを振り（そもそも付き合わなかった）、鋭太郎とくつついた。家名に問題があるため、小夜と話し合って鋭太郎の籍に入る。対外的には原作通りにケルベラスで処刑されたことになっているが、行方不明にもなっておらず、普通に生活している。

鋭太郎もエヴァも小夜も不老であるため、自らも不老化するように鋭太郎に相談しているが、人間止める手段は何かと危険が付きまとうので、改良策を模索する間は抗老化に留められている。

おかげで大戦から20年経った現在でも、あの頃の若さを留めたまま『母親のやわらかさ』を得た。

女王時代の経験を活かし、経理や対外的な交渉・取引を担当している。

名称：アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア  
ア      沢村   明日菜

#### 改変

完全なる世界からそのまま鋭太郎の保護下に入った。  
紅き翼と共同生活した過去もないので、咸卦法を知らない。やろうと思えばできるかも知れない。

逃避行の必要もなく、知識人に囲まれ、記憶を弄られてもいないので『バカレツドじゃない』。

また、学費を稼ぐ必要もないので、新聞配達バイトもしていない。

年上だからか、木乃香たちのストッパー兼まとめ役になることが多い。

名称：桜咲 刹那      沢村 刹那

#### 改変

視力保護の為カラーコンタクトはしているが、白髪は隠していない。

自らの容姿が迫害されるはずだった事を自覚していて、そこから拾ってくれた鋭太郎を慕うあまりにファザコン化。

麻帆良に来るまでは、京都でスクナ・暁から剣を学んでいた。神鳴流も初步の技は使える。

名称：近衛 木乃香

#### 改変

魔法を知り、触れ、研鑽している。

保護監督が鋭太郎に委任されているので、学園長に縛られたり干渉されたりすることがない。

具体的には、お見合いしてないし、個人的に呼び出されることもない。

小夜について家事を習っている。

名称：ブリジット（調）&エレナ（焰）

#### 改変

いずれもフェイトではなくエヴァの従者になっている。主な現状は家事手伝い。

ブリジットは音楽、エレナは魔眼の日常活用などを重点的に練習中。

ブリジットは原作通りにアーティファクトを所持しているが、エレナは魔眼の制御を優先する必要があった為、仮契約はしていない。

名称：絡繰 茶々丸 茶々丸

#### 改変

エヴァンジェリンが登校地獄で縛られていないので、学校に行く必要性の消失に伴って苗字もなくなっている。

鋭太郎が製造に関与している為、色々と原作にない機能が追加されている。

く新規オリキャラ

世界を超えた迷子

名称：モリスン

種族：モーグリ

性別：雄

体格：身長72センチ 三頭身

身体能力：モーグリ平均レベル。

魔法能力：木乃香が謎の仮面をつけてワープする所を見たらしい。  
感知能力：そこそこ高い。鼻が利く。

性格：臆病だが好奇心旺盛。

愛好：保護者 食べ物 レアアイテム  
嫌悪：トラップ、モンスター、怒ったエヴァなど怖いもの全般

夢：お宝に囲まれる事。

装備『不思議な鞆』

容量が常識を超越した鞆。ココのものより二周りほど小さい。

装置『モグネット端末』

モーグリはモーグリによる情報伝達網、モグネット。そのモグネットに接続する為のラップトップパソコンに類似した装置。

何故かネギま！世界においても問題なく接続可能で、電送まで出来る。原因不明だが、召喚魔法の原理を応用しているのかもしれない。

FF世界の通貨である『ギル』がないので、モグネットを通じて何かを買うことは今のところ出来ていない。ココ製のエーテルなどを売れば入手できると思われるが……

端末は超一味に改造され、まほネットへの接続、田中シリーズ試作品への命令伝達が可能になっているらしい。



## 概要

アトモスのワームホールに飲まれたらネギま！世界に出てしまったらしいモーグリの子。

その後麻帆良に在住していた魔法使いに捕獲されたが、異世界の存在と言う特異性故に秘匿され、その魔法使いの死後は封印されたまま忘れ去られていた。

トラップ満載の為に放置されていたその屋敷を鋭太郎たちが麻帆良での住居にと買い取り、調査したところ発見、開封された。

魔法使いへの警戒や不信感よりもチョコボとの遭遇に歓喜し、以後そのまま沢村家の一員になった。

役職は小間使い 兼 迷宮封印係である。

## 主人公の娘

名称：沢村 咲夜

通称：咲夜、咲姉（七曜）、咲夜姉ちゃん（小太郎）

種族：鋭太郎と人間のハーフ。外見は人間。

性別：雌。

体格：168センチ、B90/W58/H87

髪：金・ショートヘア

瞳：碧

肌：白

身体能力：魔法世界の裏仕事で困らない程度。

魔法能力：戦乙女騎士団・正規騎士レベル。ただし王家の魔力と陰陽術の組み合わせは『本物』に匹敵する。魔力量・大。

適性属性：土・光＞＞水・闇・雷＞風・火・氷  
感知能力：バグってない程度。

性格概要：ダウナー。対鋭太郎時はファザコン。

愛好：鋭太郎、家族、犬上小太郎（可愛い弟）、長谷川千雨（親友）。

嫌悪：邪魔者。

夢：鋭太郎のお嫁さん（これを聞いた瞬間、年長組女性陣の目が光った）

魔法発動体：イルカのネックレス

体質『王家の魔力』

エンテオフュシアの血筋に刻まれた、造物主の（だと思われる）魔力。

本人の意図に関わらず他者の魔力を打ち消す効果があり、陰陽術にも使用できるので本人は重宝している。

常時展開状態の『黄昏の姫御子』はまた別物らしい。

技能『マクダウエル流裁縫技術』

世界最強の人形遣いにして上流階級出身であるエヴァから盗んだ、裁縫の技術及びデザインセンス。

糸繰りを応用する事があるので、一般人から見ると若干ズルい。

## 概要

鋭太郎とアリカの間に生まれた子供。出生地は関西呪術協会総本山。

その出生から陰陽術・西洋魔術の英才教育を受けており、また

裏方仕事も経験済みであるため、魔法関係者としてはかなり早期に一人前の領域へ足を踏み入れる事となった。

修行中に小太郎、月詠などと出会い、弟・七曜と共に研鑽を積んだ仲。

月詠が七曜を見る目を気にしているが、そちらに気を取られているせいか小太郎が自分を見る目には気付いてない。察しは悪くないのだが……。

麻帆良中等部女子寮におけるルームメイトは長谷川千雨。

裁縫技術を通じてコスプレ仲間になったのだが、クラス2位に飛び込むスタイルそのほかにコンプレックスを抱かれる。

そこで鋭太郎直伝の整体法や美容法を伝授するなどしていたら、親友と呼べるほどの間柄になった。

まだ魔法はバラしていないが、裁縫の師匠に会いたいと言われているので近くバレるであろう。

### 主人公の息子

名称：沢村 七曜

通称：七曜、七曜ちゃん（一部を除く女性陣から。不服）

種族：鋭太郎と人工生命体小夜のハーフ……外見は人間。

性別：雄。

体格：130センチ、やや細い標準体型。

髪：黒。ストレートロング。

瞳：黒。

肌：黄（肌色）

身体能力：小さな鋭太郎。

魔法能力：魔力は一般魔法使いレベル。運用は一流。

適性属性：闇＞土＞氷＞風＞水＞火・光・雷

感知能力：達人級。能力補正で人外級。

性格概要：寡黙

愛好：家族 仲間

嫌悪：それ以外の人間（無関心）、髪を切られること。

夢：鋭太郎のような家族を守れる使い手になること。

魔法発動体：物体の幽霊。

異能『<sup>ツクモ</sup>九十九の長』

小夜的能力が遺伝したもの。物体の幽霊を運用できる。

この能力には“幽霊の発見と確保”が前提として必要なので、

鋭太郎と旅をしていた小夜ほどにはバリエーションに富んでいない。

『本来の目的を果たした上で大切にされた物』でなくては魂が宿らないので、必然的に古い品になる。

装備『<sup>ヤマクスシ</sup>霊弓“山崩”』

前述の『九十九の長』によって運用される、古の弓の幽霊。折れたものが総本山で保管されていた為、七曜が回収した。

当たり所が悪ければエヴァンジェリンの存在さえ揺るがす程に強烈な破魔の力を宿す強弓で、矢も幽霊なのですぐに手元に戻り、弾（魂）切れがない。

技法『鳴弦』

弓の音には魔、すなわち災厄を退ける力が宿る。この現象を自らの気によって増幅させる事で、魔法的な現象を相殺するエネルギーを生み出す技。

気を溜める時間が必要だが、弓そのものに宿る力もあいまって“おわるせかい”さえ退ける可能性がある。

#### 概要

鋭太郎と小夜の間に生まれた子供。出生地は姉同様に関西呪術協会総本山。

陰陽術や西洋魔術も習いはしたが、近接戦闘術のほうに適性があり、補助に使うにも能力を使ったほうが手っ取り早いので、対策を覚える程度に留めている。

#### おまけ

この作品でのA組メンバー出席番号。

- |    |          |
|----|----------|
| 1  | ：明石 裕奈   |
| 2  | ：朝倉 和美   |
| 3  | ：綾瀬 夕映   |
| 4  | ：和泉 亜子   |
| 5  | ：大河内 アキラ |
| 6  | ：柿崎 美砂   |
| 7  | ：春日 美空   |
| 8  | ：釘宮 円    |
| 9  | ：古 菲     |
| 10 | ：近衛 木乃香  |
| 11 | ：早乙女 ハルナ |

|    |                 |
|----|-----------------|
| 12 | ： 佐々木 まき絵       |
| 13 | ： 沢村 明日菜        |
| 14 | ： 沢村 咲夜         |
| 15 | ： 沢村 刹那         |
| 16 | ： 椎名 桜子         |
| 17 | ： 龍宮 真名         |
| 18 | ： 超 鈴音          |
| 19 | ： 長瀬 楓          |
| 20 | ： 那波 千鶴         |
| 21 | ： 鳴滝 風香         |
| 22 | ： 鳴滝 史伽         |
| 23 | ： 葉加瀬 聡美        |
| 24 | ： 長谷川 千雨        |
| 25 | ： 宮崎 のどか        |
| 26 | ： 村上 夏美         |
| 27 | ： 雪広 あやか        |
| 28 | ： 四葉 五月         |
| 29 | ： Zazie Rinyday |

第二次チート設定公開。(後書き)

シッコミビコ多数……

平穩、侵食、包囲網（前書き）

まとまりが……ない……！



## 平穩、侵食、包囲網

> 鋭太郎

まあ、歳を取ると月日の流れてのは本当に速いもので。中等部に勤めるようになって、早一年が経とうとしていた。

何かの理由で担当の先生方が留守していない限り、学校での俺は暇だ。

とはいえタカミチはこれ幸いとはかりに出張を消化しまくって8割方留守してるから、普段はそうでもないのだが……はて。あいつを担任にしている意味があるのか？

タカミチの英語に限らず、A組の代理授業は全て俺がやる。騒がしい連中を押し付けられただけのような気がするが、とりあえずの理由は“専属”の副担任だからだそうだ。

一時期、正規の教師陣よりも授業の進みが良いからと、A組の授業を全部押し付けようとする動きがあったが、ギリギリで察知した俺は近右衛門を締め上げて阻止させた。

……俺に本来の仕事をさせまいと忙殺を企んでいるのが丸解りだ。

授業がないときは生徒指導室で事務手続きやら引継ぎの書類作りやらをやっている。職員室でないのは、相談員としての仕事を疎かには出来ないから。そして、この校舎の生徒指導室は結構セキユリティレベルが高いからだ。

しかし、一クラスとはいえ様々な教科を見るというのは大変な事だ。ましてやあのA組では。

また、近右衛門締め上げるか……タカミチの出張過多とかで。

今日も幾つかの代行を終えて、その授業内容を纏めていた。

そこへ、入り口の引き戸が音を立てて開くと共に、明るい声が飛び込む。

「沢ちゃん、やつほー！」

「誰が沢ちゃんだ」

かなり不本意な呼ばれ方をしたので、相手を視認する前に突っ込みを入れてしまった。

声で判別はついていたが、改めて相手を確認する。明石裕奈だった。舌なめずりする様に大きく舌を出し、目を一方に寄せる“ペちゃんフェイス”ですっ呆けている。

「えー？ だって“さわむらせんせー”って何か堅いじゃん？」

「堅くて何が悪い。少しは立場を把握しろ」

「だってほら、桜子とかまき絵とかも言ってるし。いいじゃん、可愛くて！」

「良い歳したオッサンが可愛いとか言われても嬉しくない！」

「大丈夫だよ！ 沢ちゃん若いから！」

A組の面々は最初の怒気で怯えられていた部分もあるのだが、一月もすれば俺が本当に拙い部分以外は特に関与したがない人間なのを見抜いたようで、皆が割とフランクに接するようになった。

それは良いのだが、だからと言って“沢ちゃん”呼ばわりはどうかと思う。男なんだから。

言い出したのは確か……鳴滝風香、だったな。ノリの良い奴らに

はあつという間に広まって、面白がつて龍宮まで呼ぶ始末だ。二度と餡蜜奢らないと言ったら土下座して謝ったけど。

思い出しただけで溜息が出そうになる。というか、出る。

「ハア……それで、本題は何だ。何か相談だろう?」

「あ、そうそう。お父さんのことで、ちよつとにや?」

「明石教授か。彼がどうしたんだ?」

「いや、この間久々にお父さんのところに泊まったんだけど

」

ようやく語りだした本題は、この娘の父親、魔法先生でもある麻帆良大の明石教授のことだった。

延々と続く愚痴を聞き逃さないように聞き流し、必要な部分とそうでない部分を頭の中で篩い分ける。

そして、結論は

「だよ!? もう信じらんないでしょ!」

「男鰥<sup>やもめ</sup>夫なんだからそのくらい大目に見てやんなさい」

だ!

すっかりした人でない限り、一人暮らしの生活は怠惰になっていく。仕方がない。仕事と家事の両立は難しいのだから。仕事が忙しければ忙しいほど、家事は疎かになる。一つの天秤だな。

ましてや一度夫婦生活を送ったのならばなおさらだ。家事のやり方などココロが忘れてしまう。

しかしそんな父親の苦勞……かどうかは別にして、心理状況がわからない子供である明石裕奈は、頬張り過ぎた栗鼠の様に頬を膨らませる。

「だってだって、レトルトカレーのチンしないのとか食べてるんだよ！？ 酷すぎるっしょ！？」

「ふむ、レトルトカレーのチンしないのか」

具体的な例を挙げた抗議に、ちよつと過去を思い出してみる。

そういえば大戦中に紅い月を展開していた頃、勿論普段は小夜の手料理だったが、大忙しの時には調理の手間がないからと缶詰やら瓶詰やらを旧世界から（こっそり）直輸入してよく食べていた。

中でもメンバーに人気だったのが、日本から持ち込んだ、とある有名なレトルトカレー。

助けを求める合唱が聞こえてくるテントの前に、お湯を沸かして『三分間、待つのだぞ』なんて言ってる余裕もなく、そのままパンにつけて食べてた奴が一杯いた気がする。

……そいつらは『早い！ 易い！ 美味しい！』と絶賛してた。

かく言う俺も何度かやった事があるのを覚えている。

「あー、あるある」

「あるの！？」

「俺も20年位前に良くやった」

「うわ、信じらんない……沢ちゃんに20年前があることが」

失礼な奴だなオイ！

自己紹介のときに四十路過ぎてるって言ったの、まだ疑ってるのか。

実際はもう8世紀以上生きてるんだぞ？ 言えないけど。

ともかく、明石は父親の生活が（健康的な意味で）乱れているの

をかなり気にしている。

しかし、俺から見るとそれは仕方が無いと言うか、どうしようもないと言うか、少なくとも教授本人に改善を求めるのは限りなく不可能に近いと判断せざるを得ない。

ただの大学教授ならともかく、あの人は近右衛門に事務方の色々を押し付けられてるんだから。

この間中々裕奈が会いに来れる時間が作れないって泣いてたぞ……

「まあ、どうしても気になるなら何とかして飯作ってやる機会を増やすしかないだろうな」

「うゝ、それしかないのかにやゝ？」

「後は、アレだ。甲斐甲斐しい嫁さんを貰う。客観的に言えば、オススメではある」

「にやぬっ！」

オススメと言うか、解決するならこれしかない。

正直に言うと、俺だって今の職場環境で小夜たちを失う様なことがあれば、相当に墮落する自信がある。きっと野菜丸齧りとか平然とやらかすに違いない。

下手すると“飢えなければなんでも良い”と言う状態に陥る事もあるからな。

ちなみに、家政婦という手が無いとは言わない。だが、旧世界こちらがわで好き好んで侍従をやるような魔法使いというのは、本当に良家名家の従者か『魔法使いの従者』ミステル・マギくらいなのだ。

雇うとなれば財布に翼が生えるのを覚悟しなくてはならない。それでは折角環境が整っても逆効果だ。

「まあ、解決策を示すのと、それを実行できるかは別問題だ。そう目くじら立てるな」

再婚を勧められて睨みつけてくる明石の視線を苦笑で受けて、話を流す。

明石教授はこいつや前の嫁さんを愛してるから、そう簡単には再婚しないだろう。忙しすぎて男女交際してる暇がないとも言うが。もしかしたら、一生このままで居る事を望んでるかも知れんな。

まあ、根本的な解決にはならないまでも、生徒の力になってやるのが教師というもの。

それに、悩みの根っこに近右衛門が居座っているなら、多少の無理を通したところで問題あるまい。

「とりあえず……外泊許可申請書、やるから。何枚か持つてけ」

「あ、許可じゃなくて申請書なんだ」

デスクの上にくくつもある引き出しから、適当に何枚か書類を持つて明石に渡す。

ちよつと期待はずれみたいな反応をされたが、まあこれは仕方が無い。夜間の外出がかなり制限されているこの麻帆良において、外泊許可というのは生徒の安全に関する非常に重要な事なのだ。

つまりは、寮の外に居られたら監視出来なくて困るから駄目、という意味なんだが。

「流石にそこまでの権限は無いからな。ここに日時と行き先を書いて、こつちにフルネームとハンコだ。ふざけて書いたり偽の申請出したりしたら二度と通らないと思え」

「はい。お父さんのためだもん、これくらいは真面目にやるよ」

「まあ、何だ。頑張んな」

「はい。それじゃ、ありがと沢ちゃん！」

沢ちゃん言うな！

〈同時期／魔法世界　ヘラス　帝都〉

>分身／美剣陽子

「待て。ちょっと、待ってくれ、総督……今、何と？」

頭痛を堪えるように左手で顔の半分を覆い隠しながら、神妙な顔で眼前に座る新オスティア総督の顔を見据える。

魔法世界はヘラス帝国の帝都でこちら側の重鎮との連絡役を担っている俺のところには、ヘラス第三皇女たるテオドラへの表敬訪問という形で、時折人が来る事がある。

その中の一人。

嘗て紅き翼に同行しながらもナギ・スプリングフィールドを見限った男であり、現在ではメガロメセンブリア元老院でも相応の地位  
新生オスティアの総督に就いている、クルト・ゲーデル。

この男が寄越した情報は、俺が頭痛を覚えるには充分すぎる話だった。

曰く

「『サウザントマスター千の呪文の男』の息子が、近く……恐らく来年の頭ごろ、麻帆良に行きます」

だ。

「ありがとう、理解した……つまり、連合は俺達に喧嘩を売るわけだな？」

「ち、違います！」

何が違うのか、説明してほしい。

そもそも俺の本体が麻帆良に居るのは、スクナの騒動によって連合に向けられた疑念の真実を調べる為の潜入捜査が目的だ。

表向きは西の監視者だが。

そこへ、英雄の息子を放り込む？

何か？ そっちから問題を起こすから関東魔法協会を潰せとでも言うつもりか？

個人的に言えば、潰れても一向に構わないが。

「本来であれば、彼は魔法学校を卒業次第こちらに呼び、元老院直下の組織で見習いとして研修を受けるはずだったのです」

「だろうな……で？ それがどうして麻帆良行きなんてことになった？」

どう考えたってそんなのを旧世界に放置する意味がわからん。

『英雄の息子』という立場は、当人にもその周囲にも必ず影響を及ぼす。それも、本人が自覚を持った上で周囲がそれ相応の対応をしない限りは、悪いほうに。

だからこそ、魔法の秘匿という意味合いも含めてさっさと魔法世界に取り込んでおかねばならないはずだ。



「それが、研修内容を示す卒業証書の内容をすりかえられてしまったのです」

「……」

「恐らく、完全なる世界と癒着のあった派閥を警戒したのでしょうが、厄介な真似をしてくれました」

「じゃあ、何か？ 手前の下部組織に裏切り喰った、と？」

苦い表情で面目ないと口にするクルトを見て、相変わらず連合使えないなと思ってしまう。

まあ、嘗て使えた事など一度もないのだが。

「彼が卒業したメルディアナ魔法学校の校長は彼の祖父で、ナギを通じて麻帆良の学園長とも懇意だった様です。恐らく、結託して書類を細工したのでしょう。本来ランダムに内容を設定するはずの卒業証書に細工があるなど表沙汰に出来る事ではないので、決定を覆す事が出来ませんでした」

悔しそうなクルトではあるが、俺にはもう一つ聞いておかねばならないことがある。

更に追い詰めるような事になるかも知れんが、今後抱える厄介ごとの根源くらいは知っておかねばならん。

「あー……そいつ、歳はいくつだって言ってたっけか？」

「ご子息と同じくらいですね。今年で8歳のはずです」

止めようよ、俺。これ以上聞いたら絶対後悔するって。

脳裏にそんな天使のささやきが聞こえた。悪魔は何を囁くのかと思ったが、何故か悪魔ではなく『仕事』と書かれた襷を付けた鬼が

現れた。

いやいや、それは駄目だ。任務の為に、家族の安全の為に、傍に置かれる爆弾の実態は把握せねばならない！

どうやら、俺の中には誘惑よりも義務感が先に立ってしまつらしい。

悪魔よ！ 俺の中の悪魔よ！

出てきて『もうこいつら殺っちゃっていいんじゃない？』とか囁いてくれ！

返事がない、ただの妄想のようだ。

をゐ！……はあ。諦めるしかないのか。

「……それで、そのガキは麻帆良で何をやらかすんだ？」

「卒業証書には……『日本で先生をやること』と表示されたそうです。かなりの大騒ぎをしたそうで、メルディアナの殆どの人材がそれを知っていました」

……… 本当に、聞かなきゃよかった。

く旧世界 イギリス某所く

>?????

私の前には今、鉄と革で出来た、重厚な扉がある。  
この扉の向こうに、私が会いたい人がいる。

「よ……よし、いくわよ」

ときどきする胸を押さえながら、大きなドアの把手を握り、カ一杯に引つ張る。

けれど、結局両手で引つ張らないと微動だにしないほど重いドアだった。

「ん、ん~~~~~!!」

全力で引つ張ってもゆっくりとしか開かなくて、何とか私の体を通るくらい開いた所で急いで中へ滑り込む。

大きな音を立てて扉が閉まり、来客を知らせる鈴が鳴った。

店内はとても暗かった。窓は内壁ごと暗幕で隠されて、外の光は入らない。中の明かりも、幾つか置いてあるランプだけ。

けれど、その光がどこか暖かくて、妖しくて、不思議な気分になっていく。

まるで、絵本の中から魔女の家が抜き出されてきたみたいで、そんな雰囲気だった。

「いらつしゃい……」

奥のほうから声が聞こえてきて、周りを見ていた視線をそちらに向ける。

そこには、大きな揺り椅子に座った人と、真っ黒なローブで全身を多い、唯一露出する顔さえ白い仮面で多い尽くした人がいた。

「……そろそろ失礼しよう」

「そうかい」

なんて声を書けたら良いかわからなくて固まっている間に、二人は会話してこっちに歩いてきた。

急いで道を開けると、座っていた人が軽々と扉を開けて、ローブの人を見送る。

「彼らに宜しく」

「ああ、それでは」

それだけ言うと、ローブの人は扉の向こうに消えていった。座っていた人は扉を閉めると私のほうに向き直る。

「さて、リトルレディ。私の店に、どんな用件かな？」

「貴方が、このお店の……“猫の陽だまり”のご主人ですか？」

「……ふむ」

どこにも書かれてない店名を出すと、その人の表情が少しだけ変わった。

そして、とても強い目でじっとこっちを見つめてくる。

「ッ！」

「ふむ……どうやら、興味本位で来た訳ではない様だな」

さて、と呟いて揺り椅子に戻った店主が、改めてこっちを向く。

「この店に何をお求めかな？ 発動体から魔法書、触媒、魔法薬……」

「お金が出せるならクレムリン宮殿だって売ってあげよう」

「く、クレムリン!？」

「正確にはコピーの魔法球だが」

あ、そうよね。ビックリした……って、そうじゃなくて！

「その！ お客じゃなくて、お礼を言いに来ました！」

「……礼？」

最初は痛そうな顔、次に困った顔をする店主に、深々と頭を下げる。

「ね、ネカネお姉ちゃんに新しい足をくれて、ありがとうございまして！」

そう言つと、店主は『足？』と呟いて上を見上げる。

覚えてなさそうね。まあ、5年前の事だし……そう思ってたなら、店主が手を打ち合わせた。

「……ああ、五年位前に石化の呪いを貰った娘のことか」

「お、覚えてるんですか？」

「ああ。義手や義足を売るような人はあまり居ないし、両足、それも膝から下だけを作ったのはその娘しか居なかったからな」

そう、私の故郷の村が悪魔に襲撃されたとき、ネカネお姉ちゃんは悪魔の攻撃からネギを庇つて、両足を無くしちゃった。

呪いの大部分は一緒にネギを庇ったスタンさんが負ってくれてたから、石化は治癒魔法で直ったんだけど、碎けてしまった足はちゃんと治すのは無理だった。

そこで、ネギのおじいちゃん……メルディアナ魔法学校の校長先生が、元の体とそっくりで自由に動かせる魔法の義足を手配してくれた。

おかげでお姉ちゃんはそれまでと変わらない生活が来ている。

私がこんな隠れ家みたいなお店に来れたのは、その義足の取扱説明書に書いてあった住所を辿ってきたから。

ちなみにネギは暢気に眠りこけてたから、その時の事は何も知らない。

まあ、あいつは悪魔の襲撃が自分のせいだと言ってたし、教えてたらまた落ち込みそうだったからでもあるんだけど。

「それで、その後義足に不都合はないか？」

「あ、はい！ もうバッチリ！」

「そうか。体のバランス変化や成長に伴う調整なんかのアフターサービスは万全だから、いつでも言いつけてくれるように伝えてくれ」  
「ありがとうございます！」

もう一度、深く頭を下げる。

「あの……それと、一つお願いが……」

「ふむ。弟子入りかな？」

「えっ？」

まだ何も言っていないのに、お願いの中身を見抜かれてビックリした。

そんな私を見て、店主はにっこりと微笑む。『君のような歳の魔法使いが、一人で来るときの用事等一つしかない』と。

「見習いの課題だろう。遠慮することはない、立派な後進を育てる事もまた、魔法使いの楽しみなのだから」

す、凄い……圧倒されるほどの大人の余裕。

元々、お姉ちゃんの義足が凄く高度な魔法を使っているのはわかってた。だから、できたら弟子入りしたいな、くらいに思ってたんだけど。

少なくともこの人は、凄くて、良い魔法使いだ。

「それで、課題の内容はどんなのだった？」

「はい！ う、占い師です！」

「そうか。それなら、机と椅子とクロスと……幾つか道具も貸してあげよう」

「そ、そんな！ 大丈夫ですよ！」

「いやいや」

なんだか凄く過保護にされた気がして断ろうとしたら、店主は凄く重たそうな思いを込めて首を横に振った。

「暮らすつてのは、物入りだ。手持ちのお金は大切にしなさい」

「……はい、わかりました師匠」

なんだか凄く含蓄のありそうな声色だったから、素直に聞くことにしました。

すると、店主改め師匠が不思議そうな顔をします。

「ん？そういえば、弟子の名前をまだ聞いてないな」

「え？……あ！」

いつけない！ そんな大事な事を忘れるなんて！

……ネギのボケボケが伝染ったのかしら。

「あ、アンナ・ココロウアです！ アーニヤとお呼び下さい師匠！」

「そうか、アーニヤか。可愛い名前だな」

真正面から頭撫でられると、照れくさいわね。

「普段は偽名で通してるんだが……折角の弟子だ。本名を教えてやるっ」

そう言って、師匠はまたにつこりと笑った。  
ど、どついう、意味かしら？

「俺は分身1009号。本体の名前は『総合病院』アウトリエだ」

この後。

私は多分、生まれてから死ぬまでで一番になるだろう悲鳴を上げて。

弟子になって最初の仕事は、パニックになって壊してしまった陳列台の修理と掃除だった。



## 平穩、侵食、包囲網（後書き）

学園内での鋭太郎を書きたかったんですが、かけてるかな？

そして薬味坊主包囲網、順調に展開中。

かなり前のフラグを回収。ネカネとのコネフラグでした。

足が『ヘルマンの石化』喰った上で『砕けた』んだから、治ったとしても相応の障害が残ってるのが自然ですよ。

でも原作184時間目で歩くどころか全力疾走……何故に！？

木乃香（潜在）レベルの完全回復呪文の使い手がいたのか？

だとしたら何故村の連中は治ら（さ）なかったのか？

怪し過ぎます。なので、鋭太郎が開発してたスペシャル義足ってことで！

ちなみに、鋭太郎はナギの故郷が襲撃を受けた噂を聞いていますが、石化して魔法学校の地下に安置されてる人々のことは知りません。

アーニヤなら助けを求めるかもしれませんが、邪魔が入るでしょう。

次回、ジジイの陰謀（出鼻挫かれ編）と鋭太郎の日常（交流編）をメインに据えようかと思います……。

くおまけ

「沢ちゃんせんせ……」

「だから沢ちゃんって言うな。で、どうした佐々木」

「な、悩みが思いつかなくて……」

「こん！（鋭太郎が机に頭突きする音）

「……」

「えう……」

「……………あのな、佐々木」

「ぐすっ」

「悩みがないってのは、日々に満足してて幸せだって事なんだから泣いてないでいつもみたいに能天気になつとけ。それでいいんだから」

「そうなの？」

「そうだよ。わかったら回れ右！ クラスの連中と笑って来い！」

そして能天気は加速する……？

## お知らせ

お世話になっております、作者の深海です。

まことに勝手ながら、本作はこれ以後の話を大幅に路線変更して改定する事を決定いたしました。

リンク切れなどによるサーバー負荷を避けるため、没部分は削除せず、新規執筆した話を上書きと言う形で対応していきたいと思っております。

更新に関しては活動報告にてお知らせする所存です。

読者の皆様には大変ご迷惑をおかけいたしますが、なにとぞご理解の程をよろしく願います。

字数補填

子供先生、襲来！（前書き）

原作主人公、麻帆良に到着。

独自解釈に基づく改変があります、ご注意ください。

子供先生、襲来！

>明日菜

二年の三学期に入って、少し経った。別に、何があったってほどのことはなかった。鋭太郎が少し忙しくなったこと以外は。

学校の勉強はあんまり面白いものではないけれど、騒がしい教室の中に居るのは悪い気分じゃない、と思えてる。

そんなある日の朝。いつものように早朝のランニングと訓練をして、家でご飯を食べて、木乃香たちと一緒に電車で登校している。いつも通りに、歩けば丁度5分前という時間で麻帆良学園中央駅に着いた。

電車に乗るべき時間は調べられていて、それに間に合うように家を出されるのだから、当然の事ね。

「明日菜、明日菜ー」

「何よ、木乃香」

私、木乃香、刹那に咲夜。いつもどおりの面子で学園の道を歩く。そんな中、片手に占いの本を持った木乃香が話しかけてきた。

「今日、明日菜の運勢あんまり良くないんよー。気いつけなあかんえー？」

「それ、本の奴？ それとも木乃香の？」

木乃香が占いの話を持ち出すときの定型文を返す。

内容が勝手に書き換わる魔法書だとしても言うならともかく、普通に売ってるような大衆向けの占い本なら、不特定多数にあてたもの

だから当たったり外れたり色々だ。

けれど、木乃香自身が“私を”占ったのなら、それは本気で注意しないといけない。そういう力を使って、運命を垣間見たということだから。

「本や。でも注意するに越したことないやろ？」

「まあ、そうだけど」

別に、本の奴を全然信用してないかと言えば、そんなことはない。旧世界における占いというのは、つまり統計学を使っていることが多いから。

誰にでも起こりうる事が、そろそろこの人に来るかもよ？という警告だと思えば良いから。

「このちゃん、ちなみになんて書いてあるん？」

「『運命の出会いあり』やて」

「『最悪（ね／やね）』」

リアクションが刹那、咲夜とハモる。

普通の人になら良い話だけど、私達にとっては全然違う意味があった。

「あはは、言うと思った」

「当たり前でしょ。今以上に濃い顔ぶれなんて要らないわよ」

そんなことを話しながら歩いていると、後ろのほうが騒がしくなる。

滑り込みグループの到着か　ん？

たったったったった……

私達を追い越していく、滑り込み高速移動組。単純に足が早い人、路面電車で飛び乗った人、それに捕まったスケートボード乗り、ハーレーと思しきアメリカンな単車で突っ走る移動購買部……最後のはちよつと違うか。

そんな中、七曜よりは少し大きい程度の、コートを着た小さな子供が私達の隣で速度を落とした。

(( ( ( …… は ? ) ) ) )

四人の心がシンクロしたのがわかる。それでも登校の足を止めないのは、鋭太郎たちの訓練の賜物ね。

って言うか、何、このガキ。

大雑把過ぎる強化で垂れ流しの魔力、布を巻いただけの体より大きな杖、背中一杯のバックパックには何を詰めてるのか、一步ごとにガチャガチャと煩い。

一般人の視点なら『私、不審者です』。裏側の視点なら『魔法使いです』と、全力で宣伝していた。

第一、ここは女子校エリア。性別的にも年齢的にも、こんなガキが来る様な場所じゃない。

全力で、関わりたくない相手だった。

だというのに、そのガキはイラつく笑顔でこちらを見上げてくる。

そして。

「あの、あなたたち……失恋の相が出てますよ?」

爆弾を、投下した。

> 木乃香

空気の凍りつく音が、私には聞こえた。

この子、何考えてるんやろ。

開口一番『失恋の相』……明日菜とせっちゃんとか咲ちゃんが物凄く黒いオーラ出しようよ？

でも、全然気づいてないみたいや。

まあ、叶わぬ恋やいうんは明日菜たちもわかつとるんよ？

しゃあないやん。恋する相手が相手や、勝ち目なんてあらへん。ただ、諦めきれないだけなんよ。

だからこそ、それを誰かに言われるのは……それも、初対面の相手になんて。

怒るんが当然や。

「それも、かなりドギツイのが……」

それなのに追い討ちをかける男の子。命知らずやなあ。

「黙りなさい」

「ぴぎいっ!？」

あ、明日菜が男の子の頭をアイアンクローで捕まえて持ち上げ、そのままわき道の建物の影に持ってい



く。

その後ろを歩くせつちゃんは、男の子を凄い目で睨みながら神剣が擬態した小刀を抜こうとしてる。

「明日菜、その壁に押し付けて」

咲ちゃんは……そのアイスピック、何処から持って来たん？

持ち手のところにはBAR:CHACHANEって焼印が入ってるんやけど。

「は、放して……降ろしてくださいー！」

謝るでもなく不満げな男の子。ますますヒートアップする三人。

あかんなあ。このままやったら、この子の人生ここまでや。おっ

ちゃんが経緯聞いたら嬉々として事件を闇に葬りそうな気がするえ？

「えうっっ……は、は……」

！？ なんや？ 男の子の顔の周りに、魔力が……っ、武装解除

！？

「はつくちん！」

吹き荒れる烈風。それは、明日菜たちの服を脱がす……様なことにはならず、路地の奥へと吹き抜けてった。

クシャミになる寸前に、咲ちゃんが顔の向きを無理矢理変えたからや。

「……汚い」

危なかったな。まさかクシヤミに魔法乗せるなんて思わなかったえ？

でも、男の子は表情を変えてない……無意識、やろか。だとしたら、随分助平な子やね。

「うつうつうつー！」

「斬る」

「……一突きで、逝かせてあげる」

「あぶぶ……！ た、助けてタカミチー！」

今にも抹殺に動こうとしていた三人が、男の子の口から飛び出した名詞で一時停止や。

その名前は、私たちも良く知ってる人の名前だったからやね。

「ネギ君！ こんなところに……って」

振り返ると、物陰から大通りのほうに目を向けるような形になる。で、その路地の出口を塞ぐように、いつも留守する担任の先生が立っていた。

「高畑先生、おはようございます」

「あ、ああ。おはよう、近衛君。ところで、沢村君たち。これは……どういふ状況なのかな？」

私が挨拶すると、戸惑いながらも返してくれる高畑センセ。けれど視線の先は、男の子を締め上げる女子中学生三人という風変わりな光景に釘付けになってはるわ。

「どういふ、って聞かれると、ちょっと困るんですけど……」

「あえて言っなら、乙女心を粉碎した少年を処分しようとする状況、

ですね」

「タカミチ助けてー！」

「あゝ……沢村君たち。この子が何をしたのか知らないから、あんまり強く言えないのは解ってるけど。その子は学園長が呼んだ子でね、時間もないし、放してくれると嬉しいんだけど……」

そう言つて、高畑センセは左の手首を　そこにくつついてる腕時計を指し示しながら見せ付ける。

その仕草に私も自分の時計を見た　あかん、もう始業5分前やん！

「……解りました。咲夜、刹那もいいよね」

「仕方ありません。他者の目のあるところで過激な真似をする訳にもいきませんし、何より」

「遅刻厳禁。怒られるのは嫌」

高畑センセの説得で三人が引き下がると、男の子が勝ち誇つたみたいな顔をして、明日菜をまた怒らせた。

苛立ちをそのままじゃ気がすまなかったのかな、明日菜が高畑センセに男の子を投げてぶつける。

「ぶぎゅー!?」

「つと……悪いね、三人とも」

「ええ、本当に」

「明日菜さん、遅刻します。急いで」

「解ってるわよ！」

もう男の子と高畑センセには目もくれず、大急ぎで教室まで走った。

視線に注意しながら認識障害と瞬動まで使つて時間ぎりぎりに滑

り込んだのに

「皆さん。今日のHRと1時限目は新しい先生の準備が遅れているので開始が遅れると、沢村先生から連絡がありましたわ」

携帯電話を置んだ委員長から努力が無駄になったと知らされる事になってもうた。

> 鋭太郎

「ああ、雪広か？ そうだ、俺だ。すまんが、クラスの連中に暫く自習するように言ってくれないか。新任の先生の準備がまだ出来てなくてな……ああ、静かであれば内職も許可するから……悪いな」

ピッ。

イラ、イラ、イラ、イラ、イラ、イラ……

電話口では表に出ないように抑え込んでいた苛立ちが、抑えられた分だけ反発力を得て溢れようとしている。

「なあ、近右衛門……全身不随と意識不明とどっちが良い？」

「か、勘弁してくれんか……」

滝のような汗と目の幅涙を流す近右衛門と同じようなやり取りをするのも、これで20回目になるだろうか。最初は手指の骨折と足指の骨折だったんだが……次は死体が残るのと残らないのだろうか。妖怪モドキが相手でも、殺しはやりたくないんだが。

何故、そんなやり取りをしているのかといえば……今日この日こそ、クルトやアーニヤに聞いたナギ・スプリングフィールドの息子、ネギ・スプリングフィールドが麻帆良に就任する日だからだ。いや、それでは説明不足だな。順を追って話そう。

まず、件の少年は2 Aの担任を務める教育実習生として着任する為、7時過ぎにこの場で挨拶をすることになっていた。

その後、職員室で簡単に面通しをして、会議や授業内容などの説明・引き継ぎを行い、8時半には教室で生徒に挨拶をする……と、そういったスケジュールが組まれていたのだ。

前日のうちにやっておくべき事を何故か当日、就業直前に行うと言っかなりの凶行、もとい強行スケジュールだが、近右衛門達が教師としてのネギ・スプリングフィールドを求めていると考えればスルーできない話ではない。迷惑だが。

基本的に誰の手にも負えない2 Aなら、最初から無能でも普通に見えてしまうからそう言う意味も有るかもしれん。

まあ、今頃考えても意味の無いことだ。この予定は遵守されていないのだから。

だからこそ今、俺はこうやってストレスを溜め込んでいる。

現在時刻 8時37分。肝心の子供先生は現れないだけでなく、連絡一つ寄越していない。

いくらなんでも遅すぎる。麻帆良の広さを考慮して、6時半にはタカミチが駅まで迎えに行っているはずなのだがこれは一体どういうことなのか。

駅と学園長室までの道のりから逆算しても6時45分には駅に着かなければならないのだから、最低でも昨日のうちに来日を済ませ

てどこかで一泊しているはずだ。未就労かつ子供なのだから、二日三日かけて時差ボケを取ってから挨拶に来る、という余裕ある旅程を組むことが出来たはず。

出来たはず、なのだが……これほどまでに遅れているという事実を考えると、今日来日すると言う強行軍だと言う可能性も否定できないな。

何れにせよ、遅れの連絡を寄越さないととなるとネギ少年の人格評価を大幅に下降修正しなければならぬと見るしかない。

クルトに聞いたネギ少年の内申は『優秀な成績で実力を示し、飛び級で主席卒業する天才』だった。

だがアーニヤが愚痴るネギ少年の評価は『父親の幻以外は何も見ようとしてないボケ』だった。

人伝、しかも色眼鏡越しのものしか情報が手に入らないクルトよりも、同じ目線の高さで最も身近に見ていただろうアーニヤの言葉だからこそ、相応の覚悟というか、心構えはした“つもり”“だった”。

この状況を見るに、それは甘かったと自戒する他ない。

戦場を渡り歩いて、この歳になって、まだ覚悟が甘いなどということがあるうとは。

慢心していたのだろうか。それとも、ネギ少年とやらは俺の覚悟を飛び越えるほどの傑物なのか。

……遅刻する時点で、後者は信じたくないな。あるいは、あの赤毛バカの息子だからこそそのブツ飛び方なのだろうか。どちらにしても迷惑極まりないな。

「……葉巻でも始めてみようかな」

苛立ちを何とか紛らわせたくて、逃避策をポツリと口にした。  
ニコチンやらタールやらの弊害は、俺なら全く問題ないし……

おや、廊下を走る音……重量感やテンポを考えて、成人男性  
タカミチか。

「お、お待たせいたしました、学園長！」  
「おお、高畑君……！」

必死の形相で学園長室に駆け込むタカミチ。その脇には、荷物の  
ように抱え込まれているコートの少年が居た。

珍しく息切れを起こしているタカミチが、少年を降ろして一人、  
近右衛門に近寄る。

「学園長。ネギ君を、お連れ、しました」  
「おお、待っておったぞ（遅いぞ、高畑君！ もうちょっとでワシ、  
殺されるところじゃったわ！）」  
「（やはり……）あ、ネギ君、僕はこれで失礼するから……」  
「あ、はい」

退出するタカミチの背中を見送る少年の頭は、20年前を髣髴と  
させる赤毛。なるほど、良く似ている……考えが浅そうなところも、  
人の心や空気が読めなさそうなところも。

「ウェールズから来ました、ネギ・スプリングフィールドです。修  
行の為、先生をしに来ました。よろしく願います」

魔法とは言わなかったが、『修行って何の？』って聞かれたらど

うするんだろうな。

そして、遅れたことに対する謝罪その他、一切なし、と……

「ふおつふおつふお、待っておったよネギ君。しかし先生とは、厄介な課題をもらったのう。しかしまずは教育実しゅ「ごほん！」う……の、前に、じゃ」

近々右衛門？ 何事も無かったかのように話を進めるんじゃないよ。命、いらないの？

「ごほ、ごほ。ん、ん！ ネギ君。その前に、じゃ。麻帆良からあちらへ送った予定表には、本当に目を通してくれたのかね？」

「えっ？」

「アレにははつきりと7時15分までにここへ来るようにと書いておいたはずなのじゃがのう？」

「そ、それは……」

「先生というのは、生徒の模範となるべきものじゃ。それが、理由もなく遅刻するようではお話にならんぞい？」

「あう……」

うつむいて黙るネギ少年。ここまで言われて、まだ謝らないのか……！！

何と言つか、消せないテトリスをやらされてるような心境だ。我慢しても我慢してもブチギレ一直線。

「それについて、何か言う事は無いかの」

「でも、それは……」

「言い訳等するでない！ どれほど遅れたと思っておる！」

「っ……」



「既にここに居る沢村先生や高畑君を含め、多くの先生と君のクラス生徒が迷惑を被っておる！」

そうそう、駄目な子供はしっかり教育しないと……“大人”、失格だよ？

「社会人にとって時間は命じゃ！疎かにするような者には、何一つ勤まらんと心得よ！」

「あ、あうあうっ」

未だに謝罪一つないネギ少年……まさか、自分の悪さが自覚できてないとも言うのか？

善悪の線引きすら出来てないとなると、魔法使い以前に人間としての教育に問題があると言わざるを得ないんじゃないか？

「（こ、これでいいかのう？）」

「（まあ、絞り方としては悪くないな。一度緩めて、謝罪するようなら良いんじゃないか？）」

こっそり念話で問いかけてきた近右衛門に同じく念話で返す。

率先して謝るのは日本人独自の文化でネギ少年に馴染みが無いのはわかるが、これほどの大ボカに対して謝らない事は許せるようなことじゃない。

“郷に入っては郷に従え”という言葉があるのだ。

「……儂からは以上じゃ」

「あうあう……こ、ゴメンなさい……」

涙目で謝ってはいるが……信用できるのか？言わされた、って感じがする。

……本当に七曜と同じ年なのか？いや、人外の子供は比較対照にならないか。

「うむ……では、先生としての仕事の話に移ろうかの」

その、『いいよね？』みたいな視線は止める。

「まずは教育実習生という事になる。今日から3月までじゃ」

「は、はい、よろしくお願いします！」

いきなり目を輝かせるネギ少年。やはり先ほどの謝罪は信用出来なさそうだ。

嫌な事……いや、アーニヤの言によれば父親以外のことはすぐ忘れる体質なんだろうな。

「この修行は大変なことじゃ。本来は大人の仕事である先生を、僅か9歳の君がやらねばならんのじゃからの」

なんとも緩い緊張感。恐らく近右衛門とネギ少年の性格のせいだな。

「駄目じゃったら、故郷に帰らねばならん。チャンスは二度とない

……それでも、やるかね？」

「はい、やります！ やらせてください！！」

やる気充分、といった様子だが、だつたら遅刻するなよ。

「では、遅くなったが紹介しよう。此方の沢村先生が君が担任になる2年A組の、副担任の先生じゃ。君の指導教員でもあるので、解らない事があつたら彼に聞きなさい」

「沢村鋭太郎だ。よろしく頼む、少年」

「は、はい。ネギ・スプリングフィールドです」

ネギ少年に挨拶し、握手。魔法障壁を感じたが、黙っている事にしよう。魔法関係者としてこの少年に関わる意思が無いことは、既に近右衛門に伝えてあるし。

少年がタカミチの代わりに2 Aの担任になる、という話には、当然反発の声がある。

その中には俺を担任に格上げしては、と言うものもあったが、養護教諭や生活指導／相談などの専門色の強い役割を兼任している事もあり、その話はお流れになった。

ではタカミチをそのまま担任にしておけばどうか、というと、出張のし過ぎで担任の役割をあまり果たしていない、俺に押し付けてるじゃないか、という話になり、タカミチの降格に近い扱いで終わった。

つまり……時期が中途半端な事もあってA組の担任になれる教師が居らず、じゃあ新参者に投げてみよう、という大人の事情があったのである。

勿論、近右衛門がそうなるように教師の数を調整していた事は言うまでも無いが。

「では、早速教室へ向おうか。生徒が待っているのね。学園長、よろしいか？」

「うむ、時間を取らせてすまんのだ」

「……では此方へ、Mr・スプリングフィールド」

「は、はいっ」

仕事だからな、呼び名くらい変えるさ。

道中で名簿を渡したり、これまでの英語の授業の進捗を教えたりしている間に、教室の前に付く。

本当ならもつと時間をかけて理解させるところなんだが……時間が無いんじゃない。

ネギ少年が廊下側の窓から教室を覗いているが、中はそこそ静かにしているようだ。

クラス名簿で顔と名前を再確認したネギ少年は、意気揚々と扉を開き……振ってきた黒板消しを障壁で受け止めた。

ネギ少年の頭上5センチほどのところで浮遊する黒板消しに、クラス中の視線が集う。

その視線を受けて初めて黒板消しに気付いたネギ少年は、何を思ったのか態々加速させて自らの頭に叩きつけ、実にわざとらしく『いやーひっかかっちゃったー』などと喚いた。

俺はチョークの粉がスーツにかからないように風上に逃れていた。

そして再び踏み出したネギ少年の足を、一本のロープが引っ掛け、ド派手に転倒。上を注意させてからの、見事なコンボである。

「へぶうつ！」

どれだけ勢い付けて踏み出したのか、何故かそのままごろごろ転がっていくネギ少年。その進路上に飛来する、吸盤。ばしばしと音を立てながら少年のスーツに引っつく矢の群。

「あああ……ぎゃふんっ！」

教壇に激突しようやく止まったネギ少年が、ふらふらしながら起き上がったところへ

「う、うん……」

「ごわんっ！」

「あべっ!？」

銀色の金ダライがクリティカルヒット。ネギ少年の意識を刈り取った。

……嘘だよ、縦に当たったならともかく、金ダライにそんな威力があつて堪えるか。

見事に嵌った出オチにクラスは大爆笑。だが、すぐにその芸人（違う）が自分たちが想像していたのと違う生き物であることに気付くと、大慌てで介抱に向かった。

「え、子供!？」

「きみ、大丈夫!？」

「ごめんごめん、沢ちゃんが先に入ってくると思ってたから……!」

こら、春日。俺なら良いのか。で、沢ちゃんって言ふな。

ちなみに俺に罾を仕掛けた場合、軒並み回避した後に最後の金ダライだけ喰らうのがお約束になっている。全回避だとひたすらエスカレートするもんだから。

尚、水などの後始末が大変な罾に関しては、一つに付き課題プリント10枚課すと言ったらやらなくなつた。

「沢ちゃんせんせー、この子誰ー？」

「沢ちゃんって言うな……新任の先生だ」

【ええっ！？】

「とりあえず自己紹介してもらってから、席に戻れ。もう時間もないしな」

俺の言う事は“とりあえず聞く”を貫いてくれる生徒達を席に座らせて、ネギ少年を教壇に立たせる。

何か緊張してるが、仕事なんだからしっかりやれよ？

「今日からこの学校でまほ……」

まほ？

「英語を教えることになりました、ネギ・スプリングフィールドです。3学期の間だけですけれど、よろしくお願いいたします」

まほ、なんだ。魔法か？ 魔法と英語をどう間違えるんだ？

そして何より、他人に魔法を教えられるほど、魔法を理解できているのか！？

表情に出さないように苦労しながら苦悩する俺を他所に、静寂に包まれる教室。

ああ、これは嵐の前の静けさだ。

【カワイーーーーー！】

あつという間に教壇に群がり、質問攻めだの抱き潰しだのにかか  
る生徒達。

もみくちやにされながら何とか質問に答えていくネギ少年だが……  
『数え10歳』を『10歳』と答えるのは卑怯ではないか？

「おい、マジなのか？」

長谷川が呆然としながらも訊ねてくるが、事実である以上突き放すしかない。

「実に残念だが……マジだ。非常識“の”話だ」

咲夜と親しくなった事で無意識にこつち側に踏み出していた長谷川には、『非常識』の正体を教えてある。何せ精神干渉耐性が極めて高い体質なものだから、放置すると廃人になる恐れがあったし。それでも身近に『目に見える非常識』が出現する事に耐えられず、一抹の望みを託してきた、と言ったところだろう。元より期待はしていなかったと溜息一つで諦めをつけた長谷川は、別件があるから耳貸せとスーツの袖を引っ張った。

「咲夜たちが朝からやたら黒いんだ……何とかしてくれよ、父親だろ？」

「黒い？ 朝はいつも通りにご機嫌だったんだが。何かあったのか？」

「知らねーけど、教室に来たときは近衛以外の3人が無差別殺人でも始めるのかと思ったくらいだ」

「ふむ……まあ、様子見してからだな」  
「頼むぜ」

席に戻る長谷川から、娘達に視線を移動させる……なるほど、確かに厳しい表情をしてネギ少年を睨んでいる。

長谷川。すまん、アレは無理だ。酔い潰れた源先生を家まで送っていったときなんか、アリカが『貴様は乙女心を何と心得るか！』とか言う時のオーラだ。

ネギ少年、一体何をしたのやら。知ったところで、庇いもフオロも一切しないが。

その日の授業は、ネギ少年が遅れに遅れたこともあつて質問攻めだけで終了した。



## 子供先生、襲来！（後書き）

近右衛門の陰謀（出鼻挫かれ編）。挫いたのはネギ坊主本人というオチ！

今回のシーンについて、ちょっと原作1時間目の流れをチェックしてみよう。

ネギ、駅に到着。『僕も急がないと遅刻する時間だ』が、7時50分。（ネギの懐中時計。同時に、始業ベル10分前の放送あり）しかし、道中明日菜とトラブルを起こし、制服を吹き飛ばし、明日菜がジャージ着替え、学園長室に殴りこんで抗議、抗議、抗議。（全部スルー）

源先生接触事故。

明日菜の新しい制服を用意、着替えるのを待つて教室に向かう。

明日菜、居候の件でネギを突き放し教室へ先行。

教室では委員長が黒板に『先生が来る……』と書いていて、恐らく来るまで自習、だったと推測できる。

教室に現れた明日菜たちだが、周囲のリアクションは始業ベルの後丸々一時間居なかったようには見えない（普通におはよーとか言ってる）

ネギ坊主自己紹介、9時10分……どーなってんの？ 始業ベルいつ鳴ったの？

始業ベルから実際の始業まで1時間もあるわけがないのに。

そんな訳で、ネギは遅刻した事にしました。

なお、拙作におけるこの時点でのネギの性格を、深海は「原作通り」と見ています。原作1巻2巻における、直接的な魔法以外の事

象に対するネギの姿勢や対応から読み取ったイメージを組み込んで  
いる、つもりです。

例えば、叱られても（謝るべきときに）謝らない、というのは明  
日菜に魔法がばれるまでの脱がしやら何やらに対する姿勢からです。

早速ネギ叩きになってしまいましたか……一先ずは、ご勘弁を。

子供先生の初日、後編？（前書き）

お待ちせしました……登場した途端スランプに陥らせるとは、ネギ  
恐るべし。

## 子供先生の初日、後編？

> 鋭太郎

ネギ・スプリングフィールド就任初日の放課後。

俺は珍しく職員室に居て、苛立ちを隠しきれずにいた。机の上でウェーブする四本の指を制御する事を諦めて、溜息と共に机の上の白い束を見る。

俺自身の書類仕事は精々が代理授業の引継ぎか備品管理程度だし、第一そんなものはとづくに処理済だ。

では何なのかと言えば……ネギ少年に書き方を教えなくてはいけない各種書類である。

近右衛門がオックスフォードを出たと言って周囲を誤魔化しているが、当然ながら嘘である為、ネギ少年は“教員がやるべき事”を何一つ知らない。

恐らく、いや間違いなく生徒から見た“先生”像……授業をするだけの存在だと思い込んでいるのだ。

『何故そんなことが断言できるのか？』

フツ、良い質問だ。ならば、粗方予測済みである事を承知で、この沢村鋭太郎、あえてここで公言しておこう。

……“生徒の”終業時間と同時にネギ少年が蒸発したからだよ。

あの小僧、他人の注意とか指摘とか過去の反省とかそいつたものを無視するつもりらしい。

必要最低限の常識も身につけていない餓鬼を表社会に送り出した

メルディアナの校長には、後で念入りに呪いをかけておくことにする。

具体的には、倦怠感と微熱と筋肉痛関節痛が延々と続くのにひたすら肉体労働がしたくなるような奴を。

まあ、それは後の事だ。今はネギ少年だが……奴に聞くのが一番早い。

そう思つて、左胸の万年筆に触れ、静かに念話の魔法を紡ぐ。

「（てす、てす。此方は沢村鋭太郎。本日（の機嫌）は雷雨なり。

近衛近右衛門は至急ネギ・スプリングフィールドの所在を伝達せよ）

」

「（ふおっ！？）」

「（繰り返し返す。近衛近右衛門は至急ネギ・スプリングフィールドの所在を伝達せよ）」

「（ネ、ネギ君なら時計塔近くの広場に居るようじゃ。泊まる所の話があるから、タカミチ君を迎えにやっとするよ）」

あっさり吐く近右衛門。どうせ遠見の魔法で監視してるんだろうと思つたが、どうやらビンゴのようだ。暇な奴。

「（仕事が残ってるから職員室に寄る様、伝えて欲しい）」

「（う、うむ。わかつたぞい）」

使い走りが上層部にいると、こう言うときに役に立つな。実力と脅迫材料と良心の呵責を無視できる精神性が必須だが。

タカミチが何時頃迎えに行ったのかは知らないが、近右衛門の言い方ならまだ合流はしていない筈。最寄の時計塔からなら所要時間は大体10分程度だ。さて何をして待つか……。

>ネギ

うう、今日は失敗ばかりだったなあ。初めての授業も何にも出来なかったし……はあ。

後でタカミチに相談しよう。

「それにしても、なんだよ。あの子たちの態度。僕は親切で教えてあげただけなのに。ひどいよ、まったくもう」

授業中も席に座ったまま凄い目で睨んでたし。なんていう子なんだろう。

そう思いながら、渡されてるクラス名簿を開いて顔を捜す……あれ？

「三人とも、同じ苗字……？」

僕を睨んでいた三人の女の子。彼女達の無表情な写真の下に書かれた名前には、二つの共通した文字が並んでいた。

姉妹、なのかな。そういえば、あの先生も……

……顔写真を見てると何となく仕返しがしたくなって、手持ちのペンで顔に落書きをした。ふーんだ、いい気味。

「ネギ君！」

「えっ？ あ、タカミチうわっ？」

なんだか凄く真剣な顔をしたタカミチは、いきなり僕を肩に担いで走り出す。

声を掛けても全然返事してくれないまま、職員室まで連れて行か

れて、ソファに乱暴に下ろされる。

「あううつ、痛いよ、何するのタカミ」

けれど、僕の抗議の声は途中で止まった。強い力で頭を掴まれて、後ろにいるタカミチのほうを向いていた僕の顔が無理矢理前に戻されていく。

強引な腕を辿ると、そこには

「仕事を放り出してどこをほっつき歩いてたんですか？ Mr. スプリングフィールド」

笑顔の悪魔がいた。

慌ててタカミチのほうに振り返ろうとすると、掴まれている頭に力が入れられて動けない。

「この話はわたしの仕事であり、あなたの仕事のことです、Mr. スプリングフィールド。高畑先生には関わりの薄い事ですよ」

「うつ、ご、ごめんなさい」

「謝れば済む話ではありません。あなたの勝手に浪費した時間は二度と戻らないのです」

うつ、助けてタカミチ。

「他者に助けを求める前に自らを省みなさい！」

「ひう！」

突然の大声に体がすくんで、手に持っていたクラス名簿が床に落ちちゃった。

さっきラクガキしたばかりのクラス名簿が床に撥ねて、その顔を晒してしまう。

「あ、あうあう」

「……………貴様は」

地獄の底から響くような声が、僕の体を縛り付ける。  
怖い、怖い怖い怖い……！

「生徒を誘って、楽しかったか？」

「だ、だってこの子達が……！」

この子達が、僕を睨むから……！

そう思っていると、沢村先生は僕の足元からクラス名簿を拾いながら、言葉を紡ぐ。

「これに至ったあなたの心理状況など知ったことではありませんが、物品の意図的な汚損と誹謗中傷は立派な犯罪です。器物損壊……違<sup>きき</sup>うな。この場合は文書等毀棄罪と、侮辱罪ですか」

……………！

> 鋭太郎

油の切れたブリキ人形のように動きを止めるネギ少年を前に、俺はラクガキされたクラス名簿を軽く調べる。

名前の読み仮名や鳴滝の姉妹など、タカミチが書いたと思しき注



釈のほか、明日菜、咲夜、刹那の三人に角やらヒゲやらブーイングがマジックと思いき太い線で描かれている。三人の闇堕ちの原因はネギ少年で間違いなさそうだな……

これがあればこのガキを麻帆良から追放できる、とか思った俺は外道なのだろうか。多分近右衛門がごねると思うが。

「沢村先生！」

「何か間違っていましたか？」

「いえ……ですが、彼はまだ10歳で」

「それを言うなら、Mr.スプリングフィールドは教育実習生で、私は指導教員です。年少者だからと問題の在り処を問わないわけには行きません」

「うつ……」

間を取り持とうとするタカミチだが、正論は全てこちら持ちなので反論はさせない。

それに、問題のネギ少年は“犯罪”と言われた瞬間から微動だにしない。かと思えばガタガタ震え出して

「う、うわああああー！」

「ネギ君！」

ああ、一目散に逃げ出した。タカミチも反射的に三步踏み出したところで留まり、こちらを振り向く。蒼白と言って良い酷い顔色に、俺はさっさと行けとばかりに手を振って机に向った。

指導教員として俺が追いかけるシーンなのかもしれないが、それは顔見知りのタカミチに譲っておこう。責めておいて今更と思うし、流石に面倒だ。

纏めてあつた机の上の書類は、ばらして元あつた収納場所に戻した。少なくとも今日の内は、あの子供に見せる事はないだろう、と。

「失礼しまーす！沢村先生とネギ先生いらっしゃいますか？」

丁度片付けが終わつた頃に、職員室の扉が元気良く開いて声が響く。目をやって確認すると、こつちを見つけた朝倉が手を振つた。さて、何事か。

「Mr・スプリングフィールドなら先ほど外に出られたが、何か用か？」

「あちゃー、入れ違いかあ。いやー、みんながネギ先生の歓迎パーティーを用意してるんだけどさ、肝心の先生が居ないから手分けして探してるんだよね」

なるほど。ハイテンションとお祭り好きとお人好しが標準装備のあいつらならやりそうな事だ。

尤も、主賓は先ほど現実から逃走したから空振りになりそうなのだが。

「ちなみに、教室の使用許可は取つたのか？」

「あ、その辺は大丈夫。ちゃんといいんちよが取ってきたから。あんまり騒ぎ過ぎるなって言われたけどね」

「そうか」

流石の手回しだな、雪広。これで「やべ」とか言うようなら即刻中止させるところだ。

まあ、折角準備しているというなら空振りさせるのも少し気が引

けるな……よし、教えてやるか。

「朝倉よ。実は、学園長がMr・スプリングフィールドの寢床について説明をし損ねていてな」

「え？」

「学園長室で張ってあれば、そのうち来るはずだ」

「なるほど。解った、行ってみるよ。リークありがと！」

「感謝するなら、先ず“沢ちゃん”を止めんか」

「ちゃんとしたとこなら沢村先生って呼ぶから見逃してよ。良いじゃん、可愛いつぱいよ？」

どうやら2 Aでの俺は沢ちゃんで確定らしい。男のプライドとか完全無視か。

早足で去る朝倉を見送りながら小さく溜息をつくとき、隣で源先生に少し笑われた。

~~~~~

家に帰ると、娘三人はすっきりした風な表情で、反してエヴァが半端なく落ち込んでいた。

「エヴァンジェリン、何があつた？」

「鋭太郎……！！」

声を掛けると、まるで少女のように いや、実際見かけは10歳の少女だが 俺の胸にしがみ付いて嘆き出すエヴァンジェリン。一度も見たことがないエヴァの姿勢に俺は仰天した。

「わたしが、わたしが200年もかけて作った人形全部、全部……」

…っ、うつうつっ！」

全部、どうなったのかは良くわからないが、俺同様にエヴァの泣き入れにオロオロして謝罪の言葉を探している娘達の様子を見るに、八つ当たりで壊してしまったのだろう。

普段尊大な態度を取っていても本質的には600年前とさほど変わらない無垢な少女の感性が残っているのだろう、思い出して口にするだけで流す涙を増やすエヴァンジェリン。ヤバイ、可愛い。

とりあえず抱き寄せて宥め、涙は受け止めてやる。しかし、エヴァの涙を見るのは……『闇の福音』になる為に出かけていったときにココに殴られて以来か。

そこへ食卓の方から七曜がやってきた。エヴァの泣き声に片眉を上げたが、すぐにいつもの表情で俺の膝に手を置く。

「父」

「何だ」

「夕飯」

「すぐ行く」

エヴァはしがみ付いたまま嫌々してるので、そのまま抱っこで移動することにする。羨ましそうに娘達が見ていたが、泣かせたのが自分達だからか文句は言わなかった。

食卓には既にアリカやエレナがついていて、茶々丸とブリジットが給仕していた。少し離れた場所に、種族的な都合でテーブルにつけないココとモリスンが居る。

俺は定位置……アリカと小夜の間になる席に腰掛ける。エヴァは抱っこしたまま。

「エヴァンジェリン、何故そこに居る」
(いやいや)

沈黙と不動を主張したエヴァに、眦を吊り上げたアリカが手を伸ばす　って、痛い痛い！

エヴァを掴んでいるつもりなのだろうが、爪が俺の胸とか腕とかを引っかいてるから、普通に痛い。

「ええい、離れよ！」

(いやいや！)

「コレは妾の良人じゃ！」

(いやいやいや！)

アリカは妻と言う立場を前面に押し出し、エヴァはいやいやで突っぱねる。

以後、暫くループでお待ちください……。

↓ 従者のコメント。

「あんなマスター、初めて見るわね」

「まあ、やってることはさほど珍しくありませんが」

「……録画しますか？」

「面白そうだからやってみたら？」

↓ 子供のコメント。

「あれ？　何でエヴァちゃん幼児退行してるん？」

「いじめっこ」

「わ、私だけがやったみたいに指差さないでよ！」

「一人で過半数」

「うっ！」

「私も……っ！」

「咲夜……貴方は一昨日添い寝して貰ったのでは？」

「刹那は昨日ギュッてしてもらった」

「……………」

「そのほか

「何か、笑うところなのか怯えるところなのか良くわからないクポね」

「くえー！」

「え？ 扱いが軽い？ 同意クポ」

「……」

エヴァVSアリカと、何故か勃発した刹那VS咲夜に終わりを告げたのは、やはり小夜だった。

「ご飯ですよ？」

ただ一言発しただけで、二つの喧嘩が一瞬で収まった。

何と言つか「言う事聞いてくれないと泣いちゃいます」オーラが場を包んで、逆らえなくしているのだらう。

尚、エヴァは俺の膝の上でこの日の夕飯を取り、後日茶々丸が記録した画像で弄くられる破目になる。

子供先生の初日、後編？（後書き）

本文に登場した文書等毀棄罪というのは、仕事で使う書類などを意図的に駄目にする行為に対する、實在の法律です。多分。

クラス名簿つてのは当然学校の備品で、ネギ坊主の私物じゃないんだからラクガキは駄目だろう。だったら器物損壊か？と思って調べたら、書類はこっちの罪に当たるそうなので出してみました。

器物損壊は基本的に持ち主が訴えなければ問われない親告罪ですが、こっちは公務所で使う文書だと他人の訴えでも裁かれる罪なそうです。（公用と私用で別の罪なんだそうな）

その場合、三月以上七年以下の懲役……。

公立学校なら『公務所』に当てはまるんですが、私立の麻帆良だとうんなんだろう。

深海は別に法律家でもなんでも無いただの中卒野郎なのでこの辺に関するツツコミは無しの方でお願いします。

内服薬様にご指摘を頂きました。

私立の学校は『公務所』じゃないので公用文書に当てはまらないそうです。

また、タカミチの注釈のことも考えると所有格がネギに移っている場合も考えられる為、私用としても適用されるのは難しいとか。

侮辱罪のほうも、基本的にネギ以外は見ない、持たないのクラス名簿には公然性が認められにくいいため、やっぱりダメなんだそうです。

やっぱりダメですね、にわか知識でこっぴつの持ち出しでは。
内服薬様、ありがとうございます。

まあ……いずれにしても、9歳児のネギを訴えるのは最初から無理なんですけどね？

ええい……役に立たんツ！（前書き）

序盤の各種イベント……うちのオリ主が関わると消滅するんですよ。

ええい……役に立たんツ！

> 鋭太郎

前代未聞の子供先生就任から数日。勤まる訳が無いと最初から放り出している俺としては、“余計な事”さえしなければ、教師として未熟だろうが何だろうが放置しても良いと思っている。指導教員としての職務はまた別の話だが。

子供先生に犯罪だと指摘した翌日は流石に意気消沈していたが、父親をダシにした発破とA組の励ましで持ち直したようだった。興味が無いのでそれ以上触れる気は無い。

そう、余計な事さえ、しなければ。

「あなた達、こんな可愛い子を独り占めなんてずるいわよねえ？

ここは先輩に譲らない？」

「だつ……誰が譲りますかこのババア！」

「なあんですつてえ！？」

「双方それまで」

俺は今、目の前の女生徒へ殴りかかった雪広の拳を左腕で受けて、迎え撃とうと動きかけていたウルスラの制服を着た女子高生の首に右の手刀を突きつけていた。

格闘選の間合いに入ろうとする二人の間に横から飛び込む形で。

「さ、沢村先生……？」

「雪広。何があったのかは知らないが……いや、想像はつくんだが、激昂して拳に訴えるのは文明人として、淑女として如何なものか」

「うっ……申し訳ありません」

とりあえず暴力に訴えようとしていた雪広を引き下がらせて、ウルスラの生徒に向う。一年か、二年か……大分前に、初等部の保健室で見た顔がちらほら。

この場で言及する必要もないので、さっさと話を進めてしまおう。

「さて……説明してもらおうか」

「は、はい」

「いや、違う」

高校サイドの代表らしき生徒が進み出ようとするのを、手で制する。そして視線を、未だ呆然と突っ立っている子供先生へ。

「そこで呆けている Mr. スプリングフィールド」

「あのっ、そのっ、えと、これはっ！」

「必要以上の口は利かなくて良い。この場で何が起きてどうトラブルに発展したのか説明を」

誰も本気にしていないことだが、この子供先生は見習いとはいえ教員である。中立的な立場から客観的な事実を纏め、公正な判断を下すなり、判断を仰ぐ為の情報を整理して報告するべき立場なのだ。

最初に対立する二者から事情聴取するとそのままトラブルに逆戻りしかねないし。

「え、えと、あの、まき絵さんと亜子さんが怪我させられて職員室に来て、校内暴力があるって言われたのでここに来たらクラスの皆様さんが虐められて。その、止めようとしたら……」

「ああ、もついい」

俺は、コレでもかと言わんばかりに盛大に溜息をついた。明らかに、何もわからないまま行動して騒ぎを助長させたのが理解できなかった。

生徒達は何も言わないが、俺が呆れと怒りの混ざった感情を抱いている事は理解したようで、戸惑いと怯え　一部に、子供先生を責める事への避難を向けている。

勿論、俺はそんなものに流される事無く業務を遂行するのだが。

早々に子供先生から視線を外し、集まっている2　A生徒（明石、和泉、大河内、佐々木、雪広）から目的の顔を探す。話に出てきた、バカピンクと保険委員。

話の流れから呼ばれるのが解っていたのか、自分から進み出てくれたので少し楽だった。コレも一つの教育の成果、か？

「佐々木、和泉。とりあえず、その“校内暴力”の一部始終を簡潔に説明しなさい」

「ええっ、と。あたし達と、ゆうなとアキラでバレーしてました。ちよっとおしゃべりしながら」

「したら、この人らが来て、場所譲れーて。断ったらいきなり仕掛けてきて」

「力が強いから勢いで転んじゃったりとかで怪我しちゃって……それで、職員室に」

あとは子供先生が言った事と変わらない、と。明石や大河内も頷いて同意しているし、高校生側に確認しても、苦い顔で肯定した。

しかし……これは暴力、なのか？　確かに横暴で実力行使ではあるが、負傷についてはスポーツの枠を出たようなものではない。強引に巻き込むのは褒められた事ではないが、“暴力”と呼ぶには弱くないだろうか。

羽交い絞めにした上でぶつけたとか、複数のボールで滅多打ちに

したとか言っなら話は別だが、どうやらそう言うことではないらしい。ううむ。体格の差がダメージに繋がるのは、対戦の常だぞ？

……まあ、やられた側と言うのは得てして被害を大袈裟にしてしまつものだ。両成敗は確定してるし、言及は保留で良いだろう。

「ふむ。Mr・スプリングフィールドが来る前のことは、大体理解した。では、到着してから俺が介入した乱闘寸前に発展するまでの事を……今度はそっちから聞こうか」

少し芝居っぽく、大仰に振り返る。こういうのは場を支配し続けないと、すぐに混ぜっ返すからな。

やや躊躇いがちではあったが、最初と同じ長髪の生徒が前に出た。

「その、ネギ先生が私たちを止めに来たんですけれど、その。あんまりオタオタしてて可愛かったので、つい。そしたら、その金髪女がボールをぶつけてきたんです！ 私達をオバサン呼ばわりして！」

「同じように私達をお子ちゃま呼ばわりしたでしょう！」

ビシッと指差す女子高生。差されて吠える雪広。こんな若い内から歳の話か、女子ってのは大変だなあ、などと現実逃避している場合ではない。

「止めんか！」

「っっ！」

「高校側が我を失っていたとしても、最初から力に訴えた雪広が悪い」

「そんなっ！」

「客観的事実だ。後、歳の話は自爆だから両者とも今のうちに撤回

しておけ」

女性教員が聞いたら何て言うか、と仄めかせると、殆ど反射の速度で撤回した。それが良い。

後は細かい部分のすりあわせで両成敗すれば終わりだな。

「よし、事態の把握は充分だろう。裁きを下す！」

『はーっ！』

両者の中間に手をかざすと、生徒達が一斉に土下座した。なぜか高校生達も。

意外とノリが良いんだな……まあいい。一人取り残されてる子供先生は、当然無視する。

「先ず、ウルスラ組。後輩への横暴につき、教育的指導！ 年長者としての思慮が足りない。佐々木たちの怪我について、この場で謝罪を。そのほかについてはウルスラの先生方に報告しておくので、そちらの指示に従うように」

「はい。申し訳ありませんでした……悪かったわね」

少し不満げというか不真面目な謝り方だが、怪我の原因と規模を見れば解らんでもないな。

「大河内と明石は無罪放免だが、佐々木と和泉は言葉の持つ印象というものをもう少し自覚しろ。お前達が最初から『高校生とトラブルになっています』といえば職員室に居た先生方が適切な対応を取れた筈だ」

「要は慌て過ぎること？」

「まあ、そうだな。確かに痛かったろうが、その程度の怪我なら今までにも何度かしてるはずだぞ？」

転んで出来た擦り傷で、何でそんな大騒ぎになるんだか。
今回は受け取り側にも問題があったから、軽く良い含める程度で
いいだろ。

「雪広は、わかってるな？ 話の聞きようによつては、お前が暴力
を振るつたと言われかねない」

「はい。申し訳ありませんでした」

「まあ……良いわよ。私達もちょっとはしゃぎすぎてたし」

これで、生徒間のことは処置完了、と。残りは子供先生か。
最初に突っ立ってた場所から一步も動いてないのが腹立たしいな。

「Mr・スプリングフィールド」

「は、はい」

「一方的な物言いを鵜呑みにした拳句、自己の能力と事態を天秤に
かけることも無く独断で首を突っ込み、あまつさえ事態を悪化させ
た……指導者としてあるまじき行為です」

「で、でも、まき絵さんと亜子さんが！」

相変わらず人の話を聞かない奴だな。その場で何があつたのか聞
き出して他の先生方に手を借りる、必要最低限の準備さえしなかつ
た事を注意しているんだが。

「で？ 貴方一人で何が出来たのですか？」

「そ、それは……」

「15歳以上が複数名居る騒動に、9歳の貴方が一人で飛び出して、
何が出来ると思つたのですか？」

「……」

「理解できたなら、職員室に戻ってください」

言うべき事は言ったので、視線をずらす。子供先生に同情染みた視線が向う中、俺は二度、手を叩いた。

「さあさあ、休み時間が終わりだ。午後の授業が迫っているぞ！
走れ走れっ！」

余談だが、午後一の授業（体育）の代理授業でバレーをするための屋上に言ったところ、何故かまたウルスラの生徒達と鉢合わせした。

自習のレクリエーションだで行っていたが、屋上使用許可が無届だったので即刻撤収させたのは言うまでも無い。

>クルト

彼の息子が麻帆良学園に行つて、大体一週間ほど経つたでしょう
か。

その件が含まれた、最初の報告書が届きました。

……少し目を通しただけで、手が自然とそれを伏せてしまう。

「……………空が、青いですねえ」

こんなに陽気なんだから、みんなしんどしまえばいいのに。

「総督！ 帰ってきてください総督！」

「ああ、すみません」

補佐につけている少年に体を思いつきり揺さぶられたおかげで何とか気を取り直しました。体はふらつきますがね。

とりあえず、メルディアナ魔法学校と関東魔法協会は近く何かの理由をつけて公式な精査・処分をする必要がありますね。これまでの卒業生に関しても、こちらの情報網で洗って見ましょう。

彼の子に関しては……どうしようもありませんね。

時代はもう“英雄”を望んでいません。完全なる世界の残党も掃除しましたし、竜種などの被害も生態への影響を抑えるよう安定しています。

ましてや、帝国と再び戦端を開くなどありえない。

私達魔法世界上層部が最も懸念すべき事項は、力尽くでどうこうなる問題ではない。

……本当に、厄介なものを遺していきましたね、ナギ。見事に使い道がありません。

表沙汰になるのを待つて終身オコジョ刑にしてしまうのが一番か……いやいや、何を考えているのですクルト・ゲーデル。貴方は新オスティアの総督でしょう。表沙汰にしないように働きかけるのがあなたの義務です。

………一まず、アリアドネーの業者に良く効く胃薬を発注するところから始めましょうか。

ええい……役に立たんツ！（後書き）

原作でのタカミチは手を出したら負け、と明日菜を諫めていたが、鋭太郎は具体的に両成敗しました。

それだけの話。

何かを封殺した気がするが、対象がわからない。（前書き）

改定第一弾です。図書館島の話は完全削除の方針にしました。

何かを封殺した気がするが、対象がわからない。

> 鋭太郎

何故か中等部校舎に高校生が侵入すると言う珍事から数日の時が流れた、とある金曜日の事。

前触れもなく近右衛門が呼び出すから何事かと思えば、『ネギ教育実習生最終課題』なる封筒をあの子供に渡せとの事だった。

「自分でやれ」

そう言つて突つ返した俺は、何一つ間違っていないだろう。職員一同に何の説明も無く勝手に決めているのだから、それに伴う行動は全て近右衛門が自らの責と努力にて行ふべきだ。

当の子供先生にしても、自分と生徒達の思考速度差を把握できていないのか授業の進行がやや早すぎる傾向があるし、『日本の英語』という特殊な代物に対応できてなくて戸惑つてる部分はあるし、発音は訛りは取れてないしで、教員という枠で見ると使い物にならない。一目でモドキとわかるような状態だ。

そして人格も未成熟。故郷でどんな教育を受けてきたのか知らないが、自惚れで独断専行するわ人の話は聞かないわ注意されても改善しないわ……碌なもんじゃない。

未だに生徒と同じリズムで生活しようとするし、職責を軽く見ているような態度が目にする。『魔法使い見習い以外の自分』というものを何一つ持っていないと言うのが、何より問題だ。

以上の理由により、俺は子供先生正式採用に反対である。故に、予定調和の代行を拒否する事は不当なことではない 理論武装完了。

「そう言わずに持って行ってくれんかの。これでも忙しいのじゃよ。ネギ君のためにも、出来るだけ早く渡さねばならんしの」

「……………」

既に試験まで五日を切っているというのに、よくそんな戯言を口に出来るものだ。

これ以上この阿呆と会話するのは苦痛なので妥協する事にする。

「中身は検めるぞ」

「うむ、かまわんよ」

一言断ってから、封筒を裏返し……………仮にも重要文書が入った封筒をシール止めてどういいうことだ。封蝋とまでは言わんがちゃんと封印しろよ。

だが検品には好都合なので黙って封を開け、中身を見る。

『ねぎ君へ。次の期末試験で、二 A が最下位脱出できたら正式な先生にしてあげる。 帆良学園学園長 近衛近右衛門』

……………OK。人をバカにしてるんだな？

確かに近右衛門はそれができる強権の保有者だが、こういった文書で『してあげる』などという言葉遣いはあまりにも不適切だ。大体において、期末試験で発表されるクラスごとの順位はクラス全体の一科目あたりの平均点というめんどくさい代物だから、英語しか担当していない子供先生が最下位脱出に責任を負えるわけが無い。

コミュニケーションをとって生徒を勉学に前向きにさせる、と言えば担任っぱいかもしれないが、成績向上に繋がるかどうかは別問題だ。

近右衛門が子供先生を強引に正式採用するのは予定調和だろうが、
コレは無いだろ。

腸が煮えくり返る思いを表情に出さないよう注意しながら、その
手紙を封筒に戻し、封筒の状態とシールの粘着力を魔法でちょいち
よいと復活させて、丁寧に着着。

「念のため、言っておくが。成績操作やふざけた小細工をするよう
なら……郎党諸共氷結地獄^{コキョース}まで叩き落す」

絶対命令に等しい宣言を遣し、俺は学園長室を後にした。

思っていた以上に学園長室で時間を取られたが、始業に遅れない
よう余裕を持っていたこともあり、課題の封筒は職員室でも渡せ
ば良いので特に気にしなかった。

きちんと目の前で開封させて小細工が作動したのと『簡単そうじ
やないですか』という職責軽視のアホ発言を確認して、俺は事務仕
事とカウンセリングに専念する事にした。

>エレナ

「まあ、俺個人の印象としては、牛蛙が蝦蟇蛙を生んだ、って
具合だな」

鋭太郎様が近況報告の場である夕飯後の団欒でサウザンドマス
ターの息子について語られた内容は、私たち全員を呆れ果てさせ、先
行きの暗さで頭痛を覚えさせるようなものだった。

事実、知り合いの子供として話を聞こうとしていたアリカ様や興味深げにそれに乗っていたエヴァ様は聞かなければ良かったとばかりに頭を抱えているし、明日菜たちは何か不愉快な目に遭ったのか、聞きたくもないとばかりに怒気を漂わせている。

七曜は話に興味を持たずに無反応、モリスンは明日菜たちに怯えているだけで、ココは鋭太郎様に甘えている。小夜様は木乃香と茶々丸を引き連れて食事の後片付け、チャチャゼロにいたっては落ち込んでいるエヴァ様に茶々を入れたり、話を聞かずにいつも通りの行動をとっている人も居る。

デザートとお茶を出しているブリジットと私にとっても、面白いとは言えない話だった。

そもそも私たちにとって『赤き翼』は英雄や救世主などと言う立派なものじゃない。大戦を引つ掻き回して激化させ、飛び火や残り火の量を増やした疫病神だ。あいつさえ居なければあんな目には遭わなかった、とは流石に言えないが、それでも程度を悪化させた事実に変わりは無い。

そんな疫病神の息子が、唯そうで有るというだけで優遇されると聞くと、心の奥底に良からぬ澱が溜まっていくのを自覚できる。

勿論、その子や木乃香に責任があるとは思っていないし、責めようと思っっているわけでもない。

ただ、都合よく捻じ曲げられている親の功績を何の疑いもなく掲げて七光りにして、それを自覚もせずにあんな返っている姿勢が気に入らない。そして、それを助長する周囲の人間が何より気に入らない。

英雄なんて偶像を見せ付けて何をするつもりなのか知らないけれど、陰謀は早めに消してしまうべきではないだろうか。

突然鋭太郎様の視線が私に向けられ、どきりとする。窘めるような視線に、思考を読まれたかのような錯覚さえ覚えた。相変わらず、とんでもない領域に立っている方だと思う。

「前々から言つてあるとおり、俺は麻帆良の方針には干渉しない。だが、この件は生徒達に被害が及ぶ可能性が極めて高いと見た。事の発展次第では強制介入もありうることに、覚えておいてくれ」
「うむ……場合によっては我らがナギの息子を教育する事も有るのか？」

アリカ様の問いかけに、鋭太郎様は悩むことなく否定の仕草を取った。

「それはあまりにも手間がかかりすぎる上、利点もない。外から人と呼び寄せるか、あるいは」

鋭太郎様はそこで一度言葉を切り、瞼を落とした。

「奈落の底に叩き落とすか、だ」

鋭太郎様にしては過激なその決定は、英雄の息子が多くの不幸を運びかねないと言つ見解の表れなのだろう。恐らくは、かつてアリカ様が呼ばれた『災厄』の名を体現するかのよう。

「では当面は放置するのか？ 聞く限りでは、無自覚に魔法を悪用しそうだが」

「うむ、妾もそう感じる。あまり目を離せるとは思えぬな」

「ああ、そうだな。だから手は打った」

確かに、魔法の中には一度記した文字を任意に書き換えたり、物を思い出し易くするといった不正に応用できそうなものがいくつが存在している。

そういった魔法による不当な介入を懸念されるエヴァ様とアリカ様だが、鋭太郎様は軽く答えて。

「今の話に出た課題の封筒なんだが、仕舞いなおすときに封印に使っていたシールに向こう一月の期限で魔力封印の呪詛を仕掛けておいた。起動は目の前で確認したし、今頃魔法が使えなくなった事に気付いててオタオタしてるだろうよ」

決定的な対抗手段を提示した。確かに、魔力が封印されていればそれらの不正は不可能だ。

マジックアイテムの流入には厳しい規制があるし、アリアドネー教授の肩書きも持つ鋭太郎様の前でそんなものを使えば発覚しないわけがない。

この地の脆弱な魔法使いに、簡易とはいえ鋭太郎様が掛けた呪詛を解除できると思えない。

どうやら私たちはもう暫く平穏を味わえるらしい。そう思って隣を見ると、同じような結論に達しただろうブリジットがこっちを見て微笑んでいた。

>ネギ

最終課題は最下位脱出かぁ。ドラゴン退治とか攻撃魔法の取得とかと比べたらずっと楽そうだな。

それに、僕は立派な魔法使いになるために先生の修行してるんだから、これも魔法で何とかすれば良いんだよね。

ようし、使えそうな魔法を……って、あれ？

な、なんで、なんで？

なんで、魔法が使えないのー！？

> 咲夜

寮に戻った私は今、千雨を誘って大浴場に入っている。

ゆっきりのんびり入れるのは好きだし、千雨のストレスも和らげておきたい。

だから、少し煩いのも我慢。だけど。

「あいつら、馬鹿じゃねえの……」

「馬鹿で確定」

少し離れた場所で騒いでいる、委員長を始めとした馬鹿の群れ。

一体何を、と気を向けてみれば、部屋の取り決めが未だ決まらずホテル暮らしだという新米担任を自分の部屋に引き込んで調教する権利を争奪中らしい。判定基準は母性が如何とかで乳房の大きさを争っているとか。理解不能。

何より、そんな権限は始めから存在しない。だから無駄に騒ぐ委員長達は馬鹿。疑問符不要の確定事項。

「……だよな」

心のどこかでまだA組が常識の中にあると信じたがっている千雨。さっさと見限れないその優しさが哀しい。

頬を引き攣らせる千雨の横顔を見ていると、ふと何かに気付いたように此方を向いた。

「つーか、“これ”」

「？」

そして、むくれた顔で私の胸を見て、手を伸ばし、鷲掴みにする。独特の感覚が背筋へと駆け抜ける。

父様ならともかく千雨に刺激されたところでちっとも嬉しくないが、そのまま乱雑に揉みしだかれると声を堪える事も難しくなってしまう。

「んっ、ふっ……ち、ちさ、め」

「何なんだよこのサイズはよ」

「あふ……や、いやぁ……」

「ウエスト私と変わんねえのにバストが長瀬以上ってどういうことだ、おい」

意図的に大きくした訳でもないのに糾弾されても困る。あと、あんまり乱暴に揉まれると少し痛い。

……それ以上に快感を覚えていると言う事実は無視する。私は同性愛に走る気はない。

「この、この、この……!」

「や、だめ……あ、くうっ!」

………もっど、と言い出しそうになるのを抑えるのは大変だった。

“それ”から響く鬼のような重低音の声を聞いた私以外の全員が、全身を震わせて飛び上がった。

「さ、沢ちゃん!？」

『正解だ。なお、この通信はサウンドオンリーであり、覗き行為では無いことを主張しておく』

私が持ち出したものの名前は、携帯電話。防水型だから心配ない。そして通話相手はA組副担任の、父様。ハンスフリーでスピーカー出力。

『話は聞いた。こんなデキの悪い阿呆なデマに踊らされるとは、貴様らそれでも中学生か？ あ？ クラスの解散も小学校への編入も出来るわけがないだろうが。そんな事で貴様らを編入させられる連中の迷惑も考えられないのか』

【うっ！】

『この程度のデマに流されるなど、情けないにも程があるぞ。少しは頭を使え、頭を』

全く、と呆れ果てた様子の父様。一部にまるで反省していない顔があるけど、これ以上は知らない。

『それと、言うておくことがある。中学生に留年はないが、問題行動を起こせば退学という処分が下されるという可能性を忘れるな』

そこまで言われれば、平気な顔をしていた早乙女ハルナの顔も青くなるのだから。

何かを封殺した気がするが、対象がわからない。（後書き）

というわけで、深海は原作準拠をほぼ完全に放棄し、図書館島編もイベント発生前に潰してしまう事にしました。

一応ネギを残す形にして春休みを挟み、修学旅行編に移行します。

機人少女の休日（前書き）

改定前の奴ですが、棄てる理由が特に無い事に気付いたので復帰させました。

機人少女の休日

>茶々丸

「どうかな、茶々丸。ロリボディの調子は」

「はい……機能的には問題ありません」

ハカセの問いかけに、自己判断プログラムによって出された結論を返します。

今の私の体は、10歳相当の大きさに調整された、スぺアボディ。

いつもの体はオーバーホールを兼ねたバージョンアップの為、研究室に安置されています。

「機能的には？ 珍しいね、茶々丸がそんな言い回しをするなんて何か不満が有ったりする？」

「はい。ボディのサイズが、些か小さすぎるように感じます」

私の答えに、ハカセは不思議そうな顔をします。

「そうかな？ 同じ性能なら、コンパクトなほうが良いと思うんだけど」

「ですが、用途に対する最低条件の大きさを満たせないのであれば、それは『過ぎたるは尚、及ばざるが如し』というものではないでしょうか。このままの大きさですと、お屋敷に戻っても炊事や洗濯が困難になると思われます」

私はマスターのサポートのほかに、沢村家の家事手伝いを行っています。ですので、最低でも一般的な家財や設備の大きさに対応で

きる、成人女性の平均身長程度は確保していないと仕事に差し支えてしまうのです。

それに、超包子の給仕をすることもありますから、あまり小さなボディでは……。

「ああ、そつか。キッチンとかの大きさも考えなきゃダメなんだっけ……ゴメンね茶々丸、気が回らなくて」

「いえ。ハカセの技術力に対する向上心と自己顕示欲については理解していますので、ご理解いただけるならそれで大丈夫です」

「……言うようになったね、茶々丸」

ハカセの笑顔が引き攣っているように見えますが、どうされたのでしょうか。事実を伝えたくもりなのですが、何か不備が有ったのかもしれない。要検証としてこれまでのやり取りを保存しておきましょう。

「ん、とりあえず今動かせるボディはそれだけだし、先生とエヴァンジェリンさんには連絡しておくから、ちよつとしたお休みだと思っで楽しんでよ」

「お休み、ですか？」

ガイノイドである私が、休暇を取っても良いものでしょうか。

そんな私の考えなど解っているといわんばかりに、ハカセは指を一本立てて諭してきます。

「そう、お休みよ。いつもと違う視点でいつもと違うことをすれば、AIにも良い影響が出ると思うしね」

「わかりました。ありがとうございます、ハカセ」

「あ、新しい装備、最低でも一回ずつ使っておいてね。データ取るから」

「はい、ハカセ」

メンテナンスのときにいつも交わされる言葉を最後に、帰路につきます。途中、工学部の方々や弟 開発者が違うので従弟と呼ぶべきでしょうか 達に挨拶をしながら。

そして工学部の建物の外に出ると、そこには……

「七曜さん、どうなさったのですか？」

「迎え」

甚平姿の七曜さんが立っていました。服装の好みが家長や小夜さんに似ているのか、授業のない日は和装でいる事が多いようです。親しいご友人が少ないのか、あまり外に出ない方なのですが……態々私の迎えに来られずとも。

「 買出し依頼の、ついで」

そう言つて七曜さんが手渡してきた紙には、買い物リストが書かれています。品物から、マスターのご要望だというのが良くわかります。

「そうでしたか、ありがとうございます。では、私はこのまま商店街に向かいますので……」

「 同行する」

お先にお戻りを、と続けるはずだった私の言葉を遮って、七曜さんが宣言します。

そして、何故と問う前にその続きを、呟くように告げられました。

「 虫除け」

ほんの少し……アイカメラの映像を的確に再生できる私が比較してもほんの少し、頬を赤らめて視線を外している七曜さんを見てみると、主機関に熱が籠るようです。

……永久保存フォルダに今の視覚映像データを確保します。

「迷惑？」

返事が遅かったせいでしょう、七曜さんは窺うように此方を見て、問いかけてきました。……このデータも保存しましょう。

ともかく、外観的には非力に見えるこのボディ、確かに一人よりは誰かと一緒に行動するべきであり、七曜さんなら無用なトラブルを撃退する時間が省けるでしょう。

「いいえ。よろしく、お願いします」

ですので、同行をお願いすることにしました。

商店街に着き、リストの品々を買い集めていると周囲の皆様から温かな視線を向けられている事に気が付きました。

普段と違うボディなので最初は戸惑われますが、本体整備の為の予備ボディである事を説明すると納得され、暖かな視線を向けられています。

……何故でしょうか。

斜め後ろで超鈴音謹製・圧縮空間買い物袋を持っている七曜さんに視線を向けますが、これと言って反応はありません。彼の場合、見知らぬ他人の視線など気にしない、ということもありますが。

疑問を抱きながらも買い物を済ませ、沢村家のお屋敷に戻ります。
幸い、無用なトラブルは起こりませんでした。良いことなのに、
何故か駆動システムが重く感じた私でした。

「お帰りなさい、茶々丸さん」

「はい、ただいま戻りました、小夜さん」

「七曜もね」

「ただいま」

橙色の和装に身を包んでいる小夜さんが、お屋敷に付いた私たち
を出迎えてくれました。

そして、荷物を置く為に手早く奥に消えてゆく七曜さんを見送る
と、小夜さんは口元を隠して意味深に微笑みながら、そつと、私の
耳元に顔を寄せられて。

「デート、楽しかったですか？」

「……」

ななな何を仰るウサギさん。いえ小夜さん。

確かにこのボディサイズなら七曜さんと同年代に見えなくもない
ですし、仮にもガイノイドである私と少年の七曜さんが二人だけな
らデートと呼んでも差し支えないかも知れませんが、私たちはあく
までも買い物に出かけていただけで……

「くすつ。御夕飯までまだ時間がありますから、ゆっくりしててく
ださいね」

私の反応など何でもないようにスルーされ、「葉加瀬さんから聞
いてますから」と言い残して奥へ行ってしまう小夜さんの背中を見

送るしか出来ない私。

はっ！

まさか商店街でのあの視線も、デートだと思われていたのでは……？

だからあんな、一定以下の年齢の少年少女が二人きりで居るのを見守るような温かい視線を向けられていたのでは！？

そんな、私はロボットですからそんなことは……！

結論の出ない思考の渦に囚われて混乱した私は、中々戻らずに心配させてしまったマスターにハリセンで叩かれるまでその場に凍り付いていたそうです。

サイズダウンの影響で給仕としての仕事ができなくなってしまった私は、夕食の支度が出来るまでの時間を地下のレーベンスシウルト城で慣熟運転と装備の確認にあてることにしました。

マスターたちも訓練がてら付き合っていただけなのです。

「……やはり、科学はさっぱりだな」

そのマスターは、ハカセが用意した変更点リストを投げ出すように咲夜さんたちに手渡し、溜息をつきました。

渡された咲夜さんたちは、興味津々でそれに目を通していきます。

新型の人工筋肉や人工皮膚、関節の変更によって外観の質感を更に人間に近づけ、同時に触覚センサーを細分化。

頭髮に用いられている放熱繊維を改良したものに交換、これにより髪型の自由度を広げる。

転移換装システムの実装。それにとまなう、下腕換装式近接・射撃戦装備、触手型中距離格闘兵装・テナクラード、遠隔誘導小型浮遊砲塔・ビット、魔力式飛行装置等、外観的に常時装備が困難だった新規兵装の搭載。

各種センサー・兵装のベースアップ。

魔力供給システム・魔力電力変換システムの高効率化。

……そして、特殊な装備による、『女性型』^{ガイノイド}としての、存在意義の強化。

どなたが言い出してこれを搭載する事になったのか、是非教えていただきたいのですが。

「ん、簡単に言うと、女の子っぽさが上がって、武器が増えて、空が飛べて、長く動けるようになった、ゆう事かな？」

「ええ、語感から感じるのはそんなところですね。ですが……」

木乃香さんが纏め、刹那さんが肯定しながら……やはりということです。

「この最後の奴って、アレよね？」

「ええ、恐らく」

「アレね」

「？」

明日菜さん、刹那さん、咲夜さんと伏せて仰られています、その、何度も言われてしまうと恥ずかしいのですが……

そして、一步離れた場所で紙を回されるのを待っているために内容を知らないまま疑問符を浮かべている七曜さんに、木乃香さんが近付いていきます……え？

え、ちょ、ちょっと待ってください木乃香さん！ 貴方は何を！？ 何故そんな面白そうな笑顔なのですか！？

「この姉？」

「あんな、七曜ちゃん」

いや、何を告げようとなさってるんですか！？ そんな、やめ

「茶々丸ちゃん、えつちいことが出来るようになったんやて」

「人工女性器搭載？」

ああ……爆弾が爆弾に投下されてしまいました。連鎖です、誘爆です。

あまりの恥ずかしさに、両手で顔を覆って背を向けることしか出来ません。

「このちゃああん！？」

「七曜！ あああんたもそんなドストレートに言うんじゃないわよッ！」

スパパァン、と小気味の良い音がして、木乃香さんと七曜さんが呻き声を上げているのを、背中で聞きます。

うつ……違うんです、私が望んで付けて貰った機能じゃないんです。

恥ずかしさで小さく固まっている私に、マスターの足音が近付いてきます。

「あゝ、茶々丸」

「……」

「とりあえず、新兵器の実験を試みたらどうだ？　良い具合に、モニターが立候補した事だし」

「……解り、ました」

マスターの指示に従い、転移換装装置を起動します。右腕の肘から先が長剣になり、左腕の肘から先が銃器に。そして背中に飛行翼とテンタクラーロッドを一对ずつ展開し、周囲にビットを展開。

現状、私が展開できる最も重武装な状態です。ビットの同時制御にメモリとエネルギーを割いてしまうので、長時間の展開はまだ困難ですが、試運転には問題ありません。

「目標、七曜。任務は撃墜だ。しっかりやれよ、茶々丸」

「任務了解。遂行します」

マスターの指示で最終セーフティが解除され、私はこれまでの恥ずかしさを振り切り、七曜さんに向かって飛び出しました。

手を出すな、というマスターの一喝で明日菜さんたちが下がっていくのを確認しながら、先ずビットを七曜さんの視界から外すように散開させます。

左腕の機関銃で牽制しつつ接近し、直前で逆噴射、後ろ上方へ宙返りの体を取りながら弾幕。飛行翼に内蔵されたマイクロミサイルもばら撒きます。

「ッ！」

気によって強化された反応で弾幕を掻い潜り防いでいた七曜さんが、ミサイルを見て表情を硬くするのが見えました。

ですが手は緩めません。ビットによる多方面からの熱線攻撃を追加しながら、一度高空まで退避します。

そして、適度な高度を取ったら反転、爆煙の中に見える七曜さんの影に突撃します。

ミサイルと熱線によって生じた爆煙は銃弾が突き抜けることで視界を開かせていき、その中から両手を体の前で交差させた防御体制の七曜さんが僅かに姿を見せました。

右腕の長剣を一閃。跳び退って回避されましたが、ビットによる追撃と銃弾で動きを制限し、もう一度長剣で切りかかります。

回避不能距離だったのですが、剣の腹に触れることで軌道を変えさせられてしまい、空振りで大きな隙を作ってしまいます。

即座に床を蹴り、飛行翼の姿勢制御機構を使って七曜さんのの上を取りながら体を捻り、更に斬りつけました。七曜さんはそれを守り受け流したりしながら、私の顔を見つめています。

「振動剣」

「正解です」

告げられたのは、長剣の正体でした。先ほど受け流されたときに気付かれたようです。

返答と一緒に、メインカメラに仕込まれたレーザー発振器を起動させます。起動から発振までの僅かなチャージ時間に視線から逃れられますが……

「追えます」

「ッ……！」

発信中に頭を振ることで、回避された方向へ薙ぎ払います。床に焦げた線が引かれますが、そのライン上に七曜さんの体はありませんでした。

ですが、避けた先にはビットからの攻撃が雨あられと降り注ぐので、七曜さんは反撃に移ることも距離を取って仕切りなおす事も許されません。

このまま攻撃を続ければレーザーや銃弾でも充分にダメージを与えられる隙が生まれるでしょう。ですが、私はあえて動きを制限されている七曜さんに、三度の突撃をします。

機関銃を単発の砲に換え、ビットの攻撃サイクルを上げて動きを縛り、必中を確信した一撃を見舞います。

七曜さんはあえてビットの攻撃に身を晒して砲の直撃を防御し、衝撃で後ろへ吹き飛びますが……飛行翼の推進力が後退速度を上回り、長剣を突きつけるに至りました。

「……私の、勝利です」

あまりしたことのない私の宣言に、七曜さんは頷いて脱力しました。

そして、私の目を見て、頭を下げます。

「ごめんなさい」

真剣に、謝られてしまいました。

……何に対しての謝罪かが思い当たった途端、恥ずかしさと一緒に

失態を理解します。そして、七曜さんが一切反撃行動を取ろうとしなかった理由も理解して、更に恥ずかしくなっていました。

「どうやら、先ほどの攻撃は全てお仕置きだった、と、捉えられているようです。」

「いえ、その、決して恥ずかしくなかったから仕返しをしたというわけではなく、あくまでも装備の試験運用で……」

「ごめんなさい」

何を言っても聞いて頂けそうにないので、困り果てた私はマスターに助けを求めようと顔を向けますが、そこには

「こ、このちゃああああん!？」

氷柱に封印されている木乃香さんと、それを見て泣いている刹那さん、何とか魔法を解除しようとする明日菜さんと咲夜さんが居て、それをみて上空から高笑いをしているマスターがいらっしやいました。

「……どうやら、自分の暴走を受け入れない訳にはいかないようです。」

「こういうのを、若さゆえの過ちというのでしょうか。ロボで2歳でも適用されるでしょうか。」

機人少女の休日（後書き）

明らかに、思考／嗜好が暴走してますね。何やってんだらう。
俺、バカジャーナー？　パイとかお見舞いされるレベルだよ。

以下は、今回登場した茶々丸新装備の説明です。

と言っても、一部を除き原作で出てきたのをくつつけてるだけです。

テンタクラーロッド：名前はガンダムF91の敵メカ、ラフレシアの触手から。あつちは125本もあるけど、こっちは2本だけ。実態は学園祭で出てきた茶々丸シスターズの背中についてたスタンガン。

ビット：皆大好きオールレンジ攻撃兵器。これも学園祭で超が使ってた奴。ゼンマイ巻きの儀式で溜めた魔力エネルギーで稼動。ビームが撃てるよ！

飛行翼：学園祭の茶々シリーズ空戦タイプとか田中さん空戦タイプにくつついてたアレ。ミサイル搭載はオリジナル要素。

下腕換装型剣&銃：魔法世界編序盤でネギを守るため突如茶々丸の服（の袖）を突き破ってた、アレ。高周波ブレードはお約束。余波とかで茶々丸が壊れないように配慮されてます。

目からビーム：ロケットパンチに並ぶヒト型ロボットの約束。
原作でも学園祭時点では搭載されてた。剣&銃で挙げたシーンでも使ってる描写あり。ホーミングレーザーらしい。どちらも左目から

撃つみたいだけど、ひよつとして左目はそれ専用で、茶々丸は右目でしかモノを見てないのか？……いや、流石に立体視不可って事は無いか。

人工筋肉&人工皮膚：柔らかく女の子らしくなりました。水着だつて着れちゃいます。

アレ：……この後テストするらしいですよ？（描写はしませんが悪しからず）

そのほかにも、頭のアンテナが携帯電話として展開したり、魔法障壁発生装置が付いてたり

麗らかな春の一日

> 鋭太郎

特に何の問題もなく土日が過ぎ、期末テストも滞りなく終わり。バカルテットは例年通りに赤点を取り、2 Aは滞りなく定期テスト連続最下位記録を更新した。

いつものことだ。気にする意味など無い。既に6度目となる補習も慣れたもの、ささっと詰め込んで終わらせてしまった。

別に魔法を使ったわけではない。少しばかり手製の香を焚いて精神を刺激し、理解しやすくしてやっただけだ。ブレンド元は市販の香だし、火を使わない電池稼働の香炉を使ったから魔法面でも安全面でも服務規程面でも問題ない。

あれだ、教室に花を飾るのと同じようなものだ。

最終試験に合格できなかったネギ少年は正式採用が見送られ、故郷に逃げ帰った。訳ではなく。引き続き教育実習生として2 A担任を続け、来年度は3 A副担任として『しゅぎょー』を続けるらしい。

確かに最終試験の紙面には『達成したら正式な先生にする』としか書いていなかったから、内容を反故にしたわけではないだろう。屁理屈だが、言うだけ無駄だと割り切るしかない。

まあ、精々来月の修学旅行で菜乃香たちを刺激しないように注意しておいてほしいものだ。

……ふう、茶が旨い。

「また腕を上げたな、茶々丸」
「恐縮です」

洋館の庭に野点の用意がされていて、メイド服の口ボ娘が焙じた茶を着流しの男が飲む。

ロケーションがミスマッチ過ぎるが、仕方が無い。館の敷地を出ると麻帆良側が煩いし、この館を手配したのは俺ではない。茶々丸の服装はエヴァの趣味だ。

補習やら来期の準備やらを済ませた『俺の春休み』の間、存分に平穩を満喫している。

つまり、外界のゴタゴタから隔離した空間でのんびりとナマケモノしている、ということだ。

「ところで茶々丸、エヴァの傍に居なくて良いのか？」

「別命あるまで家長の傍に居るようと、マスターの指示ですので」

エヴァの指示？ 何故に？

恐らく真意は教えられていないだろう茶々丸は、それだけ言っと視線を庭のほうにやって、実に幸せそうに微笑んだ。

その視線の先に何があるか、と言えば……

ぱっぱらぱっ、ぱばぱらぱ、ぱっぱらぱーぱー、ぱばらー、ぱばらぱー、ぱー、ぱー、ぱっ

「きゅっきゅっきゅっ、くえー！ きゅっきゅっきゅっ、くえー！」
「楽しい」

……咲夜の伴奏に合わせて、ノリノリでア ルーダンスを踊るココ

と七曜。

あれは無限ループなのになぜか夢中になってしまふ魔性の踊りだ。しかも無性に楽しくなる上、混ざりたくなるのだ。

三脚で固定されたビデオカメラの横で、長谷川もうずうずしてるし。

しかし何故、あんなことを……いや、おかた鳴き声が「きゅー」だからやってみたかったとか、そんな感じだろうが。

「家長」

「ん？」

どうした、茶々丸。頬を染めて体を震えさせるなんて、高度な自立行動を取って。

「私は今、至福と言うものを学習できた気がします」

「……………それは、よかった」

録画した映像を後で小夜とアリカに見せてやると良いよ。きっと共有できるはずだ。

>千雨

……なんつーか、もう、普通とかどーでもいい。拘るのもアホ臭くなつた。

いや、別にテンプレなトラブルを望んでるとか、そう言うわけじゃない。勘違いするな、平穩無事で波風立たないのが一番だってのは、今も私の信条だ。

ただ、誰かが作った『普通』の概念』に拘る必要が無くなった、ただのただのことだ。

咲夜と出会ってからというもの、私の『普通』は変化していた。だがまあ、考えてみりゃ当たり前だ。『友達も居ない日常』が『親友が一人居る日常』に変わったんだから、『普通』が変わらないわけが無い。変わるのが『普通』なのだから、気にしなけりゃ気付かねえだろ。

だからまあ、今なら解るんだよ。『普通』だの『常識』だのなんてのは、一人一人の生活そのもので、他人の価値観じゃないんだ、ってのがさ。

それを私に刻み付けた決定打は、咲夜の家だった。

親友らしく親友の家に遊びに行ったら、母親が二人居るわ腹違いの弟が居るわメイドが居るわロボが居るわ見たことも無い鳥が居るわ二足歩行する謎生物が居るわ生き人形が居るわ……挙句の果てには自称600歳の合法ロリ吸血鬼だぞ！

前半はともかく、後半の明らかに普通じゃないトンデモな連中今まで、極々普通に「いらつしゃい、ゆつくりしていつてね」と言われた私の気分が解るか！？ ボディランゲージとはいえ鳥にまで！

色々吹っ飛ぶだろ！？ 主にイメージとか価値観とかが！

……ああ、悪い。取り乱した。

ともかく、咲夜の家族を見てから改めて担任のガキとかクラスメイトとかを見ると、今までみたいな拘り方じゃなく『何に』普通を求めるべきかってのが自然と認識できたんだ。

だから、那波とか鳴滝姉妹とか、あとザジには謝っておいた。身体的特徴とか出身とかで偏見を持つのはダメだった。鳴滝姉妹は何

で謝られるのか意味がわからないって顔してたけどな。
ただし忍者、テメーはダメだ。せめてもう少し忍んでから対応させろ。

とにかく、それから私は週3くらいで咲夜の家にお邪魔しては咲夜の生母・アリカさんに担任の愚痴を聞いてもらったり、沢村家裁縫担当にして吸血鬼のエヴァンジェリンに裁縫を習ったり、たまに副担任に授業の補足をしてもらったりしている。

今みたいに鳥や咲夜の弟・七曜と遊ぶ事もある。

出来心だったんだ。ココがあんまり円らな目で見つめやがるから、ついつい、動画サイトに上がってるネタダンスを仕込んでみたくなっただ。

その誘惑に負けた結果が、これだよ。

「きゅつきゅつきゅつ、くえー」

「」

最初はココだけに仕込んでたんだが、たまたま顔を出した七曜の奴が真似してハマリやがった。

無愛想無表情キャラが楽しそうなオーラだけ出してコミカルダンスとか、何の罠だよ！

私は委員長みたいなショタコンじゃない！ 断じてない！ だから抱き潰したいとか一瞬思ったのは気の迷いか慈愛の精神的な何かだ！

「あれ？ 千雨ちゃん遊びに来てたの？」

「うおっ！？」

「ひゃっ！？」

い、いきなり話しかけるな！ 明日菜！

……って、何で私はうるたえてるんだ。平常心、平常心。

「わ、悪い、ちょっと驚いちゃった」

「あー、うん、私もちょっと急すぎたよね、ゴメンゴメン。……で、何してたの？」

明日菜の奴も苦笑いしながら頭を下げ、私の隣においてある三脚付きデジカメに目をつけた。

興味津々と言った感じで弄ろうとするが、寸前で阻止する。適当に動かされて壊されたんじゃないからな。

「勝手に触んな。ココの奴に軽く躍らせてみただけだ」

「ココが？」

「ああ、七曜も混ざったけどな。編集済んだら見せてやるよ」

そーなんだ、と軽く言う明日菜だったが、その目の輝きは誤魔化せねえぞ。

まったく、ドイツもコイツもココ絡みになると目の色変えやがるからな。

さて、と。とりあえずデジカメ仕舞うか。

「そこへ直れエヴァンジェリンツ！！」

「わかった、わたしがわかったあ！」

「又アアッ!？」

「よりによって、よりもよって脚荷の樽酒に手をつけるなどッ！」

「何ッ!？」

……あー……わたしは何も見していない。

金髪美女に追い掛け回される金髪幼女と人形と、その騒ぎの内容で飛び上がって驚く副担任なんて見ていない。

あー……在るのか、この家。船とか樽酒とか。

「父の趣味。ツマミも作る」

そーか。……って。

「おい七曜。教えてくれるのは良いが、忍び寄るのと心を読むのは止せ」

「善処する」

大丈夫なのか、コイツ。なんか私以上に友達できなさそうなんだが。

「不要。問題ない」

だから読むなって……

「ちう姉が居る」

「ッ! 恥ずかしい事言ってんじゃねえ!」

……なんつつか、流石の切り返しだった。伊達に母親二人居ないな。

> 詠春

最近、関西呪術協会影響域の裏社会で事件が頻発しています。

現地の支部や魔法組織の実力ギリギリの現象が散発的且つ高頻度で起こっている、と言うのは、一種の攻撃と判断するべきでしょう。具体的に、そうですね……何か大きな動きを見せる前段階として、総本山の戦力を分散させるつもりなのではないでしょうか。大分裂戦争時にも陽動作戦は多く取られていましたし、可能性としてはかなり高いでしょう。

タイミングを考えると、木乃香達の修学旅行に合わせたとも考えられます。ただ、一般人が多数参加する修学旅行を狙って事を起こそうと言う話だと、かなり危険な相手と考えたほうが良いでしょう。もしくは、内部犯ですが……

「如何致しますか、長」

幹部が集う広間で考えを伝えた私は、妻の菜乃香 関西呪術協会会長に判断を仰ぐ。

長は幹部達を見回して異論のないことを確認してから、手に持った扇子をくるりと回した。

「そやなあ。地方を助けない言うんは論外やし、腕利きを向かわせるんはエエとして。宿儺様超えるような襲撃やつたらどうもできひんから本山の守りは頭数減らしても、街の守りはしっかり固めんとあかんしなあ……ハードなお勤めになってまうなあ」

そこで言葉を切った長は、一瞬だけ居並ぶ幹部達に視線を送った。

「長。出張任務は我らにお任せを」

「我らも持続力と火力には自信があり申す」

「では我らが市中の見回りを」

「有事の対応は我らに」

「我らは分散して連絡役となりましょう」

それに気付いた幹部達は、次々に頭を垂れて自分達の得意とする役割に立候補していく。

総本山の部隊は幹部が部隊編成を任されている。そして、その性格に見合った運用を申し出て、最終的に長が判断する。

先代の長が採用した方式だが、これにより長と幹部達の間には信賞必罰の信頼関係がより強く築かれ、組織全体として適した動きを取りやすくなっていた。

長は強く頷き、幹部達の主張を認め、戦略として詰めていく。

「ありがとう。出張組みは行き先割り振って、スケジュール出してな。見回り、即応、連絡も、人と時間の割り振りは出しとき」

【はっ】

「一先ず解散や。何か有ったらまた報告よろしゅう」

【御意に】

幹部が退出し、私たちと世話役の巫女だけになると、長は妻の表情になって姿勢を崩した。

両手を突き上げて大きく伸びをし、次いで溜息。

「これで、当面乗り切れるやろ」

「油断は禁物ですよ、長」

「わかつとるよ？ 本命が多面や多段の攻撃やったら困るし」

確かに。沢村殿のほうから関東魔法協会が動く可能性も忠告されていますし、元老院のような大組織が本腰を入れるなら四面楚歌も

覚悟しなければなりません。

宿儺が助けてくれているとは言え、最悪京の町ごと魔法テロの標的になる事も考えられますから……やはり、現状は危険です。

「お父様……」

妻の小さな呟きを聞きながら、どうか、東の動きが本命でありませぬように、と願う私でした。

……この数日後、東からとある連絡が届きます。

その内容に、私たちがどのような感情を抱くかは……語りますまい。

麗らかな春の一日（後書き）

なんでもない春の日のお話でした。

時期的には春休み後半、始業式目前くらいです。

> 茶々丸の格好

前話のロリボディからは開放されています。

基本的に、メイド服。和服もありますが、プロポーションの関係で着崩れ防止の魔法を併用しないとエロい格好になってしまうので、メイド服が標準装備です。

> エヴァの意思

泥棒の見張りです。結局アリカに見つかってお説教コース。

> ア ルーダンス

MHPシリーズのネットワークモードで見られる、あれ。

知らない人は動画サイトで「きゅっきゅっきゅっニャー」で探してみよう。色んなキャラが踊らされています。

うん、やってみたかった、それだけなんだ……！

> 脚荷の樽酒

脚荷とは、船を安定させる為の重荷として載せる貨物の事です。

ワインの樽などを載せておくと、光量温度湿度波の揺れなどの環境が美味しい酒に育つと言うお話があるのです。

じっくり熟成させてた取って置きを掠め取られた鋭太郎でした。

> 千雨

拙作の千雨は『ファンタジーの存在を認識している』という状態です。

勿論、誰かさんのように『ゆめときばうにあふれたところおどるせかい』等とは考えておらず、沢村一家がフツーに生きてるせいで『スペックがファンタジーなだけで中身は普通の連中』と認識しています。

当然、魔法使いたいかそんな事は考えてすらいません。……魔法少女に変身したい、ってのは別にして。

>七曜

格好つけた風に見えますが、人懐っこさや好奇心など、心の本質は幼いところが結構あるのです。

感情表現が極端に乏しい純粹無垢、といった感じでしょうか。

>関西呪術協会

魔改造済みですので原作のような事態にはならないです。フェイトの侵入対策は難しいでしょうが……

最後の連絡の内容は、原作通りのアレです。東側は「まほうさいきょー」を標榜したままで西の力を低く見積もっているので、結構ギリギリに使者派遣を通過、と言う無茶振りをしたというご都合設定。

さあ、京都、行こう。（前書き）

修学旅行編の出発シーンです。

当日の朝から話が始まるのに京都に到着しない不思議。

やっぱりネギを出すと展開が極端に遅くなって困ります。無視したくても無視できないダメ人間がッ！

さあ、京都、行こう。

> 明日菜

クラス替えでも無いと、学年が変わった、って感じがしないのよね。

鋭太郎と子供先生の『担任』『副担任』が逆転した以外は、殆ど変化無かったし。

いつも通りに過ごして迎えた、修学旅行初日。いつもより血色の良い小夜さんと姉さんが、少し寂しそうな笑顔で私たちを送り出していた。

「いつてらっしやい、気をつけてね」

「周囲に迷惑をかけぬようにな」

私たちは、そのつもりだけど……クラスとしては、自信無いなあ。言って止まる連中じゃないし、実力行使で止めるわけにも行かないし。

「土産は湯葉でいいぞ」

「素の生八橋をお願いします」

「あ、私は餡子を挟んである奴ね」

エヴァちゃんとブリジットさんエレナさんはお土産の要求。私もそうだけど、こういうお土産って置物とかより食べ物みたいな使い切りの方が良いのよね。

お小遣いもちゃんと用意してるし、忘れずに買ってくるわよ。序でにおいしそうなものがあれば、それもね。

「お帰りをお待ちしております」

「怪我スナヨ」

「皆に、宜しく」

「いつてらっしゃいクポ！」

当たり障りの無い挨拶をする残り三人。何故か茶々丸さんから感じる微妙な違和感に少し後ろ髪を引かれながら、私たち三人はみんなに背を向けて歩き出した。

集合場所に先行している鋭太郎とココが待つ、大宮駅へ。

> 鋭太郎

修学旅行の集合場所である大宮駅では、既に何人かの生徒が到着しており、集合時間の午前9時を待っている。まだまだ先の話だがな。

中には某子供先生のように始発（5時半過ぎ着）で来ると言うアホも混ざっており、その落ち着きの無さは中学生の修学旅行というより小学生の遠足が相応だろう。

かく言う俺は、そんなアホ共が周囲に迷惑を振りまいたりしないよう、始発前に転移で来ていたりするのだが。

そしてアホ筆頭、子供先生がまたしてもバカな事をやらかしている為、早速注意することにした。

「おはよう、スプリングフィールド実習生」

「おはようございます、沢村先生！」

テンションが振り切れてるな、子供先生。だが、今すぐその浮かれ具合を遮断させてもらおうか。

ちなみに呼び方は試験に落ちた時点で変更した。敬称をつけるのも苦痛なんだよ。

そんなことより、今はもっと大きな問題がある。

「その右肩の小動物は何のつもりですか？」

「え？ えと、この子は僕の友達でオコジョよ、じゃなくオコジョの力モ君です」

「何者か等という事は訊いていません。何のつもりかと訊いているのです。修学旅行にペットの同伴が認められるとでもお思いで？」

呆れや苛立ちを顔に出さないよう注意しながら指摘すると、途端にうろたえ出す子供先生。

子供先生の肩に乗っていた小動物の正体は、魔法バレを始めとする各種魔法的犯罪を犯したモノへの刑罰である『オコジョ刑』に処された犯罪者だった。

オコジョ刑とは、言ってみれば体をオコジョに変えられた上での禁固or懲役刑だ。刑務所の収監限度を水増しする為に体を変えたのが始まりだとか、そうでもないとか……詳しい起源までは知らん。

そして魔法世界の闇に通じていなければ知りえぬことだが、脱獄囚や無期限変化刑が適応された重犯罪者の元魔法使いオコジョで構成される『オコジョ妖精』なる連合の地下組織が存在し、仮契約を濫用させて優秀なアーティファクトの適格者を探索、調査していると言う話もある。

はつきり言つて、子供先生との相性は破滅的なまでに良好だ。ちよつと唆せば行動に移す軽薄さと父親譲りのバカ魔力、そして近右

衛門の陰謀で集められたハイスペック奇人組をもつてすれば、稀代のアーティファクトカードを量産する事になりかねない。

よって、生徒達の為にも可及的速やかに排除すべきなのである。

「今ならまだ往復できます。直ぐに麻帆良に戻してきなさい」
「で、でもそうしたら力モ君が！」

案の定、オコジヨを両手で隠すように抱えて抵抗する子供先生に、沸々と腸が煮えくり返るのが良くわかる。地下組織である『オコジヨ妖精』のことを知らなくとも、学校行事にペット同伴というバカ丸出しの暴挙が認められると思っっているあたり、もう手遅れだ。
……俺もココ同伴だが、少なくとも他者の目のある場所では影から出さないから反論なんて聞かない。

「あ、ネギせんせーが沢ちゃんに怒られてる！」
「お、お姉ちゃん、私たちまで怒られちゃうですよ」

怒鳴ってやろうかと考えていたとき、横合いから声を掛けられる。見れば、そこには鳴滝姉妹の姿が。やれやれ、こいつ等も始発なのか？

「い、いえ、これはその、違うんです！」
「何が違うのですかスプリングフィールド実習生？」
「あ、あうあう……僕、先生なのに！」
「やっぱり怒られてんじゃん」
「お姉ちゃんってば」

誤魔化そうとしたのか認識すら出来ていないのか 後者だろう。これまでの問題を見ていれば解るとおり、子供先生は極端に物事の

理解力が低い。勉強出来るだけの馬鹿、その典型だ。

この世の全てが自分を許容すると思い込んでいるあたりに、特に腹が立つ。

「鳴滝風香」

「さ、さー！ 大人しくします、さー！」

名前を呼んだだけなのに震えて敬礼する鳴滝・姉。どうやら苛立ちが視線にでも出てしまっていたようだ。注意しなくては。

「よろしい。ああ、忘れるところだった。

おはよう、鳴滝風香、

鳴滝史伽」

「「おはようございます、沢ちゃんせんせー、ネギせんせー！」」

「お、おはようございます、風香さん、史伽さん」

忘れかけた挨拶も済ませたので、再び子供先生と正面から向き合う。……視線の高さを合わせたりはしない。

「さて、スプリングフィールド実習生。小動物の話に戻します。今すぐ戻してきなさい」

「小動物？」

また首を突っ込もうとした鳴滝姉に対し、お嬢さん（誤字に非ず）風にギロギロリ。

「失礼しましたッ！」

「ツたく。ほら、これで朝飯でも食って来い」

「えっ、いいの！？」

「あ、あわわわ、いいんですかあ？」

「さて、知らないな。その五百円玉は落し物であるからして」

「「ありがとー沢ちゃん！」」

話が進まないの、五百円ずつ進呈して追っ払う事にした。
おっと、貴様は逃がさんぞ。

「あ、あうっ」

「あうーもうぐうありません。周辺にアレルギー持ちが居るかも
しれませんし、オコジョといえば鼬科の生物。本質的に攻撃性が強
いから近付いた生徒を傷付けないとも限りませんし、最悪、何かの
拍子に臭腺が働きでもしたら確実に修学旅行は中止になります。衛
生上も宜しく無い。第一、教職員が率先して規律を乱してどうする
のです」

「うっ……」

「理解できたなら直ぐに行動しなさい、スプリングフィールド実習
生！」

えいたろうの ほえる！

やせいの ねぎは にげだした！

……こっそり連れて来た時用の対策、しっかり練っておかないとな。

午前8時。新田教諭が到着。

「おお、おはようございます、沢村先生。お早いですな」

「おはようございます新田先生。興奮したまま早めに来る連中を注
意しなくてはなりませんからね、少しばかり先行させていただきま
した」

特に鳴滝姉妹なんかは麻帆良のノリそのままに悪戯しようとする

危険性があるからな。

それに、大宮駅と一口に言っても結構な広さがある。集合場所を認識させる為の目印係が居ないと、駅に着いたけど集合場所がわからなくて　なんて言うマヌケが出てくるかもしれない。具体的には……佐々木とか。

「流石に頼もしいですな。5日間、宜しくお願いします」

「はい、此方こそ宜しくお願いします」

新田教諭と握手を交わし、四泊五日の激闘へ向けてお互いに気合を入れなおす。

生徒のため、その後輩達の為、京都市民の為。俺達はA組を含む生徒達を厳しく律する、強い力を保持し続けなければならないのだ。……具体的には、喉の潤いとか。

8時半にもなると、引率の教員は全員集合し、生徒達も六割ほどには揃ってくる。

明日菜たちも到着し、子供先生もなぜか雪広と一緒に戻ってきた。……ヌウ、臭い。破廉恥な齧歯類のにおいがする。しかし鞆の中にも隠したのだろう、見える場所には居ない。魔法関係を遮断している立場では、これ以上何も言えんな。

明日菜たちにもオコジヨ妖精が子供先生に憑いている事は伝えておく。四人とも非常に嫌そうな顔をしたので、機会があり次第オコジヨ妖精は始末しようと決意した。

そして午前9時。集合時間。

普通にやったのでは中々統率できない麻帆良生を相手取る為、新田教諭に代わり同じ広域指導員の肩書きを持っている俺が挨拶を勤める事になった。

アテンション
「注目！！」

掛け声に応じて、A・D・H・J・S、5クラスの生徒があつという間に整列して直立不動の体勢を取る。

やはりノリの良さはこういう時には都合が良いな。

「先ずはおはよう、京都行きを選んだA組、D組、H組、J組、そしてS組の諸君。A組担任で学園広域指導・相談員の沢村だ。

我々は本日まで今より26日土曜までの5日間、京都・奈良へ修学旅行に赴く。諸君が何を思いこのコースを選んだかは私の知り及ぶところではないが、各々普段とは違う環境、文化、風習、感性に触れ、何かしらを学び、感じ、友との絆を結び、強め、自らの成長の糧としてくれることを強く願う」

あえて靴音を響かせながら左右に歩き、生徒達の顔を見渡す。一部を除き、期待と緊張と興奮がない交ぜになった表情でこちらを見ていた。

「だがしかし、忘れてはならない。現地は勿論の事、新幹線の中にも宿泊するホテルにも一般の方々が大勢居られる。諸君は麻帆良学園の生徒として、そしてそれ以前に一人の人間として、それらの方々にご迷惑をお掛けせぬよう、配慮した行動を取らねばならない。

具体的には、軽々しく他の車両へ遊びに行ったり、冗談半分で清水の舞台から飛び降りてみたり、貴重な文化財に落書きをしたり、寺社のご利益を求めて他人を跳ね除けたり、騒がしく夜更かしをしたり、事前の計画から大幅に外れた場所に何の連絡も無く足を伸ば

してみたりと」

目を細め、やらかしそうな連中をぐるりと睨む。清水とラクガキ以外は全員やりそうだが。

「そう言った迷惑行為を取って問題が発生した場合、修学旅行の中止は勿論、警察機関のお世話になったり、麻帆良へ帰った後に停学・退学と言った処分が下ることもあるだろう。それらを肝に銘じ、慎みある思い出作りとするように！」

語尾を強めて話を締め括ると、生徒達は一斉に踵を鳴らして最敬礼。

【Sir, yes sir!】

「よろしい。では、各クラスは班毎に点呼を行い、準備が整ったクラスはホームへ向かう事になる。後のことは各クラス担任に従うように。諸君の健闘を祈る」

……ノリノリでやつといて何だが、何をやってるんだ俺達は。

「沢村大尉、A組小隊、欠員ありません！」

「軍隊ごっこは数分前に終わったぞ、柿崎軍曹。では1班より順に並んでホームへ向かうとしよう。旗見て迷わず付いて来るように。修学旅行中、班員から迷子を出したら班長と迷子は反省文5枚だからな」

ビシッと敬礼を決める一班班長の柿崎に苦笑いをしつつ、俺は3Aの旗を高く掲げて歩き出す。

さあ、出発だ。

……子供先生？ 一言も喋らずにオタオタしながら付いて来て、雪
広を悶えさせてるけどそれが何か？

さあ、京都、行こう。（後書き）

>カエル

東の妖怪じゃないんだから、そんな大事になりそうなことするわけ無いじゃないですか。

>オコジヨ

別に魔法的視点がなくても……というか、魔法的視点以前の問題として追放（駆除）すべきでしょう。何で原作はスルーなんだ。

見た目こそ愛くるしいと言えましようが、オコジヨはかなり凶暴な生物です。純肉食の小動物をナメちゃいけません。体格で勝る相手だろうと果敢に襲いかかります。そして喰います。

臭腺というのは動物の体内に在る様々な臭いを発する器官ですが、ここでは俗に言う鼬の最後っ屁をかます為の肛門腺の事を示しています。強烈な臭いを放つ液体をスプレーのように放つことが出来て、一度臭いが染み付いたら当分落とせないと言われています。本人も周囲も修学旅行どころじゃねえ。

このことで有名なのはスカンクですね（彼らはイタチ科ではなくスカンク科ですが）。直撃すると死者も出るとか。

オコジヨ妖精の設定は捏造です。脱獄囚なのに仮契約を仲介したら報酬が支払われるって、明らかに裏がありますよね、と言う考えから。

魔法世界でレアなアーティファクトのカードが裏取引されている、と言う原作の裏設定も咬ませています。

あえてバラしますが、オコジヨはこの後死にますのでファンの方（居るのか？）はご了承ください。

懐かしきもの、来る。（前書き）

お待ちしております、深海です。

修学旅行一日目、後編……と、言ったところでしょいか。

話の進みが遅くて申し訳ありません。前提の改変項目が多すぎて原作イベントの使い回しが全く出来ない状態なんで……

あ、キャラ崩壊してる人が居ますのであらかじめご了承の上、お読みください。

懐かしきもの、来る。

> 明日菜

公衆の面前で西の者が接触してくるような事もなく、京都到着、昼食、清水寺の見学……修学旅行一日目のスケジュールは順調に消化されてる。

そして今、私たちは清水の舞台を見学中。

「おー、高いねー」

「これが噂の飛び降りるアレかー」

「良い景色だねえ」

「こ、怖いですー」

最初の挨拶での釘刺しが効いたのか、それとも「大騒ぎしたら課題」の脅しが効いたのかは知らないけれど、みんなは大人しく見学している。

……麻帆良の結界の内側でさえ言葉だけで道理を遵守させるだけの力を持つてゐる鋭太郎が、結界の外で同じ事をするのがどの程度の手間かなんて言うまでもないことよね。

みんな思い思いに写真を撮ったり舞台の下を覗き込んだり、夕映が語る蒨蓄を効いてビックリしたりしている。

私たちは、ほら。それなりに長いこと京都にいたし、夏休みなんかは木乃香の里帰りで毎年こっちに来てるしで、そんなに新鮮な感覚は無いのよね。

少なくとも

「わあ、凄い凄い！ 京の街が一望ですねー！」

あのガキンチョみたいにはしゃげるだけの感動は無いわ。
大人しく記念写真でも撮るときましよう。

「そうそう、この先に恋占いで人気の地主神社があるですよ」
「恋占い!？」

……。む。数ヶ月前の嫌な事を思い出すフレーズね。それ自体は嫌いじゃないけど。

いいんちょを始めとしたクラスの殆どが、飛び跳ねるように反応してガキンチョに向かう。

「行こう行こう!」

「ネギ君も、ほら!」

「え、あ……?」

「よおし、とつげ『おい』きい、い……」

そしてそんな暴走少女達に立ち塞がるのは、勿論クラス担任のこの人。

「さ、沢ちゃん……」

鋭太郎を前にしたみんなが、明らかに竦み上がっているのがわかる。

仁王さんからのオーラを漂わせている鋭太郎が、じっと先頭集団を見つめる。

「年頃の少女が恋だ愛だとはしゃぐのはわかる。だから行くなどとは言わない。だが、な」

そこで鋭太郎は言葉を区切ると、ガキンチョを抱えて地主神社へ急行しようとした生徒達を見渡して、静かに言葉の槍を投げつけた。

「強欲を剥き出しにして浅ましく行動する者に、神仏のご利益があると思うか？」

【はうっ！？】

その一言の威力は凄まじかったみたいで、さっきまで騒いでたメンバーが片手で胸を押さえて仰け反ってる。

まあ、自覚があるみたいで何よりね。

地主神社に到着すると、いいんちよたちが早速恋占いの石に挑戦してる。

20メートルくらい離れている二つの石の間を、目を瞑ったまま移動できれば恋が実るらしい。

「明日菜やせつちゃんはやらへんの？」

「止めとくわ。目を瞑ってても石の位置くらいわかるし、成功率100%じゃ有り難味無いもの」

「同じくです」

「そうなん？ 咲ちゃん挑戦するみたいやけど」

「「え？」」

木乃香に言われてもう一度石のほうを見ると、高笑いしながら走るいいんちよと薄目を開けてそれを追いかけるまきちゃんがゴールした後方で、布で目隠しした咲夜が片手を挙げていた。

そして一步、二歩と弾むように前に出て、ロンドートからバク転二連に後方二回宙捻りで、着地地点がゴール……と。

頼まれてVサイン決めるのも良いけど、誰が、いつ、アクロバツ

トで辿り着けと。普通に拍手喝采で目立ちまくりじゃないの。

「相変わらず本気^{マジ}ね、咲夜は」

「ええ、つと。あれでもご利益^{リキ}つて在るんでしょうか」

「……さあ？ 一応、視覚を絶つてルールには従ってるけど」

呆れる私たちの隣で、ニコニコしながら拍手してる木乃香……さすが、器が違うわ。

「咲ちゃんすごいなあ。明日菜は同じの出来るんやない？」

「無茶言わないでよ、七曜じゃ在るまいし」

アイツの場合、やらせようと思えば踊りながらも辿り着くに違いない。

そんな風に、それなりに楽しみながら進んでいく私たち。けれど、音羽の滝に呪術的な細工の痕跡を見つけたときは一瞬体が震えて思わず周囲を見渡してしまった。

細工の内容は、流れている水を何かしらの呪薬に変化させてしまう術。仕込みとは言え持続的に使うような術じゃないし、流水そのものに浄化の概念があるから余り強力な効果は望めない筈だけど……

ダメね。私にはどんな効果の水が落ちているか見当がつかない。だから、魔力を視れる木乃香に効いてみた。

「……木乃香、どう？」

「うーん、そやね。はつきりせんけど、こう、上げて落とす感じの精神干渉っぽいなあ」

「このような場で毒殺や発狂を狙うとは思えませんし、静観すべきではないでしょうか」

それってつまり、呪術的なアルコール？

だとしたら、仕掛けた側の狙いは夜更かしの妨害、ってことか。

……引率の教員的には、大歓迎よね、それ。

鋭太郎も放置するみたいだし、私たちも放つところか。

> 鋭太郎

修学旅行初日。日程に滞りなし、と。

2 - Aを始めとする生徒達は、一部を除き音羽の滝に仕込まれていた術で熟睡中。

「静かな、良い夜だ……」

「きゆう」

生徒達が術中に落ちたお蔭で手が開いた俺はというと、露天の岩風呂に熱燗入りの桶を浮かべてココにお酌されて、すっかり良い気分浸っていた。ちなみに生徒らの消灯時間は既に過ぎている。

開発が進んだお蔭で夜空の星は殆ど見えなくなってしまったが、頬を撫でる夜風の冷たさと湯の温かさはそう変わるものではない。

ココの羽毛を撫でながら、良い酒に酔い、時の流れを愉しむ。何とも贅沢な一時。

その中で、俺は浴槽内に立っている岩の向こうへ、放るように猪口を投げた。その後に響いたのは、着弾には少しばかり大きすぎる

水音。

「来たなら声くらい掛けたら如何なんだ？」

「すまない、余りに良い雰囲気だったから。空気を讀んだつもりだったのだけれど」

……人を変態みたいに言うんじゃない。

岩の陰から出てきたのは、見覚えのある白髪青年だった。

20年ほど前、あの戦争の先に幻の創世を夢見ていた者達。その一人。

「生き残れたようで何よりだ、アーウェルックス」

「ああ、君には感謝してるよ。君が流通させていた高品質の魔法薬や護符が無ければ、こうして再生する事も出来なかったからね」

「……そうか」

アリアドネー時代に小銭稼ぎで流してた奴が。

創造主の使徒とやらにも問題なく効くんだなあ、と我ながら感心していると、アーウェルックスの手に渡っていた猪口にココが酒を注いだ。

そして、こっちにも桶から取り出した猪口を突き出してくる。

……そうだな。

「とりあえず飲むか。再会を祝して」

「そうだね。再会を祝して」

「きゅ」

バケモノと、鳥と、人形。

常識など地平の向こうと言わんばかりの奇妙なトリオが今、月下

に静かな酒宴を開いた。

「活動は今も続けてるのか？」

「是であり、非でもある。開店休業状態、と言ったところだね。『赤い月』のお蔭で人員はそれほどでもないが組織はほぼ壊滅に近いし、主はナギ・スプリングフィールドに封印されてしまっし、黄昏の姫御子は行方不明。おまけに苦勞して忍び込ませた工作員はガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグと高畑・T・タカミチが掃討してしまっから迂闊に動く事も出来ない」

俺の問いに答えたアーウェルンクスは、深々と溜息をついた。

「僕はナギ・スプリングフィールドに敗れた時点では復旧困難だったから、戦後は主が次代の使徒を起動したんだけど、これも設定に何かと問題があつてね」

…… おや、ひょっとして愚痴モードか？

相変わらず妙に人間臭いな。

「^{セクンドゥム}2は熱心なのは良いけど自意識過剰で丁寧さや繊細さに欠けて何か胡散臭いし、^{テルティウム}3は逆に目的意識や忠誠心が希薄で反逆癖があるし、主が封印されたら今度はデユナミスが何考えてるのか僕のシリーズばかり増やすし、^{クワアルトゥム}4と5は2号同様客観視も出来ない未熟者だし、^{セクストゥム}6に至っては女の子だ」

…… 苦勞してんなあ、オイ。

色々な自分が共同空間内で生活してるせいで、変質した自己嫌悪にフルボッコされているのか。

簡単に言つと、『こんな僕は僕じゃない』というストレスに苛まれているわけだな。

「大体において、火や水のデータなんていくらかでもサルベージ可能なのだから、態々僕のデータを再調整して属性を増やす必然性なんて何処にもないはずなんだよ。それをあの裸族仮面は……」

……裸族仮面？

『完全なる世界』で俺の知る仮面と言えばデユナミスだが、あいつ裸族だったのか。ううむ、今後は娘達やアーニヤを近づけないように注意しなくては。

「聞いているのかい？」

「ああ、聞いているよ。だからいくらでも愚痴れ」

半眼で覗き込むようにこつちを睨むアーウェルックスに、ニヤリと笑いかけてやる。

「聞いているだけなら中々面白いからな」

「……君は性格が悪かったんだね」

長生きしてるからな、そう言う気分の日もあるのさ。
そう、声に出さずに答えたところで、ふと肝心な話に触れていないことを思い出した。

「そういえば、態々こんな旧世界の辺境まで何をしに来たんだ？」

「え……ああ、そうだね。すっかり忘れていたよ」

アーウェルックスは猪口の中身を流し込んで一息つき、真面目な顔でこちらを見る。

「今回、僕の目的は三つ。一つはこうして、君に挨拶に来る事。

二つ目は英雄ナギの息子がどの程度の存在かを確認する事。そして三つ目は魔法組織間の軋轢を利用して彼の立場を此方に有利に動かす事、なのだけれど、これはどうやら僕らが手を回すまでも無いみたいだ」

……平然と自滅コース邁進中だからな。

言いたいことを言ったアーウェルンクスは、最後に一杯空けると桶の中に猪口を落として立ち上がった。

「さて、僕はそろそろ失礼するよ。使命があるからね」

「そうか……では、また会う日まで」

「きゅっきゅう」

「ああ、僕も次を楽しみにしているよ」

微笑を遣して転移で去るアーウェルンクス……ん？　ってことは、アイツ最初から裸で転移してきたのか！？

……んな訳無いか。大体あいつらの服、多分物質じゃなくて魔法だろうし。

「……俺達もそろそろ上がるか」

「きゅいい」

最後に体を思いつきり伸ばし、脱力して浴槽から出る。そして脱衣所まで歩く間にココは影の中の巢へと帰って行った。

後に残るのは、小脇に木桶を抱えた俺一人。

手早く着替えを済ませ、部屋に戻ると……不寝番のつもりなのか、探知結界を張り巡らせた瀬流彦教諭が椅子で船を漕いでいた。

今の関西呪術協会が、そんなモンに一々引つかかるやり方をするとは思わんがな。

俺もさっさと寝よう……。

……翌朝。子供先生が親書を盗まれたらしい。

懐かしきもの、来る。（後書き）

好き好きに羽を伸ばす沢村一家の影で、あっさり親書を盗まれてしまったネギ少年。

入浴中にまで親書を持ち込んだりは出来ませんから、泥棒さんやりたい放題。仮に金庫に入れていても、考えの浅い彼なら……ね。

次は二日目、原作なら例のアレが発生する日です。

深海自身が忘れない為にもこの場で言及致しますが、ネギのフラグは（魔法バレ含めて）今のところ一切、立っておりません。（デフォ成立のあやか（+悪乗り）は別にして）

……さて、どうしましょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9987m/>

魔法先生は魔鳥と一緒に

2011年11月23日18時18分発行